

---

# 迷宮の王

支援BIS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮の王

### 【Nコード】

N0488V

### 【作者名】

支援BIS

### 【あらすじ】

第1部 強敵を求めて戦い続け、迷宮の王と呼ばれるようになったミノタウロスの物語。約7万字。

第2部 迷宮の王に打ち勝つ力を求めて旅に出た少年の出会いと成長の物語。約18万字。

ミノタウロスの闘いにしか興味はないというかたは、第2部では挿話と最終話だけごらんください。

## 地図

> i 2 9 7 3 3 — 3 6 8 0 <

すべての国で、共通の言語が用いられます。

現在、国家を形成している種族は、人間だけです。ただし、高地などの秘境には、異種族の国があるかもしれません。また、コボルト、ゴブリン、オークなどのモンスターは、小規模あるいは中規模の集落を作ることがあります。

かつては、エルフやドワーフなどの種族がいたと伝えられていますが、現在、人間の国でみかけることはありません。

赤色の国境線は、王国歴1103年に、バルデモスト王国に編入された地域です。

## 年表

バルデモスト王国歴元年

始祖王、邪竜カルダンを討伐。

建国。

1024

吏務査察官マゼル・ス・ラ・ヴァルド、反乱計画の罪により族滅  
する。

エイシャ・ゴラン(41)、死去。

シヤナⅡエラン(浄王)(42)、死去。

1032

ウエルゼア、誕生。

1040

パウロ候、バルデモスト王に帰順し、男爵に叙せられる。

1052

パーシヴァル、誕生。

1068

テラⅡエラン(刑王)(46)、死去。

1070

パーシヴァル(18)、刺客より王の命を守る。

1071

パーシヴァル(19)、天覧武闘会で優勝。

1072

パンゼル、誕生。

1073

パーシヴァル(21)、シャルリエラ(18)と結婚。

1074

ユリウス、誕生。

1079

のちに迷宮の王と呼ばれるミノタウロス、誕生。

パーシヴァル(27)、死去。

ギル・リンクス(69)、死去。

1081

ミノタウロス、100階層のボスとなる。

1083

バラスト(72)、ミケーヌ冒険者ギルド長を退任。

パロス(31)、ミケーヌ冒険者ギルド長に就任。

1091

近衛第4騎士団、ミノタウロス討伐に失敗。

1096

騎士パンゼル(24)、ミノタウロス討伐とパントラムの乱鎮圧の功により、王国守護騎士に任じられ、ゴラン家を復興。

第二王妃、廃位。

パウロ男爵、フェンクス諸侯国に亡命。

1097

パンゼル(25)、エッセルレイア(21)と結婚。

ユリウス(23)、黒卿に。

1098

ユリウス(24)、結婚。

ユリウス、旧パウロ男爵領であるケザに封じられ、ケザ侯爵に。

1100

アルス、誕生。

セルリア、誕生。

パン||ジャ、死去(81)。

フェンクス諸侯国との戦争、勃発。

1103

パンゼル(31)、従軍中に急死。

フェンクス諸侯国との講和条約、締結。

ゴラン家、バヌーストに封じられ、パンゼル、バヌースト侯爵を  
追贈さる。

エッセルレイア(27)、爵位継承とアルスの処遇につき、王に  
直願。

1105

リオラン、誕生。

ユリウス(31)、赤卿に。

1106

パロス(54)、ミケーヌ冒険者ギルド長を退任。

ドルーガ(47)、ミケーヌ冒険者ギルド長に就任。

パロス、バヌースト領の財務官僚に登用さる。  
ユーララ＝エラン（剣王）（55）、死去。

1114

アルス（ザーラ）（14）、サザードン迷宮の探索を開始。

1116

アルス（16）、冒険の旅に出発。

1117

ユリウス（43）、青卿に。

ミノタウロス、突如、上層に移動し、5階層に10日間とどまる。  
冒険者ギルド、緊急警報を発令。

1119

東方より異人の船団が現れ、戦争が始まる。  
アルス（19）、バヌースト侯爵位を継承。

1120

北方同盟を結成。  
リガ公ドレイドル（56）、戦死。  
ユリウス（46）、白卿に。

1122

バラスト（111）、戦死。  
アンポアンの誓約を結び、終戦。

アルス（22）、大陸守護騎士に叙せられる。

1124

アルス（24）、王命によりミノタウロス討伐に赴く。

1125

冒険船「竜の巫女」号、東方探検に出発。

登場人物（前書き）

末尾の数字は生年（バルデモスト王国歴）

## 登場人物

ミノタウロス…… 迷宮の王と呼ばれるモンスター。 1079

## 冒険者

エリナ・カー…… Cクラス冒険者。 戦士。  
マルコ・ヘス…… Cクラス冒険者。 戦士。  
レイストランド・ユリオロス…… Bクラス冒険者。 剣士。  
パジャ・ン・ド・マユル…… Bクラス冒険者。 スカウト。  
シャルリア・リード…… Bクラス冒険者。 魔法使い。  
アイゼル・リード…… 冒険者。 魔法使い。 シャルリアの父。  
カレン…… Dクラス冒険者。 魔法使い。  
ロルフ…… Dクラス冒険者。 剣士。  
ジヨナ…… Dクラス冒険者。 神官。  
グレッグ…… Dクラス冒険者。 剣士。  
アラン…… Dクラス冒険者。 剣士。  
リーフ・モラン…… Dクラス冒険者。  
ボランテ…… 冒険者。 戦士。  
ヒマトラ…… 冒険者。 魔法使い。  
ゴンドナ…… 冒険者。 僧侶。  
ブリアプル…… ロアル教国の冒険者。 スカウト。

ミケーヌ冒険者ギルド

バラスト・ローガン……ギルド長。スクラス冒険者。ドワーフ・ハ  
ーフ。1011  
ギル・リンクス……ギルド顧問。スクラス冒険者。魔法使い。10  
10  
パロス・アイアドール……事務長。ギルド長。のちバヌースト領財  
務総監。1052  
ドルーガ……ギルド長。ドワーフ。1059

#### ミケーヌの街の住人

店長……武器屋の店長。  
ヴィエナ……武器屋で働く娘。  
トルモン……大酒飲みの行商人。

#### バルデモスト王

シヤナ<sup>II</sup>エラン（浄王）……在位998～1024。982  
ヤン<sup>II</sup>エラン（静王）……在位1025～1043。1003  
テラ<sup>II</sup>エラン（刑王）……在位1044～1068。1022  
ユーララ<sup>II</sup>エラン（剣王）……在位1069～1106。1051  
今上……在位1107～現在。1070

#### メルクリウス家

パーシヴァル……スクラス冒険者。天剣と呼ばれる。1052  
パン<sup>II</sup>ジャ・ラバン……家宰。実はマゼル・ヴァルドの次男アドル。

1019

シャルリエラ……パーシヴァルの妻。 1055  
ユリウス……パーシヴァルの長男。 1074  
バルドラン……パーシヴァルの曾祖父。 975  
セルリア……ユリウスの長女。 1100  
リオラン……ユリウスの長男。 1105

### ゴラン家

パンゼル……王国守護騎士。死後バヌースト侯爵に。 1072  
アルス(ザーラ)……パンゼルの長男。スクラス冒険者。 1100  
エッセルレイア……アルカンの娘。アルスの母。 1076  
エイシャ……剣客。パンゼルの曾祖父。 983  
チャルダ……エイシャの弟子。パンゼルの祖父。 1002  
エニナ……エイシャの娘。パンゼルの祖母。 1010  
ウエルゼア……チャルダの息子。パンゼルの父。 1032

### リガ家

クレルモ……当主。 975  
モルゾーラ……当主。クレルモの長男。 1005  
アルカン……当主。モルゾーラの長男。 1036  
ガレスト……アルカンの長男。 1058  
ドレイドル……当主。アルカンの次男。 1064

### ローウェル家

エバート……バルデモスト王国枢密顧問。

ジャン＝マジナル寺院

マンダ……ゴルメドの聖獣環継承者。パンゼルの師。

パタガモン……教務院総務官補佐。

カウ・レカン……教務院総長。

ラガラタ……教務院法務官。

ビア＝ダルラ

コラリオル……君主。

ラウラ……コラリオルの娘。騎士。剣士。

オリエナ……騎士。支援魔法使い。

シャリアプロ……騎士。アーチャー。

ジヤマガル……騎士。アサシン。

モーラ……騎士。壁役。

その他

シャリエザーラ……山の民の娘。

ナーリリア……大峡谷の村に住む薬師。正体はラミア。

岩の男……実はナーリリアの夫。

ジャガ……大峡谷の村の住人。

イシュクリエラの白姫……占い師。正体は水の精霊パクサリマナ。

竜の巫女……正体は竜。カルダンの娘。1116

幽霊……カルダンの夫。ダンジョン・メーカー。

ジャル・ドル・バザ……アルダナの高名な剣士。剣聖と呼ばれる。  
ポーラム……パウロ男爵。 1062

#### バルデモストでの六大神

大地神ポーラ（女神）  
海神エルベト（男神）  
愛と繁栄の神ファラ（女神）  
裁きと忘却の神マスゴール（男神）  
知恵と契約の神オルゴリア（女神）  
治癒と死の神トラン（両性）

#### メルクリウス家の秘宝

アレストラの腕輪（魔法消去）  
カルダンの短剣（状態異常解除、聖属性付与）  
ライカの指輪（攻撃魔法発動）  
エンデの盾（物理攻撃反発および反動削減）  
ホルトンの護符（隠形、魔法蓄積）

#### 四聖獣

東のゴルメド  
西のラシヤ  
北のポルポ  
南のヤーッ



## 文字数と読了時間（前書き）

字数は末尾2桁切り捨てです。

読了時間は、1分間に500字を読むとしての時間です。

## 文字数と読了時間

総合計：261,400字 523分

第1部 ミノタウロス(計71,300字)計143分

第1話 ユニークモンスターの誕生(3,500字)7分

第2話 灰色狼(3,400字)7分

第3話 冒険者パーティー(5,300字)11分

第4話 剣士(6,900字)14分

第5話 魔法使い(5,700字)11分

第6話 冒険者ギルド長の困惑(5,600字)11分

第7話 天剣パーシヴァル(6,800字)14分

第8話 メルクリウス家の家宰(5,600字)11分

第9話 アレストラの腕輪(7,100字)14分

第10話 五十階層(3,700字)7分

第11話 下層への挑戦(4,500字)9分

第12話 武器屋にて(4,600字)9分

最終話 約束の日(8,200字)17分

第2部 ザーラ(計185,700字)計372分

第1話 ガーラの娘(19,000字)38分

挿話1(1,000字)2分

第2話 岩の男(10,000字)21分

挿話2(2,100字)4分

第3話 イシユクリエラの白姫(20,800字)42分

挿話 3	( 1 / 6 0 0 字 )	3 分
第 4 話	エルストラン迷宮の亡霊	( 1 7 / 1 0 0 字 )
挿話 4	( 9 0 0 字 )	2 分
第 5 話	業火	( 2 7 / 5 0 0 字 )
挿話 5	( 1 / 1 0 0 字 )	2 分
第 6 話	武闘僧パタガモン	( 1 3 / 0 0 0 字 )
挿話 6	( 2 / 3 0 0 字 )	5 分
第 7 話	赤の騎士	( 1 8 / 8 0 0 字 )
挿話 7	( 1 / 9 0 0 字 )	4 分
第 8 話	時を待つ者	( 2 5 / 2 0 0 字 )
挿話 8	( 2 / 3 0 0 字 )	5 分
最終話	邪神の迷宮	( 2 0 / 0 0 0 字 )
		4 0 分

## エピソード

ユトから吹く風 ( 4 / 2 0 0 字 ) 9 分

## 第1話 ユニークモンスターの誕生

サザードン迷宮の十階層、人間たちがボス部屋と呼ぶ空間に、一匹のミノタウロスが、リポップした。牛の頭と人の体を持ち、両手に斧を携えた魔獣である。

ミノタウロスは、ひどい飢えを感じていた。

左に出入り口が、右に小さな湖が見える。

湖に駆け寄り、水面に顔をつけて、水をむさぼり飲んだ。

乾ききった体に水が染み込んでいく。

細胞の一つ一つがうるおされ、力を取り戻していく。

頭を持ち上げて息を吸い、吐く。

呼吸がほの暗い洞窟に吹き上がる。

再び顔を湖につけて、またも水を飲む。

喉の渴きは癒えたが、飢えはむしろ強まった。

出入り口を見る。

あの向こうには、飢えを満たす何かがあるのか。

ミノタウロスは、出入り口まで歩いていった。

外に出ようとして、強烈な不快感を覚えた。

ここは通れない。

ミノタウロスは、水際に戻り、座り込んだ。  
おのれを生み出した世界も、飢えを感じるおのれ自身も、憎かつた。

ここまでは、いつも通りの、ありふれた光景であった。

やがて、この部屋に、一人の女戦士が入って来た。

目的は、ミノタウロスをソロで倒して、Bクラス冒険者に昇級する資格を得ることである。

女戦士には、それができる強さがあつたし、準備もしていた。

ミノタウロスは、女戦士の姿を見るなり、立ち上がって駆け寄つた。

本能が、あれは敵である、と教えたのである。

攻撃できる距離まで近づくと、大きく右手を振り上げた。

女戦士は、巨体に気圧されながらも、斧の動きを見極めてかわし、怪物の伸びきつた右腕に、剣で斬り付けた。

落ち着け！

落ち着け！

うしろめたま  
牛頭は、力は強いけれど、攻撃は単純。

斧を振り回すか、角で突きかかってくるだけよ。

とにかく、攻撃をかわしながら、両手の斧が使えなくなるまで、腕に斬り付けていくのよ！

女戦士は、自分に言い聞かせた。

それは、この怪物と闘うときの常道である。

あとは、ただ一つの特攻にさえ気をつけていれば、負けるはずはなかった。

攻防は続いた。

ミノタウロスの両腕は、ずたずたに切り刻まれ、血だらけになっている。

女戦士は、汗だくになり、息も荒いが、これという傷は受けていない。

落ち着いてみれば、怪物の動きは鈍い。

振り回す斧は速いが、予備動作は単純で、軌道は予測しやすい。

一つの動きから別の動きに移るのも、もたもたしている。

と、深く踏み込んできた怪物の攻撃をかわしたとき、絶好の攻撃位置を取れた。

今よ、と自分に声を掛け、両手で握った剣を真っすぐ振り下ろす。太い骨を断つ不気味な音がして、ミノタウロスの左手が切り落とされた。

勝った！

と思う心が隙を生んだ。

怪物は、手首から先を失った左手で、女戦士を殴り飛ばした。

岩壁に、したたかに打ち付けられる。

怪物が右手の斧で追撃してくるが、岩壁を蹴ってかわし、少し距離を取って、怪物と向き合い、息を整える。

怪物が、上を向き、顔をしかめて、大量に息を吸い込んでいる。

来る！

腰のベルトに取り付けられたポーションソケットに左手を伸ばす。状態異常を解除する黄ポーションを、取り出そうとする。

女戦士の顔が真っ青になった。

つぶれている。



これで助かった。

もう、大丈夫。

そのうち、誰か通るはず。

ポーシヨンを借りれば、助かる。

とにかく、足首を縛って、血を止めないと。

女戦士が、そのような思考を巡らせているとき、ミノタウロスは、出口の前で、うなり声を上げていた。

殺したい。

殺したい。

こいつを殺したい。

だが、出口を通ることはできない。

魚が空で泳げないように。

鳥が大気の外に飛び出せないように。

ボスモンスターは、ボス部屋の外には出られない。

ミノタウロスは、あらゆる感覚がその一步を拒むのにあらがい、出口に足を踏み入れた。

じゅうつ、と音がして、右足が焼けただれ。

痛みと驚きで、斧を取り落とし、後ろに跳びすさる。

だが、ミノタウロスは、なおも、出口に向かった。

突き出した右手が焼け、じゅうじゅうと泡立つ。

構わず踏み込んでいくにしたがい、肩が、顔が、胸が、足が、焼けていく。

醜く顔をゆがめ、口からよだれを垂れ流しながら、しかし、進む

ことをやめない。

ただ、目の前の敵を殺したい。  
もう敵に手が届く。

女戦士は、目の前の光景を、理解できなかった。

怪物は、地獄の悪鬼のごとき、おどろおどろしい姿に変じながら、越えられるはずのない境界を越えて、近づいてくる。

嘘よ、嘘よ、というつぶやきは、声にはならず、ただ、かたかたと歯を鳴らす。

ミノタウロスは、顔を、ぐしゃぐしゃにゆがめながら、なおも右手を突き出す。

炭化して黒ずみ、吹き出す体液でぬらぬらする、すじばった右手が、くわっと開かれ、

女戦士の胸当てをつかんだ。

そのまま、ごぼう抜きに女戦士の全身を持ち上げると、倒れ込みつつ、体を回転させ、女戦士を、頭から岩壁にたたきつけた。

ぐしゃっと、女戦士の頭はつぶれ、脳漿と血のりと頭蓋骨のかけらが飛び散る。

女戦士は、すうっと消えた。

あとには、幾ばくかのアイテムが残されているばかりである。

飛び散った血や肉も、瞬時に消え去った。

迷宮では、人といえど、亡きがらをとどめることはできないのである。

ミノタウロスは、消え残った胸当てを右手につかんだまま、倒れ

伏している。

体中が黒ずみ、縮み、いやらしい匂いのする煙を吹き出している。間もなく、このモンスターは、短い一生を終えるだろう。

だが、それでも、ミノタウロスは、心の中で、強く念じていた。

もつとだ！

もつと、もつと、闘いを！

もつと、もつと、強い敵を！

俺に力をよこせ！

敵を殺す、さらなる力を！

人の言葉になおせば、そうもなるであろう。

それは、妄執でもあり、呪詛でもあり、祈願でもあった。

言葉にはならなかったが、明確な意味を持つ、心の底からの叫びであった。

このとき、怪物の頭の中に、声が響いた。

「汝の願いは、聞き届けた」

ミノタウロスは知る由もなかったが、女戦士の胸当てには、大地神ポーラの護符が縫い付けられていた。

神々から職能に応じた加護を受ける、いわゆる恩寵職の中でも、迷宮でモンスターを倒して経験値を獲得し、アイテムやスキルのドロップを得られるのは、騎士、冒険者、盗賊など、一部の職に限られる。

今響いた声は、女戦士が神殿で大地神に冒険者としての加護を祈願したとき聞いた声そのままであった。

淡い土色の光が、ミノタウロスを包む。

しゅうしゅうと柔らかな音がして、見る見る表皮や体毛が再生さ

れる。

失った左手さえも、元の通りに復元される。

いや、元通りではない。

その体は、数段強靱さを増していた。

冒険者なら見慣れた、レベルアップの場面である。

女戦士を殺して得られた経験値は、ポーラ神の加護を介し、このミノタウロスに設定された成長係数により換算され、レベルアップをもたらしたのである。

ミノタウロスは、湖のほとりに戻り、がぶがぶ水を飲むと、眠りについた。

迷宮のモンスターは、岩からしみ出してくる、といわれる。

倒されれば時をおいてリポップするが、記憶や経験が引き継がれることはない。

リポップしたときには、すでに別の個体なのである。

迷宮のモンスターは、成体として発生する。

迷宮のモンスターには、成長も進化もない。

迷宮のモンスターには、性別がなく、つがいを作ること、子をなすこともない。

迷宮のモンスターは、知性を持たず、本能のままに、ただ人を襲い、殺し、喰らう。

迷宮のモンスターは、魔獣あるいは幻獣とも呼ばれるように、厳密な意味での生物ですらない。

生命の奇怪な似姿というべきである。

レベルアップによってとはいえ、成長するモンスターは、極めて

特異な存在といえる。

この日、サザードン迷宮に、一匹のユニークモンスターが誕生した。

## 第2話 灰色狼

ミノタウロスは、両手に斧を持って、ボス部屋を出た。  
あれほど強硬に通過を拒んだ出口が、今はあっけなく通れた。

出口をくぐり抜けると、左右に岩の回廊が続いていた。  
左側に向かって歩く。

ほどなく道は左右に分かれた。  
右の道を選ぶ。

いくつかの分岐を過ぎたあと、前方に気配があった。  
薄暗い通路の向こうに、一対の眼が光っている。

と思うや、相手が駆けて来た。

灰色狼である。  
攻撃しようとしている。

ミノタウロスは、身がかがめ、右手の斧を狼の頭にたたきつけた。  
だが、当たると思った打撃は空を切った。

狼は半歩手前で軌道を変え、右足をかすめて通り過ぎたのである。

すぐに狼は、反転して攻撃してくるであろう。

すばやく振り向いたとき、右足に痛みが走った。

右膝からくるぶしにかけての肉が、えぐられている。

ちつぽけな狼に傷をつけられ、ミノタウロスの視界は真っ赤に染まった。

飛びかかって来た狼を迎撃すべく、斧を横なぎに振るう。

しかし、今度も敵をとらえることはできなかった。

狼は、壁面に飛びつき、突き出た岩を踏み台にして、ミノタウロスの喉笛に噛みついたのである。

普通の相手であれば勝負を決したであろうこの一撃は、しかし狼の失策となった。

ミノタウロスは、恐るべき反射神経で顎を伏せて、喉を守る。

狼がミノタウロスの頑丈な顎をかみ砕きかねた一瞬、ミノタウロスは斧を手放すと、両の手で狼の頭をつかみ、そのまま岩壁に突進した。

「ギヤイン！」

岩壁にたたきつけられた狼は、悲鳴を上げた。

すかさず、狼を抱え上げ、頭突きで狼を岩壁にたたきつける。

鋼鉄をねじり合わせたような2本の角が、狼の腹部をあっさりと貫いた。

狼の体液が顔と体に降り注ぐのも構わず、繰り返し、繰り返し、狼を岩壁にたたきつけ続けた。

どすっ。どすっ。

びちゃっ。びちゃっ。

狼の腹は大きく裂け、内蔵があふれだしてきた。

ミノタウロスは、頭突きを続けた。

もがく狼の爪に腕や胸をえぐられても、ひるむ様子もない

やがて狼は、あがきをやめ、けいれんを始めた。

そのけいれんも、ほどなく止まり、狼はまったく動かなくなった。

と、急に狼の姿が消え、ミノタウロスは、したたかに岩に頭を打ち付けた。

狼は、いったいどこに行ったのか。

ふと下を見ると、赤い小さなポーションと、銀貨が何枚か落ちていた。

俺が欲しいのは、こんな物ではない。

ミノタウロスは、とまどい、怒った。

勝利の報酬は、あの狼の肉でなくてはならない。  
肉だ。肉だ。

あの肉を食らわねばならなかったのに。

あれは俺の物だったのに。

飢えはいっそうひどくなるばかりだった。

ミノタウロスは、斧を拾い上げ、迷宮の奥へ進んだ。

いた。

先ほどと同じ灰色狼である。

その俊敏性と狡猾さは、すでに学習した。

ミノタウロスは、左手の斧を喉の前に構え、右手の斧を敵のほう

に向け、油断なく狼の動きを見つめた。

すばらしい速度で走り寄った狼は、接触する直前に左に身をかわした。

そこに、すつと右手の斧を突き出す。

斧の切っ先が、狼の右頬に食い込む。

刹那、右手の斧を引き、左手の斧を、狼の首に振り下ろした。

狼の首が跳ね飛び、胴体は床の岩盤に打ち付けられた。

肉だ。

ミノタウロスの眼が歓喜の色をたたえた。

しかし、今度も、絶命した狼の姿は消え去り、あとには青い小さなポーシヨンと、数枚の銀貨が残された。

ミノタウロスの顔が、怒りにゆがむ。

何だ、これは！

またも俺から戦利品を取り上げるのか！

ふざけるな！

肉をよこせ！

ミノタウロスは、青いポーシヨンを踏みつぶすと、さらに奥へと進んだ。

すぐに三匹目の狼に出遭った。

今度は、こちらから駆け寄った。

左手でフェイントの攻撃を仕掛け、狼を右側に誘導して、その鼻面に右手の斧を叩き込んだ。

狼は、真っ二つに切り裂かれた。

肉だ。肉だ。

肉をよこせ。

変な物に変わるんじゃないぞ。

お前の肉を、俺によこせ。

相手を見かけた瞬間から、心の中で叫び続けた。

今度の狼は、姿を消すことなく、血だまりの中に沈んでいる。

斧で肉を切り取り、口に運んだ。

かみしめて飲み込んだとき、何とも言えない充足感が、ミノタウロスをひたした。

肉だ。肉だ。

おのれが倒した狼の肉をむさぼった。

半分ほどの肉を腹に納めたとき、またも狼の姿は消え、数枚の銀貨が残された。

腹はくちた。

それなのに、飢えが収まっていないことに、ミノタウロスは気づいた。

斧を両手に持って立ち上がると、次の敵を探して歩き始めた。

それから十数度、狼と闘った。

たいてい狼は一匹であったが、ときには群れで行動していた。

五匹の群れに出遭ったときには、連携攻撃にとまどい、たくさん  
の傷を受けた。

狼が死ぬと、赤いポーシヨンか青いポーシヨンと、銀貨が残る。

死骸は、血痕もろとも消え失せてしまう。

しかし、死骸が残るよう念じながら殺すと、しばらくのあいだは、死骸が残る。

幾度かは肉を食らった。

食べることに飽きると、ただ殺すために闘った。

次の敵を求めて歩いていると、前方から戦闘の気配がした。近づいてみると、人間が狼と闘っていた。

人間は一人である。

男で、皮の鎧を身に着け、剣で闘っている。

回廊には、二匹の狼が、血まみれになって転がっている。

剣士が倒したのであろう。

二匹の狼は、動くこともできないほどダメージを受けている。

三匹の群れと遭遇し、二匹を倒し、最後の二匹と闘っているのであらう。

だが、剣士も相当に傷ついている。

顔には幾筋もの裂傷が走り、服は血に染まっている。

左手は、動かせないほど傷を受けているのか、だらんと垂れている。

いっぽう、狼のほうも、相当な痛手を受けているが、動きは素早い。

低い位置から威嚇すると、すきを見ては剣士に飛びかかり、肉をかじり取る。

と、剣士がミノタウロスに気づく。

目が驚愕に見開かれた。

現在の敵でさえ、ようやくしのいでいるのに、新たな強敵が近づいて来たのである。

この場にいるはずのない、恐るべき敵が、絶望を感じて当然ではある。

しかし、ミノタウロスには、この闘いに参戦するつもりはなかった。

弱っている獲物を倒しても仕方がない。

それよりも、人間が灰色狼と戦っている、その技に興味があった。

剣士は、刃先を狼のほうに向けてはずさない。

狼が爪や牙で攻撃をすると、手首をひねり、剣の角度を変えて、攻撃を受け、そらす。

最低限の動きで、攻めをしのいでいる。

体力を温存するためでもあるが、あれならば、大きく態勢が崩れることもない。

体の端をかすめるような攻撃は、無視している。

そのため、傷は少しずつ増えているが、体の中心に来る攻撃は防ぎきっている。

ミノタウロスに、分析的に男の動きを理解できるほどの知力があつたわけではないが、学ぶものがあると感じ、闘いの行方を見守つた。

決着は突然であつた。

剣士の体がぐらりと揺れたのを見逃さず、狼が飛びかかった。

ミノタウロスは、それが人間の仕掛けた罠であると気がついていった。

剣士は、剣で小石を弾いて狼の顔に当てた。

すかさず、動かないはずの左手を、狼の喉に突き込む。

手の骨がかみ砕かれる音が聞こえる。  
そのとき、剣は狼の腹部に差し込まれ、びりびりと音を立てて、股までを一気に切り裂いた。

狼の飛びかかった勢いに押され、剣士は仰向けに倒れ込んだ。  
その体の上にのしかかった狼は、すでに事切れていたのであろう。  
剣士の腹に、赤いポーションと、数枚の銀貨が残された。

剣士は、剣を手放して、赤いポーションを右手でつかむと、仰向けのままミノタウロスのほうを見ながら、飲み干した。

全身の傷が、見る見る癒やされていく。  
ぐしゃぐしゃになった左手さえ、修復されていくのが見える。

剣士は、剣を杖に起き上がり、瀕死の二匹にとどめをさした。  
一匹は銀貨と赤ポーションに、一匹は銀貨と青ポーションになった。

剣士は、二つのポーションを、すぐにあおった。  
傷はさらに治り、気力さえ取り戻したように見える。  
そうした行動を取るあいだ、注意をミノタウロスからそらすことはなかった。

ミノタウロスのほうでは、闘いが終わるとともに、興味を失っていた。

剣士が完全には復調していないのは明らかであり、殺すに値する強さを感じなかったのである。

続いて剣士は、落ちていた銀貨を拾い集めた。

抜き身の剣を右手に持ち、巨大な敵をにらみながら、回廊の奥に後ずさって行く。

と、剣士の姿が横穴に消えた。

ほどなく気配が消えてしまう。

不審に思っただけで近づくと、横穴と見えたものは、上方に続く階段であつた。

ここは何度か通つたはずなのに、階段があるとは気付かなかつた。

きびすを返し、生まれた部屋に戻ると、眠りについた。

### 第3話 冒険者パーティー

何かが近づいて来る気配に、ミノタウロスは目を覚ました。  
両手に斧を持って立ち上がり、入り口のほうを見つめた。

入り口に、一人の男が現れた。

「いたぜ」

男はそう言った。

身軽そうな装備をしている。

小柄な背中から短弓がのぞいている。

男はスカウトであった。

「いて当然よね。」

フロアボスがボス部屋を出て歩き回ってるなんて、「冗談じゃないわ」

答えたのは、後ろから現れた若い女である。

右手には短い杖が握られている。

魔法発動の依り代となる杖である。

「ええ。」

それはそうですね。

でも、九階への階段付近でミノタウロスを見かけたと報告しているのは、マルコですからね。

いいかげんなことを言う人じゃない。

それに、十階のあちこちで、放置された銀貨やポーシヨンが見つかるのは間違いないですよ。

現にぼくたちも、拾ってきたじゃないですか」

三人目は、がっしりした大柄な青年で、幅広の長剣を持っている。胸、肩、額、腕などは金属板に覆われており、防御力の高そうな剣士である。

「で、どうするー？」

このまま帰るか？

倒しておくかあ？」

スカウトの軽口に、魔法使いの女が答える。

「このミノタウロス、気に入らないわ」

眉間にはしわが寄っている。口調は吐き出すようである。

「なんで、こいつ、あたしらを見ても、吠えないの？」

突っかかって来ないの？

なんで、こいつ、偉そうに立ったまま、値踏みするように、こっちを見るの？

こいつ、やっぱり変よ」

「そういや、そうだな。

ミノタウロスとは、一回しか闘ったことないけど、あんどきとは

ずいぶん違う感じがするぜ」

「倒しましょう。」

恩寵付きのバスターソードが出たら、下さいね。

そのほかの物なら、お二人でどうぞ」

「いや、そりゃ出ねえだろう。」

相当なレアドロップだぜ。

恩寵バスターソード狙いで、五十体以上ミノタウロス狩り続けたけど、結局ドロップしなかつたってやつの話聞いたことあるぜ」

「それ、ぼくです。」

あと、まだ四十九体なんです。

次こそ出そうな気がします」

「お前だったのか。」

それにしても、そんだけの数、一人で倒したのか？  
すげえな。

つか、ボスを独り占めすんな。

つか、今日も一人でやれ」

「だめよ！

あたしも、普段ならミノタウロスは、一人で狩るわ。

でも、こいつはだめ。

悪い予感がするの。

全員でかかるのよ。

バジヤ、指揮お願い」

「へいへい。」

じゃ、戦闘隊形」

すつと、三人はフォーメーションを組み替えた。  
先ほどまでは、探索用のフォーメーションであったが、これは戦  
闘用のフォーメーションである。

剣士が前に立ち、距離を置いて魔法使いが、その斜め後ろにス  
ウトが立つ。

臨時パーティーではあるが、お互いの特性やスキルは確認済み  
ある。

「シャル、足止め準備。

レイ、そのままの速度で接敵。

接敵したら、タゲ取り。

防御主体で敵を引きつけてくれ。

シャル、足止め発動後、詠唱の速い攻撃呪文を連発。

俺がアイカロスを射ったら、威力の大きい魔法を準備」

そのまま三人は、生き物のほうに進んで行く。

やっぱりでかいなあ、とレイストランド・ユリオロスは思った。

三人の中では抜けて大きい自分の背丈が、このミノタウロス  
の肩までしかないのである。

今まで遭った中で、一番大きいミノタウロスだな。

威圧感、すごいや。

だが、これを足止めするのが、前衛たるレイストランドの役目  
である。

それに、すぐ魔法が来るだろう。

「アースバインド」

シャルリアが発動呪文を唱える。  
ミノタウロスがレイストランドを攻撃の間合いにとらえる直前、  
突進は突然止められた。

地面から黒い木の根のような物が出て、足にからみついている。

そのすきを逃さず、レイストランドは左足を大きく踏み込み、剣を右後ろに引いてから、たっぷり加速を付けて、両手剣をミノタウロスの脇腹にたたき込む。

強靱な筋肉の鎧に覆われたミノタウロスであるが、ここは刃が通りやすいのである。

驚いたことに、刃は筋肉に弾き返された。  
が、確かに傷は付けた。

これでタゲは取った、と思いつつながら、レイストランドは小刻みな攻撃を仕掛けようとした。

そこに左手の斧が横から切り込んで来た。  
重量のある攻撃なので、カッティングでは、そらしきれないと判断。

両手剣を下からかち上げて、手斧の軌道をそらす。

上から右手の斧が、うなりをあげて降ってきた。

左手の斧をそらすために両手剣に力を込めた瞬間に攻撃されたので、迎撃できない。

身をそらしながらのバックステップで、かるうじてかわした。

「うわっ。」

あ、危なかった」

確かに、今まで闘ったミノタウロスとは違う、とレイストランドは思った。

パジャ・ン・ド・マユルは、自分の目を疑った。

今、このミノタウロス、フェイント使わなかったか？

いや、何を馬鹿な。

気のせいだ。

だが、優れたスカウトであるパジャは、一目見たときから、これが尋常なミノタウロスでないと感じていた。

軽口をたたきながらも、胸中には悪寒がふくれあがってきていたのである。

いきなりアイカロスなどという強力な毒矢の使用を作戦に組み込んだのも、スカウトとしての嗅覚がなせるわざであった。

「アイス・ナイフ」

再び、シャルリアの発動呪文が唱えられ、氷のくさびがミノタウロスを襲う。

「アイス・ナイフ」

「アイス・ナイフ」

「アイス・ナイフ」

「アイス・ナイフ」

立て続けに発動呪文が唱えられる。

この魔法は、比較的短時間の準備詠唱のあと、魔力と技術に応じた複数の発動ができる点に強みがある。

それにしても、これほど短い間隔で5本の連続発動ができるのは、この女魔法使いの技量の高さを示している。

一本目のアイス・ナイフは、顔を狙った。  
続く四本は、胸を狙った。

ミノタウロスは、左手の斧を顔前に掲げて、一本目を防いだ。

こしゃくな真似を、とシャルリア・リードは思った。  
だけど、これでこちらの勝ちよ、と心の中で続けた。

一本目は注意を引きつけるのが目的。  
続けて四本ものくさびが飛んで来れば、それをかわすか、迎撃しようとする。

ところが、足は地に縫い付けられているので、大きくは動けない。  
腹部を狙えば、はずすことはない。

四本のアイス・ナイフに気を取られた隙を突いて、パジャの短弓から毒矢が飛ぶ。

アイカロスの矢は、特別な準備を要し、気軽には使えないアイテムである。  
強力な麻痺毒を持つうえに、狙いを外さない祝福がかけられている。

すぐにこの矢が怪物に突き刺さり、勝負は一方的なものになるであらう。

音もなくパジャが矢を放った。

ミノタウロスは、四本のアイス・ナイフに目もくれず、毒矢だけを左斧ではじいた。

四本のアイス・ナイフのうち三本は、ミノタウロスの腹と胸に刺さり、一本は左腕に刺さった。

痛みを覚えながらも、ミノタウロスは、右手の斧で剣士を攻撃し続けた。

剣士に攻撃の余裕を与えないように。

三人の冒険者は、あぜんとした。

ひよっとして、意識して毒矢だけを防いだのか？

いや、偶然に決まっている。

偶然にせよ、毒矢が不発に終わったのは痛手である。

アイカロスの矢は、神殿での儀式で作られる。

高価なのである。

そして、一度撃てば魔力は消費され、二度と使えない。

今回の依頼は、ギルドに貸しを作るつもりで、安い報酬に目をつぶって受けた。

消耗品の経費は、三人で均等に分担する約束である。

こんちくしょうめ。

こっとなったら、高めのアイテムをドロップしやがれ。

三人の心は一つになった。

ミノタウロスは、いらいらしていた。

足止めの魔法がかけ直され、剣士は右側に、スカウトは左側に回り、攻撃角度を広げたうえで、絶え間なく剣戟と攪乱射撃を繰り返してくる。

魔法使いが撃ってくる氷のナイフは、一撃の威力はそれほどではないが、確実に傷を増やしていく。

ミノタウロスが流した血は、足下の岩場に血だまりを作っている。

うつとおしい。うつとおしい。うつとおしい。

一人一人は、さして強力な敵であるとは思えない。だが、三人で連携されると、どうにも闘いにくい。こんな相手に翻弄されているおのれが、あまりにはがゆく、許せなかった。

三人の冒険者は、あせりを覚えはじめていた。

こんなはずではなかった。

確かにミノタウロスは、この辺りの階層では強力なボスモンスターであり、Cクラス冒険者がソロで討伐すれば、無条件にBクラスにランクアップできる。

しかし、しよせんは、馬鹿力とタフさだけが持ち味の、基本的には近接攻撃特化型モンスターであり、Bクラスでも上位にある3人がパーティーを組めば、楽勝で倒せる相手のはずなのである。

それなのに、攻めきれない。

毒矢ははじかれ、スカウトの矢玉はことごとく退けられた。

アイス・ナイフをはじめ、手数が出る魔法攻撃で、着実に傷を増やしているが、ミノタウロスは、巧妙に体の中心線は守り続け、急所への被弾はない。

血は流しながらも、動きは少しもぶくならない。

まるで無限の体力を持っているかのようである。

アースバインドが効いているから何とか互角に戦えているが、どこまでねばれば倒せるのか、見当もつかない。

レイストランドは、いつもであれば、相手を怒らせてから、すき

をついて手足を切り落としていき、最後に首を落として、ミノタウロスを倒す。

だが、このミノタウロスは、手足を切り落とせるすきを、まったく見せない。

シャルリアは、いつもであれば、足止めしたうえで、小刻みな攻撃を続け、相手が武器を取り落としてから、フレイムボールでとどめをさす。

しかし、このミノタウロスは、斧を取り落とす気配を見せない。フレイムボールの詠唱でじっとしているとところに、斧を投げつけられる危険は冒せない。

パジャは、ソロでミノタウロスと闘うのは、相性がよくない。それでも、毒矢さえ当たれば、勝つのはやさしいのだが。

冒険者たちは、体力回復の赤ポーションと、精神力回復の青ポーションを断続的に摂取することで、かろうじて戦闘力を保っていた。だが、物資には限りがある。

特に、シャルリアは、アースバインドを放つたびに青ポーションを飲み、残数が少ないので、もうあまり長くは闘えない。

パジャの使う短弓は、20階層のボスモンスターからドロップしたレアアイテムで、通常攻撃であれば弓の補給が必要ないが、そのぶん精神力を消費する。

こちらも、青ポーションの残量は多くない。また、いくらポーションを飲んでも、集中力は回復しない。心の疲労はたまっていくのである。

やがて均衡は崩れるであろう。

どれほど攻防を繰り返したか。



「馬鹿なっ」

二度目のハウリングが三人を襲った。

三人は、この攻撃を予期していなかった。

ミノタウロスのハウリングは、一度使用すると、次に使用できるまで長いブランクタイムがある。

事実上、一度の戦闘では一度しか使えない。

だから、これはあり得ない攻撃なのであった。

まさか、このミノタウロスがレベルアップしたために、スキルもランクアップしていたとは、想像もできなかった。

三人は、何とか黄ポーシオンを取り出そうとするが、体の自由は利かない。

シャルリアは、杖の根本を口に押し込んで、かみしめた。

この杖は、エルフがトネリコの木で作った物である。

魔除けの効果があり、また、精神力を高める効果がある。

状態異常が少し緩和されると、シャルリアは、一か八か、フレイムボールの準備詠唱を開始した。

いくらこいつでも、フレイムボールが直撃すれば、ただでは済まないはず。

だが、シャルリアの魔法準備を、ミノタウロスは見逃さなかった。ミノタウロスは、右手の斧をくるりと回すと、鋼鉄の斧頭で、足下の岩を打った。

岩は飛礫となってシャルリアに襲いかかり、顔に、胸に、腹に、足に、いくつもの穴をうがった。

詠唱は中断された。

冒険者たちは、さらに信じられない光景を目にする。

ミノタウロスは、ひときわ高く怒りのうなり声を上げると、アイズバインドを引きちぎったのである。

魔法が砕け散る音が響き、束縛の効果は完全に消滅した。

シャルリアは、痛みでもうろうとしながら、恐怖の目で怪物を見た。

ミノタウロスが、いったん発動したアイズバインドを自力で脱することなど、あり得ない。

だが、現にミノタウロスは自由を取り戻し、自分たちは動くこともままならない。

まず剣士の首が飛んだ。

次に盗賊が唐竹割にされた。

最後に魔法使いがくしゃりとつぶされた。

こうして戦闘は終わった。

三人の死体は消え、あとには所持していたアイテムが残った。

## 第4話 剣士

ミノタウロスは、ある機能に気がついた。

きっかけは、三人の冒険者との闘いのあと、剣士の使っていた両手剣に興味を持ったことである。

斧を置いて、剣を拾い上げようとした。

そのとき、どういう意識の働きか、右手の斧を、ひょいと左肩の上に納めたのである。

手斧は、何もない空間に消えた。

斧が消えたことに驚き、そんなことをした自分に驚いた。

いろいろ試してみても、左肩の上に、いわば見えない収納袋があって、物品をしまっておけるのだと分かった。

剣でも、杖でも、ポーションでも、銀貨でも。

そのほか、試した物は、何でも収納できた。岩でさえも。重さは感じない。

収納できる数には限りがあるようだが、今のミノタウロスにとっては十分な数であったし、そもそもミノタウロスは、数を数えることができなかったので、気にはならなかった。

取り出すときには、その物品を思い出しながら、左肩の上をまわぐる。

すると、その物品がつかめる。  
そのまま引き出せばよいのである。

その見えざる収納袋を、戦利品置き場として使うことにした。  
よい闘いから生まれた戦利品は、俺とともに在ればよい。  
そう考えたのである。

あの闘いで、ミノタウロスは、再びレベルアップをした。  
だが、ミノタウロス自身にとり、あの闘いの思い出は苦い。  
自分はまだ戦い方を知らない。  
そう思い知らされたのである。

階段を上ってみよう。  
そう思った。  
新たな敵に出合うために。

階段に足を踏み入れようとすると、心に強いためらいが湧き上がった。  
その不快感を無理やり押し込めて、階段を上った。

九階層に上がると、剣戟の音が耳に入った。  
階段の近くに、横穴がある。  
音は、その横穴から聞こえる。  
穴をくぐると、中は広い部屋になっていた。

豚のような顔をしたモンスターと、五人の人間が闘っていた。  
モンスターの数も五匹で、長剣、槍、短剣、鉄棒、太い棍棒を持っている。

対する人間は、剣を持った男が三人、杖を持ってロープをまとっ

た女が一人、祈祷書を両手で広げて持つている女が一人である。人間たちは、後ろに現れたミノタウロスに、気づいていない。

前衛の剣士三人は、よい動きを見せて、五匹のオークを防いでいる。

杖を持った女は、ぶつぶつと呪文を唱え、「ライトニング」と叫んで、モンスターを指す。

すると杖から光弾が飛び出して、モンスターを直撃する。モンスターの腕が吹き飛んだ。

すかさず、右側の剣士がそのオークの胸に剣を突き入れる。オークが血を吐いて倒れ込む。

魔法使いは、またもぶつぶつ呪文を唱えている。

「ライトニング」と叫んで光弾を撃つ。今度は、中央の剣士ともみあっていたオークの腹をえぐった。

左側で二匹のオークを相手にしていた剣士が、一匹の持つ短剣をたたき落とした。

が、もう一匹のオークが振り下ろした太い棍棒をよけそこねて、したたかに右肩を打たれた。

「回復おねっ」

負傷した剣士が叫ぶ。

神職の女が、「キュア！」と呪文を唱える。

祈祷書が、ぼわつと緑色に光る。

淡い緑の光が、一瞬、傷ついた剣士を包み込み、消える。

「ありっ」

中央の剣士は、横腹をえぐられたオークの下腹部に剣を突き入ると、ブーツでそのオークを蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた先には、棍棒を振りかざして左側の剣士に襲いかかるうとしていたオークがいた。

モンスター同士がぶつかって態勢がくずれるあいだに、中央の剣士が飛び込んで、棍棒を持ったオークの首を薙ぐ。

傷の癒えた左側の剣士が、中央の剣士と位置を入れ替え、突っ込んで来たオークの槍を、剣でたたきつける。

オークの槍は地面に突き刺さる。

手がしびれたのか、一瞬動きが止まるオーク。

剣士の脇をかすめて、ライトニングがオークに突き刺さり、致命傷を与えた。

「おいおい、危ねえって、今のライトニング。かすったぞっ」

「だいじょうぶだって。

ちゃんと狙ってるから、あんたを」

「俺を狙って、どうすんのっ」

「そこを、あんたがさっとかわせば、オークを直撃できるってわけよ」

戦闘に決着がつき、余裕が生まれたのか、冗談の応酬をしながら、剣士が魔法使いを振り返った。

そして、後ろの怪物に気づく。

かくん、と剣士のあごが落ち、目は驚愕に見開かれる。

「み、み、み、み」

「水が欲しいのなら、三べん回ってわんって言いなさい。私はもう水持ってないけど」

「み、み、み、み」

「今日は一段と、カレンのロルフいじりが好調だね」

「うん。いい感じに絶好調だね」

残ったオークにとどめをさした二人の剣士が、笑顔で振り返るとともに、ミノタウロスに気づき、真っ青になる。

それを見て、魔法使いの女と後ろの女も、振り返る。

魔法使いのカレンが、失神して倒れかかる。

剣士のロルフが、すばやく駆け寄って、抱き留める。

その隣では、神職のジヨナが、へなへたと崩れ落ちる。

残りの二人の剣士は、剣を構える気力も失せたのか、ほうけたように、怪物を見ている。

この若い五人パーティーは、数日前に、Dクラスに昇格したばかりである。

つまり、一対一なら六階層のモンスターに勝てる、という程度の強さである。

連携のよさで、九階層で同数のモンスター相手に危なげなく闘ってはいるが、彼らのほとんどは、ミノタウロスの一撃でHPを全損する。

しかも、今は、見た目ほどは余裕のない闘いを終えたばかりなのである。

後ろに立つミノタウロスの姿は、死神に見えたはずである。

ミノタウロスのほうでは、よい動きと連携をする者たちであるから、闘ってみるのも面白いかと思っていた。

だが、人間たちにみなぎっていた闘気は、すうっとしぼんでしまった。

戦闘になりそうもないので、興味を失い、振り向いて、部屋を出た。

九階層は、オークの出現する階層であった。

オークは、単体では十階層の灰色狼より弱いと思われたが、その代わり、必ず群れで行動していた。

また、いろいろな武器を持っていた。

刃物の扱いは不器用であったが、膂力があるため、棍棒などの鈍器には、意外なほどの破壊力が込められていることがあった。

十匹ほどの集団であれば、ミノタウロスも、そこそこ闘いを楽しむことができた。

それも、すぐに飽きた。

オークには、およそ連携というものがない。

動きは単調で、攻撃は力任せである。

その力さえ、今のミノタウロスに傷をつけるには及ばない。

フロアボスの部屋にも行き当たった。

この階のボスは、巨大なオークであるが、ミノタウロスに比べれ

ば小柄である。

剣筋は粗雑で、何のひねりもない。

あっさり首をはねた。

長剣と銀貨がドロップしたが、拾おうともしなかった。

階段を探しては、次々と上って行った。

ゴブリン、コボルト、毒蜘蛛など、階層ごとに出現する敵は変わった。

上の階ほど、敵は弱くなった。

途中、何度も人間に行き合ったが、逃げる相手は追わず、また、戦闘中の相手や、戦意を向けてこない相手は無視した。

六階層で、すさまじい敵と出遭った。

剣士であった。

風のように走り、フロアのモンスターをかわし、階段を上がろうとしていた。

ミノタウロスが、殺気を込めて背中を見つめると、いきなり身を翻して切りかかってきた。

剣速があまりに速く、かわすこともできない。

胸を深く斬られ、血が噴き出す。

痛みとともに、怒りと喜びが、ミノタウロスの脳を満たした。

今まで出合ったどいつよりも強い。

剣はやつと長剣といえる長さで、驚くほど細身だった。美しい輝きを放つ剣であった。

細剣使いの後ろから、フロアモンスターが襲いかかった。細剣使いは、ろくに振り向きもせず、白刃を一閃させた。急所を的確にとらえたのであろう。

血も出さずにモンスターはくずおれ、消えた。

ミノタウロスは、剣士と闘った。

細剣を振るう、その剣士の姿は美しかった。

鮮やかな剣さばきに翻弄され、ミノタウロスは、体中の至る所を切り刻まれたが、急所だけは守りきって持久戦に持ち込んだ。

しばらく攻防を繰り返したあと、細剣使いは急に手数を増やして踏み込んできた。

ミノタウロスは、半歩下がって態勢を整える。

細剣使いは、すばやく後ろに跳びすさりつつ、左手を腰の小物入れに伸ばす。

ミノタウロスは、両手の斧で地面の岩つぶを弾き飛ばしながら、すかさず細剣使いに飛び寄る。

細剣使いは、剣で三個の飛礫を斬り飛ばし、左手で二個の飛礫をさばいた。

そのほかの飛礫は、体にかすらせもしない。

だが、そのとき、左手でつかもつとしていた何かが、小物入れから飛び出して、地に落ちた。

ポーシヨンである。

こいつは、疲れている。

と、ミノタウロスは、感じた。

それは、判断とか分析というより、嗅ぎ取った、というのが当たっている。

剣士は、深い階層で、数日にわたり、強力なモンスターたちと闘ってきたあとだったのである。

ミノタウロスは、休みを与えない、という戦術を選んだ。

細剣使いが飛礫をさばくあいだに、ミノタウロスは、斧の間合いぎりぎりの位置を取った。

その間合いを保ち抜くつもりである。

斧と腕を合わせたリーチは、細剣使いの剣と腕を合わせたリーチより、少し長い。

この間合いを保って、両手の斧を振り回し続ければ、細剣使いは防御に追われ、攻撃はしにくい。

細剣使いは、何度も距離をかせごうとしたが、そのたびに、ミノタウロスは、無理をしても阻止した。

一度など、深く踏み込んだ剣を、わざと脇腹で受けて、タイミングを狂わせることもした。

思惑が狂って、苦しいはずなのに、剣士の無表情な顔に、わずかな笑みが浮かんだように見えた。

そのあと、細剣使いは戦術を変えた。

もう距離を取ることも、ポジションを使うことも諦めたのか、ミノタウロスが要求する間合いに敢えて応じ、喉と心臓を狙ってきたのだ。

すさまじい勢いの剣戟が続く。

ミノタウロスは、顔を切り刻まれても、のけぞることはしない。

のけぞってしまえば、腕が伸びきり、斧の扱いにゆるみがでるからである。

胸は血だらけだが、決して後ろには下がらない。

この距離を保つ限り、どれほど表面の皮や肉を削り取られようと、厚い胸板の奥にある心臓には届かない。

ミノタウロスの胸から吹き出る血で、細剣使いも真っ赤に染まっている。

目にも血が飛び込んでいるが、一瞬たりと目を閉じることはしない。

これほど長い時間、ミノタウロスのリーチの中で闘いながら、ただの一度も斧を身に受けていない。

こいつは、大したやつだ。

ミノタウロスが剣士に感じた思いは、人の言葉でいえば、尊敬に近かったろうか。

とはいえ、人間の体力には、限りがある。

ひとときわ激しい連続攻撃で、斧を持つミノタウロスの両腕をはずたにしたあと、一瞬、息苦しげに、剣士の動作がゆるんだ。

次の瞬間、右手の斧が、剣士の肩口に食い込んだ。

剣士が大きくよろける。

目は力を失っていないが、目の周りが黒ずんできている。

ミノタウロスが息を詰めて連続攻撃をすると、珍しく、まともに細剣を斧に打ち合わせて、攻撃を弾いてきた。

かわしたり、そらせたりするだけの余裕がないのであろう。

そのまま押し込まれて、剣士は転倒した。

左斧が、剣士の左足を、すねの上の部分で断ち切った。

ミノタウロスは、さらに一步踏み込んで、胴体に右斧を打ち込もうとした。

すると、神速の剣が、ミノタウロスの左足を大きく薙ぎ、そのまま円を描きつつ、なおも速度を上げて、足をかばって態勢を崩しかけたミノタウロスの首を刈った。

ミノタウロスは、危うく首をひねって、致命傷を免れたが、首から血潮が吹き出す。

それは、そのまま、剣士の下半身に降り注ぐ。

もはや、ミノタウロスの血と、剣士の血は混ざり合って、区別も付かない。

首をひねったため、いよいよ態勢を崩したミノタウロスは、剣士の体の上に倒れかかる。

細剣が、くるりと反転して、血を吹く首筋に迫るのが分かる。

ミノタウロスは、剣士の体に身を寄せつつ、左肘で、右手を押さえ込んだ。

細剣は、側頭部を浅く切り裂くにとどまった。

ふと見ると、剣士の左手に、ポーシヨンがにぎられている。

最初に落としたポーシヨンである。

いつの間に。

油断も隙もないやつだ。

ミノタウロスは、右手で剣士の左手を払った。

ポーシヨンは、剣士の手を飛び出し、岩壁に当たってつぶれて散った。

ミノタウロスは、すばやく右手で斧を握り直し、背中に回す。

キュイン！

と、剣が斧にはじかれて鳴った。

剣士が剣を引き戻そうとするのを、ミノタウロスは左手の肘で押し放し、その反動で起き上がる。

喉首のすぐ前を、剣尖が通り過ぎる。

剣士は、身を起こそうともしない。

もうそれだけの体力がないのであろう。

両目を閉じて、細剣を体の上に横たえている。

ミノタウロスは、頭の側に回り込もうとする。

音も立てず、光の軌跡だけを見せて、細剣が振るわれた。

まるでスローモーシヨンのようだった。

細剣が、きれいな円を描いた。

ミノタウロスの右足首が、半ばまで切り裂かれた。

細剣はと見れば、いつの間にか、剣士の胸の上に戻っている。

赤黒く染まった岩場と、モンスターと、人間と。

その中で、細剣だけが、血にまみれつつ、血のりをはじいて、銀色の美しい光を放っている。

剣士は、眠っているように見えるが、不用意に間合いに踏み込めば、何物たりとも切り裂かれてしまうであろう。

満月のように美しいあの円弧は、この剣士の絶対制空権なのである。

ミノタウロスは、迷った。

このまま待てば、やがてこいつは死ぬ。

ポーションの使用さえ許さねばよい。  
待つべきだろうか。

だが、次の瞬間、自分の愚かしさに笑いがこみ上げる。

馬鹿か、俺は。

俺が求めるものは、勝利ではない。

俺が求めるものは、闘いだ。

俺が求めるものは、より強い俺だ。

今、ここに、死に瀕してさえも俺を圧倒する、すばらしい敵がいる。

死ぬな。

少しでも長く俺を苦しめてくれ。

ミノタウロスは、剣の間合いに注意しながら、剣士の頭の側に回り込んだ。

体中から血が流れ出し、ずきずきする。

ミノタウロス自身の体力も、そうはもたない。

だが、頭や心臓を狙うのは無駄だ。  
剣だ。

やつの剣が生きている限り、やつを倒すことはできない。

やつの剣は、やつの命そのものだ。

ミノタウロスは、慎重に剣筋を予想しながら、相手の間合いに踏み込んだ。

キュイン！！！！

剣士の攻撃は、正確に敵の足を薙いだ。

だがその軌道に、ミノタウロスの斧が差し出された。  
細剣が、斧に食い込む。

すばやく細剣が引かれようとする、その刹那、ミノタウロスは、  
渾身の力で斧をねじり上げる。

パッキイイイイイイイン！

細剣は、折れた。

剣士は、薄目を明けて、顔の前に掲げた愛剣の残骸を見つめた。  
ミノタウロスは、斧を、剣士の心臓に打ち込んだ。

剣士の体が一瞬跳ね上がり、口から血があふれ出た。  
剣士が、ミノタウロスを見た。

その眼差しには、怒りも、恐怖も、憎しみもなかった。  
ミノタウロスは、剣士の目を見ながら、首を刎ねた。

またもミノタウロスの体は、変化を始めた。  
レベルアップである。

より強く、より速く。  
すべての傷は消え去った。  
そのとき、ミノタウロスは、

やつに付けられた傷がすぐに消えてしまつのは、惜しいな、  
と思った。

剣とはこれほどまでに変幻自在なものなのか。  
見事な敵であり、満足のいく勝利であった。

剣士が消えたあと、大量のアイテムが、そこに残された。

いったいどこに、こんなにたくさんアイテムを持っていたか、  
と思えるほどである。

剣士も、見えない収納袋を持っていたのだろう。

ミノタウロスは、深い充足感を味わいながら、アイテムの中から  
腕輪と短剣を拾った。

傷は癒やされたものの、体の隅々まで、ひどく疲れていた。  
頭ももやがかかったようである。

ミノタウロスは、十階層の大部屋に戻った。

水を飲んで、眠った。

泥になったように。

目が覚めると、湖の水を飲んだ。

心身の充実が、実感される。

以前とは比べものにならないほど、戦闘力は上がっている。

さらに劇的な上昇を遂げたのは、知力である。

もともと、モンスターの知力は低い。

ミノタウロスは、その中でも、特に知力のステータスが低い。

それが、レベルアップにより、知力が底上げされ、情報認識、理  
解、分析、記憶、総合処理など、関連ステータスが、Bクラス冒険  
者なみに上昇していた。

思考は、すっきりと冴え、生まれ落ちてからこれまでの出来事を、  
つばさに思い起こすことができた。

細剣使いとの闘いを振り返り、勝てるはずのない闘いに勝ったの  
だと、あらためて理解した。

そして、場面場面での、相手を取り得た行動、こちらが取り得た  
行動を、頭の中でシミュレーションした。

いつの間にか、ここで闘った三人の荷物がなくなっていた。荷物の中で、興味があったのは、長剣だけであり、それはもう見えない収納袋にしまっておいたので、問題はないが。細剣使いとの闘いのあと、見えない収納袋の収納可能数は、数百倍に増えていた。

部屋を出ると、二匹の狼がいた。

飛びかかって来るところに斧を合わせて、ほとんど力も使わず、一瞬のうちに二匹を倒した。

こんな相手に多少とも苦戦したなど、信じられないほどである。

ミノタウロスは、再び、上への階段を上り始めた。

このまま上に向かっても、もう強いモンスターはいないであろうが、一度、行ける所まで行ってみよう、と思った。

この迷宮が、迷宮でない世界とつながっているのなら、その迷宮でない世界を、一目見たいと思ったのである。

## 第5話 魔法使い

ミノタウロスは、四階層で上への階段を探していた。

いきなり前方の闇の中から魔法攻撃を受けた。

ちょうど心臓の辺りに着弾する。

体は弾き飛ばされ、ひっくり返る。

直感が、倒れかかる体を左にひねらせた。

すぐ右を光弾が走り抜け、地面に当たって爆発した。

体をひねっていなかったら、致命傷を受けていたところである。

倒れつつ体を回転させ、ぐるぐると転がり、身をねじって、上半身を起こした。

起き上がる頭部を狙い澄ましたように、光の蛇をねじり合わせたような魔法が伸びてくる。

顔をひねってかわそうとする。

光の槍は、噛みつくように右頬をとらえた。

右頬は吹き飛ばされ、右目の視界は奪われる。

激しい耳鳴りがする。

だが、ミノタウロスの知能は、今が反撃のチャンスである、と判断した。

これほど威力の高い魔法を三連発で放ったのだから、ここで空白

の時間が生まれる。

そう考えて、前方に駆けだした。

すかさず雷撃が飛んで来る。

胸のまん中に突き立ち、大きなスパークを上げる。

巨体が吹き飛ばされる。

ミノタウロスは、全身と脳髓がしびれるのを感じながら、それでも、岩陰に転がり込んだ。

胸は焼けただれ、強烈な痛みが走る。

収納袋から三本の赤ポーションを出し、一気におおる。

またたく間に傷が癒やされていく。

顔を突き出して、様子をうかがう。

相手は、近づきも遠ざかりもせず、通路のまん中に悠然と立っている。

全身を厚手の布の服で包んでいる。

目、鼻、口を残して、顔も頭巾で覆われている。

特殊な防御効果を持つ服であろう。

頭巾で覆われて見にくいだが、顔には幾筋ものしわが刻まれ、白い口ひげと顎ひげを生やしている。

老人である。

それもかなりの高齢である。

だが、目は若々しく、みずみずしい。

こちらを指さす。

火炎弾が飛んで来た。

呪文の詠唱もなく。

こいつは、前の魔法使いとは、全然違う。

ミノタウロスは、そう思いながら、岩陰に頭を引っ込めた。ところが、軌道を変えた火炎弾に腹部を直撃された。

魔法攻撃を曲げることができるのか！

はみ出す臍物を左手で押さえながら、右手で赤ポーションを幾つかつかみ出して、容れ物ごとかみ砕いて飲み込む。

光の槍が立て続けに飛んで来て、隠れていた岩を完全に破壊した。

この魔法使いの攻撃は、一撃一撃が、致命的な威力を持っている。しかも、その強力な攻撃を、休みもなく続けて撃ってくる。

ミノタウロスは、何度も殺されかけながら、次々と遮蔽物を変え、勝機を探った。

何度か岩や飛礫を飛ばしたが、敵の体に触れる前に、ジュツと音を立てて消滅した。

しばらくそんなことを繰り返したあと、魔法使いは両手に雷球をまとって、ふわりと飛び上がった。

飛べるのか！

すさまじい速度で洞窟内を飛行し、ミノタウロスの背後に回り込むと、右手の雷球で頭を攻撃してきた。

とつさに体をひねり、向き直りざま、右手の斧で切りつける。

だが、必死の反撃は、かすりもしない。

魔法使いの攻撃は、ミノタウロスの左角と左側頭部を削り取り、後ろの岩をえぐった。

ミノタウロスは、しゃにむに斧の攻撃を繰り返したが、魔法使いは宙に浮いたまま、距離を取りもせず、余裕を持って、すべてかわす。

魔法使いが、右手の雷球で攻撃した。

ミノタウロスの左手首の先が、斧ごと消えてなくなる。

魔法使いが、左手の雷球で攻撃した。

ミノタウロスの右手に持った斧が蒸発する。

武器をなくした魔獣は、収納袋から獲物を取り出そうとした。

何かこいつを殴れる物を。

つかんだのは、細剣使いが残した腕輪だった。

後ろの岩を蹴って飛びかかり、腕輪を魔法使いの額にたたきつけた。

だが一瞬早く、魔法使いは、左手を顔の前にかざす。

雷球をまとったまま。

ミノタウロスの右手は、その雷球に吸い込まれて溶け去るほかない。

だが、そうはならなかった。

当たると見えた瞬間、雷球が消えた。

腕輪に吸い込まれるように。

腕輪は、魔法使いの左手ごと額を打ちすえた。

手が砕け、頭が割れる音がした。

飛びかかった勢いのまま、ミノタウロスは、手首から先のない左手を、大きく伸ばして旋回させ、魔法使いの胸にたたきつけた。

魔法使いの体は宙を飛んで後ろの岩にぶつかり、跳ね返って、うつぶせに岩の床に横たわった。

まだだ。

まだ、こいつは死んでいない。

両手の雷球は消えていたが、魔法使いにはまだ復活と反撃の力がある、と直感がミノタウロスに教えた。

間髪を入れず飛びかかり、腕輪で、魔法使いの後頭部を打ちすえる。

魔法使いの頭はぐしゃっとつぶれ、頭巾の下で脳漿が飛び散る。

そのとき、魔法使いの右手にはめた指輪が光った。

ミノタウロスは、反射的に、腕輪を顔の前に引き戻す。

指輪から赤く細い光が放たれ、腕輪に吸い込まれた。

ミノタウロスは、腕輪で魔法使いの心臓をたたきつぶした。

体の至る所を殴りつけた。

全身がぐじゃぐじゃにつぶれるまで、殴り続けた。

不思議なことに、どれほど打撃を加えても、魔法使いの服は破れなかった。

びちびちつ、という音がする。

振り返ったミノタウロスは、魔法使いの左足を見て、愕然とした。つぶしたはずの足が、ふくらみを取り戻し、勢いよくけいれんしている。

その次には、ぷくりと胸がふくらみ、脈動を始める。

体のあちこちが、生まれたての小さな命であるかのように、うごめき始めた。

魔法使いの全身が、命を取り戻そうと、あがいているのである。

どっだ。

こいつの生命力の元は、どこにある。

ミノタウロスは、ふと、気付いた。

指輪をはめた右手。

ここは、たたきつけてもつぶれていない。

指輪は、まるで心臓の鼓動のように、赤く、黒く、点滅している。

ミノタウロスは、有効な武器を求めて、左肩の上の空間に、右手を差し入れた。

指先にふれたものがある。

あの剣士が残した短剣だと、すぐに思い当たった。

短剣を取り出すと、魔法使いの、指輪をはめた指に突き立てた。

指輪は、指ごと切り離され、勢いよく飛んでいった。

同時に、体のあちこちで起きていた脈動は止まり、全身は、ぐったりとなった。

安心しかけたミノタウロスの鼻が、何やら焦げ臭い匂いをとらえた。

魔法使いの背中から、黒い煙が出ている。

不気味な生き物のような形に焦げ目が広がる。

その形は、人のようでもあり、獣のようでもある。

瞬間、勢いよく黒煙が立ち上り、不吉で邪悪な怪物が、現れた。すさまじい悪意と、強大な魔力を発している。

怪物が、手とも触手ともつかぬ物を、ミノタウロスの頭部に伸ばしてくる。

ミノタウロスは、傷ついた左手で、それを防ごうとする。  
あつという間に、左手の肘から先が腐り落ちた。

ミノタウロスは、右手に持った短剣を、怪物の体の真ん中に突き込んだ。

右手が激しく痛み、指が溶けていくのが分かったが、構わず短剣をねじり込んだ。

「ギシャアアアアアアッ」

叫び声を上げ、怪物が苦しんでいる。

短剣が、淡い緑の燐光を放っている。

突然、怪物は、霧のように空気に溶けて消えた。

同時に、魔法使いの体も消えた。

あとには、驚くほどたくさんのアイテムが残された。

ミノタウロスは、岩の上に大の字に横たわった。

激しい痛みが体を襲う。

またも体が造り替えられている。

すさまじいまでのレベルアップが始まったのである。

痛みが治まり、すべての傷は癒やされた。

失った指も、腕も、角も、頬も、修復されている。

ミノタウロスは、自分がとてつもなく強靱になっていることを感じた。

しばらく休んだあと、起き上がった。

魔法使いが残したアイテムは、残らず収納袋に入れた。

成長にともない、収納可能数も、飛躍的に増加していた。

今度は服も残ったので、それも拾った。

これほどの強敵を倒した証を、ひとかけらも残すことは許されない。

それにしても、何という敵であったことか。

広い場所であれば殺されていた。

あの腕輪がなければ殺されていた。

あの短剣がなければ殺されていた。

ポーションがなければ殺されていた。

ここまで力と経験を蓄えていなければ殺されていた。

人間とは、すごいものだ。

あそこまでになれるのだ。

ならば、俺も、まだまだ強くなれる。

体は疲れ切っていたが、気持ちは高ぶっていた。

階段を探して上っていった。

何度か人間と出遭ったが、相手は逃げるばかりで、戦闘にはならない。

直感は、ここが最上階層と教えている。

ここに外への出口がある。

ミノタウロスは、迷宮のしくみを振り返った。

各階層は、回廊と部屋でできている。

各階層のモンスターは、その階層にしかおらず、他の階層に行くことはない。

階段が目に入っていないようだ。  
モンスターは、回廊をうろつくこともあれば、部屋にいることもある。

モンスターによって、どちらか片方を好むようだ。

各階層には、ボスモンスターが、一体だけ出現する。

ボスモンスターの居場所は決まっている。

モンスターも、ボスモンスターも、殺されたあと、しばらくすると、湧いてくる。

各階層には、階段が、それぞれ二か所ある。

一つの階段は、上の階層につながり、一つの階層は、下の階層につながっている。

上の階層ほど、モンスターは弱い。

考えながら歩いているうちに、今までになく明るい光が差し込んでいる部屋があった。

あそこだ。

あそこに、強い光があふれている。

あの向こうに、迷宮ではない世界があるに違いない。

そう思って部屋に入ったミノタウロスが見たものは、ちゅうちゅ鳴くちゅぽけなモンスターに、ずいぶんちゅぽけな人間が、とどめを刺すところだった。

若い、というより、幼い。

明らかに、まだ戦える年齢ではない。

その少年は、モンスターを倒したときに現れた銅貨を、大事そうに拾い、腰の袋に入れた。

そして、顔を上げて、ミノタウロスに気付いた。

部屋は、かなり広く、あちこちで、ちゅうちゅう鳴くちっぼけなモンスターが走り回っている。

しかし、少年のほうを攻撃するようでもない。

このモンスターは、自分からは攻撃しないのだな。

ここまですに出遭っていないということは、部屋にたむろするタイプなのだろう。

部屋の端には、短い横穴があり、そこから、まぶしい光が差し込んでいる。

あそこだ。

あそこが、外への出口だ。

ミノタウロスは、ふと目線を下ろして、驚いた。

少年がいた。

泣きも、へたり込みもしていない。

こちらをにらみつけ、武器を構えている。

武器といっても、ごくお粗末なナイフである。

この少年からすれば、このナイフは、大きな斧のように感じられるだろう。

なぜ逃げないのだろう。

弱き者は、すぐ逃げるものなのに。

お前は決して、俺に勝てないのに。

ミノタウロスは、あらためて、その小さな人間を見つめた。傷だらけである。

顔も、むき出しの腕も、ぼろきれをくりつけた足も。

粗末な服も、至る所が破れ、血がにじんでいる。

ここちっぼけなモンスターも、この少年にとっては、強敵なの

であろう。

顔に飛びつかれ、体にまとわりつかれ、手や足をかじられ、闘ってきたのだらう。

何のために？

おそらくは、あの小さな茶色の、丸い金属のために。

それにしても、いい目だ、とミノタウロスは考えて、突然理解した。

そうだ。

これは、同じ目だ。

あの細剣使いと、同じ目だ。

闘う者の目だ。

思わず、ミノタウロスは、右手に握った短剣を振り上げていた。すると、いよいよ驚いたことに、少年は、走り寄って来る。

走りながら、腰だめにナイフを構えると、腰を回して、武器をミノタウロスの左足に打ち込んだのである。

あきれほど、遅い動作だ。

信じられないほど、重さに欠ける打撃だ。

こんなもので、本当に俺と闘うつもりなのか。

だが、弱々しくはない。

その剣尖の軌跡は、美しささえ感じさせた。

ミノタウロスが、あきれながら見るうちに、少年の剣は、牛頭の怪物のくるぶしのすぐ上に当たり、

そして、食い込んだ。

食い込んだ、どころではない。

刃幅の半ばが、足の筋肉に食い込んだ。

残りの半分は体毛で隠され、剣全体が巨獣の足に吸い込まれたように見える。

ミノタウロスは、驚愕した。

自分の強靱な肉体を、この貧相な武器が傷つけるとは。

いったい、何が起こったのか。

そのとき、ミノタウロスは、足に妙な気配を感じた。

見ると、少年が、ずりずりと崩れ落ちていた。

ミノタウロスは、思考が麻痺したまま、しばらく動かなかった。すると、すうすうという寝息が、少年から聞こえてきた。

そうか、この少年は。

先ほどの一撃で、残された気力と体力を、使い果たしたのだ。

そして、気を失い、俺の左足の五本の指を寝床にして、今眠っているのだ。

ミノタウロスは、少年を抱き上げ、岩の上に寝かせた。

左足に食い込んだままのナイフを、足から抜き、少年の傍らに置いた。

この少年は、力も技も、まともな武器も持たない。

だが、先ほどは、すばらしい攻撃を見せた。

成長すれば、やがて、好敵手として、俺を楽しませてくれるに違いない。

いつかこの少年と戦えると、ミノタウロスは予感した。

その日のために、自分はまだまだ強くならねばならない。

その予感は、確信に近い思いとなって、ミノタウロスの胸に降り

てきた。

それにしても、今、俺は勝ったのか、負けたのか？  
この少年は、勝ったのか、負けたのか？

しばらく考えたが、結論は出なかった。

間違いないのは、この少年が、よい闘いをしたということである。  
よい闘いは、報われねばならない。

ミノタウロスは、左手に持っていた腕輪を、少年の胸の上に置いた。

顔を上げて、出口の明かりを見た。

あの向こうには、この少年の世界がある。

だが、あの、やたらまぶしい光を見ると、あの中には踏み込みたくない、という思いが強くなる。

あれは、俺の住むべき世界ではない。

あそこは俺を喜ばず、俺もあそこを喜ばないだろう。

次に、今まで来たほうを振り返った。

歩いてきた道を思い出すと、頭の中に、各階層のマップが浮かんだ。

自分の世界は、ここから始まり、下層へと続いている。

自分が生まれた階層には、下に降りる階段もあるのではなからうか。

その下には、さらに深い階層があるのではなからうか。

きつと、そうだ。

下に、下に、俺の世界は続いている。

下に行くほど、強い敵がいる。

強い敵こそ、俺の友であり、出遭うべき相手だ。

俺は、すべての友を殺す。

それが、世界が俺に求めることであり、俺が世界に求めることだ。

ミノタウロスは、これまでにない強烈な飢えと、暴力的なまでの  
歓喜を感じた。

昂然と、きびすを返して歩き始めた。

下に向かって。

## 第6話 冒険者ギルド長の困惑

ここミケーヌの町の冒険者ギルド長であるバラスト・ローガンは、困惑していた。

事の起こりは、サザードン迷宮九階層と十階層をつなぐ階段付近でミノタウロスを見た、というCクラス冒険者の報告であった。

いうまでもなく、ミノタウロスは十階層のボスモンスターである。ボスモンスターというものは、ボス部屋の中にいるものであり、その部屋を出ることはない。

これは初心者講習で冒険者の卵に最初にレクチャーする基礎知識の一環であり、サザードン迷宮に限らず、あらゆる迷宮に共通する常識である。

だから、最初に報告を聞いた受付の職員は、見間違いか記憶の混乱であろう、という所見を添えて、緊急度の低い案件として処理した。

以前にも、あり得ない場所でミノタウロスが目撃されたことがあり、調べてみたら、それは大柄な人間の剣士で、魔獣の頭部を素材とする兜を装備していたのだと判明した。

似たようなケースだろうと判断されたのである。

ところが、それから三日ほどのうちに、十階層のあちこちで、銀

貨やポジションが放置されていたという噂話が広がった。

もともと十階層は、人気の低いエリアである。

銀貨もポジションも魅力的ではあるが、何しろ灰色狼は強すぎる。一匹なら、まだ階層適正範囲であるが、集団戦闘が得意という妙なモンスターなのである。

速い足取りで常に回廊をうろつき回っているし、遠くから敵の匂いや音を検知するため、最初は一匹を相手していても、手間取っていれば、どんどん集まって来るのであるから、始末が悪い。

また、十階層のボスであるミノタウロスも、何でこの階層にそれほど強力なボスが、と思わせるモンスターである。

倒す苦勞の割には、獲得経験値は高くない。

ドロップ品も凡庸である。

ごくまれに、極めて希少な武器が出るが、それは他の階層のボスも同じである。

その上、スキルドロップがない。

スキルドロップとは、ボスを倒したとき、新たなスキルが得られる現象である。

通常の修行で得られるスキルがドロップすることもあるし、スキルドロップでしか得られないスキルもある。

ドロップするスキルはランダムであるが、ボスモンスターごとにドロップしやすいスキルの傾向はある。

そのボスからしかドロップしないスキルもある。

深い階層のボスほど、強力なスキルをドロップする。

だが、スキルをドロップするのは、十一階層以下のボスであり、ミノタウロスからは落ちないのである。

要するに、期待できる見返りに対し、必要な労力と危険が高すぎ

るため、十階層は素通りされやすい階層なのである。

回廊を徘徊する灰色狼をやりすごすための疑似餌や匂い袋は、ギルドでも定番の売れ筋商品となっている。

迷宮に潜らず、護衛や討伐や採取その他のクエストで生活する冒険者にとっては、ミノタウロスを倒すだけでBクラスが取れ、クエスト請負の幅が広がるというのは魅力的であるが、その場合、狼は必ず回避する。

それなのに、十階層で、狼を倒して回っている物好きがいる。ドロップ品を放置したままで。

バラストは、ギルド職員たちに、十階層に関する情報を集めるよう命じた。

すると、まず、エリナ・カーという戦士の冒険者カードと残留アイテムが、十階層のボス部屋の前で回収された、という記録が出てきた。

こちらは、異常とまではいかない。

ボスモンスターに闘いを挑んで敗北し、ボス部屋の付近で力尽きて死ぬ、というのは、時々は起こることだからである。

しかし、マルコ・ヘスという剣士がミノタウロスをボス部屋の外で見かけたという報告は、事実であるとすれば異常な出来事である。

「ミノタウロスが、灰色狼を倒してるのか？」

モンスター同士が争っているというなら、それもまた妙なことがある。

どうやったらボス部屋の外に出せるのかは思いつかないが、強力な支配呪文などを使えば、ミノタウロスに狼を攻撃させることは可能かもしれない。

そんなミノタウロスが徘徊しているとすれば、看過できない。

とにかく調査してみるか、と考えて、バラストは、探索依頼書を書いた。

依頼者は、ギルド長であるバラスト・ローガン。

請負資格はBクラス以上。

依頼内容は、十階層を調査し、ミノタウロスの所在と様子を確認するとともに、不審を感じたら討伐すること。

冒険者たちがたむろする一階に降りる。

クエスト掲示板の前に、多くの冒険者がいる。

その中に、パジャ・ン・ド・マユルの姿がある。

優秀なスカウトであり、この任務には、まさにうってつけである。

「パジャ」

「お、ギルド長様じゃねえか」

「ちょうどいい。」

「この依頼を受けてくれんか」

「どれどれ。」

「ほう？」

「なんでまた牛頭なんぞを調べるんだ？」

バラストは、事情を説明した。

「なるほど。」

事情はわかったけど、この報酬、ちと安すぎじゃねえか？」

「ミノタウロスがボス部屋にいて、異常が何もなければ、それを報告するだけでよいのだ。」

今のところ、明らかな問題が確認されているわけではないから、これ以上の報酬は設定できん。

わしに貸しを作ってみんか」

「ほう。」

あんたに貸しかい。

悪くねえな。

分かったぜ。

請けさせてもらう」

「その話、あたしたちも、かませてもらえないかしら」

横から割り込んできたのは、魔法使いのシャルリア・リードであった。

その後ろに、剣士のレイストランド・ユリオロスがいる。

ともに、間もなくAクラスに上がるであろうBクラス冒険者である。

「うげっ？」

シャルじゃねえか。

冗談よせよ。

この報酬、二人で分けた日にゃ、赤字になっちまう」

「三人よ。」

レイも行くわ。

クエスト報酬は、あんたが一人で取ればいい。

ドロップ品は、山分けで。

あたしたちは、ギルド長への貸しができれば、それでいい。

その代わり、報告は、あんた一人でしてね。  
牛頭を倒したら、あたしたち二人は、下に行くから」

「あ、そういうことかよ。

お前ら、はなから下で狩りするつもりだったな？

行きがけの駄賃でわけかい」

「ええ。

レイと三十五階層で狩りをするの。

転送サービスを使うか、悩んでたのよ。

高いからね。

十階層に寄ってクエスト済ませて、あとは走って降りることにするわ。

ギルド長、それでいいわね？」

いいも何もない。

シャルリアとレイストランドなら、それぞれ一人でも、ミノタウロスの撃破にじゅうぶんである。

この二人がいれば、パジヤは毒矢を節約できるだろう。

そういえば、レイストランドは、ミノタウロスのレアドロップを狙っていると聞いた覚えがある。

もしかして、最初からミノタウロス討伐は、予定のうちだったのかもかもしれない。

逆にシャルリアとレイストランドだけでは、調査の精度に不安が残る。

この三人で行ってもらえれば、言うことはない。

「無論だ。

よろしく頼む」

「だつて。」

パジャ、よろしくね。

あ、あと、消耗品は割り勘ってことで」

パジャは、踏みつぶされた蛙のように、渋い顔をした。

が、次の瞬間、何を思いついたのか、にやりと口をゆがめた。

三人は、迷宮に入って行った。

半日が過ぎてもパジャは帰らず、バラストが嫌な予感を募らせていたころ、ギル・リンクスが訪ねてきた。

大魔法使い、ギル・リンクス。

辺境の孤島に生まれ、数々の冒険で名を上げ、ついにはバルデモスト王国の魔法院に招かれ、魔法院元老にまで上りつめた男。

悪魔を封印したとか、古竜を使役するとか、天界の逆逆者を殲滅したとか、尾ひれのついた武勇伝が、まことしやかに語られている。

大陸中にその名を知られ、子どものお伽噺では、大魔法使いといえはギルを指す。

そんな伝説級の人物でありながら、少しも驕るところがない。

思うままに贅沢のできる立場であるのに、財や権力には見向きもせず、世界の平和と人々の幸福のために、尽くし続けている。

物静かで思慮深い性格をしており、基本的には研究中心の生活をしているが、事あればどんな困難にも平然と立ち向かう胆力と行動力の持ち主である。

バラストにとっては、若き日に冒険をともにした盟友であり、冒険者としての心得を一から教えてくれた良き先輩でもある。なぜかギルは、バルデモストの王に厚く信頼されている。それもあって、ギルドの顧問に就いてもらっている。

「ギル、久しぶりだな」

「うむ。」

王宮からの依頼で、マズルーの魔道研究所の手伝いに行っておったのじゃ。

帰国報告に参内したが、王が夕食をしながら話を聞きたいということなのでな。

いったんこちらにあいさつに来たのじゃ。

おぬしも元気そうだなにより、と言いたいが、何か心配事かの？」

「顔に出ておったか。」

いや、実はな」

と事の次第を説明した。

「シャルリア・リードというのは、アイゼル・リードの縁者であったかの？」

「娘だ。」

ああ、そうか。

アイゼルは、あんたの弟子だったか」

「そうじゃ。」

ふむ。

では、一度、十階層に降りてみるわい」

そういうと、ギルは消えた。

瞬間移動の魔法である。

適正の問題で、習得できる魔法使いは少ない。

たいていの場合、この魔法を使う魔法使いは、ほかの魔法がほぼ習得できない。

このギルドでは、瞬間移動の魔法で冒険者たちを送り迎えする専門の魔法使いを二人雇っているが、いずれも戦闘力は皆無である。

ところが、ギルは、強大な攻撃魔法と、パーティー戦で非常に役立つ付与魔法に加え、多層範囲探知や瞬間移動や、各種の高等補助魔法もいこなす。

範囲瞬間全回復魔法さえ習得しているらしい。

まさに大魔法使いだな。

それにしても、相変わらず、身軽なことだ。

必要と思えば、さっさと動いてくれる。

ありがたいことだ。

と、バラストは思った。

ギルが消えたとき、バラストの胸のつかえも消えていた。

だが、その安心は、ほんの短い時間しか続かなかった。

お茶一杯を飲む時間もなく、ギルが帰還し、三人の冒険者カードをバラストに見せたのである。

十階層のボス部屋には、三人のカードと装備が残されていたという。

どう考えても、三人は死んだと見るべきである。

「アイゼルは、今この街におるのか？」

ザックと呼ばれる魔法の収納袋から、三人の遺品を出しながら、ギルは聞いた。

事務員に調べさせたところ、アイゼル・リードは依頼を受けてパダネル湿原に行っているということが分かった。

帰還は何週間か先になるらしい。

ギルは、慎重に対応するよう助言して、王宮に行った。

バラストは、冒険者パーティーを派遣することにした。

しかし、動員可能な冒険者を集める前に、新しい情報が飛び込んできた。

九階層でのミノタウロス目撃情報である。

目撃者は、若手の冒険者五人。

いずれも今年冒険者となったばかりではあるが、バランスもよくチームワークも高いチームである。

五人とも、覇気と向上心を持ち合わせており、バラストは密かに将来を楽しみにしている。

バラストは、一階に降りて、直接五人から話を聞いた。

分かったことは、五人を簡単に殲滅できたはずなのに、ミノタウロスが攻撃を仕掛けなかった、ということである。

それにしても、九階層だと？

バラストとすれば、何かの間違いではといたいところであるが、この五人がそろって勘違いしているとは考えにくい。

記憶も話しぶりもしっかりしている。

とすれば、このミノタウロスは、明らかに異常である。

階層を越えて移動するモンスターなど、あり得ない。

そもそも、迷宮のモンスターは、上の階層も下の階層も、認識できない。

いや、認識しているかもしれないが、移動できるという発想もないし、実際にもできない。

人間にとっての天界や冥界のようなものなのだろうか。

階段自体、見えないのである。

目の前で、冒険者が階段に移動すると、消えたように見えらしない。

無理に移動させようとしても、階段に踏み込んだモンスターは、死んでしまう。

実は、迷宮の階段というものは、基本的には人間にも見えないのである。

一階層には、誰でも入れるが、二階層には下りられない。

騎士や冒険者などの恩寵職を得たとき、初めて、階段を見ることが、足を踏み入れることもできるようになる。

もしも、モンスターが階層を越えて移動できるようになったとすれば……

それは、まるで、モンスターの冒険者ではないか。

混乱するバラストのもとに、次々とミノタウロスの目撃情報が入った。

九階層どころか、八階層、七階層からも目撃情報が上がってきた。目撃時間の情報を総合すれば、次第に上の階層に移動してきていると思われる。

バラストの混乱に拍車をかけたのは、どの場合にもミノタウロス

が攻撃してこなかった、ということである。

また、どの証言でもミノタウロスは単独であったという。

パジャとシャルリアとレイストランドの残留アイテムも、調べてみた。

何の手掛かりも残っていない。

全員ポーションの残数が少ないことから、長時間にわたって激しい戦闘が行われたのではないかと推測できたぐらいである。

しかし、あの三人が、ミノタウロス相手に手こずるといふようなことがあるのか。

まして全滅などということが。

そのミノタウロスが、たまたま強力な個体であったとしても、あの三人であれば、足止めしておいて逃げるぐらいのことはできる。

最悪の場合、一人か二人の犠牲が出て、誰かは生還できる。

百歩譲って、何かのトラブルがあつて、全滅したとしても、パジャが何の情報も残さず死ぬというのは、いったいどういうことなのか。

本当に敵はミノタウロスなのか。

そのミノタウロスは、本当に単独行動なのか。

結局、この夜、新たな探索パーティーは、派遣できなかった。

翌日になった。

ミノタウロスと、派遣した三人のことが気になりながらも、要務に追われているうちに時間が過ぎ、夕刻となった。

すると、日帰りで浅い階層を探索していた冒険者たちが帰還し、報告が上がってきた。

今日は、ミノタウロスが六階層で目撃されている。

いずれの場合も、人間との戦闘は発生していない。

ミノタウロスがモンスターを倒していた、という目撃情報はあったが。

次の日の朝、衝撃的な知らせが、バラストのもとに届けられる。

死亡ドロップと思われる冒険者カードとアイテムが受付に持ち込まれ、鑑定により、カードの持ち主はパーシヴァル・コン・ド・ラ・メルクリウス・モトウスと判定された、というのである。

## 第7話 天剣パーシヴァル

「天剣」パーシヴァル。

コン・ド・ラ・メルクリウス・モトウスという族名と家名と敬称が示す通り、直閲貴族家の当主であるが、同時に、Sという最上級のクラスに至った冒険者でもある。

わずか十二歳にして冒険者の世界に足を踏み入れ、十四歳でAクラスとなり、十五歳のとき、ゾアハルド山賊団の討伐に参加し、圧倒的な武勲を上げて、Sクラスとなった。

十六歳のとき、父の死により家と爵位を継いだが、めったに朝議にも出ず、一年のほとんどを各地の迷宮に潜って過ごす、孤高の剣士である。

直轄領は持たないとはいえ、国から多額の年金を受け取る立場であり、また家格からいって顕職に就くべきであるのに、名ばかりの役職を得て、気ままに暮らしている。

本来、そのようなことは許されないのであるが、他国の使節に紛れ込んだ刺客の刃が国王に迫ったとき、これを見事に取り押さえた功績と、「あの者は好きにさせておいてやれ」という国王の言葉により、いわばお墨付きを得たような状況にある。

「天剣」というあだ名は、パーシヴァルの剣の師が、少年時代の

パーシヴァルの剣技の冴えと成長力に感嘆し、「まさに天剣」と賛えたことに由るらしい。

人付き合いを嫌うのと、上流階級の出身であるため、反感を持つ冒険者も多いが、悪い人物ではない、とバラストは思っている。

仕事のえり好みは激しいが、いったん交わした約束を破ったことはない。

人の邪魔をしたり、悪口を言うことはない。

ただただ強い敵と出合って闘い、倒してさらに強くなることにしか興味がない。

死に直面する危険の中ですが、おのれの生の充実をかみしめることができない、そんな不器用な人間なのだと評価している。

バラストは、こんな質問をしたことがある。

「パーシヴァル殿は、一度優勝したのち、天覧武闘会に出場されていないようだが、理由をお聞きしてもよろしいか」

それに対する答えは、意外だが納得できるものであった。

ただ一度出場したとき、準決勝で魔法使いと闘った。

その魔法使いは、目くらましと補助魔法を駆使して距離と時間をかせぎ、なんと彗星召喚を行ったのである。

メテオは、最大級の破壊力を誇る、範囲殲滅魔法である。

武闘会の個人戦でこれを使うというのは、まったく常識をはずれている。

詠唱時間も長く、消費魔力も多いし、一人の人間に対して使うには、大がかりすぎる。

メテオの直後、審判は、闘いを終了させ、魔法使いの反則負けを

宣言した。

この判断が、パーシヴァルには承服できなかったというのである。

確かに、対戦相手を殺してはならず、また死んでしまうような攻撃をすることは、大会規則で禁じられている。

しかし、どのような攻撃が死ぬほど危険であるかは、相手と攻撃の仕方による。

こちらは刃引きさえせぬ真剣を使っており、斬り方次第では死に至る攻撃ができる。

また、現にこちらは、ろくに怪我さえしていない。

ただ、恩寵アイテムをもってしても、完全にはメテオの魔力を吸収しきれず、また、吹き上げられた砂塵や瓦礫と大地の振動で、一瞬ではあるが、攻撃も防御もできがたい状態になった。

つまり、相手は有利な状況を作り出すことに成功したところだったのである。

パーシヴァルからすれば、技巧重視の高速型剣士である自分からメテオなどという大型魔法を撃てる時間を確保したことは、相手のスキルの高さを示す以外の何物でもない。

こちらの能力や所持アイテム、反応を読み切ったうえで、メテオという決戦魔法の、その余波を有効に使って場面を作り上げたセンスの良さには、最高の賛辞が与えられてしかるべきなのに。

「あとであらためてよく調べ、よく考えて、得心した。メテオは発動点が遠い。

また、込めた魔力が多いほど、攻撃点での半径が膨らむ。

発動点がもつと近いが、私の体を直撃するだけの攻撃であれば、アレストラの腕輪で吸収できたであろう。

また、私の体でなく、周囲の地面が狙いと分かっているれば、ほかの恩寵アイテムを使用することも、移動してかわすこともできた。

だが、攪乱と弾幕と高速な詠唱と破天荒な戦術により、何を狙っているか、私に悟らせなかった。

彼は見事で、私は遅れを取った。

とはいえ、まだ反撃は可能であった」

それがパーシヴァルの言い分である。

やっとわくわくするような闘いに出合ったのに、そこで試合は終了とされた。

いったい、あのあと、相手はどのような攻撃を仕掛けてくるつもりだったのか。

それは自分を打ち倒せるものであったのではないか。

そう思えてしまうほどに、すばらしい敵手であった。

それなのに、相手の勝利と判定するならともかく、パーシヴァルの勝ちだというのである。

憤懣やるかたない判定ではあったが、審判に申し立てをするのは、パーシヴァルの流儀ではない。

だが、

「判定の不可解さを我慢しながら翌日の決勝にのぞんだが、何の意味も喜びもない闘いとなった。

あれほど弱い剣士がなぜ決勝に残れたのか、準決勝の判定以上に不可解であった」

のだという。

この会話からしばらくたって、バラストは、関係するいくつかの情報を得た。

準決勝の審判は、ある貴族家お抱えの武術師範で、その貴族家は、パーシヴァルに恩を売ったと思っ込んでいるらしいこと。

決勝の相手が、当時の国王の愛妾の兄であったことは、周知の事実であるが、気を利かせた宮廷雀の一人が、控室のパーシヴァルを訪ね、勝ちを譲るよう勧めたらしいこと。

なるほど。

あほらしい話ではあるが、まあ、ありそうな話だ。

そう思いながら、そのあほらしさを、あほらしく思い、自分の勝利を不当と憤るパーシヴァルに、好ましいものを感じた。思い出すのは、あのとときの別れ際である。

「とはいえ、あの魔法使いとの対戦は、有益な経験であった」

「ほう？」

何か学ぶべき点でも？」

「うむ。」

あれ以来、どのような人間と、あるいはモンスターと対決していても、心のどこかで思うのだ。

次の瞬間にはメテオが飛んでくるかもしれないと」

それが珍しくも天剣の言い放ったジョークだと気が付いたのは、扉が閉まったあとだった。

その天剣パーシヴァルが、死んだ。

バラストは、一階に降りて、受付に行った。

パーシヴァルの冒険者カードを持ち込んだのは、八人のDクラス、

Eクラス冒険者であった。

リーダーは誰かと聞けば、リーフ・モランという名のスカウトが、発見したのは自分であると名乗り、パーティーを組んでいるわけではないと付け加えた。

アイテムを持ちきれなかったため、通りがかった冒険者に、手伝いを頼んだのだという。

そうだ。

ドロップアイテム。

迷宮で冒険者が死ねば、カードとアイテムが残る。

カードとアイテムをギルドに届けて登録すれば、所有者本人が現れて異議申し立てをしない限り、一か月後に、アイテムの所有権は、拾った人間とギルドで等分される。

所有者の遺族から願い出があった場合は、遺品アイテムは遺族に優先的に買い戻しの権利が与えられるが、冒険者の遺族が金銭に余裕があることは、まれである。

買い戻すとしても、身につけていた物などのうち、ごく安価な物を形見として引き取るのが精一杯ということがほとんどであり、優良なアイテムが買い戻されることは、まずない。

ギルドの取り分を金銭で納めるか物納するかは、拾得者に決定権があり、物納の場合でも、アイテム選択の優先権は拾得者にある。

高価なアイテムには、魔法による所有の印が刻まれるのが普通であり、横領も横流しも、調べられれば判然とする。

届け出さえすれば、まず間違いなく欲しいアイテムは合法的に手に入れられるのであるから、希少なアイテムほど、ちゃんと届けられるものなのである。

受付横の床に、天剣の死亡ドロップらしい品々が、無造作に積み  
れている。

ちらと見ただけで、めまいのするほど希少なアイテムもあるのが  
分かる。

それにしても、ずいぶん量が多い。

冒険者は、ザックと呼ばれる特殊インベントリが使える。

レベルが上がるほどに、ザックへの収容可能数は増える。

パシヴァルなら、とんでもない容量のザックを持っていたであ  
ろう。

金目の物に無頓着そうな、あの男が、どれほどの高価で希少な品  
々を、無造作にザックに放り込んでいったか。

あの男の死とともに、ザックも消滅し、中のアイテムがその場に  
現れたはずである。

冒険者カードは、三度も鑑定させた。

このドロップアイテムも、天剣ならではの質と量である。

やはり、死んだのだ、天剣は。

バラストは、モランとほかの冒険者から、カードとアイテム発見  
の状況について、くわしく話を聞いた。

受付の係員に、カード鑑定の結果を取得者に伝えてよい、と許可  
を出し、取得者の権利について説明し規定通りに手続きを進めるよ  
う、指示をした。

そのあと、思いついて、アイテム鑑定の結果が出たら、一覧表の  
写しを提出するよう、言い足した。

ギルド長の部屋に戻るべく、階段に向かったが、その足は重かつ  
た。

急に老人になったように感じた。

六階層だと？

あり得ない。

いや、天剣が六階層を通ったこと自体は、不思議ではない。

深い階層を探索しているはずの天剣が、まったく転送サービスを  
使わないので、専属契約をしている瞬間移動術師でもいるのかと、  
聞いたことがある。

何しろ相手は大金持ちである。

「いや、転送は使わぬようにしておる。

走る、という鍛錬は、何より重要と心得おるゆえ」

という返事だった。

なるほど変人だな、と妙な感心をした覚えがある。

天剣が六階層にいたことは、あり得る。

しかし、天剣ほどの冒険者を倒せるモンスターが六階層にいるな  
ど、あり得ない。

迷宮は、何が起こるか分からない場所である。

九十階層とかの深淵であれば、天剣といえど、単独では危険があ  
るろう。

最下層のメタルドラゴンには、一対一では、さしもの天剣も敵う  
まい。

だが、六階層だと？

違う。絶対に違う。

モンスター相手に遅れを取ったとは考えられない。

ということは、相手はモンスターではないのだ。

モンスター以外の何者かが、天剣を殺した。

おそらくは、卑劣な罫や、仕掛けを使っ

まともに闘えば、何十人の敵といえど、さばけない剣士ではない。

そして、迷宮は、軍隊を一度に投入できる場所ではない。

そこでは、一人一人の技と心が生死を決める。

権力によって兵員や武器を大量投入して勝てる場所ではないのだ。

だからこそ天剣は、迷宮を愛したのに。

そこを唯一の住処と定め、人としての栄華にも、醜い争いにも背を向け、ただ冒険者であろうとしたのに。

そんな天剣を殺しやがった。

くそっ。

どいつが、どんな手で、天剣をはめやがった？

「バラスト！

いるのだろうか？」

はっとした。

ギルの声である。

どうも、先ほどから呼ばれていたようだ。

「す、すまん、ギル。

入ってくれ」

ギル・リンクスが、扉を開けて部屋に入って来る。  
バラストは、立ち上がって、ギルをソファアに招く。  
自分もその向かいに座った。

バラストが平常心を失っていることは、ギルの目には明らかだったろうが、それについては何も言わず、静かな声で、

「すまん、来るのが遅くなって。」

王のほうでも、いろいろ、わしに用事があったな。

話も長くなった。

そのあと王宮に泊まり込んで、丸一日かけて、急ぐ用事だけ片付けてきたのじゃ」

と話しかけた。

「そうか。」

あんたも大変だな。

朝食は？」

「済ませてきたよ。」

王と一緒にな。

王子たちも同席した」

「たち？」

「うむ。」

最初は第二王子だけじゃったが、第一王子はお元気かとわしが聞いたら、王が召された」

「へえ！」

さすがはギルだ。

王妃たちのご陪席かい？」

「第二王妃だけじゃったな。」

王が、第一王妃は風邪ぎみで、今朝は遠慮していると、仰せられた」

「今朝も、だろう。」

それと、『第二王妃の申すには』ってのが抜けてるぜ」

「ふむ。」

お主の耳には、そのように届いておるのか」

「違うっていつのか？」

「それは知らん。」

ただ、第一王妃も第二王妃も、心根は優しいかたじやと思つ。

宮廷に、権力とその使い方をめぐって、さまざまな思いや立場があり、軋轢が生まれるのも無理からぬことではあるが、人を決めつけて見るのは、思考の放棄じゃ」

「う。」

同じようなことを、何十年か前に言われた記憶があるな」

「はは。」

人から見ればあちらがモンスターだが、あちらから見れば人がモンスターだ、という話のことかの」

「それそれ。」

あんどきは、ちよつとショックを受けたなあ。

一番悪辣な盗賊より、人間がモンスターを襲うやり方のほうが非道だって、納得させられたんだからなあ」

「人が思う非道の基準からすれば、の話じゃ。」

モンスターにとっての幸不幸、正義と非道、善と悪、成功と失敗、獲得と喪失。

それが人間と同じであるとは、わしも思わん。

けれど、それでいて、人とモンスターとに共通することわりや価値も、どこかにあるとは思つておる」

「あんたは、人間以外と、ずいぶん付き合いがあるらしいからなあ。あ。

というか、あんたは、まだ人間なのか？」

「こりゃ、ひどいな。」

うむ。

これを非道いというのじゃ」

二人は一緒に声を上げて笑った。

いつの間にか、バラストの気鬱も怒りも鎮まり、普段通りの明晰な思考力を取り戻していた。

「ところで、一階の受付近くで、殴り合いの喧嘩が起きておったが、あれは何じゃ？」

「は？」

殴り合いの喧嘩？

いや、聞いてない。

「今か？」

「何やら、荷物の運搬で、約束した金額では足りないから、現物を寄越せ、などと言っておったの」

「ああ。

なるほどな。

よく分かる話だ。

事前にどんな取り決めをしたか知らないが、あれはもめて当然だ」

「もめて当然、とは、ギルド長の珍しい発言を聞くものじゃ」

いや実は、とバラストは事情を説明した。

そのうえで、天剣を毘にはめた卑劣な陰謀を、どう暴けばいいのか、ギルに相談した。

「いや。

それは、順序が違う」

「何の順序が違う？」

「よく考えてみよ。

事の発端は、妙なふるまいをするミノタウロスが目撃されたことじゃ。

そのミノタウロスは、確かに実在し、だんだんと上の階層に上って来ている、と推測される。

アイゼルの娘たちのパーティや、パーシヴァル殿の行方不明も、その流れの中で起きておる。

なるほど、ミノタウロスごときに倒される四人とも思えぬが、かといって、今のところ、ミノタウロス以外に探索すべき対象が明らか

かになつたわけではない。

いずれにしても、ミノタウロスが本来の活動場所を離れて移動しているのは、異常なことには違いなく、放置できぬ。

まずは、ミノタウロスを発見するのじゃ。

そして、倒すのじゃ。

そのとき、それ以上の常ならぬ事が見据えられればよし、そうでなければ、あらためて探索と検証を進めればよいのじゃ」

この言葉を消化するには、いささか長い時間が必要であった。

しかし、沈黙のあと、バラストは、しっかりした声音で返事をした。

「おっしゃる通りだ。

まずは、ミノタウロスに当たらねばならない」

「うむ。

今からわしが、迷宮に入る。

一階層から順に十階層までを探索し、ミノタウロスを探し出して撃滅する」

ありがとう、とも、申し訳ない、とも、バラストは言わなかった。

この人物に対しては、逆に失礼に当たると思ったからである。

ただ深く頭を下げた。

「これを渡しておこうかの」

いつの間にか、ギルの右手に、耳ほどの大きさの、多層殻を持つ貝殻が握られていた。

「これは……セルリア貝？」

「そうじゃ。」

セルリアの花によく似た色をしておるじゃろう。

セルリアの花言葉は、乙女の恋心、というらしい。

まこと、恋する乙女のような、淡く、切なく、はかない色をして  
おる。」

「おおお？」

急に詩人だな。

何か、思い出でも？」

冷やかしのように尋ねるバラストに、昔な、と心の中で返すと、  
ギルは、虹色に輝く貝殻を顔に寄せ、白い口ひげを揺らして、ふっ  
と息を吹き込んだ。

すると、貝殻の内側に、青紫に輝く光の球が生じた。

貝殻をバラストに渡し、ギルは言った。

「今、この貝に、わしの命の波動を記憶させた。

この光の球が輝く限り、わしは生きておる。」

「おいおい。」

わしより早く死ぬつもりか？

というか、あんた、冥界の王に恩を売って、死なない体にしても  
らったんじゃないのか？」

「ははは。」

噂とは面白いものじゃな。」

とはいえ、置き土産は、バラストに安堵を与えた。

安堵する自分の心を見つめて、バラストは、自分が天剣の死に、

いかに動揺していたかを知った。

同時に、ギルの思いやりをかみしめた。

「ありがとう、ギル」

につこり笑って瞬間移動を発動させかけた大魔法使いは、ふと思いついたように、バラストに言葉をかけた。

「幸せな死に方があるかどうかは、わしは知らん。

けれども、このように生きたいという生き方を見つけることができ、死に至る最後の瞬間まで、そのように生き切ることができたとしたら、それは幸せな人生であったといえるじゃろう。

人生の値段は、本人以外には付けられぬ。

他人が付ける値段は、死体の値段か、さもなければ、その他人にとつての思い出の値段じゃ」

まるで遺言のように言い残し、ギル・リンクスは闘いに赴いた。

その言葉は、この大魔法使いの生涯最後の言葉となった。

## 第8話 メルクリウス家の家宰

「メルクリウス家の家宰様がお見えです。  
静かな場所で、ギルド長にご相談なさりたいことがあるとのこと  
です」

バラストの脳髄は、耳が聞いた言葉を理解するのに、少なくとも  
時間を要した。

メルクリウス家の家宰だと？

静かな場所？

相談？

いやな汗が、じわっと湧いてくるのを感じた。

ともあれ、そのような尊貴な人物を、いつまでもは待たせられな  
い。

静かな場所ということは、人に話を聞かれないような場所、とい  
うことだろう。

とすれば、この部屋以外にない。

バラストは、事務長に、お客様をギルド長室にご案内するよう命  
じた。

今日は仕事が、とても忙しい。

ギルド長の判断や決裁が必要な案件が、目白押しなのだ。

ギルが出て行ったあと、書類仕事に追われ、昼食を取る時間もない。

つい先ほど、天剣の残留物品一覧表の写しが届けられたが、まだ目は通していない。

その書類と一緒に、天剣の冒険者カード拾得についての知らせを家族に送る、という案件が上がってきたので、実施許可のサインをしたばかりだ。

つまり、まだ連絡は行ってない。

しかも、呼びつけられるなら話は分かるが、家宰自身が直接訪ねて来るだと？

カーン。

カーン。

カーン。

入室ベルが打ち鳴らされた。

まさか、これを実際に使うことがあるとは、思いもしなかった。ギルド長ってというのは偉いんだぞ、という冗談で付けさせたのに、扉の内側にドアガードはないので、事務長は自分で外からドアを半開きにした。

涼やかな声で、ギルド長の正式の役職と氏名を宣言すると、来客の名前を告げる。

待て。

何で名前が二人分なんだ？

しかも、二人目の名前は。

その家名は、確か……

先に部屋に入って来たのは、老境にさしかかった男性であった。長身である。

きちんとなでつけられた髪と、上品な服。

静かな足運びと、柔らかな動作。

しかし、鍛え抜いたバラストの観察眼は、この家宰なる人物が、一騎当千の戦闘力を持つ武人であると見抜いた。

「高貴なお方をお迎えでき、光栄に存じます。

ミケーヌ冒険者ギルド長、バラスト・ローガンでございます」

バラストは、机の横に出て、深く頭を下げた。

「メルクリウス家の家宰、パン・ジャ・ラバンと申す」

相手は、族名も敬称もはずして名乗った。

これほどの名家の家宰であるから、それなりの人物でなければならぬ。

家宰は、その家の実務を取り仕切ると同時に、当主の名代でもある。

メルクリウス家の歴代当主は、家臣思いで有名である。

家臣には、機会を与え、経験を積ませ、やがて一家を立てさせる。苦労は共にし、報いは惜しみなく与える。

そのため、元の家臣たちの家は、メルクリウス家を主家と仰ぎ、代が替わっても、構えを崩さない。

親族たちへも厚く遇してきた。

そのくせ、メルクリウス宗家自体は、少しも太ろうとしない。

このような家であるから、一朝事あれば、分家、子家、従家、縁戚の家兵が参じる。

家産の低さにもかかわらず、その潜在的武力は、国内有数と目される。

宗家当主や有力分家の当主が従軍しないときは、宗家の家宰が、

これを率いるのである。

事実、この二年で二度あったメルクリウス家の出兵では、家宰が指揮を執ったと聞いている。

であるから、この家宰自身、上級貴族であるのが自然であるのに、名前も家名も、バラストの記憶にはなかった。

が、突然、あることを思い出した。

先々代国王の時代に、近衛の平騎士から吏務査察官に任じられるという、異数の出世を遂げた男がいた。

男は、王の知遇に感じ入り、職務に精励した。

ところが、他国との貿易で不正を行った家をいくつか摘発したとき、リガ公爵の逆鱗にふれ、男の家は、族滅された。

誰一人見逃さない過酷な惨殺により、嫁ぎ先の幼子に至るまで、兵戈の露と消えた。

その男と家族と親族は、一夜にして、この地上から消え失せたのである。

翌朝、参内したりガ公爵は、王と閣僚たちの前で、賊徒の殲滅を報告し、その罪科を述べ立てた。

理不尽な言いがかりというべきであったが、事はすでに終わっており、いかんともしがたかった。

王は、顔を紫色にして、一言も発せず席を立ったという。

だが、バラストは、少し違う噂も耳にした。

その男の次男である少年の屍体を検分した者が、本人のように思うが、少し面差しが違うようにも思われる、と述べたというのである。

男の友人であった貴族が、身代わりを立てて少年を助け、かくまっているのではないか、と憶測する者もいた。

この家宰こそが、その生き延びた少年ではないか。

と、バラストは、家宰の正体を推し量った。

口にするのできない臆断であるが、目の前の人物の心胆がどこに置かれているか、つかめたような気がした。

家宰に守られるように入室して来たのは、五、六歳の美童である。栗色の髪に、水色の瞳。

極めて上質な衣服。

あどけなさや凛々しさが同居する、とてつもない美少年である。

家宰の態度は、この少年が家宰の随行のではなく、逆であると語っている。

しばしの間を置いたが、幼い貴紳の紹介はない。

今は名乗りたくないということか、と判断して、二人にソファーを勧めた。

家宰は、少年を座らせてから、自分もその横に座り、バラストにも着席を許した。

いささかならぬ緊張を強いられているバラストを横目に、事務長が二人の女性職員を連れて入室する。

女性職員が持っているのは、来客の外套と帽子であろう。

小憎らしいほど落ち着いた所作で、事務長は手ずから外套と帽子をラックに懸けると、職員を従えて部屋を出て行くこととした。

「事務長、わしが声を掛けるまで、この階には誰も来ないようにしてくれ」

事務長は、バラストのほうに視線を送ると、了承のしるしにうなずき、無言のまま、ドアの前で深くお辞儀をして、姿を消した。

まことに礼法に適った所作である。

くそ。お前は、どこの貴族家の執事様だ。

と心で毒づきながらも、バラストは、いつもはからかいの対象でしかない事務長の育ちのよさに、ちよっぴり感謝した。

ドアの向こうで、人の気配が消えてから、メルクリウス家の家宰は口を開いた。

「バラスト・ローガン殿。

先触れもなく、突然に訪ね、相済まぬ。

相談の議があつて、参つた。

その前に、ユリウス様をご紹介せねばならぬ。

先ほどは、母方の家名を名乗られた。

かの家は、母上様よりユリウス様が相続なされたものである」

物言いが丁寧なのにとまどいながら、バラストは、家宰の言葉を聞いていた。

あの家名を母親から受け継いだとすると、その母親とは、つまり

……

「しかし、ユリウス様の本来の聖なる責務は、始祖王に付き従いし二十四家の一つ、光輝あるメルクリウス家のもとにある。

ユリウス様は、父君にして現当主たるパーシヴァル・コン・ド・ラ・メルクリウス・モトウス様の、正当にして正規の後嗣であられる」

後嗣？

父君？

ということは……

「天剣に息子がっ？  
というか、結婚してたのかった？」

思わず叫んだあとで、自分がどれほどの不作法をしでかしたかに  
気付き、バラストの顔面は蒼白になった。

「こ、これは、まことに失礼をしましたっ。  
ひらに、ひらにご容赦のほどっ」

応接テーブルに頭をこすりつけるバラストに、意外にも家宰は笑  
顔を向けた。

「ローガン殿。  
かしこまるには及ばぬ。

貴族には貴族の作法があるが、冒険者には冒険者の作法があるう。  
まして、ここは冒険者の城にも等しい。  
われらは、そこに足を踏み入れた部外者に過ぎぬ」

それに、と言葉を続けた。

「冒険者ギルドは、冒険者たるパーシヴァル様にとり、庇護者に  
して支援者。

わけでも、ローガン殿には、特段のご厚配を受けたと聞き及ぶ。  
パーシヴァル様は、常々、ミケーヌのギルドは居心地がよい、と  
仰せであった。

あれほどの放浪癖の持ち主が、ミケーヌで過ごされることが多か  
ったのは、ここの迷宮とローガン殿のおかげと、当家では感謝いた  
しておる。

ミケーヌで過ごすあいだは、当家に戻られたゆえ」

家宰の横で、ユリウスが、きらきらした目でバラストを見ている。お願いだから、そんな目で見ないでくれ、とバラストは思った。

「さて、わがあるじは、七日前に屋敷を出て、サザードン迷宮に入られた。

七十五階層から八十階層にかけて探索なさる予定であった。

補給品はじゅうぶんに準備なされたが、長くとも十日程度のご予定であった」

そんな深い階層で、そんな長く、しかもソロで探索するのは、あなたのご主人ぐらいのもんだよ、とバラストは心の中で突っ込んだ。

「パーシヴァル様は、水晶球に命の波動を記録なさっておられた。その水晶球を収めた箱の鍵は、ユリウス様が保管され、日に一度水晶球をごらんになるのが、ユリウス様のご日課であった。昨日、その水晶球の光が失われた」

ユリウスの顔が、悲しげにゆがむ。それを見て、バラストの胸が痛んだ。

「パーシヴァル様は、常に仰せであった。

危難に身を置くからには、いつ命を落とすやもしれぬ。

迷宮で死ねば、亡きながらも残らぬ。

この水晶球の光が失われたときには、水晶球とわが書状を証として、ただちに死亡を届け出よ。

しかして、ユリウスに家と爵位を継がせよ、と」

ユリウスが、必死に涙をこらえている。

昨日、水晶球を見たときは、シヨックだったろうなあ、一日泣い

て過ごしたのかなあ、とバラストは思った。

「ローガン殿。

わがあるじの消息につき、ご存じのことあらば、お教えねがいたい」

「家宰様。

実は、ちょうど、書状をお届けするところだったんで、少しお待ちを」

バラストは、ドアを開いて、コールチャイムを鳴らした。

チャイムの音が消える前に、下の階から事務長が上がって来た。澄ました顔をして、手に盆を捧げ持っている。

事務長の後ろには、お茶を持った事務員が続いている。

事務長が持つて来たのは、メルクリウス家宛の報告書簡と、拾得アイテムのリスト、アイテムの扱いについての規則の写しだった。

ご丁寧に、受領証と、サインするためのペンまで添えられている。

なんでこんなに準備がいいんだよっ！

それに、なんでそのお茶、煎れ立てなんだよっ！

バラストの心の声に構わず、事務長は、書類を家宰に渡して受領証を受け取り、正しい順序でお茶を並べ、すうつと部屋を出て行った。

立て付けのよくないはずのドアを無音で閉めて。

家宰は、無言で書類を読み進めた。

ふと気づいたように、ユリウスにお茶を口にするよう、しぐさで促す。

ユリウスも心得たもので、カップを口に運ぶと、くちびるに触れさせ、そのままソーサーに戻した。

これで、ほかの二人もお茶を飲むことができる。

バラストは、ありがたく喉をうるおした。

そして、仕事机に置いてあったリストの写しを、読み始めた。

家宰は、リストに何やら印を付けたあと、書類を応接テーブルに戻し、目を閉じて、しばらく考え事をしていた。

目を開いて、ユリウスのほうを見ると、

「ユリウス様。

パーシヴァル様の遺品が、昨日六階層で、通りかかった冒険者に発見されました。

今朝ギルドが開いてすぐ、遺品は届けられ、現在は当ギルドに保管されております」

ユリウスは、うなずいた。

「ローガン殿。

遺品の何点かを買い戻したい」

バラストは、天剣の恩寵職がなぜ冒険者だったんだろう、と理不尽な怒りを覚えた。

恩寵職に騎士を選択すれば、ザックではなく、ルームが持てる。ルームなら共有や相続が可能で、今回のようなことにはならなかった。

とはいえ、マッピング技能をはじめ、ソロで冒険者をするのに必要なスキルを多く取得できるのは、やはり冒険者である。

取り回しのよさでは、ザックはルームに優っている。

ユリウスと家宰を交互に見ながら、申し訳なさそうに謝った。

「これが世の中一般のことであれば、遺品というものは、一も二もなく遺族のもんです。

まあ、遺言とかで、遺贈先を指定していなければですがな。

ところが、迷宮ではルールが違います。

迷宮で死んだ人間の遺品は、拾った者とギルドの物になります。

たとえ遺言があっても、迷宮で拾われた物には適用されないのです。

ですから、普通、迷宮には、あまり高価な財産は持ち込まないのです。

あれほどの財産を、みすみす他人に渡すのは、さぞお腹立ちのことでしょうが、どうかご理解ください」

「それは、よく分かっておる。

国法にも認められた、迷宮固有の決まりであり、なぜそのようななったかも理解しておる。

財産が奪われた、などとは思わぬ。

また、この程度は、当家の財政に影響は与えぬ。

さらにいえば、パーシヴァル様は、武具にしても法具にしても、

最上のもは、ユリウス様に取り置いておられる。

貴重な品は、迷宮には持ち込まれなかった。

ただ、五点だけ、例外がある」

家宰は、お茶を一口飲んで、話を続けた。

「その五点は、いずれも恩寵品であり、パーシヴァル様の冒険に、あまりにも有用であった。

その五品は、当家にとり、格別の意味がある。

ローガン殿」

家宰は、目に力を込めて、バラストの目を見据えた。

「パーシヴァル様は、貴殿のことを、高い見識を持つ人格者である、と仰せであった。」

貴殿を見込んで、腹を打ち割った話をしたい」

天剣。

あなた、わしと誰かを間違えて伝えてないか？

と思いながらも、バラストは、うなづくほかなかった。

「まずは、このリストに印を付けた三点を、買い戻したい」

バラストは、家宰が印を付けたリストを見た。

ライカの指輪。

エンデの盾。

ボルトンの護符。

いずれも聞いたことのない名であるが、リストによれば、三点とも恩寵アイテムである。

「分かりました。」

買い戻しについては、ご遺族に優先権があります。問題ありません。

ただ、値段のほうは、これから査定をせねば、はっきりしません」

「費用は、いくらかかっても構わぬ。」

さて、問題は、ここからなのだ」

会話をしながら、バラストは、あることに気がついた。

あのアイテムが、一覧表に含まれていない。

天剣が持っていたに違いない、あの有名な腕輪が。

「パーシヴァル様が所持しておられた品で、このリストにない品があるとしたら、それはどういうことであろうか。

これには、アレストラの腕輪と、カルダンの短剣が含まれておらぬ」

## 第9話 アレストラの腕輪

アレストラの腕輪。

始祖王が、女神ファラより邪竜カルダンの討伐を命じられた際に下賜され、討伐に功のあった英雄に始祖王が与えたと伝えられる、絶大な恩寵を持つアンチマジックアイテム。

その英雄こそが、メルクリウス家の初代当主である。

「ローガン殿。

パーシヴァル様は、自分が迷宮で死んでも、殺した相手を探してはならぬ、と仰せられていた。

自分は迷宮に好んで行くのであり、闘いの一つ一つは、自分にとり、名誉ある決闘であると。

力及ばず倒れたとしても本望であり、決して恨みや憎しみをわが子に伝えてはならぬ。

そう何度もそれがしに念を押された。

であるから、パーシヴァル様が亡くなられた原因や様子を調べようとは思わぬ」

それから少し間を置いた。

言葉を選んでいるのであろうか。

「だが、このままでは、ユリウス様がお継ぎになることができぬ。

「当主就任と爵位継承は、問題なく認められるであろう。認められたあとが問題だ」

「ユリウス様のお母上様が、国王陛下におとりなしを願われても、叶わないようなことなのですか？」

家宰は、少し目をむいて、バラストを見た。

「これは驚いた。

あの家名を知っておったか」

「先代国王陛下の第二王妃様が、ご実家から受け継がれた従属家名かと。」

第二王妃様のお母上様が、時折お使いであったと側聞いたしております」

「ううむ。

冒険者ギルド長の情報と記憶とは、すさまじいな。

パーシヴァル様と奥様とは、秘密婚をなされた。

「ご結婚そのものは正式であるが、奥様が有される尊貴な血統と特権が、お二人の子に災いとならぬようにされたのである。」

「訳あつて内分に願いたいですが、聖上には、ことのほか、この結婚を寿がれてある。」

ゆえに、当主就任の勅許と爵位継承のご沙汰については、問題ないと申した。

問題は、そのあとにある。

「家名継承と襲爵にあたっては、参内して聖上への拝謁を乞わねばならぬ。」

「当主は、その際、かの腕輪を身に着ける慣例なのだ。」

そして、聖上は、腕輪を手に取り、始祖王と初代当主の君臣の契

りをお贖えになる。

ただの慣例ではあるが、このとき、腕輪が紛失しているということでは、当家は体面を失う。

したがって、腕輪が戻るまでは、パーシヴァル様のご逝去を届け出、ユリウス様への代替わりを願出することはできぬ。

カルダンの短剣については、見つからねば、当面は諦めて、また時を待つこともできる。

アレストラの腕輪については、そうはいかぬのだ」

今度は、バラストが考え込む番だった。

ややあつて、バラストは、口を開いた。

「順番に考えていきましょう。

ドロップアイテムが見つかったのは、六階層の階段近くです。

人通りの多い場所ですが、ここにパーシヴァル様が長くとどまっておられた、と思われる情報は上がってきておりません。

ですから、パーシヴァル様は、深い階層で探索を続け、それが終わったあと、出口を目指して迷宮を上り、六階層で命を落とされた、と考えられます。

すると、腕輪と短剣は、六階層に上がった時点ではどうなっていたか、という点がまず問題になります」

「ふむ。

その通りではあるが、生きているパーシヴァル様から、あの貴重なる二品を奪うのは無理であろう。

紛失するような品でもない。

格別な恩寵が込められた品であるから、破損して消滅した、とも

考えにくい」

「わしもそう思います。

一覧表を見ると、高性能の回復アイテムも多数残っております。

深い階層で傷や毒を受けたとしても、それは回復できたわけですから、やはり、六階層で、命を落とされるような出来事があったのです。

そのとき、あるいは、その後に、誰かが持ち去った、という線をも、まずは考えるべきでしょうな」

結論は正しかったが、バラストの知らないこともあった。

パーシヴァルは、修行の効果を上げるため、できるだけ回復アイテムを用いない。

同じ理由で、五十階層より上の階層を駆け抜けるときには、わざわざ、全ステータスが低下するブーツを着用していた。

ミノタウロスと遭遇したときには、体力も気力も絞り尽くし、本来の能力が抑制された状態だったのである。

「そうであるうな。

非礼を承知で訊ねるが、拾得者は、すべての物品をギルドに提出したであろうか」

「はい。

提出しとります。

少なくとも、本人たちは、そう思っておりますな。

ところで、もちろん二つのアイテムには、所有印がどこしてありましたでしょうか？」

「然り」

「おそらく、最上級の刻印なのでしょうな？」

「然り。」

最上級の刻印であり、呼び戻しのまじないも加えてある。取り戻したい五品すべて、そのようにしてある。

ふむ。

貴殿の次の質問への答えも然りである。

すでに昨日、刻印術師を呼び、探索の術を施させた。

夕刻になり、反応が出始めたが、問題の二品のみ、反応がなかった。

監視を続けさせたところ、今朝になり、物品がここに持ち込まれたようであった。

そこで、出向いてきたのである」

食えない男だ、とバラストは思った。

それにしても、呼び戻しのまじないまで掛けてあるとは。

アイテムと同じ重さの聖銀を使いつぶしにする術であり、効果は長くて一か月ぐらいと聞く。

切れるたびに掛け直すんだらうなあ。

掛け直すときには、現物はなくてもいいらしいが。

家柄の割には金持ちでないと聞くが、やはり桁が違うわい。

そんなことを考えながら、話を引き取った。

「ということは、腕輪と短剣は、まだサザードン迷宮の中にあるのですな」

「そうとしか考えられぬ」

「なるほど。」

ところで、拾得物提出については、トラブルを避けるため、本人

の許可を得て、虚偽判定の魔法を掛けながら、いくつか所定の質問をするんです。

その中に、拾得した品は全部提出したか、というのがあります。八人全員について確認が取れとります。

ですから、拾得者たちが、迷宮内に腕輪や短剣を隠匿している、ということはありませんわい。

さらに、所定の質問の中には、元の持ち主の死に関与していないか、また関与した者に心当たりはないか、というのも含まれております。

こちらについても、八人全員、パーシヴァル様の死因については、まったく心当たりがないことが確認されとります。

次に、通りがかりの第三者が腕輪と探検を持ち去った、という可能性も、考慮の外に置いてよいでしょうな。

元の持ち主を害していないのであれば、ギルドに堂々と持ち込んで利益を得られるのですからな。

まあ、第一、現金や高価な消耗品などが残されとりますから、強盗にせよ、火事場泥棒にせよ、単なる利益目的のではありませんわい」

「さようか。」

では、残る可能性は何か」

「まず、拾得者たちが見落としたか、途中で落とされたということが考えられます。

この場合、一階層から六階層までのどこかにあることになりましたな。

次に、モンスターが、アイテムを持ち去ったということも、考えられなくはありませぬ。

武器や光る物に興味を示すことがありますからな。

この場合、アイテムは、六階層にありますよ。

次に、畏れ入る申し条ではございますが、パーシヴァル様とお家を陥れたい者が、パーシヴァル様を殺害し、二品を奪い、迷宮のどこかに隠したか、持ったまま今も隠れているという可能性です。

パーシヴァル様が亡くなられたことが知れ渡り、若様が跡継ぎの願いを出さないわけにはいかなくなるまで待ち、お家に恥をかかせらるなり、あるいは条件付きで腕輪を返す、というような筋書きになるかと思えます。

しかし、これは、どうも、ありそうであり得ない可能性かと思えます。

これほどのお品なら、最上級の刻印があることは当然ですから、迷宮を出たとたん、例え移動の魔術で大陸の端まで逃げたとしても、探知されずし、呼び戻しの術で、一瞬にしてアイテムは取り戻せるわけですからな。

ここの迷宮から、よその迷宮に直接瞬間移動したんなら、まあ、刻印の探知には引つ掛からんでしょうが」

「待て。

迷宮から迷宮に瞬間移動することなど、不可能であろう」

「不可能じゃありません。

できる魔法使いを知っとります。

しかし、複雑な術式と、しちめんどくさい準備と、大量の魔力が必要だということです。

何より、大規模な瞬間移動は、それ自体が探知されやすいですからなあ。

移動元と移動先の、両方のギルドにばれてしまいます。

まあ、この可能性は、考えんでもよろしいでしょう。

持ち去った者がいるとすれば、その者は、この迷宮におるに違いないでしょう。

しかし、持ち主の家族とギルドが本腰を入れれば、やがて間違い

なく見つかるわけですからなあ。

そもそも、迷宮というものは、どんなに経験豊かな冒険者が、バランスのよいパーティーを組んで、たっぷりの消耗品を準備したとしても、長期間潜伏できるような場所じゃありませんわい。

まあ、売ることはできませんでも、迷宮の中でだけでも使うことができるなら、盗む意味もありますが、あのアレストラの腕輪は……」

「うむ。

あの腕輪には、女神フアラにより、特殊な制限が掛けられておる。当家の当主か、当主が心から認めた者にしか、効果を発動できぬ」

「え？

後半部分については、初めて聞きましたわい。

まあ、いずれにしても、不当に得ても使えないことは、広く知られとりますからなあ。

所有印の履歴は消せませんから、所持することは、刑罰や不名誉、あるいは騒乱の種を抱え込むようなもの。

ほかに数々の高価で優れたアイテムがあるのを無視して、使うことも、よそで売ることもできぬ品だけを持って、やがて発見されるに決まっているのに、迷宮に隠れ続けているというのは、不自然すぎます。

どう考えても、利口なやつのことじゃない」

まあ、お貴族様つてのは、とても利口とはいえないことを、しょうちゅうなさいますがね、とバラストは心の中で付け加えた。

家宰も同じことを考えていたと知ったら、バラストは大声で笑ったろう。

「ただまあ、その場合は、できるだけ深い階層に逃げるでしょうから、こちらにも態勢を調べて探索に掛からねばならんですな。

付け加えていえば、パーシヴァル様のご性質からすると考えにくいことですが、深い階層で、想定外に強力なモンスターの集団がいる所で腕輪を落としなさったが、独力では取り戻しにくいので、いったん上に上がって来られて、何か異常な出来事で命を落とされたというような可能性も、まったくないわけではありませんな。

この場合も、態勢を調べてから探索することになります。

つまり、まずは一階層から六階層までを調べるべきです。

その刻印術師殿は、どちらにお住まいで？」

どのような所有印が刻まれているかを知っていれば、膨大な距離を隔てても、たとえ特殊インベントリに格納していようと、そのアイテムを探知できる。

所有印を刻んだ術師本人が探索するのが手っ取り早いですが、当然、刻印の記録は取ってあるはずである。

その記録を利用すれば、どんな刻印術師でも探知ができる。

この家宰なら、複数の刻印術師を動員して、昼夜兼行の探知態勢を取るぐらいのことはしたであろう。

しかし、迷宮の外から、迷宮内のアイテムを探知することはできない。

迷宮内のアイテムを探知したければ、中に入るしかない。

迷宮一階層に行けば一階層内の探知はできるし、二階層に行けば二階層内の探知はできるのである。

「今、馬車の中で待たせておる」

「ご用意が行き届いております」

では、すぐに迷宮に参りましょうと言いかけて、バラストは思い出した。

今、迷宮で起きている事態について。

「家宰様。

今度は、こちらの事情をご説明いたします」

バラストは、奇妙なミノタウロスのこと、死んだと思われる三人の冒険者のこと、ギル・リンクスが探索に出ていることなどを説明した。

それに続く家宰の沈黙は、かなり長いものとなった。

「ローガン殿。

ギル・リンクス師がご探索中となれば、まずはそのご帰還を待つべきとは存ずる。

しかし、勝手を申すが、まずは刻印術師を伴い、六階層までを調べてみたい。

この点の許しと案内人の手配を頼めまいか」

「そうおっしゃると思つとりました。

ギルドには、迷宮に入っていていいとか、いけないとか、決める権利はありませんしな。

冒険者以外の人間に対しては、なおさらです。

案内兼護衛については、ここに、ちょうどよいSクラス冒険者がおりますぞ」

バラストは、自分を指して、にやつと笑った。

ユリウスは、護衛とともに迷宮の入り口で待つことになった。

家宰は、驚いたことに、ザックを持っており、そこから軽鎧と長

剣を取り出して、装備した。

バラストも、皮鎧を身に着け、バトルハンマーを持った。刻印術師も攻撃魔術が使えるとのことであった。

迷宮の入り口の近くまで来たとき、

「おおっ」

と刻印術師が声を上げた。

迷宮から、誰かが出て来たところである。

その影は、ひどく小さい。

「なんであんな子どもが？」

と、バラストがいぶかるうちに、刻印術師が、子どもに駆け寄る。黒い目と、黒い髪をした、五歳から七歳くらいの少年である。顔も体も薄汚れて傷だらけである。

右手に、ぼろぼろのナイフを、左手に、美しい腕輪を持っている。

「あつた！」

ありましたぞっ」

少年のそばに駆け寄った刻印術師が叫ぶ。

全員が、少年を取り囲むように集まる。

「すまんが、その腕輪を見せてもらえぬか」

家宰が、身をかがめて少年に言うと、少年は、すっ、と腕輪を差し出してきた。

それをひとしきり眺めた家宰は、腕輪を若い主君の前に差し出し

て、

「アレストラの腕輪に相違ありません」

と告げた。

家宰は、片膝をつけてしゃがみ、目線を少年に近づけて言った。

「そなたの名は？」

「パンゼルといいます」

少しも臆するところのない、しかし、礼儀正しい物腰である。家宰は、少し口元がゆるむのを感じながら、言葉を続けた。

「この腕輪は、そなたが迷宮から持ち帰った物ゆえ、迷宮の習いにより、そなたの所有物となる。

が、この腕輪は、これなる若様の父君ご愛用の品にして、わが家の家宝たるべき品。

しかるべき値あたで譲り受けたいが、いかがであろうか」

パンゼルと名乗った少年は、家宰の目を見つめ返し、次に、自分のすぐ前に立つユリウスを見た。

ユリウスは、腕輪をしっかりと抱きしめ、まっすぐにパンゼル少年の目を見つめている。

「その腕輪は、あなたのお父さんの物ですか？」

パンゼル少年の問いに、ユリウスは、うなずきつつ、「うん」と返事をした。

「では、腕輪は、あなたにお返しします。  
お金は要りません」

ユリウスは、はじけるような笑顔を見せて、「ありがと、パンゼル殿」と言った。

腕輪が戻ったとなれば、無理に今すぐ迷宮に入る必要はない、と家宰は判断し、パーシヴァルが迷宮内で死去したことは公表しないことと、一連の出来事について調査が進展したら知らせることを依頼して、ギルドを辞した。

翌日には、バラストの推薦する冒険者の案内で、メルクリウス家の家臣が六階層までを探索することになった。

ユリウスは、父親の死んだと思われる場所で花を捧げてほしい、と言っていた。

パーシヴァルの死を公表しないといても、すぐに噂は流れる。秘密にできるわけではないが、ギルドとして公言はしない、ということである。

メルクリウス家では、パーシヴァルは病死したと届け出る。

これまでも、公式行事や参内義務をさぼるについては、病気のため、と理由を届け出ており、パーシヴァルは、書類上は「病弱」ということになっているらしい。

迷宮に籠もっていたことは、宮廷でも周知の事実であろうが。

バラストとしても、確かな事実として言えるのは、天剣パーシヴァルの冒険者カードおよび所持品とおぼしき品々が発見され届けられた、ということだけであるから、家宰の申し出を了諾するのに、

何の問題もない。

腕輪はミノタウロスが持っていた、というパンゼル少年の証言には、ひどく驚かされたが、考えてみれば、一番納得できる結末でもあった。

もつとも、そうすると、やはりパーシヴァルを倒したのはミノタウロスなのか、という疑問も湧いてくるし、最後の遺品である短剣も、ミノタウロスが持っていたというのがそうではないか、と思えてくる。

まだ何もかもが解決したわけではないが、ありがたいことに、あのミノタウロスは、めったに人を襲わないようだ。

何しろ、数多い目撃証言のすべてで、襲ってこなかったことが確認されている。

攻撃を仕掛けたパンゼル少年さえ、無事だったのだ。

人を襲わないミノタウロスというのは、それはそれで奇怪であるが。

あのあと、家宰は、パンゼル少年に、家族や住まいのことを訊ねていた。

金は要らないと少年は言っていたが、あの家宰なら悪くはすまい。それにしても、「なぜお金は要らないと言ったのか」と聞く家宰に、あの少年、

「だって、お父さんの物が、人の物になっていたら、悲しいです」

と答えていた。

そんな経験があるのだろうか。

病気の母親と二人暮らしで、その薬代欲しさに迷宮に入ったとい

うのだから、何かあったのかもしれない。

まあ、いろいろあったが、最後はよかった。

忙しかったが、充実した一日だったな、とバラストは独りごちた。机の上に積み重なる未決書類の山も、気にならない。

一杯やるか、と焼き酒と飲酒椀の入った引き出しを開けた。

椀の手前に、セルリア貝が置いてある。

忙しさにかまけて、結局まったく確認していなかった。

ギルが死ぬわけではないから、確認するといつても、無駄なことなのだが。

しかし、ギルの命を映す青紫の光は、失われていた。

愕然としたバラストは、震える手で、貝殻を持ち上げようとした。力加減を間違えたか、その指先で、貝殻は砕け散った。

世界が崩れていくような気がした。

## 第10話 五十階層

ミノタウロスは、五十階層のボス部屋にいた。

最上階層にたどりつき、そこから下層への移動を開始して六日目である。

敵が弱いと感じたら、とにかく階段を探して、下に降りてきた。

いくつかの階では、ボス部屋に足を踏み入れたが、ミノタウロスの飢えを癒す強敵はいなかった。

細剣使いに続いて魔法使いを倒し、一気にレベルアップしたため、浅い階層では物足りなかったのである。

この階層に来て、やっと手応えを感じた。

ここでは意識してボス部屋を探し、見つけた。

この階のボスは、巨大なりザードマンだった。

両手に曲刀を持ち、威力と速度と技巧のある連続攻撃を仕掛けてきた。

隙あらば足蹴りや頭突きも飛び出すし、尻尾は恐るべき威力を秘めていた。

ミノタウロスは、ひどくこの敵が気に入った。

長時間の闘いを楽しむうち、長剣が折れたので、三十階層のボスから得た巨大な棍棒で、とどめを刺した。

棍棒も、悪くない。

しかし、ミノタウロスの興味は、刀に向いていた。大きく、重く、頑丈で、思いつき振り回して相手を叩き切るこ  
とのできる刀が欲しいと思った。

リザードマンが消えたとき、持っていた二本の曲刀も一緒に消え  
たが、あとに、より大きく、より美しい曲刀が現れた。

ミノタウロスは、座り込んで、しげしげと戦利品を眺めた。

もう少し大きく、もう少し重ければなあ。

だが、美しい刀だ。

強い力を感じる。

ミノタウロスは、その曲刀を、当面の武器にすることに決めた。

少し考えたあと、右手に曲刀を持ったまま、地面に置いていた棍  
棒を、左手に取った。

右手に、刀。

左手に、棍棒。

ミノタウロスは、リザードマンの二刀流の剣技を思い出しながら、  
この二つの武器を両手に持って敵と闘うおのれの姿を、思い描いて  
みた。

何物かが近づくと気配を感じて、入り口のほうに向き直った。

間もなく、六人組の冒険者が、部屋に入ってきた。

盗賊剣士、剣士、魔法使い、アーチャー、神官戦士、魔法戦士と  
いう組み合わせである。

油断なく戦闘隊形を取りながら、言葉を交わしている。

「おい。」

あの転送屋、五十階層と十階層を、間違えやがった」

「いや、そんなはずないって。  
部屋の外は、確かに五十階層だったよ」

「じゃ、なんで、牛頭うしまたまがいるんだよっ」

「うーん。」

持ち場を交換したのかなあ」

「お、なるほど。」

モンスターだって、同じ部屋で同じように殺され続けたら飽きるもんなあ。

たまには、違う部屋で、違うレベルの冒険者に殺されたいよなあ。  
って、あほかっ」

「どうでもいいけど、こいつ、ミノタウロスと思えない強さだわ」

「そうだねえ。」

それに、くれる物くれるんなら、牛頭だろうがトカゲ野郎だろうが、どっちでもいいさね」

「いや、ミノは、ドロップしよぼいですから」

「ほっほっほ。」

そつでもないようじゃ。  
見なされや。

右手には、鮮血のシミター、左手には、タートルクラッシュャーを、  
すでに持っており」

「恩籠品が二つですか。」

しかも、片方は、レアドロップ。

なかなか、もてなしの心を知ったミノタウロスですね。  
「アースバインド」

冒険者たちは、無駄口をたたきながら、じりじりとミノタウロスとの距離を詰め、最適な距離に入った瞬間、いきなり戦闘を開始した。

指示も打ち合わせもなく、こうした行動が可能であるのは、このパーティーの連携が練り上げられていることを示している。

ミノタウロスは、足止めの魔法が発動する瞬間に、ごく小さく跳躍し、発動を不発に終わらせる。

魔法使いは、短く詠唱して、まず自分に、次いで前衛から順番に、ヘイストをかける。

攻撃速度と移動速度上昇の付与魔法である。

盗賊剣士は、ミノタウロスの左側に回り込むと、左手でフラッシュ・パンチを投げ付け、右手で脇腹めがけてサーベルの小刻みな突きを仕掛ける。

神官戦士は、奉ずる神に祈りを捧げつつ、剣士に息を吹きかけた。わずかな時間であるが、魔法防御と物理防御を大きく上昇させる魔法である。

ぱぱぱぱぱぱつ。

ミノタウロスの、顔のすぐそばで、続けざまに破裂音を発しつつ小さな閃光がはじける。

ただそれだけのアイテムであるが、動物系のモンスターは、これを嫌がる。

ところが、このミノタウロスは、閃光にも破裂音にもまったく頓

着せず、左手の棍棒を振って、盗賊戦士を牽制する。

同時に右手の曲刀を斜めに振り下ろし、剣士の首を斬り飛ばす。

曲刀の軌道が、直角に曲がり、神官戦士の左肩を切り裂く。

ミノタウロスが頭をかがめ、その頭上を魔法矢が通り過ぎる。

しゃがんだ反動で前方に飛び出す。

魔法戦士の放ったファイアー・ダガーが顔と胸に突き立つが、かわしも防ぎもせず、これを受け止める。

あまりダメージも受けていない。

ずっと後方で、魔法矢が泉に着弾し、巨大な水柱が上がり、大量の蒸気を生み出す。

棍棒が石ころをはね飛ばす。

低く突進する二本の角で、魔法戦士の体をとらえる。

石ころの弾丸が、青ポーションを補給しようとしていた魔法使いの腹を直撃する。

魔法戦士を頭に縫い止めたまま、なおも前に突進する。

追いついた盗賊戦士のダガーが背中に刺さるが、すぐに抜け落ちる。

ミノタウロスは、ポーションを取り落とした魔法使いにシミターを向ける。

アーチャーが二本目の魔法矢の魔力を発動させ終わる。

ミノタウロスが、直進から右前方へと、進行方向を急転換する。

ミノタウロスの真ん前の魔法使いと、頭にかつがれた魔法剣士がじゃまで、アーチャーは、矢を発射できない。

シミターが魔法使いの胴体を、上下に切り分ける。

棍棒がうなりを上げて、アーチャー目指して投擲される。

「コール！」

後ろで、神官戦士が唱える。

すると、アーチャー、魔法戦士、盗賊戦士が、神官戦士の元に瞬間移動する。

近距離限定のパーティーメンバー召喚スキルである。

あつという間に二人を失ったパーティーは、この敵には勝てないと判断する。

手持ちの目くらましアイテムとスキルを総動員して、戦線を離脱して逃げたのであった。

「何言ってるんだい！」

こつちは二人も仲間を殺されたんだよ！

あんな危険なやつがボスになってるんなら、なんで五十階層への転送を頼んだときに、教えてくれなかつたんだ」

「まことにお気の毒です。

あらかじめ、迷宮全般の情報を買っていたら、当然、最近話題になっているミノタウロスのことは、お教えしました。

もつとも、今、このミケーヌの街では、子どもでも、ミノタウロスのことは知っております。

まして冒険者となれば、どんな駆け出しでも情報を持っておりません。

あのミノタウロスは、こちらから攻撃しない限り、襲ってくることはないというのは、すでに常識となっております。

五十階層に達しているとは、当ギルドでも把握しておりませんが、それもおそらく一時的なことで、順次下の階層に移動していくものと思われれます。

たまたま、あのミノタウロスが五十階層のボス部屋にいたときに、そこに突入なさったのは、不幸なことでした」

「そのせいで、こちらは、強敵と知らずに突っかかって行ったんだよ！」

「どうしてくれるのさっ」

「では、はつきり申し上げます。」

これは、久しぶりにこの街に来たのに、何の下調べもせず、いきなり五十階層に挑んだ、あなたがたの油断による失敗です。

ボス部屋にいたのがリザードマンではないと気付いた時点で、引き返すこともできたはずですよ。

あなたがたが攻撃するまで、ミノタウロスからは仕掛けてこなかったでしょう？

これは、あなたがたが、ご自分で選び取った危険ですよ。

「迷宮への挑戦は、自己責任で行うものなのです」

そう言われれば、アーチャーには、事務長に言い返す言葉がなかった。

このパーティーは、もともと、この街で腕を上げ、五十階層のボスを倒したのを機に、他の迷宮を探索しに旅に出たのだ。

迷宮探索のほか、さまざまなクエストもこなした。

経験を積み、クラスを上げ、優れた装備も手に入れた。

久々にこの街に帰って来て、帰還の景気づけにと、ギルドを訪ねるなり、いきなり五十階層への転送サービスを頼んだのだ。

負けるはずがないと思いついていた。

自分たちは強くなったと信じていた。

だから、どこに行っても最初に行う情報収集を、今回だけ、まったく行わなかった。

五十階層のボスのことは、よく知っているから。

油断であった。

慢心があった。

そのせいで、ずっと一緒に冒険をしてきた二人の友が死んだ。

アーチャーは、抗議と非難の言葉を失い、じつとこぶしを握り締めながら、悔しさをかみしめるほかなかった。

そのころ、ミノタウロスはといえば、まだ、五十階層のボス部屋にいた。

リザードマンとの闘いが気に入ったのと、もう一本シミターが欲しかったので、リポップを待っているのである。

岩壁にもたれて、先ほど闘ったパーティーのことを思い出していた。

やつらは、油断していた。

こちらの力を、低く考えていた。

だから、闘いを有利に進められた。

しかし、油断していなかったら、どうだったろう。

一人一人は、それほどの強さでもなかったが、あの連携というもの、まことに大したものだ。

技の種類も多い。

新しい技を、いろいろ見せてもらった。

やはり、人間は、面白い敵だ。

ミノタウロスは、次の人間との対戦を、楽しみに待つことにした。

相変わらず飢えは感じていたが、その飢えすらも、楽しみの一部となっていた。

## 第11話 下層への挑戦

結局、それから五回、ミノタウロスはリザードマンを倒した。

ドロップは、いずれも、切れ味はよいが恩寵のない平凡なシミターであった。

しかし、スキルドロップがあった。

身体の強度と魔法抵抗を強め、一定の割合で体力が回復していくという、使い勝手のよいスキルである。

それ以上に、ミノタウロスは、剣の技を学べたことに満足していた。

人間以外で、剣の奥深さを、初めて教えてくれた敵であった。

ミノタウロスは、下へ下へと、階層を降りて行った。

五十階層から下では、すべてのボスと闘った。

また、下層で遭う人間たちとも、闘いになることが多かった。

しばらくは、鮮血のシミターとリザードマンシミターの二刀流で闘った。

リザードマンの動きを思い出しながら、様々な技を工夫した。

いささかシミターに飽きてきたころ、冒険者を倒したときに残った恩寵付きバスターソードが目についた。

なぜかひどくなじむ気がして、この武器を使うことにした。

80階層ボスのマンティコアから恩寵付きツヴァイヘンダーがドロップしてからは、これが主武器となった。

重量感と破壊力は申し分なかったが、重心が先に寄りすぎ、また、全体の作りも大味で、微妙なコントロールがしにくいと感じた。

自分に本当にふさわしい武器は、まだほかにあるような気がしていた。

鎧や小手、盾、靴を始め、冒険者たちが目の色を変えるような恩寵品を、いくつも獲得したが、ミノタウロスは、防具にはまったく関心がなく、無造作に収納袋に放り込むばかりだった。

首輪や指輪、腕輪などの装飾品や、剣以外の武器なども同様である。

ポーションや各種のブーストアイテムには、興味を示し、使うこともあった。

意識してそうしたわけではないが、防具を使わず戦い続けることで、ミノタウロス自身の物理および魔法防御のステータスは、どんどん伸びていった。

襲ってくる冒険者たちの遺品も、目に付いた物は収納していた。

冒険者から得たアイテムの中で、ミノタウロスが長く愛用したのは、一本のベルトである。

あるパーティーと闘ったとき、魔法戦士が、ベルトのソケットから、ポーションを次々に取り出して飲んでいった。

どうしてあんなにたくさん入れられるのかと不思議に思ったので、相手を殺してから、調べてみた。

そのベルトは、ソケットに消耗品を入れて、それを使うと、特殊インベントリに同じ品があった場合、自動的に補給する機能を持っていたのである。

その上、このベルトには、移動速度を二割、HPを五割増加させ

る恩寵が付いていた。

ミノタウロスは、ひどくこのベルトが気に入り、以後常用した。二十個のソケットのうち二つには、炸裂弾を入れた。投げつけたら爆発するというだけの投擲武器であるが、下層に来る人間がよく所持しているので、補給がしやすかった。

これを人間相手に使用すると、相手がびっくりするのが楽しかった。

乱戦の中で、後衛の魔法使いにうまく当てられるように、技術を磨いた。

人間がモンスターを倒せば、経験値が入るが、人間が人間を倒しても、経験値は入らない。

ミノタウロスの場合、ちょうどこの逆で、人間を倒せば経験値が入ったが、モンスターを倒しても経験値は入らなかった。

しかし、レベルアップをもらたす経験値は入らなかったとしても、モンスターとの対戦は、武器やスキルの熟練値を上げ、基本ステータスを底上げしてくれ、さらに判断力など、数字に表れない総合能力を上げてくれた。

モンスターは、それぞれまったく違う特性を持っている。

相手の攻撃を受け止めて耐え、あるいはかわし、有効な攻撃を選び、その精度や威力を研ぎ澄ます。

そして、殺す。

強力な敵に出遭い、それを倒せる自分になることは、ミノタウロスの喜びであり、存在する意味そのものであった。

また、モンスターからのスキルドロップという恩寵は、ミノタウロスにも与えられた。

高熱の息を吐くスキル。

突進力を高めるスキル。

クリティカル攻撃を受ける確率を減らすスキル。

階層内の敵の位置や種類を探知するスキル。

などを、身につけていった。

ハウリングも、ランクアップを重ね、別物と思えるほどの強力な攻撃になった。

人間との戦闘は、経験値の獲得を置いて、貴重な勉強の機会であった。

剣の使い方、魔法の特性、さまざまな武器、攻撃方法、連携の仕方などを、ミノタウロスは人間から貪欲に吸収していった。

下層に降りるほどに、戦闘は苛烈になった。

何度も死にかけた。

特に、最下層である百階層のボスと闘ったときは、無残な敗北を続けた。

それでも、鍛え直して再挑戦を続け、ついには、このメタルドラゴンを倒すことができた。

ありがたいことに、いつのころからか、強い人間たちのパーティーが、立て続けに、ミノタウロスを襲うようになっていた。

ミノタウロスは、彼らを殺し続けることで、レベルを上げていくことができたのである。

一度倒したあとも、何度もメタルドラゴンと闘った。

強敵である、ということもさることながら、このメタルドラゴンは、倒すたびに、違う種類のすばらしい剣をドロップした。

実は、このボスモンスターは、倒した者が心から欲しがっているアイテムをドロップする、という特性持ちであった。

次々と出てくる剣を楽しみに、殺して、殺して、殺し続けた。

長剣での闘い。

短剣での闘い。

長期戦。

超短期戦。

さまざまな戦い方を試した。

百回目に殺してから、リポップが止まった。

まるで、迷宮が、メタルドラゴンに変わってミノタウロスが最下層のボス部屋の主となることを認めたかのように。

メタルドラゴンのリポップが止まっても、ミノタウロスは、最下層のボス部屋にとどまった。

もはや、闘いたいモンスターはいない。

闘うべき相手がいるとすれば、それは人間である。

人間は、次々にやって来た。

彷徨するミノタウロスの存在が知られた当初は、冒険者たちのあいだに動揺が生じた。

しかし、こちらから攻撃しない限り襲ってはこないと知れると、そういうものであるとして、受け入れられていった。

徐々に下層に向かい、各階層のボスと闘う姿が、冒険者たちの目にとまることも多かった。

ミノタウロスは、おのれの価値観に従って挑戦を続けているのであろう、と思われるようになっていった。

敢えてこの魔獣に挑むパーティーもあった。

次第に、遠方からも、ミノタウロスへの挑戦者が現れるようにな

った。

ミケーヌ冒険者ギルド長バラスト・ローガンの名前で、驚くほど高額の賞金が掛けられてからは、恐ろしい数の狩人たちが、ミノタウロスに挑んだ。

そして、ミノタウロスの経験値となっていた。

ギルド長名による懸賞金のスポンサーは、実は王であった。

ギル・リンクスが姿を消した少しあと、内々の勅使がギルドを訪ねて、ギルド長を、大いにあわてさせた。

バラストは、知っていることを、隠さず伝え、あのミノタウロスが大魔法使いを倒したとは思えない、と意見を述べた。

ミノタウロスが、いかに突然変異の強者であっても、ギルなら、遠距離からの攻撃魔法一撃で勝負をつけることができる。

防ぎようがない。

アレストラの腕輪を、ちょうどそのころミノタウロスが所持していたように思われるが、あれは、天剣以外の人間には使えない。

天剣と、その息子以外には。

まして、モンスターなんぞに使えるわけもない。

かりに百歩譲って使えたとしても、直接攻撃以外にも、ギルにはいくらかでも魔法の使い方がある。

さらにいえば、ギルは、近接戦闘においても達人である。

若いころ、二人で、ロアル教国に行ったとき、巫女を守るバラストの目の前で、ギルは、短剣二本で、二人の聖騎士を手玉にとってみせた。

聖騎士は、低く見積もっても、戦闘力だけならSクラス冒険者に匹敵する。

あれこれ考えるうちに、バラストは、ギルが死んだと思うのはやめた。

自分の目に見えないどこかに行っているのだと、思うことにしたのである。

それから三か月ほどたって、王は、突然、自分が賞金を出すから、冒険者ギルド長の名でミノタウロスに討伐依頼を出してほしい、と言い出した。

初めに王から提示された金額は、ギルドをいくつも買い取れるような金額であった。

バラストは、頼み込んで、賞金の額を下げてもらったのである。表向きの理由は、ギル・リンクスを殺したと思われるモンスターを討伐し、その遺産を回収すること、となっていたが、おそらく本当の理由はほかのところにあると、バラストは推測した。

パーシヴァルの妻の母は、先王の第二王妃であったが、出産後、王の勘気に触れ、第二王妃の座から降ろされた。

以後、後宮の奥まった一角に、子どもともども押し込められたが、これは実は、母娘に平穏な暮らしをさせようとする先王の計らいであった。

その思いを、現王も引き継いでおり、表面上はこの異母妹をうとんじる態を装いながら、実際には深い愛情を抱いていた。

後宮の奥深くでひっそりと生涯を終えるはずの異母妹が、奇跡のような出会いをして、若者と恋に落ちた。

なんと、その若者は、現王が、その武勇と清廉を愛してやまぬ、王家に忠義深き一族の若き当主であった。

若者が、恋人の正体を知らぬまま、王の前に額づいて結婚の許しを懇願したとき、王は、生きていることの楽しさを、生まれて初めて味わう思いがした。

王は、王家からの正式の降嫁という形を取らず、妹が有していた従属家名を使つて、結婚させた。

王家の一族として扱われないという王の意志を示すために。

二人の間に男の子が生まれたと聞いたときには、喜びのあまり、勅使を発しようとして、側近にいさめられた。

万一にも、その赤子が、いくつかの条件さえ整えば王位継承権第六位を主張できる立場であると、大貴族たちに思い出させてはならなかったからである。

パーシヴァルの死後、二か月ほどして、メルクリウス家は各方面への調整を終え、当主の後継と承爵を願い出た。

王は、パーシヴァルの死を知り、仰天して、密かに事情を調べさせた。

そして、パーシヴァルをミノタウロスが殺したと知った。

あの幸せそうだった妹が、未亡人となった。

今まで会うことのできなかつたかわいいい甥は、父のない子となった。

王にとって、ミノタウロスは、仇敵そのものとなった。

しかし、一貴族の仇を討つために、騎士団を差し向けることはできない。

そもそも、パーシヴァルが迷宮でモンスターに殺されたなどと、公に言うことはできない。

そこで、王家に対しても王国に対しても功績のあるギル・リンクスの死に関わったと思われる、という理由で、王の資産から賞金を出すことにしたのである。

無論、内々のこととしてである。

返り討ちにあつて死んだ冒険者が三百人を越えたとき、ギルド長

の立場上、さすがに賞金は取り下げざるを得なくなった。

バラストは引退して、事務長のパロス・アイアドール・レティスに冒険者ギルド長の座を譲った。

冒険者出身でないギルド長の誕生に、冒険者たちは驚いたが、ギルド職員のあいだには、この人事を怪しむ声はなかった。

時を置いて、再び賞金が掛けられた。

いくつもの強力なパーティーが、この大いなるモンスターの討伐を志した。

倒れた者もあり、引き下がった者もある。

とりわけ執念を燃やしたのは、アイゼル・リードという魔法使いである。

結局、彼も死んだ。

ミノタウロスは、サザードン迷宮最下層に、いまだ健在である。

## 第12話 武器屋にて

サザードン迷宮近くの、とある武器屋に、一人の行商人が入って来た。

「いらっしやいませ、トルモン様」

「おお、ヴィエナちゃんじゃねえか。  
相変わらず、めんこいねえ」

「あら、ありがとございます」

「トルモン」

「おお、とつつあん。

おひさ」

「帰って来ておったんか」

「たつた今、着いたとこなんだけどよう。  
聞いたぜ。

ひでえじゃねえか。

王宮から、とんでもねえ人数のつぶし屋どもが来たって？」

「その話か。」

ちよつと奥へ行くぞ。  
ヴィエナ、店を頼む」

「はい、店長」

「おいおい、なんだよ。

こんなところで。

表じゃ話せねえのか？」

「まあ、ここのほうが遠慮なく話ができるじゃろうな。

店先で騎士団を笑いものにするのは、ちとまずいからの。

ふあっはっは」

「おいおい。

笑っててどうすんだよ。

王宮の気取り屋どもに、われらの王が、つぶされてるんだぜ」

「なんじゃ、聞いておらんのか？」

討伐とやらは、失敗じゃ」

「へ？」

失敗ったって、昨日入ってったばかりなんだろう？」

「そうじゃ。

そして、昨日のうちに失敗した」

「むちゃ早ええつ。

諦めて帰ったのかよ？」

「諦めたのじゃないわい。  
全滅じゃ」

「ぜ、全滅う？」

だって、おめえ、聞いた話じゃ、五十人近い人数だとか」

「七十二人じゃな。

八人編成のパーティーが八つ。

転送専門が二人、回復魔法専門が二人、総合支援が二人。

それに、見届け人が一人。

総指揮官とやらが一人」

「なんじゃ、そりゃ！

なんてえ力ずくだよ」

「今までも、ときどき、百階層のボスには、いわゆる討伐隊が出ておった」

「出てたねえ。

部屋から出ねえボスを、なんで討伐する必要があんのかは、誰にも分かんねえけど。

そんな暇あったら、盗賊や街道のモンスターを討伐しろや」

「まあ、騎士への箔付けじゃからなあ。

たとえよってたかって袋だたきでも、メタルドラゴンを倒せば、竜殺しを名乗ることができるからのう」

「いや、殺してねえだろ、全員は」

「もちろんじゃ。」

「パーティーの最大人数は八人じゃからな。」

「普通は、とどめを刺したパーティー以外は、竜殺しとはいわん。だからやつらは、どのパーティーが倒したかは、公表せん。」

「二パーティーとか、多いときには四パーティーで、交替で闘う。キャンプファイアでうまい物を食いながらな。」

「何日も掛けてドラゴンを弱らせ、最後は取り囲んでめった斬りにする。」

「疲れたり、形勢が悪くなれば、いくらでもボス部屋の外に逃げたな。」

「そのあげく、何十人でなぶり殺しにしようが、全員が竜殺しを名乗る。」

「倒したパーティーに属しておらず、経験値も、スキルドロップもなくてもな。」

「へっ！」

「いったん部屋を出たら、日を改めて再挑戦が、定法つてもんだぜ。」

「騎士や貴族どもの名誉というのは、しごく頑丈にできておるからの。」

「その程度のことでは、びくともせんわい。」

「いや、けどよう。」

「そんな人数で、そんな卑怯なまねされたら、いくら俺たちの牛頭王でもよう。」

「まず、最初に部屋に入った八人が、焼け付く息で全滅した。」

「はあ？」

いや、意味が分かんねえ。

防御魔法とか、属性対応装備とか、当然してるよな？」

「してなかったんじゃな。

なぜじゃと思う？」

そんな攻撃があるとは、思っていなかったんじゃと。

ミノタウロスの特殊攻撃は、ハウリングだけじゃと思い込んでお  
ったんじゃよ。

じゃから、装備は物理防御特化型で、状態異常抵抗を準備してお  
ったそうじゃ。

それも、ほかのパーティーは、百階層のモンスターに対抗するた  
めに、魔法抵抗も準備しておったのに、ボス部屋に入ったパーティ  
ーだけが、魔法抵抗はなくてよい、ということになっておったらし  
い」

「ぶはあつつつ。

あ、汚してすまねえ。

いや。

いやいや。

そんなあほな。

子どもでも知ってるぜ。

われらが王の特殊スキルの数々は」

「子どもなら知つとるな。

じゃが、王宮のお偉いさんがたは、知らなかったんじゃ。

そんなこと、今さら驚くこともないじゃろ？」

「ばっはっはっはっは。

そりゃ、そうだ。

けどよ、それでも七パーティー残ってんだろう。

二人といわず、四人ぐらいで王様を押さえておいて、支援魔法掛けまくったら、さすがの王様も、どうにもならねえじゃねえか」

「いや、それがな。

押さえは出さなかつたんじゃ。

総指揮官とやらは、押さえ役を出しませず、ボス部屋のすぐ外で、次のパーティーに訓示を垂れておつたんじゃそうな」

「おいおい、おいおい。

そんなことしてたら、殺されるぜえ？」

「殺されたよ。

まず、総指揮官殿が。

それから、一番近くにいたパーティーが。  
なぜじゃと思う？」

「やつら、迷宮の王がボス部屋から出られるとは知らなかつたんじや」

「……は？」

おいおい、とつつあんよ。

ちよつとは理屈の通つた話をしようじゃねえか。

ミノ閣下が、もしもボス部屋を出られねえとしたら、どうやって十階層から百階層に行ったっていうんだよ？」

「どんなうすのろでも、まっとうな人間なら、まずそこを考えるじやろうなあ。

いと尊き方々が何をお考えなのか、わしらみたいな下々の者には、見当もつかんよ。

とにかく、わが国家の威信を背負つた自称討伐団の皆様は、ボス

がボス部屋を出るのはルール違反であるという信念のもと、命を投げ出されたのじゃな。

ここまでで、二パーティーがつぶれた。

じゃが、サザードンの王がすごいのは、ここからじゃ」

「おうおう。

その次ってやつを聞かせてくれや」

「王がどうやってその場所を知ったかは、偉大なるゴラン神のみしろしめすところじゃが、とにかく、軍団のキャンプ場所に、まっしぐらに攻め込んだのじゃ。

途中、カトンボのような攻撃をくらっても、気にも留めずにな。

まず、瞬間移動術者を殺し、次に、回復役を殺した。

次に、追ってくる英雄様ご団体を誘導して、百階層を走り回り、凶悪なモンスターと騎士団を遭遇させまくっていった。

モンスターたちは、討伐の邪魔にならないように、障壁アイテムや、匂いが出るアイテムで隔離されておった。

その隔離アイテムを、王は片っ端から壊していった。

総指揮官を失った騎士団は、状況を整理する間もなく、隔離していたモンスターたちと戦闘状態になり、分断されていった。

それを王は、順番に殺して回ったそうな。

最後が傑作なのじゃが、見届け役の伯爵様だけが、無傷で残された。

夕刻になり、冒険者ギルド長が、お抱えの瞬間移動術者とスカウトと防御系魔術師に、こっそり様子を見に行くよう指示を出して、伯爵様は保護された。

半狂乱になってわめき散らす伯爵様のお世話をしながら、ギルド長のパロスは、何が起きたかを、すっかり聞き出してしもうたわけじゃ」

「す、すげえ。

すげえじゃねえか。

われらが二本角大王はよ！

それにしても、どこの師団だか知らねえが、その騎士団の情けねえことつたらねえな」

「なんじゃ、それも聞いておらんかったのか。

近衛第四騎士団じゃ。

全員な」

「なんだつてえ？

近衛騎士団？

しかも一つの近衛騎士団から、そんな人数を出したつてえのか？  
それじゃあ、近衛第四騎士団は、壊滅じゃねえか？」

「第二王子の、というよりリガ公爵の権威を高めるため、というのは、誰が見ても明らかじゃったな。

近衛から討伐隊を出すのなら、各騎士団から選抜するべきだ、という意見は、当然あった。

それを、最精鋭で連携も高いという理由で、無理押ししての結果がこれじゃ。

リガ公爵は、大いに面目を失った。

近衛第四騎士団のメンバーというのは、つまるところ、リガ公爵派の貴族の次男や三男じゃからな。

派閥の中に、不満や恨みも残るのう。

どうせ誰かに責任を押しつけて、立場を守るじゃろうが、この出来事の真相は、国中が知ることになる」

「うんうん。

俺も、知らせる手伝いをするぜ」

「くつくつく。」

せいぜい広めてくれ。

まあ、もうパロスのやつが、さんざん種まきしてるじゃろつがな」

「なあ、とつつあん」

「うむ、何じゃな？」

「冗談で、サザードン迷宮の王、なんて呼んでるけどよう、あのバケモンさあ」

「うむ」

「確かにバケモンには違えねえけど、偉えバケモンだよなあ」

「その通りじゃ」

「十階層に生まれて、どうやったか知らねえが、ボス部屋を出られるようになって。」

手強え敵をどんどん倒して強くなり、今までミノタウロスが身につけたことのねえ、すげえ技を習い覚えていってよう」

「確かにそうじゃ」

「だんだん下に降りながら、各階層のボスに闘いを挑んで。」

最後にや、メタルドラゴンを殺して、百階層のボスに収まっちゃまった。

そんだけ強えのに、自分からは、決して人間を襲わねえ。

突っかかってくる冒険者は殺すけどよ、逃げ出したら、手出しは

しねえ」

「自分より弱い者は、相手にせん。大したものじゃ。」

あのミノタウロス閣下はの。

殺したいのじゃない。

闘いたいのじゃ。

武人として闘いたいのじゃ」

「それよ！

その武人てやつよ。

それに大商人でもあらあな」

「大商人じゃとな？」

「おうよ。

俺の商売の師匠が、よく言ってたのよ。

しつかり苦勞できるやつは、やがて大きな商いができるようになるってな。

牛角の大将はよう。

自分から苦勞をしいこんで、見事におつきくなりやがったのよ」

「なるほどのう。

あの怪物は、商売する者のお手本か」

「そうよ！

どえねえお宝をため込んでるに違えねえ。

お大尽様ってわけよ。

よう、とつつあん」

「何じゃ？」

「飲みにいこうぜ」

「ちよつと早すぎるが、まあええか」

「おうよ。」

われらが魔獣王の勝利に、乾杯だあつ」

「いや、それは、ちとまずいじゃろ」

「じゃあよ。」

わが王の栄光に乾杯だつ。

どの王とは言わねえけどよ」

「はっはっは。」

のう、トルモン」

「なんでえ」

「いつか、英雄が現れて、サザードンのミノタウロスを倒すじゃろうな」

「一人でかい？」

そりゃ、いくら何でも無理つてもんだ」

「無理なんてことはないんだと、ほかならぬミノタウロス殿が、教えてくださったじゃないか。」

いつか、たった一人で、正面から、正々堂々、あの迷宮の王を倒す人間が出る。

案外、王は、その日を楽しみにしてるんじゃないかのう」

「店长、すいません。

お客様が、恩龍の付いた片手剣をお求めなんですけど、ちょっと出ていただけませんか」

「わかった。

トルモン、すまんが、しばらく待ってくれ」

あいよ、と答えた行商人トルモンは、椅子を三つ並べて、「ごろんと横になった。

サザードン迷宮の周辺は、繁栄の時を迎えていた。

上級冒険者が集まり、それに引かれて中級冒険者が集まる。

腕利きの職人が、商人が集まり、最高級の物資が集まる。

それは、初級冒険者たちにも恩恵をもたらす。

それら幅広いレベルの膨大な数の冒険者たちを受け入れる容量を、サザードン迷宮は持っていた。

迷宮からもたらされるアイテムは、その質も量も、他の迷宮を圧倒していった。

冒険者から物を買う店や、それを買って加工する店。

冒険者に物を売る店。

食事や宿泊や、その他のサービスを提供する店。

ここの冒険者ギルドは、仕事の斡旋も、各種のサポートも、実に

しつかりしている。

冒険始めにここを選ぶ新米冒険者も多い。

よそから来て、ここに住み着く冒険者も多い。

彼らの最終目標は、迷宮の王の撃破だ。

それは、現代において英雄になることを意味する。

しかし、それは、遠い未来のことになるだろう。

だから、当分は、旅の空で、ほかのどこにもいない強大で誇り高いユニークモンスターのことを話題にして、お国自慢をすることができる。

そういえば、最近、ミケーヌの町では、ぼろぼろの服を着て腹を減らしてうるつく子どもを、見なくなった。

「これも、われらが王の御徳の賜物つてえものに違えねえな」

うつらうつらと、まどろみながら、トルモンは独りごちた。

第12話 武器屋にて（後書き）

日別ランキング1位をいただきました。

ご愛読、応援くださり、ありがとうございます。

## 最終話 約束の日

人間が、近づいて来る。

間違いなく、この部屋に向かっている。

ずいぶん久しぶりだ。

だが、待った甲斐があった。

これは、とても強い人間だ。

そうミノタウロスは思い、愛剣を手に、立ち上がった。

メタルドラゴンを五十回目に倒したとき、ドロップした剣である。

黒く、肉厚で、極めて長大な剣で、先端部に向けてやや幅広とな

っている。

片刃であるが、切っ先のほうでは両刃となっている。

手に入れた武器の中で五指に入る恩寵を備えているが、何より、

その長さや重さと、両手に余る握りが気に入っている。

一見無骨でありながら、刀身の隅々までが使い手の意志をくみ取ってくれる。

無心に振るうとき、この剣はミノタウロスと一体となってくれた。

刃には鋭さが欠けているが、しかるべき技をもって振るえば、恐るべき切れ味を見せる。

この剣を手に、何度も何度もメタルドラゴンを倒し、剣技の工夫を重ねた。

部屋に入って来た人間は、たった二人であった。

「異形の戦士よ、お久しぶりです。といつても、ご記憶にはないかもしれませぬね。

十七年前、この迷宮の一階層で、私はあなたとお会いしました。あなたは私に、腕輪をくださいました。

その腕輪のおかげで、私はお仕えすべき御方に巡り会うことができました。

母の病気を治すことができ、幸せな最期を迎えてもらうことができました。

お礼を言います。

ありがとうございます」

ミノタウロスには、人語を解することはできない。

だが、この儀式のようなものが終わったら、こいつは、最高の闘気を放ってくる。

そう知っていたミノタウロスは、騎士の言葉が終わるのを、静かに待った。

「このたび、王命により、あなたを討伐いたします。

あのときお借りしたものを、今日、私の武をもってお返ししたいと思います。

お受け取りください。

後ろの人は、見届け人です。

闘いには、参加しません」

黒い目と黒い髪を持つ騎士は、白銀に輝く剣を抜いて一步を踏み出し、後ろの男は、入り口近くにとどまった。

ミノタウロスは、自分の相手は、目の前の男だけであると理解した。

そして、鬪いが始まった。

互いに剣を手にして相対したとき、ミノタウロスは、目の前の若者が、いよいよ格別の強者であると知った。間違いなく、これまでで鬪った、最高の剣士である。

ともに近寄って、お互いの間合いに入る瞬間、ミノタウロスは、様子見の攻撃を仕掛けるつもりだった。

その先を押さえ、騎士が、すっと攻撃を放ってくる。

うまいな。

と、こちらの呼吸を盗んだ間の取り方に感心した。

騎士は、長く美しい白剣を両手で持ち、右下から左上に切り上げる斬撃を繰り出してきた。

ミノタウロスの側からいえば、左下から胴を払う太刀筋である。

ミノタウロスは、両手で構えた剣を、右下からかちあげて、騎士の攻撃を、はじこうとした。

だが、おのれの黒剣と騎士の白剣が触れ合う寸前。

ミノタウロスの背中を悪寒が走り抜けた。

尋常の気迫では、この剣は受けられない。

そう直感したミノタウロスは、剣と両腕に気を込めた。

何気なく騎士が放ったかみえた、風さえまとわぬその一太刀は、

考えられないほどの重さをもって、ミノタウロスの剛剣を噛んだ。  
だが、その重さは一瞬で消える。

騎士は、ミノタウロスの防御の反動を利用して、そのまま剣を跳ね上げ、ゆるやかな曲線を描いて、ミノタウロスの首を刈りにきたのである。

まるで初めから予定されていたかのような、自然で無駄のない剣の動きである。

なんたる手練れか！

このとき、ミノタウロスは、おのれの腰から熱い奔流が吹き出し、背骨を通り抜けて、頭の中ではじけ回るような感覚を覚えた。

こいつだ。

こいつだ。

こいつと闘うために、俺は生きてきたんだ。

こいつを殺すために、俺は強くなったんだ。

左首筋に飛び込みかけた騎士の剣を、黒剣で、強引に下からたたき上げた。

騎士がミノタウロスの首を狙える位置に踏み込んだということは、ミノタウロスが騎士の全身を間合いにとらえている、ということでもある。

ミノタウロスは、手首を返して、左下から突き込み、すりあげるように、騎士の右脇に攻撃を入れようとした。

騎士は深く踏み込みすぎており、ここは、傷を浅くする方向に飛びすぎるしかない。

ところが、騎士は、まったく逃げようとせず、先ほどはじかれた

勢いすら、おのれの剣速の足しとして、空中で剣をくるりと回し、ミノタウロスの右首筋を刈りにきた。

ミノタウロスは、左手を剣の握りから放し、右手の肘を曲げると、剣のつかで騎士の刀身をはじいた。

軌道の変わった剣を、首をひねってかわす。

騎士の斬撃は、右角を半ばから斬り飛ばすにとどまった。

ミノタウロスは、驚いた。

こいつ、今、自分の身を守ることなど何も考えず、平気でこちらの首を取りにきた。

なんとというやつだ。

なんとという戦闘狂だ。

騎士の剣が一瞬泳いだため、ミノタウロスが攻める余地が生まれた。

つかで相手の剣を弾いた反動を用い、下から上にと剣を走らせる。その勢いを殺さず、すつと左手を添え戻し、剣尖に時計回りの円を描かせた。

美しい真円である。

ミノタウロスは、細剣使いとの死闘以来、剣が描く美しい円を、何度も何度も思い出した。

あのような円を、俺も剣に描かせてみたい。

そう思い、修練を積んだ。

平面の円。

立体の円。

水平の円。

垂直の円。

剣先で描く円。

刀身全体で描く円。

巻き込む円。

はじき飛ばす円。

そして、つかみ取っていった。

円の美しさ。強さ。揺るぎなさを。

今、放つのは、修行によって紡ぎ上げた、最強の攻撃である。

騎士の頭上をよぎった円は、間もなく騎士の腹に吸い込まれる。

たとえこの騎士が、万全の構えで応じたとしても、受け止めもそれらもできないほどの威力である。

まして、腕も伸びきり、剣の勢いも失っているこの態勢で、防御は不可能である。

逃げたとしても、腹か腰か、少なくとも足は刈り取れる。

闘いの終わりを半ば確信しながら、ミノタウロスが見たものは、剣を引き戻しつつ、半歩後ろに下がろうとする騎士の動きであった。

騎士は、確然たる軌道をもって迫る、死そのものである黒剣を、はじきも、受け止めもせず、

同じ円を描いた。

それぞれの舞いを舞っていた二ひらの刀身は、ごく自然に、まるで出会いを約束された運命の恋人のようにぴたりと寄り添い、合わさったまま虚空に円弧を描いた。

ミノタウロスは、おのれの剣の軌道を維持しようとしたが、余分な速度を与えられた切っ先は、描くべき軌道を飛び出して空を切った。

騎士の剣先は、本来黒剣が取るべき軌道をなぞると、そのまま使  
い手の元に引き戻された。

両者は、同時に身を引き、氣息を調える。

わずか二呼吸のあいだの、この攻防は、その一合一合が、ミノタ  
ウロスに、しびれるほどの快感を与えた。

一撃一撃、その興奮は高まり、心臓が止まるかと思うほどの恍惚  
感が体を満たした。

同時に、ミノタウロスは、今のやりとりの中で相手の弱点が見え  
た、と思った。

それは、剣である。

騎士の白剣は、それなりの業物ではあるが、この黒剣に秘められ  
た力を解放すれば、あの剣は折れ、あるいは砕けるだろう。

単なる技術では、この人間は倒せない。

一撃に俺のすべてを込め、最大の破壊力をもって打ち掛かること  
が、俺の勝利だ。

そして、攻撃力倍加、筋力強化、ダメージ軽減防止、クリティカ  
ル発生率倍加のスキルを発動させた。

こちらがスキルを発動させているあいだに、騎士のほうでも何か  
スキルを発動させていた。

いい勘をしている。

やつも、ありったけの攻撃力を、剣に込めているのだろう。

だが、剣と剣を打ち合わせたとき、白剣は折れ、お前は死ぬ。

ミノタウロスは、大きく息を吸い込みつつ、頭上に高々と黒剣を  
構え、最後の一絞りまで気を込め尽くすと、大上段から、渾身の一

撃を打ち込んだ。

騎士も、真っ向から、これに応じる。

黒と白と、二つの剣が、初めて正面から激突した。

瞬間。

すさまじい音を立てて、火花を放ち、二本の剣は碎け散った。

白剣は、薄く青みがかった銀のかげらとなり、黒剣は、赤紫のかげらとなって、ほの暗い洞窟の中で、煌めきながら、花火のように降りそそいだ。

うつくしい。

と異形の怪物は思った。

それは、地の底に生まれ地の底に死ぬこのけだものが、生涯にただ一度見た満天の星であったといつてよい。

武器破壊。

もちろん、このスキルは知っている。

ミノタウロス自身も使うことができる。

しかし、この黒剣を打ち碎くほどに練り込むとは。

それ以外の応じ方をしていたら、騎士は致命的なダメージを受けていたはずなのである。

さて、ここは、両者いったん引いて、特殊インベントリから新しい剣を出す場面であるが、騎士は、予想できない行動にでた。

なんと、素手のまま、両手を大きく広げて、つかみかかってきたのである。

ほんの少しとまどいながら、ミノタウロスも、これに合わせた。

右手は左手と、左手は右手と、組み合わせられ、指は相手の指を固く締め付ける。

騎士も、人としては大柄であるが、ミノタウロスは、頭一つ分以上高い。

上から押しつぶすようにのしかかろうとした。

が、つぶれない。

騎士の腕力は、ミノタウロスの膂力と拮抗し、少しも押されるところがない。

驚くべきことである。

騎士は、小手を付けた指で、こちらの指を巧妙に締め付け、さらに、こちらの筋肉がじゅうぶんな力を出せない方向に、力の向きを誘導している。

つまり、これは、見た目どおりの単なる力比べではない。

技による攻めなのである。

そうと分かってても、人間ふぜいに力比べを挑まれているという事実、暴力の化身である魔獣は、怒らずにはいられない。

ふざけるな。

小手先の技で、俺の力を受けられるつもりか。

ミノタウロスは、小さく息を吸い、一気に力を込めて、のしかかった

しかし、これこそ、騎士の待ち望んだ瞬間であった。

そのタイミングに合わせて、騎士は体をひねり、腰に乗せて、ミノタウロスの巨体を投げ飛ばしたのである。

ミノタウロスには、まるで、自分の力で自分が飛び出していくよ

うに感じられた。

騎士は、地面にたたきつけられたミノタウロスの右手首を右手でつかみ、ぐるっと背中側に回すと、右膝で背中を押さえつつ、左腕を、ミノタウロスの首に巻き付けた。

そのまま、ぐいぐいと首をひねりあげる。

まずい。

このままでは、殺される。

ミノタウロスは、地面に押さえつけられたまま、ばたばたと足を動かそうとしたが、うまく動かない。

後ろ手からみ取られた右手が、どうにも全身の動きを妨げる。

左手で騎士の左手をつかみ、首から引き離そうとするが、できない。

騎士は、人間とは思えない金剛力を発揮していた。

その腕は、青銅のように硬く、ミノタウロスの強い指が食い込むことを許さなかった。

しまった。

これも何かの技だったか。

俺が、剣に込めるスキルだけをいくつも準備していた、あの時間に、あの一息を吸い込むだけの時間に、こいつは、次々につなげて使うスキルを準備していたのか。

ミノタウロスは、何とか堪えようとするが、騎士の筋肉は異様にふくれ上がり、怪物の抵抗を押しつぶす。

やがて、ばきつと鈍い音が響いた。

やられた。

首の骨を、折られた。

ミノタウロスの全身から、力が失われた。まだかろうじて生きているし、少し時間を得られれば、再生スキルにより、負傷を修復することができよう。

だが、この騎士が、その時間を与えることはない。すぐに、首が切り落とされるだろう。

闘いは、すべて終わった。

悔いは、ない。

この人間は、身体の力と、剣の技と、素手の戦技のすべてにおいて、武人としての極みを見せてくれた。

こんな闘いを味わえる日が来るとは。

言葉を知らぬミノタウロスには、自らに加護を与えた神の名も、その約束の文言の意味も分からない。

だが、あのととき、二度目の命をくれた、あの存在は、自分の願いを、まさに今かなえてくれたのだと、その全身で理解していた。

感極まったミノタウロスは、低く長いうなり声を洩らした。

それは、ミノタウロスが、命の終わりに、大地神ポーラに捧げた感謝の祈りというべきかもしれない。

魔獣の首の骨の折れる音が聞こえたとき、騎士は、賭に勝ったことを知った。

討伐の命を受けてから、準備をしてきた。

冒険者ギルド長に協力を要請し、このミノタウロスの来歴や技能について、徹底的に調査し、研究した。

また、ミノタウロス一般について、体の構造や特性を研究した。その結果、選び取った戦法が、格闘技だった。

ミノタウロスの骨格、筋肉、関節などは、驚くほど人間に近い。普通のモンスターには通用しない関節技などが、有効である可能性が高い。

しかも、そうした攻撃を、このミノタウロスは、ほとんど経験したことがないと思われる。

このミノタウロスは、剣技に熟達している。

剣技だけならば、必ずしも遅れは取るまいが、肉体の強靱さは信じがたいほどで、いったいどれだけのダメージを与えれば倒せるのか、見当もつかない。

一人でメタルドラゴンと一昼夜以上戦い続ける体力も持っている。

剣と剣の戦いでは、倒せる道が見えず、持久戦となれば、明らかに分が悪い。

相手の武器を破壊し、肉弾戦に持ち込み、関節技に相手に対応できないうちに、首の骨を折るのがよい。

ミノタウロスに素手で挑むという、一見愚劣極まりない方法にこそ、騎士は活路を見た。

ひそかに武闘僧を招いて格闘技の教えを受け、ごく短い時間なら飛躍的に筋力を増大させる技なども教わった。

もともと持っていた武器破壊の特殊スキルを磨いた。

今、確かに首の骨を折った。

まだ、完全に死んではいないが、瀕死といってよい。

ここで首を落とせば、このミノタウロスは死ぬ。

騎士が、特殊インベントリから予備の剣を出そうとした、そのときである。

脇腹に鋭い痛みが走った。

見届け役の貴人が、騎士の鎧のすき間から、短刀を突き刺している。

刺し傷だけではあり得ない痛みと悪寒が、毒塗りの短刀であったことを教えた。

「エバート様。

……なぜ？」

そのとき、ミノタウロスの全身がけいれんした。

再生スキルにより、ダメージの修復が始まったためである。

びくりと動いた手が、見届け人の足に当たった。

短刀を抜き取って、騎士から身を離そうとしていた見届け人は、不意を突かれた。

武芸の心得があるわけでもないその男は、体勢を崩し、顔面から岩場に倒れ伏した。

ずるずると起き上がる、その胸には、毒塗りの短刀が突き立っている。

「パンゼル殿。

すまんな」

自分ももう助からないと覚悟を決めたからか、信頼を寄せる相手を裏切ったことへの贖罪なのか、膝を突いたまま、逃げようともしない。

「すべては罫であったのだ。

はじめから、すべて。

かのミノタウロスに勝てば、王国守護騎士に任ずるという約束、そのものが」

「勝てる見込みがないと思われていることは、承知しております」

「それでも貴公は、この討伐を受けた。受ける以外になかった。

王国守護騎士に任じられれば、苦境のあるじを支える発言力が得られるからの。

王直々の命であるからには断りようもないが、汝がその気にならねば、なんじのあるじが承服せなんだ」

「私が死ねば、それでよし。

万一勝てば、毒の短剣で勝利を敗北に変ずるため、見届け人と立たれたか。

エバート様。

まさか、あなた様が、リガ公の走狗となられようとは」

「パンゼル殿。

なんじは正しすぎる。

なんじの主君も、正しすぎる。

なるほど、大貴族たちの専横は、このままでよいとはいえぬ。しかし、急な肅正は、弱った体に劇薬を用いるようなもの。今のわが国は、豊かすぎる。大きすぎる。

それは、ふくれ上がりすぎた体躯のようなもの。無理に痩せさせては、体がもたぬ。

かりに壮健な体になりおおせたとして、そのあと、何とする。急激な王権の強化は、他国の警戒を呼ばずにはおかぬ」

苦しげに顔をゆがめて、男は言葉を続けた。

「今ごろ、貴公のあるじの屋敷に、リガ公の兵が向かっておろう」

「存じております。」

しかし、戦にはなりません。なっただとしても、負けません。

わがあるじの元には、すでに族兵が集いおります。

われらは、数においてリガ公爵様の家兵に互し、鋭気において勝ります。

それは、あなた様こそ、よくご存じのはず」

「存じておるよ。」

メルクリウスの智勇は。

知らぬのはなんじよ。

なんじは、メルクリウスの智を知って、勇を知らぬ

今のメルクリウスには、勇が欠けておる」

「わがあるじは、過ぐる南蛮諸族の侵攻において、大いに武勲を上げられました。」

また、ツェン家の反乱に際しては、いち早く廟に駆けつけ、歴代

聖上の墓所を守り抜かれました。

さらに、街道に盤踞する賊兵らを、御みずから寡兵を率いて、撃破しておられます。

これをごらんになっても、勇なしと仰せですか」

「メルクリウスに勇はある。

それは、なんじよ。

傍らになんじがあれば、かの若き当主は、いかなる苦境にあっても、比類なき勇を示す。

しかして、なんじを失えば、メルクリウスは、勇を失う。

勇を失えば、守れても勝てぬ。

しばらくは、先の家宰殿が病床から起き上がって、指揮を執ろう。しかし、長くは続かぬ。

家宰殿の気根が尽きるとき、戦は終わる。

ご当主の命は救えぬ。

が、家は残される。

なんじのあるじが死ねば、第一王子もご自裁なさるほかない。

陛下はご退位なさり、第二王子が登極あそばす。

パンゼル殿。

わがしかばねに唾するがよい。

すまぬ」

そう言い残して、男は死に、その体は消え失せた。

パンゼルは、男の遺品の前にひざまずき、黙禱を捧げた。

畏であるとするれば、約束された迎えは来ない。

見届け人が死んだ今となっては、なおさらである。

かりに来たとしても、こちらの望む場所に連れて行ってくれることはない。

外に出たければ、おのれの足で、百の階層を駆け抜けるよりない。

凶悪な魔獣たちが徘徊する、道も知らぬ迷宮の中を。

パンゼルには、予備の武器はあっても、回復アイテムの類はない。水はあるが、食べ物はない。

今回の討伐の条件が、そうなっていたからである。

毒の作用は、パンゼルのステータスの高さに押さえられてはいるが、遠からず命を奪うであろう。

たとえ毒を受けていなかったとしても、食べ物なしでは体力が続かない。

途中で冒険者に出遭うことができれば、ポーションや食料を借り受けることもできる。

しかし、今は、豊穰祭の最中である。

迷宮内で人に遭える希望はない、と行ってよい。

とうてい、出口にたどり着けるものではない。

まして、戦いに間に合うことは、望むべくもない。

それでも、パンゼルにとり、これからどうすべきかは明らかであった。

「異形の戦士よ。

あなたに、おわびしなければなりません。

私には、やらねばならないことができました。

いつか決着をつけに、帰って来ます」

ミノタウロスは、目の前の人間に、自分が負けたことを知っていた。

邪魔がなければ、この人間は、自分の首を切り落としていたはずなのである。

勝者には、報酬が与えられねばならぬ。

ミノタウロスは、起き上がり、収納袋から、この人間に与え得る最高の報酬を取り出した。

一本は片手剣。

一本は短剣。

それを人間の前に置いた。

パンゼルは、しばしの逡巡のあと、二振りの剣を受け取った。

もしも、パンゼルが鑑定技能を持っていたら、この二振りの性能に驚愕したであろう。

片手剣は、ミノタウロスが、百体目のメタルドラゴンを倒したときにドロップしたものであり、ボーラの剣という銘を持ち、

攻撃力 + 200%

クリティカル発生 + 20%

移動速度 + 80%

攻撃速度 + 80%

HP 吸収 10%

SP 連続回復 20%

全ステータス + 60%

破損自動修復

というすさまじい恩寵が込められていた。

まさに神器と呼ぶべき宝剣である。

また、短剣は、カルダンの短剣という銘を持ち、

状態異常全解除

解毒

聖属性付加

知力+200

階層内地図自動取得

という性能を持つ、これも最上級の恩寵品であった。

騎士は、片手剣を右手に、短剣を左手に持つと、ミノタウロスに一礼して、部屋を出て行った。

それから、二十八年が過ぎた。

ミノタウロスの元を訪れる人間は、一時、急に増えたが、やがて減った。

今、新たな挑戦者が、ミノタウロスの前に立っている。

黒い目と黒い髪をした青年騎士である。

右手には、二十八年前、ミノタウロスが、自分に勝った男に与えた剣を持っている。

左手には、上質の盾が構えられている。

こちら側からは見えないが、ミノタウロスの探知スキルは、盾の裏に、やはり覚えのある短剣が差し込まれ、左手に、むかし見た腕輪が装着されていることを教えた。

指輪にも、首の護符にも、格別の恩寵を感じる。

何より、この騎士は、すばらしい技と心気を持ち主である。

ミノタウロスの全身は、激しい闘いの予感に打ち震えた。

(第1部 完)

**最終話 約束の日（後書き）**

お読みくださった皆様に、厚く御礼申し上げます。

## 第1話 ガーラの娘

1

「目、覚めたか」

白く濁る意識の中に、妙にはつきりと、声が響く。

おなごの声だ。

と、少年は思った。

ぱちぱちと、たき火がはじけている。  
どこかの小屋の中である。

ああ、いつの間にか、私は、目を開けていたのだな。  
何か、とても懐かしい夢を見ていたような気がする。

少年は、再び夢の中に落ちた。

2

「お前、運、いい。」

雪の中、倒れれば、死ぬ」

行き倒れになり、すぐにも凍死するところを、この少女に見つけられ、助けられたのである。

山の天気が変わりやすいことは、十二分に心得ていたつもりであった。

まして、死の山と呼ばれるこのガーラ大山脈を侮るわけもない。が、春の若芽がすすくと伸びているこの季節に、まだ麓ふもとに近いこんな場所が急に吹雪で覆われるとは、さすがに予想を超えていた。

少年は、臥所ふしどから体を起こし、少女がよそつてくれたスープを食べていた。

塩の効いた干し肉。

じつくりと煮崩した木の根。

芋。

食べた物が体にしみ込んでいくのが、よく分かった。

「おいしかったです。

ありがとうございます」

椀を置き、少女のほうを向いて、感謝を示す。

少女は、にこりともせずうなずき、少年の使った椀と自分の使った椀を、桶に汲んだ雪で洗った。

「名、あるのか」

少女に聞かれて、少年は、

「ガーラ」

と名乗った。

無表情だった少女が、驚いたような目で少年を見つめ、それから、大きな笑い声を上げた。

「あはははははははっ。

その名前、吹雪引き寄せた、よく分かる」

きよとんとしている少年に、少女は、

「ザーラ、ポーラ、ガーラの伝え、知らないか」

と聞いてきた。

知らない、と答えると、少女は、一つの神話を教えてくれた。

### 3

ザーラという名の男神がいた。

ポーラとガーラは、その妹神である。

三柱の神は、それはそれは仲がよかった。

長いあいだ、地の平和を守り、人々に恩恵を与え、暮らしていた。

あるとき、ポーラがザーラに求婚し、二人は結ばれた。

二人の間には、娘が生まれた。

だが、ポーラは、気付いた。

ガーラもザーラに求婚したかったのだと。  
ポーラは、娘を連れて、どこかに去った。

ガーラは、自分だけが幸せになることはできないと思い、身を隠した。

二人の妹とわが子を失ったザーラは、悲しんだ。

ザーラは、天を吹く風となって、二人の妹とわが子を探す旅に出た。

神々が去り、恩恵は失われ、人々は苦難の時代を迎えた。  
人々は、神々を探した。

ポーラは、地を裂いて、その底に住んでいた。

ガーラは、土を盛り上げて山を造り、そこに隠れていた。  
ザーラの行方は、分からなかった。

平地の民はポーラを祭り、山の民はガーラを祭った。  
ザーラを祭る民は、いなかった。

ポーラは大地に、ガーラは山に、豊穰をもたらす。

けれども、ポーラもガーラも、ザーラと離れてしまったことを、  
今でも嘆き悲しんでいる。

ゆえに、神に近づけば、人は死ぬ。

ザーラと名乗った少年にとり、これは初めて聞く伝説であった。ポーラ神のことは無論知っているが、ザーラ、ガーラという二柱の神のことは、聞いたことがない。

ガーラという山脈の名の由来は、そういうことであったのか、と思った。

自分自身の名がザーラであるという偶然は、何やらくすぐったく感じた。

ザーラという名は、冒険者としての自分に、自分で付けた名なのである。

神話や伝説とは関係なく、本名のアルスをもじったものにすぎない。

改名の手続きは踏んでいるといえなくもないので、ザーラが偽名というわけではないが。

「あなたの名は？」

と少年は聞いた。

それに対する少女の答えは、まだ名はなく、ゲリエの娘と呼ばれている、というものであった。

ゲリエというのは、父の名であるという。

その返答により、少女がゾルゾガの民であることが、はっきりした。

噂など、当てにならないものだな。

と、少年は思った。

平地の民が知るゾルゾガの民は、人というより半獣である。

全身を剛毛に覆われ、人の言葉は、片言かたことしか話せない。

山に住み、平地に降りることはない。

けもののように考え、けもののように生活する。

山のことに詳しく、貴重なけもの、薬草、鉱物などを、平地の物品と交換してくれる。

親が子に名を付けるのではなく、名が必要になったら、自分で自分に名を付ける。

だが、どう見ても、目の前の少女は、けものようではない。

なるほど、けものの皮で作った服を着ているし、化粧もしていない。

髪は無造作に短く切り詰められている。

顔も手足も、汗とほこりで汚れている。

それでも、

このおなごはうつくしい、と少年は思った。

立ち振る舞いは、躍動的で、しなやかである。

言葉は確かに片言であるが、単語の選び方や話のしぶりには、確かな知性と、清明で快活な精神が感じられる。

何といつても、声と目。

力むわけでもないその声は、凜と響いて、耳にまっすぐ飛び込んでくる。

目と目を見つめ合わせれば、驕りも怯みもないまなざしに、胸が射抜かれる思いがする。

傍らを見れば、少年の剣と荷物袋が置いてある。

あの吹雪の中、少年の体を運ぶだけでも大変だったはずである。

剣にも荷物袋にも、所有印が刻印してある。

であるから、少女のインベントリに入れることはできない。

剣と荷物袋が、このおなごの心根を知っている。

と、少年は思った。

少年は、少女に、ここに一人で住んでいるのか、と訊いた。

少女は、父が三か月前に死に、集落にいられなくなったので、父の持ち小屋であったここに、一人で住むようになったのだ、と答えた。

少女の母は、平地の人間であったということで、平地の言葉は、母に教わったのだという。

母親という人のことを訊こうと口を開きかけて、少年は、外の気配に気付いた。

5

少年が、何物かの気配を感じ、剣に手を掛けたのを見て、少女は壁際に走り寄った。

つかい棒をぐっと押して、光採りの窓を大きく開き、外の様子を見る。

二日間吹き荒れた雪は、すでにやみ、春らしい柔らかな日差しが峰を照らしている。

じつと森のほうに目をこらす。

すぐに、何かを見つけたのである。

窓を閉めると、弓と矢筒を手取る。

そのとき、すでに少年は、足袋を履き、出口を出るところだった。

「だめ！」

少女が鋭く叫ぶが、少年は、そのまま飛び出していく。ちょうど、一匹のモンスターが森から出てきたところである。

エツテナである。

スノー・オーガとも呼ばれる、標高の高い雪山にのみ生息する魔獣で、人の匂いを嗅ぎつければ凶暴化し、襲ってくる。

長く白い体毛で顔も体も覆われており、特殊なスキルは持たないが、とにかく力が強く、また、物理、魔法いずれにも打たれ強い。

人型のモンスターで、普段は二足歩行をする。

身長は、人間の倍以上あり、腕が非常に長く、太い。

モンスターレベルは50前後とされているが、雪山でエツテナと戦うときは、Aクラス冒険者がパーティーを組むのが普通である。

距離は、およそ百歩。

吹雪はやんでいるが、積もった雪は、まともな歩行を許さない。にもかかわらず、少年は、すばやく雪の上を走り抜けていく。

戸口にたどりついて、少年の行方を目で追った少女は、驚きに目を見張った。

雪は、さほどの深さではないが、新雪は足にからみつくものである。

その新雪の上をあのような速度で走ることが、山の民にもできない。

少年は、エツテナの間合いに入っても、すぐには攻撃を仕掛けなかった。

エツテナが、右の腕を、ぶうん、と振り回す。  
まともには当たれば、Aクラス冒険者の前衛であっても、大げがをし、あるいは死にかなない威力である。

少年は、身をかがめて攻撃をかわす。

怪物は、次に、左手の攻撃を放ってきた。

今度は、上から下にたたきつけるような攻撃である。

少年は、襲いかかってくる手と爪と、エツテナの体全体の動きを見極めながら、攻撃が当たる寸前で、すつと左に身をかわした。

空振りした攻撃が、大きく雪をはじき飛ばす。

怪物は、空振りした手を地に付けたまま、その左手で地を引き寄せて体躯をぐつと前に運び、右手を斜め上から振り下ろしてきた。

遠くから見れば愛嬌のあるその顔は、至近から見ると、憎悪と怒りをたたえて醜く歪み、胆力のある冒険者といえど、恐怖心を抱かずにはいられない。

しかし、少年は、

平地の者はスノー・オーガと呼ぶが、角も生えておらぬし、顔の作りも、ずいぶん違う。

別種のモンスターではないのか。

などと考えていた。

怪物の重心が左腕に乗り切ったとき、腰を落とすにつつ、右手で剣を抜いた。

体重を乗せていた腕が切り落とされ、エツテナの態勢が崩れる。

少年は、右前方に飛び上がりざま、怪物の首を一刀のもとに切り落とした。

赤い血を首と左腕から吹き出しながら、怪物が白い雪の上に倒れる。

その向こう側に、少年が着地する。  
返り血も浴びず。

少女は、弓と矢筒を持ったまま、小屋の出入り口に立ち尽くして、  
あぜんとして、この光景を見ていた。

少年は、倒れ伏した怪物を油断なく見つめながら、

私の体と心は、こわばってはいなかったらうか。  
いつもどおりに動けていたらうか。

と、自分自身の闘いを振り返っていた。

6

「お前な、旅に出ろ」

「剣を磨くためですか」

「それもある。」

「剣と、体と、心を鍛えるためだ」

「このまま迷宮に潜ったのでは、強くなれませんか」

「逆だ。」

「強くなりすぎる。」

「今でも強すぎるぐらいだ。」

十四の年から迷宮に潜らせたが、まさか二年でレベル六十五になるとはなあ。

Aクラスでとめときたかったんだが、さすがにSに上げざるを得なかったと、ドルーガのやつが言っとった」

「天剣殿てんけんは十五歳でSクラスになられた、と聞きます」

「あいつは、十二歳で冒険者になった。

足掛け四年かかった計算だ。

だけどな。

そんな話じゃないんだ。

天剣の話が出たから、ついでに言うけどな、あいつも、初めのうちは、迷宮にばかりこもってたわけじゃない。

外での冒険も、ずいぶんこなしてた。

実際、Sクラスになったのは、ゾアハルド山賊団の討伐で、圧倒的な手柄を立てたからだ」

「はい。

首領を含む幹部八人を、一人で倒されたとか」

「あんときはな、さる貴族のぼんぼんが指揮を執ってなあ。

依頼そのものも、国からの依頼だったしな。

腕はそれなりにあったらしいが、実戦経験のない騎士だったんだな、そのぼんぼん。

山賊つてのは、平地におびき出して、畏にかけて討ち取るもんなのに、力押しで山の中のアジトを攻めたんだな。

まあ、そういうやり方も、ないとは言わんがなあ。

一箇所に集めて一気に殲滅するのは悪くないし。

それにしても、偵察を放ったり、本体の位置を気取られねえよう隠密行動したり、分隊を作って包囲していくとかなあ。

いろいろ作戦でなあ、あるもんなんだ」

「よく分かります。」

そのようにしなかったのですか」

「しなかったんだ。」

日中に堂々と、全員一緒に、わいわいがやがやと進軍したそうなの

「静かにするよう、命じなかったのですか」

「命じたかもしれんが、演習気分の見習い騎士や荷物持ちのやつらじゃ、なかなか言うとおりにしませんでしたろうな。」

大人数で、細い山道を行けば、隊列も長くなるし、統制なんぞききやせん。」

第一、静かにするってなあ、ここぞというときにする命令だ。何時間も続けさせるような命令じゃない。」

まあ、それでも、アジトには着いた。」

確かに山賊たちがいる。」

それで、補助魔法を掛けてから、一斉に襲いかかろうとした、のはいいんだが」

「待ち受けられましたか」

「そうだ。」

罾を張られてた。」

あちらは、ちゃんと見張りを置いてたんだろう。役人を買収して情報を買ったのかもしれん。」

とにかく、包囲網を敷いたはずの討伐隊は、包囲網の外から攻撃を受けた。」

矢玉と魔法攻撃の嵐だ。」

この時点で、かなりの被害が出た。  
だが、いいこともあった。

指令系統が混乱して、指示統制ができなくなった」

「それは、いいことなのですか」

「いいことだとも。」

冒険者たちが、自分たちの判断で動けるようになったからな。

冒険者たちのうち、パーティー単位で参加した者は、すばやく本来のパーティーを組み、そうでない者も、少人数のグループに固まって、それぞれの判断で、攻撃を逃れ、回り込んで、包囲している山賊たちを攻撃し始めた」

「天剣殿もですか」

「いや。」

天剣は、指揮官の近くにいた。

指揮官てのが、天剣のおやしさんと知り合いだったんだな。

行軍の途中で、天剣の素性に気が付いて、おお、メルクリウス家の御曹司か、つてなこと、近くに呼んだわけだ。

まあ、会話は繁らんかったと思うがな」

「なぜでしょう」

「いや、お前。」

なぜ、つたつて。

そうか。

お前は、天剣を知らんもんなあ。

あいつは、とにかく、会話の成り立ちにくいやつだった。

たいていの相手は、うむ、いや、そうか、の三語しか聞いたこと

ないんじゃないかな。

つまらんこと話し掛けると、返事せんしな。そもそも、いつもすたすた歩いとるから、話し掛けようと思ったら、もうあっちに行つとるんだ」

「無口であられたとは聞いています。

でも、伯父御とは、よく話されたとか」

「うん。

わしが話し掛けると、不思議と相手してくれたな。

まあ、とにかく、指揮官の近くにいた。

指揮官としては、最初に一斉に魔法攻撃を加えて、それからアジトに突っ込むつもりだったんだな。

ところが、攻撃の直前、アジト全体を覆う防御魔法が発動した。

あちらは準備万端だったわけだ。

かなり強力な防御魔法だったらしく、魔法攻撃は、まったく効かなかった。

指揮官は、あんな大がかりで強い魔法はわずかな時間しかもたないから、続けて魔法攻撃をするように、と命令した。

これは、正しい。

しかも、降り注ぐ矢玉の中で、盾持ちの騎士に魔法使いを守らせながら、そう命令したというんだから、まあ、まるっきりの馬鹿ではなかったわけだな。

だが、味方は見る見る損耗していく。

そのとき、天剣が飛び出した」

「指揮官の命令なしで動かれたのですか」

「というより、指揮官の意を酌んだんだな。

とにかくアジトにいるやつらをつぶす、ってことだ。

結果にたどり着くと、アレストラの腕輪を発動させ、ずっと中に入った。

敵は驚いただろうなあ。

だが、すぐに、建物から、矢や魔法で狙われた。それを片っ端からかわした」

「魔法攻撃をかわした？」

「そうなんだ。

わしが自分で見たわけじゃないが、その場にいたやつに聞いた。天剣に言わせると、狙って撃ってきた攻撃はかわせる、だと」

「…狙って撃ってきた攻撃はかわせる」

「いや、そんな感動した顔すんな。

ここは、あきれるところだ。

やつは、アレストラの腕輪を持っているくせに、めったに使わなかった。

このときも、魔法攻撃を吸収するためには使わなかった。

天剣は、建物に飛び込むと、八人の敵を斬り伏せた。

建物の中にいたのは、八人だけだったんだな。

最精鋭の幹部たちだ。

その中に、頭目のゾアハルドもいた。

ゾアハルドってのは、Sクラス冒険者だったんだがなあ。

天剣が建物に飛び込んでから、ゾアハルドの首を剣に突き刺して出てくるまで、ほんとにあっという間だったそうさ。

頭目が討ち取られたと知って、山賊たちの大方は、抵抗をやめた」

「うっむ。

見事な武勲」

「そのときの天剣は、今のお前より、レベルは低かった。だが、お前に、同じことができるか？」

「いえ。」

私に、天剣殿ほどの技量はありません」

「技量はあるよ。」

お前は、小さいときから、当代一流の武芸者たちに教えを受けてきた。

わしも、お上品ではないが実践的な闘い方をたたき込んできた。わざまへ技前でいうなら、お前は天剣に劣らない。しかしな」

「何でしょう」

「お前は、迷宮以外での実戦を、まだ知らない」

「はい」

「外での実戦は、迷宮とは、まるで違う。」

外じゃ、ポジションは使えないんだ。

外の闘いで腕を失い、足を失えば、それはもう、二度と取り戻せない。

右腕をなくしたやつが、迷宮に入って赤ポジションを使っても、右腕は戻ってこない。

右腕のない状態が、本来の状態と見なされるからだ。

レベルアップによる体の造り替えも、外で失った手足を戻してはくれん。

迷宮の外にも薬や治癒呪文はあるが、自然治癒を速め強化する以

上のもんじゃない。

まあ、たまにとんでもない神官や僧侶もいるが、なくした手や足を戻すのは無理だ」

「よく分かっています」

「精神力もそうだ。

迷宮じゃあ、青ポーションをがぶ飲みすれば、いくらでも魔法や特殊スキルが使える。

しかし、外じゃあ、そうはいかない。

だから、精神力の減り方をうまく管理しなくちゃならんし、連戦はできない。

肉体と精神力の力が尽きたら、闘えない。

闘いの最中に尽きたら、死ぬんだ」

「はい。

その点については、よくよく心に銘じてもいるし、訓練もしてきています」

「そうだな。

だが、お前は、強くなりすぎた。

このままじゃあ、恐れを学ぶことができない」

「迷宮でも、敵は恐ろしいです。

まして、いつも一人で潜るのだから、恐れは感じます」

「だが、手強い敵でも、ポーションをがぶ飲みすれば倒せる。

どんどん倒せば、みるみるレベルが上がる。

レベルが上がると、恐ろしかった敵が簡単に倒せるようになる。

迷宮というのはな、麻薬だ。

いくらでも強い自分に進化していけるんだからなあ。  
強くなるほど、見返りもでかい。

踏み込んでいけばいくほど、そこから逃れられなくなる。

迷宮で感じる恐怖なんてのは、快感の調味料みたいなもんだ。  
怖い、痛い、苦しい。

でも、大丈夫。

頑張つてレベルを上げれば、何もかも解決する。

そう考えてしまふ。

それが体にしみついたら、もう、迷宮以外では闘えない。  
闘いたいと思わなくなる」

「私の闘いは、まさに迷宮にあります」

「そうだ。」

だが、今のお前では、あいつとは闘えん」

「私に、何が足りないのでしょうか」

「人として生きる悲しみのようなもんかな。

天剣は、それを知つてた。

お前のおやじも、それをよく知つてた。

知らずにはいられなかった」

「命のはかなさを知る、ということでしょうか？」

「そうだ。」

そう言つてもいい。

だが、今のお前に、それが分かつてると思えん。

いずれにしても、やつを倒したあとは、お前は外で戦わなくちゃ  
ならん。

視野を広く持つ必要もある。  
旅に出る。

まだ時間はある」

「伯父御がそう言われるなら、そうします。

どこに行けばよいでしょうか」

「どこでも行け。

だが、まあ、北じゃ、まずいか。

バルデモストの中じゃ、いつお前の正体が知れんとも限らん。

知れてしまえば、いろいろ面倒なことも起きるだろう。

フェンクスじゃ、なおまずい。

となると、まあ、南だな。

いろいろ回ってみろ」

「分かりました。

南に行きます。

南で闘えばよいのですね」

「そうだ。

南でいろんな闘いを経験してみる。

まあ、南でも、素性がばれたら、自由には動けなくなるかもしれないがな。

お前に本名じゃなくて、ザーラという仮の名で冒険者カードを作らせたのも、こんなときのため、ってこともある。

わしの甥っ子がギルド長で、お前の戸籍を扱うのがわしの元部下、てえことがなけりやできん裏技だったがな」

「闘って、少しでもレベルを上げればよいのですね」

「いや、上がらんと思うぞ。」

外では、そうそうレベルは上がらん。

まして、そのレベルから上となると、尋常な経験値では足りん。一年ぐらい、いろんな所で闘って、レベルが一つ上がれば、速いほうだな。

まあ、レベルのことなんか、気にしなくていい。

レベルが足りなけりゃ、ここに帰ってから上げりゃあいいんだ。いろんな闘いをしろ。

いろんな人や物に出合え。

いろんな経験をしろ。

そうしたら、この世界を知ることができる。

旅をすりゃあ、自分自身を知ることができるんだ。

いや、これは、消えちまった親友の受け受けりだな。

ああ、それから、人前では、あまりインベントリを開くな。

剣も、必要なときに出すんじゃなくて、いつも腰につけとくんだけ。インベントリに頼らず、よく使う物は荷物袋に入れて、持ち歩け。

お前の修行にもなるし、駆け出し冒険者だと思われるから、二重に都合だ」

7

「やつ、やつ、やつ」

少女が走りながら、甲高い声で、獲物を追い立てる。

三匹の赤鹿が、少年が隠れている岩陰に近づいて来る。

少年は、左手にテイリカの弓を構え、右手で矢をつがえている。

その右手には、さらに三本の矢が把持されている。

音もさせずに矢が放たれ、先頭を走る鹿の首筋に突き立つ。すかさず、二の矢、三の矢が放たれ、いずれも鹿の首を貫く。予備の一本は、使わずに済んだ。

よし。

この速射法にも、だいぶ慣れてきたな。

少年は、心の中で、自分の技に及第点を付けた。

最初に、このやり方を聞いたときには、首をかしげた。

弓術の師からは、矢は必ず一本一本矢筒から補給するよう教えられたからである。

だが、山の民の弓術は違っていた。

少女によれば、せつかく当たる姿勢になっているのに、それを崩すなどもつたいない、ということらしい。

矢は、いずれも急所を射抜いている。

少女は、鹿に近づくと、喉を山刀で掻き切った。

流れ出る血が毛皮を汚さないよう注意しながら。

三頭すべてに血抜き処理をすると、少女は、一頭の腹をさばいで、おいしそうに内蔵を食べ始めた。

これだけは、まだ、まねができない。

血抜きの次に、皮をはぎ、肉を切り分ける。

いくぶんかは、あとで燻製にするだろう。

また、いくぶんかは、しばらく生のまま取り置いて、焼いたり煮たりして食べることになる。

少女の持つ特殊インベントリは、カーゴであった。

これは、商人系のインベントリであり、かなり大きな物も入れられ、種類別の格納が可能であるうえ、何といても、生鮮食品が長持ちするという特性がある。

だが、少女の恩寵職が商人というわけではない。

少女は、狩人であった。

狩人がどうしてカーゴを持てるのか、少し不思議な気がしたが、彼女の部族では、これはごく普通のことらしい。

この鹿の皮は、いったんインベントリに入れて、あとでなめすことになる。

8

あのあと、エツテナの皮をはぎ、肉を切り分ける作業を手伝いながら、少年は、山を越えて大峡谷を抜きたい、と言った。

少女は、大峡谷まで案内するから、狩りを手伝ってほしい、と言った。

ふもとと違い、高所では、夏でも雪が絶えない。

季節にかかわらず、吹雪が何日も吹き荒れることがあるという。

少年は、一人でそこを越えるつもりであったが、それは修行というより自殺であると、今さらながら気付かされた。

獣の皮をはぐという作業は、少年には初めてであったが、それでも、重い四肢を持ち上げたり、体の向きを変えたり、脂肪を雪で洗い落とす作業など、それなりに役に立ったようである。

迷宮の中と違い、外では倒したモンスターが消えたりしない、とは知っていたが、モンスターの体の中が、これほど暖かいとは知らなかった。

熱い、とさえ感じる。

この皮は、売れるのか、それとも自分で使うのか、と訊くと、少女は、

「売れる。

エツテナ、珍しい。

傷ない、よい。

すごく高い、売れる。

使える。

大きい、柔らかい、暖かい。

すごくよい物。

お前倒したから、お前の物」

と答えた。

少年は、少し考えて、

「あなたに上げたいが、失礼になるだろうか？」

と問いを重ねた。

少女は、一瞬、手の動きを止め、

「男、女、大きい毛皮、贈る。

一緒、寝る、意味。

それ、言っな」

と、少し低い声で答えた。

少年にとって、まったく予想しなかった種類の答えであったので、

意味を理解するのにはしばらくかかったが、

ああ、求婚になるのか、

と気が付き、言い直した。

「では、この毛皮を預かってください。

そして、売ってください。

売ったお金は、助けてもらったお礼に、受け取ってほしい」

それに対して、少女はしばらく答えを返さなかったが、ややあって、少年のほうを見もせず、小さくうなずいた。

それから、黙々と作業を続けた。

少女は、無口で、無表情で、指図がましいことは言わない。

動作を見ながら、少年は自分で考え、少女の作業を助け、学んだ。

やり方を覚えたあとは、ナイフでの作業は、おもに少年が行った。皮をなめすことが、これほど大変なものだとは、思っていなかった。

作業が終わるころには、肩や筋や腰や、至る所の筋肉が悲鳴を上げていた。

少年の筋力レベルなら、過大な負担ではないはずであるのに、やはり余分な力が入っていたのである。

草の汁を塗り込む作業は、少女がするのを見学した。

その夜は、薬草を体に貼り付けて眠ることになった。

少女は、テイリカの弓を持っていた。

これは、弓と矢と矢筒が一体となった恩寵品で、サザードン迷宮の二十階層などでドロップする。

矢筒には、弓が十一本入っており、消費するたびに、少しの時間を置いて矢の数が十一本に戻るというレアアイテムである。

使ってしまった矢は、そのまま消えてしまう。

矢はほかの弓では使えないが、弓はほかの矢も撃てるので、組み合わせれば、攻撃のバリエーションが広がる。

弓自身からは発射音がしないようになっていた点も、便利である。迷宮のモンスターからドロップする恩寵品は、迷宮の外では役に立たない場合も多いが、ティリカの弓は違う。

迷宮以外では手に入らないアイテムであるし、まずまずのレアドロップであるから、買えば高い。

あまり平地の金を持たない山の民にとっては、大変な貴重品に違いない。

少女の父親の形見であるが、父親が死んだとき、村中の男たちが売ってほしいと頼んだらしい。

父の技を伝えるのが自分の仕事であると、少女は首を縦に振らなかったのだという。

特殊インベントリに、いくつか弓矢が入っていたな、と思い出し、少年は、ルームをオープンし、検索をかけて弓矢を調べた。

何種類かの恩寵付き弓矢とともに、ティリカの弓があったので、

「あ、私も持っていた」

と、取り出して見せた。

同じ物を持っている喜びを共有したかったのであるが、少女はなぜか表情をこわばらせ、しばらく口を利いてくれなかった。

そして、しばらくたってから、

「弓矢、使う、教える！」

と、断固とした口調で言い放ったのである。

9

弓矢の技術を始め、さまざまなことを教わりながら、少年は、少女に導かれ、女神の名を冠する山脈を上っていった。

狩りの仕方。

薬草や山菜の種類。

毛皮をなめす方法。

高山での体の慣らし方。

天気の見極め方。

雪の中での過ごし方。

少年のほうは、特殊インベントリから持ち合わせの食材を提供したり、平地風の料理を作ったりして、少女を楽しませた。

香りのよい粉をまぶした砂糖菓子を食べさせたときの反応は、傑作であった。

文字通り、表情が溶けたのである。

以来、菓子を食べるか、と少年が訊くと、少女は目をきらきらさせるようになった。

動物のようだという噂も、ある意味正鵠を射ていたかもしれぬ。

などと、本人には聞かせられぬ感想を抱いた。

少年は、少女の村のこと、家族のこと、山の民の暮らしぶりなど、折りにふれて、ぼつぼつ訊いた。

少女のほうでは、少年の立場や目的について、一切訊かなかった。

こんな山中を抜けるなど、まともな人間のすることではない。

バルデモスト王国から、南側の国々に行きたければ、ベラの道を通って、マズルーに行けばよい。

マズルーから北エルガ街道に入れば、風光明媚なドナ湖のほとりを通って、大陸南西部に行ける。

大陸南東にあるロアル教国に巡礼するなら、マズルーに南接するイエナ大公国を抜けて、南エルガ街道に入ればよい。

ベラの道は、ガーラ大山脈の西端に築かれた街道であり、大陸南北の唯一の架け橋といってよい。

真冬以外は、いつでも通れる。

バルデモストとマズルーに、それぞれ関所があり、入国には多少の税金が取られるが、両国が警備兵を巡回させているため、安全度は低くない。

また、大陸の東端に用事があってベラの道では遠回りすぎるといふのであれば、ガーラ大山脈を東に迂回して、辺境を通り抜ければよい。

道らしい道のない所も多く、モンスターや盗賊に遭う危険も高いが、ガーラ越えをするよりは速く安全である。

それでもガーラを越えたい者がいるとすれば、それは、関所を通れない者、追っ手を振り切りたい咎人らであろう。

山の民でさえ、ガーラに住む部族は多くない。

大半の部族は、高地の南側の、より気候の温暖な、ゾルゾガの民

のふところと呼ばれる山岳地帯を、移動しながら暮らしているのである。

十日ほどで、一年中雪の消えない地帯に入った。

それから、二週間ほど、雪の厳しい地帯を歩いた。

皮膚をさらさぬため、南方のガウガロという木の皮をほぐして作ったマスクで、顔全体を覆っている。

すき間から視界も利くし、風も通る便利な品だが、ちくちくするのには、なかなか慣れなかった。

多くの獣を狩った。

少女は、毛皮は二人で均等に分ける、と言い張った。

半分でも、すでに、新しい小屋を建てて、生活用具を一新して、なお余りある収穫だという。

二人は、暖を取るため、背中を合わせて寝ている。

明日は最大の難所を越えるという日、眠りにつきながら、少年は数日前のことを振り返っていた。

その日、二人は、四形鳥しけいとりのつがいを見つけた。

四形鳥は、見る角度としぐさにより四つの違った生き物に見える、ということからそう名付けられた鳥であるが、肉は寿命を延ばすといわれ、高く買い取ってもらえる。

無事に二羽とも獲ることができたのであるが、その鳴き声と血の匂いが、氷狼ひんろうを招き寄せた。

氷狼は、モンスターレベルでいえば、灰色狼と同じ程度、つまりレベル十前後である。

ダンジョンと違って、外のモンスターには成長も学習もあるので、一概にはその強さを比べられないが、それでも、少年にとっては、

何十匹いても問題にならない敵である。

実際、近づいて来る気配も察知していたし、飛びかかってきた最初の三匹は、あっさりと切り捨てた。

たまたま近くに複数の群れがいたらしく、血の匂いを嗅ぎつけて集まって来る。

四匹目の喉首に刃を走らせようとしたとき、少年の探知スキルが、近づく狼たちをとらえた。

取り囲まれるとまずいな、と思った瞬間、右腕がこわばり、斬撃は浅く狼を傷つけるにとどまった。

すかさず、左手で狼の顔の横から打撃を加え、そのあぎとから身をかわしたが、まるで何かの呪いでも掛けられたように、少年は悪寒に襲われ、思考も動作も硬直した。

それは、わずかな時間のことであり、少女の活躍もあって、狼の群れは撃退できたのであるが、あとになってみて、あれは何であったのか、と思いついていたのである。

いや。

あれが何かは、分かっている。

恐怖だ。

十四歳で初めてサザードン迷宮に入った日、少年は、十四階層に到達した。

それまで受けていた訓練は、それを余裕をもって可能にしてくれた。

帰り道に、十階層で、灰色狼の群れに襲われているパーティーを見た。

助けに駆けつけた少年は、傷ついた冒険者をかばおうとして、乱戦の中で左手の指を三本噛みちぎられた。

すぐにポーションで治療し、敵を殲滅した。  
よい勉強をしたと納得し、その日のことは、そのまま忘れたつもりであった。

それが、似た状況になって、思い出した。

一匹一匹は、どうということもない。

今の少年であれば、まともに氷狼に噛みつかれても、大したダメージは受けない。

だが、すばやい獣が大量に同時に襲ってきた場合、攻撃をすべてかわしきることは難しい。

そして、迷宮の外では、傷は蓄積し、取り返しのつかない深手にもなる。

少年には、目的がある。

果たさねばならない使命がある。

果たすまでは死ぬことができない。

手や足を失うわけにいかない。

だから、氷狼が恐ろしくなったのである。

そんな自分をどうしたらいいのか、少年には分からなかった。

10

二日前から、神域に入っているという。

神域では、決して血を流してはならないという。

できるだけモンスターに出くわさないようにし、もしも出くわし

てしまったら、おとりを置いて逃げるのだという。

おとりというのは、血抜きをした肉である。

少女は、これを大量に用意していた。

今日一日で難所を越え、そのあとは、比較的なだらかで穏やかなルートを降りて、一週間ほどで大峡谷に出られるのだというが、ここが今までと比べてそれほど難所だとは、少年には思えない。

だが、少女は、見るからに緊張した様子で、慎重に辺りをうかがいながら進んでいる。

そろそろ休憩して食事を取りたいな。

と少年が思ったとき、離れた場所から物音が聞こえた。

山では音源の位置は分かりにくい。

それでも、こちらかと思う方向に寄って斜面の下を見下ろすと、人間が氷狼に襲われていた。

よく晴れて、見通しはよい。

平地の人間かと思われる服装の人間が四人。

うち二人は小さい。

子どもであろう。

山の民と思われる服装の人間が三人。

山の民は、ガウガ口の覆面をしている。

平地の人間は、顔にぐるぐる包帯を巻き付けている。

襲っている狼は、十二匹である。

四匹が、すでに雪の上に屍をさらしている。

少年は、

人がモンスターに襲われているなら、助けねばならない、

と思っただが、ちらと見るだけで、その必要がないことが分かった。とにかく、平地の人間の一人が、圧倒的な強さである。バスターソードを軽々と振り回し、近づく狼を両断する。三人の山の民も、的確に狼を倒している。

二人の子どもをかばっている人間は、魔法使いなのであろう。時々、火弾を放って、狼を仕留めている。

真っ白な処女雪の上に、狼たちが、次々と赤い血の花を咲かせている。

「いけない。

早く、ここ、離れる」

少女が、緊迫した表情で、少年の袖を引く。ちょうど、最後の狼も倒された。

少女の促しに従おうとした、そのとき、

妙な物が現れた。

にゆるっ、と雪の中から立ち上がったのは、真っ白で、奇怪な姿をしたモンスターである。

大きな白布をすっぽりかぶった子どものような姿、といえは近いであろうか。

手も足も、目も口も鼻もあごもなく、体全体がふるふると震えている。

その奇怪なモンスターは、次々と、雪の中に現れた。全部で十体いる。

人間たちを取り囲むように、じりじりと移動していく。

三人の山の民が、何やら大声で指示を出し、都合七人の人間は、のっぺらぼうたちのいないほうに駆けていく。

モンスターのうち何体かが、雪の中に潜るように姿を消す。

一瞬置いて、同じ数のモンスターが、人間たちの逃げ道をふさぐ位置に、にゆるっと出現する。

山の民が、それぞれの武器で、のっぺらぼうに攻撃を始めた。

が、突こうが切ろうが、雪のようなものが舞うだけで、ダメージを与えているようには見えない。

バスターソードの戦士は、追いつかなくてくるのっぺらぼうに切りつけている。

こちらは豪快に、のっぺらぼうの頭の部分を斬り飛ばしたり、胴体を唐竹割にしたりしている。

しかし、のっぺらぼうたちは、しばらく動きを止めるものの、ふるふると揺れながら、すぐに復元してしまふ。

ほどなく、のっぺらぼう十体は、七人の人間を、完全に取り囲んでしまふ。

後ろ側は、切り立った崖であり、底は見えないほど深い。

そして、

十体は、同時に、真っ赤で巨大な口を開けると、人間たちに噛みついた。

見る見る、人間たちは、傷だらけになっていく。

二人の平地の人間は、何とか子どもたちを守ろうとするが、のっぺらぼうたちは、ぐいーんと体を伸ばして噛みつくため、完全な防御は難しい。

と、山の民の一人が、のっぺらぼうの赤い口に、山刀を突き込んだ。  
のっぺらぼうは、ぱりぱりと青い火花を放ち、そして、ぱすんと雪の粉を散らして消えた。

残り九体ののっぺらぼうは、一斉に動きを止めた。

そして、伸ばしていた体を縮めると、ぶるぶると、激しく揺れ始めた。

のっぺらぼうたちの体の周りで、ぱりぱり、ぱりぱりと、青く小さな放電が縦に走る。

そして、九体ののっぺらぼうから、一斉に青い稲妻が放たれ、一体を倒した山の民に襲いかかった。

ばきんっ、という、大木がへし折れるような音がして、山の民は、黒こげになって倒れた。

少年は、インベントリを開き、検索をかけ、剣を取り出した。使い慣れた剣である。

雪の道を歩くための木の杖を格納する。

また、一つの腕輪を取り出して、装備した。

「だめ！

殺す、だめ！

あれ、ガーラの養い子。

殺す、ガーラ、怒る。

だめ！

行く、だめ！

「そなたは、ここで待てっ」

少女を振り切ると、少年は、斜面を駆け下りた。そのあいだに、さらに二人の山の民が死んだ。のっぺらぼうは、八匹になっていた。

バスターソードの戦士は男で、魔法使いは女だった。

子どもは、男の子と女の子であった。

家族なのであろうか。

子どもたちは、あちこちをのっぺらぼうにかじられ、血まみれになっっている。

女の傷は、いつそう深い。

のっぺらぼうの一匹が、大きく口を開けて、男の子の頭にかじりつこうとする。

バスターソードの戦士が、その口に剣を突き入れて、のっぺらぼうを倒す。

残り七匹ののっぺらぼうは、動きを止め、一斉に戦士に雷撃を放つ。

ばきんと音がし、火花が飛び散り、肉の焼ける匂いがするが、戦士は致命傷を受けたようではない。

対魔法装備をしているのであろう。

だが、顔の包帯ははじけとび、頭巾も飛ばされた。

その頭は無毛で、奇怪な入れ墨が刻まれている。

目の下にも、何かが刻まれている。

ゴルエンザ帝国の剣奴けんどか。

と、少年は戦士の正体に見当をつけた。

このとき、ようやく少年は現場にたどりつき、剣を抜くと、まずは、女と子どもたちを取り巻くのっぺらぼうたちを、素早く何度か切り裂いた。

だが、のっぺらぼうたちは、少年より戦士のほうに注意を向けているようである。

折よく、戦士に噛みつこうとしたのっぺらぼうがいたので、少年は、素早く、その口に剣を突き入れて、倒す。

残り六匹となったのっぺらぼうは、少年に雷撃を放った。

少年は、左手の腕輪をかざして、これを吸収した。のっぺらぼうたちは、もう一度雷撃を放ってきた。

同じく、少年の腕輪に吸収される。

よし、タゲは取った、と思った少年は、

「ここは、私が食い止める。

あなたたちは、急いでここから離れなさい！」

と四人に告げた。

このガーラの養い子とやらが、これ以上出現しないという保証はない。

自分だけなら闘えるが、四人を守りながらでは難しい。そう判断したのである。

戦士は、少しためらう様子であったが、この正体の知れない救い手に、

「すまん」

と一言告げると、女と子どもたちを促して、北の方角に走り去っていった。

丘の向こうに姿を消すとき、女がこちらにおじぎをしているのが見えた。

この間、少年は、立て続けにのっぺらぼうたちに切りつけたが、倒すことはしなかった。

数を減らしすぎたとき、何が起きるか分からなかったからである。

のっぺらぼうたちの動きは、見慣れぬものではあったが、さほど素早くはない。

また、切り裂けば、いったんは動きを止めることができるのであるから、少年は、闘いには不安を覚えなかった。

不安があるとすれば、この化け物どもを倒したあとにある。

のっぺらぼうたちは、断続的に雷撃を放ってきたが、アレストラの腕輪がある以上、ダメージを受けることはない。

ありがたいことに、のっぺらぼうたちは、一斉に雷撃を放ってくる。

じゅうぶんに時間を稼いだと判断して、残るのっぺらぼうたちを一匹ずつ倒した。

すべての養い子たちが、雪の粉となって消えて、さて、何が起きるか、しばらく待ったが、何も起きない。

気が付けば、すぐそばに少女が立っていた。

真っ青な顔をしている。

少年は、剣のよこれを落とすと鞘に収め、笑顔を見せて、

「ガール神は、お怒りではないようだね」

と言った。

そのときである。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ、という地鳴りが聞こえてきた。

突然、地面が揺れだした。

時に大きく、時に小さく、揺れは収まることなく続く。

少年と少女は、抱きしめ合って、揺れが収まるのを待った。

がらがらから。

ぱりぱりぱり。

雷鳴のようであり、破碎音のようでもある、けたたましい音が、響き続ける。

来る。

何か、とてつもなく大きな物が、

下から、来る。

少年は、その気配を感じていた。

それは、気配というにはあまりに圧倒的であり、巨大であった。

天変地異というべきエネルギーを持つ存在が、今、立ち現れようとしている。

晴天であるから、遠く近く、あちこちの山の峰が見える。

近くの峰は、この揺れにさらされているのか、雪崩を起こし、あるいは、斜面が崩れ始めている。

口元を引き締めて凝視する間に、切り立った崖の、その向こうに、

巨大な女の顔が現れた。

少年の立つ位置から崖までは、約二十歩。

そのすぐ向こうに、目を閉じた、美しい女の顔がある。

いや、すぐ向こうではない。

実際には、何百歩、あるいはそれ以上の距離がある。

あまりに巨大であるから、すぐ近くに見えるのである。

また、女の顔、というのも違っている。

それは、雪であり、氷であり、山そのものであるから、女のような造形を岩肌に刻んだ白い氷の山、というのが正しい。

この底も見えぬ断崖の下から伸び上がってきたのだとすれば、その高さは、おそらく、バルデモストにそびえる、どの山より高い。

女の顔をした山は、さらに伸び上がっていく。

腰を越える長髪は、雪を頂く純白のつらら。

白磁の顔は、氷河を削りだした巨大な彫刻。

広大なすそ野を広げて立ち上がる姿は、白き夜会服をまとう貴婦人のようである。

その目と口が、ごわっ、と開いた。

開かれたそれは、ただの穴であり、闇そのものである。

静かな形相が一変し、恨みと苦しみと哀しみに染まった。

女の姿をした氷の巨峰は、その口のごとき穴から、絞り出すように、

いゝふおゝうおゝいゝゝゝゝゝゝ

と、はらわたのねじ切れるような叫びを放った。山々は、それに共鳴し、次々にこだまを返す。さらに、それにかぶせるように、

いゝふおゝうおゝいゝゝゝゝゝゝ

と女怪が叫びを重ねる。

黒雲が立ちこめ、吹雪が舞い始める。

女怪は、見る間に雲の黒さを吸い込み、いつしか喪服をまとう狂母のごとき姿となって、身をくねらせている。

いゝふおゝうおゝいゝゝゝゝゝゝ

何物をも吹き飛ばし、滅ぼさずにはおかない慟哭の烈風が、すさまじい勢いで雪を巻き上げながら、少年と少女に襲いかかる。

少女は、絶望を声に潜ませて、それでも気丈に顔を上げ、少年に教えた。

「あれ、ガーラの娘。

見た者、助からない。

みな、死ぬ」

少年は、右手で少女を支えたまま、左手で覆面をはぎ取り、毛皮の帽子と耳覆いを後ろにはねのけて、泣き叫ぶガーラの娘に向かって、大音声で呼ばわった。

「神よ。神よ。ガーラ神よ！ ガーラの娘よ！

わが言葉を聞きたまえ！」

続く揺れの中で、その両足は、しっかりと雪の大地を踏みしめ、吹き付ける雪の中で、まなざしは力を失っていない。

「私は、パンゼルの息子、アルス！ またの名をザーラ。ザーラより女神ガーラとその娘御なる神霊に申し上げる！」

少女は、背中を少年の右手に支えられ、両の手を少年の左手に支えられて、呆然として、朗々と神霊に物申す少年の横顔を見つめた。

「神域を血で汚したるは、わが罪。まことに相済まぬ。」

どうか許されよ。

されど、これは、神々の愛し子たる人間を守らんがため、やむなく剣を振るいしものなり。

決して、あなたがたと眷属を軽んじ、あるいは禍つ神と侮りて討ち被わんとするものにあらず。

怒りを収めたまえ」

少年から青年に変わろうとする年代特有の、のびやかで張りのある声が、吹雪を突き抜けて響くのを聞きながら、少女は、きつ、とまなじりを結び、背筋を伸ばし、巨大な神霊のほうをにらみつけながら、少年に寄り添って立った。

少年の言葉と、思いを共にすると言わんばかりに。

いつしか、巨神も、二人をじっと見つめている。

「されば、私はいつかひとたび、あなたの剣となって、敵を倒そう。疾く鎮まりたまえ、大いなる山の神よ！ わが言挙げまつるを嘉し諾いたまえっ！」

高らかに起請の文言を告り了えると、少年は、右手の手袋を外し、中指の先を噛み切つて、右手を虚空に差し伸べた。指から流れる血は、一筋の赤い糸となり、風に巻き上げられて、荒ぶる神に吸い込まれていった。

だが、揺れも叫びも、収まることはなかった。

少年と少女は、立っていらなくなり、二人抱き合つて、その場にくずおれた。

逃げるにも、視界も利かず、動くこともかなわない。

硬くさらさらの雪の上を、荒れ狂う吹雪と地の揺れに、右に左に転がされながら、二人は、ただじつと堪えた。

いったい、どれほどの時間が過ぎたか。

永遠に続くかと思われた天変地異は、徐々に静まり、やがて収まった。

空は晴れて、星が見える。

とすれば、今は夜なのである。

少年と少女は、近くの岩の割れ目にテントを張り、インベントリから手当たり次第に毛皮を出して、敷き、身に巻き付けて、寝た。

二人とも、これほどの恐ろしさと疲れは、初めて味わった。

どちらからともなく抱きしめ合い、相手を求めた。

少年は、女の肌を初めて知った。

少女も同じであった。

少年は、腕の中の肌体から発せられる女の匂いに高ぶり、熱に浮かされたように、少女を愛しんだ。

いくど目かの交わりのあと、深い眠りに吸い込まれる前に、少年の心をよぎったのは、

あの家族は、無事だったろうか。

という事だった。

12

翌朝起きると、妙に体調がよかった。

指の傷も、すっかり治っている。

冒険者カードを見ると、レベルが六十八になっていた。

三つも上がっている。

ガーラの養い子とやらには、それほど経験値があったのだろうか。それにしても、いつレベルアップは起きたのか。

ダンジョンでは、戦闘が終わった時点でレベルアップが起きるが、外では、加護する神に祈ったときにしかレベルアップは起きないはずである。

少女も目を覚まし、レベルが上がった、と言う。

話し合ったが、よく分からなかったので、とりあえず考えるのをやめた。

13

一週間後、二人は、大峡谷に着いた。

少女は、ここから少し西にある交易所に行くという。少年も、そちらに行こうかと考えたが、その先には、マズルーの国以外ない。

結局、最初の予定通り、大峡谷を東に進むことにした。

大峡谷を抜ければ、いくつか村があり、迷宮もある。

野生の強力なモンスターも多い地域である。

そこから南に下ってアルダナに行けば、教えを乞いたい武者や道場がある。

別れを告げようとしたとき、少女が言った。

「あたし、名前、決めた」

「名を決めたのか。」

何という名ですか」

「シャリエザーラ」

「シャリエザーラ、か。」

よい名だ」

「そう、思っか」

「うん。」

思っ」

少女は、にっこり笑った。

少年は、このおなじこの笑顔を見るのは初めてだったかな、と思った。

少年は、別れを告げ、時々振り返って手を振りながら、東に歩いていった。

少女は、ずいぶん長く、その背中を見送った。

シャリエザーラ。

それは、山の民の古い言葉で、ザーラを待つ者、という意味である。

## 挿話1

ミノタウロスは、じりじりと焼け付くような立たしさを感  
じていた。

原因は、はっきりしている。

あの人間は、

俺の首をへし折り、俺に打ち勝った、あの人間は、どうしたのか。

あの人間が、あれ以来戻って来ない、ということが、いら立たし  
さの、一つ目の理由である。

ミノタウロスの感性からすれば、あれは、すぐにも戻って来るは  
ずの人間なのである。

やつにふさわしい敵は、俺しかいない。

俺にふさわしい敵は、やつしかいない。

だから、やつは、ここに来るしかない。

なのに、なぜ、戻って来ない。

この待ち遠しさが、いら立ちの一つ目の原因である。  
だが、いら立ちの原因は、それだけではない。

あの人間の闘いぶりを思い出してみる。

いや、思い出すまでもない。

あの闘い以来、いつもいつも、ほかの人間たちと闘っている最中でさえ、あの人間の闘いぶりは、この怪物の脳裏に、繰り返し繰り返し映し出される。

反芻される、その闘いの中で、あの人間は、いつもミノタウロスを打ち負かす。

剣の技において。

筋肉の力において。

あの素手の武技において。

先を読んで戦術を組み立てて準備をし、相手をそこに誘導していく技術において。

闘いへの幅広い知識と技術と視野において。

あの人間は、ミノタウロスを打ち負かし続ける。

このまま、もう一度やつと闘っても、俺は勝てない。

その思いがよぎるたびに、頭を乱暴に振り、周囲の岩や壁を殴り飛ばして、否定する。

だが、自らの敗北の予感、ミノタウロスの闘いへの嗅覚が鋭ければ鋭いほど、逃れられぬ運命として、目の前に立ちはだかる。

これが、いら立ちの、二つ目の原因である。

だから、いら立ちの一方で、ミノタウロスは、激しく求めている。

あの人間に勝つため、新たな闘いを積み上げること。

だが、同時に、ミノタウロスは知っている。

ここには、もう、自分を苦しめることのできる敵はいない、という事実。

あの人間が去ってから、急にたくさん人間が来るようになった。

だが、人数は多くても、闘いの楽しめる相手はいなかった。  
ミノタウロスを、さらなる高みに押し上げてくれる敵はいなかつた。

今は、また、来る人間の数も減った。

たまに来るやつらも、ろくなものではない。

だめだ。

だめだ。

ここでは、だめだ。

やつと闘うために、

よい闘いをするために、

やつをちゃんと殺すために、

ここではないどこかで、

俺は新たな闘いを積み上げねばならぬ。

だが、どうすれば、それができるのか、この怪物には見当もつか  
なかつた。

## 第2話 岩の男

1

ザーラは、岩の小径を早足で上っていた。

手には、片手剣でなく、バトルハンマーが握られている。柄は細長く、頭部も小振りである。

ひゅっ。

岩の影から、またも岩蛇が飛び掛かってくる。

びゅんっ。

と風切り音をさせてバトルハンマーがうなり、正確に蛇の頭を捉える。

ぐしゃっ。

と音をさせて、蛇がつぶれる。

空中で蛇の頭をたたきつぶす威力も、重心が極端に先寄りであるためコントロールの難しい長柄ハンマーを使いこなす技量も、見る人が見れば感嘆するほどのレベルである。

しかし、当人は、

伯父御が見たら、お前それがハンマーの音かよ、と嘆くであろうな。

などと思い、いささか忸怩たるものを感じながら、この武器を振り回している。

饑別だと渡された、重厚なバトルハンマーは、インベントリに入れている。

あんな重い物を振り回していたら、あっという間に体力が尽きてしまう。

今度は、時間差で左右から同時に岩蛇が飛びかかってくる。

タイミングと立ち位置を調整し、一振りで二匹の頭をつぶした。

飛び散る毒液を浴びないよう、身をかわず。

最初は、いつも通り、片手剣を使っていたのである。

しかし、いかに雑魚敵ではあっても、岩蛇は、硬い。

見る見る剣が損耗していく。

とにかく、ひっきりなしに襲ってくるのである。

三本目の片手剣をインベントリにしまったあとは、このバトルハンマーで闘うようにした。

これが、天剣殿であれば、うまく斬れば剣は痛まぬ、とおっしゃるのであるのか。

そんな境地もあるのではないか、と思う。

いずれそんな境地に立ちたい、と強く思う。

いや、むしろ天剣殿なら、剣も抜かず、すべての蛇をかわして、さっさと走り抜けてしまわれるかもしれないな。

などと思っっているうちに、前方に、砂漠オークの集団が出現する。ザーラは、ハンマーを左手に持ち替え、右手で剣を抜くと、速度を一気に上げて、オークの群れに突入した。

少なくとも、モンスターが多数出現する道である、というのは本当であったな。

と考えながら。

2

大峡谷は、地の裂け目である。

巨大神ポーホーが、おのれの力を示すために、高地とガーラ大山脈に手を掛け、二つを割り裂いたためにできた、という伝説がある。また、別の伝説では、水の神チャクラポツカが、強欲な人間たちもろとも削り取ったのだともいう。

大峡谷の外側は、かたやガーラ大山脈、かたや高地に続く山岳地帯であり、人が行き来するのは困難が大きい。

いっぽう、大峡谷の中は、時折強風や大雨に見舞われるが、概して気候も温暖であり、行き来もしやすい。

川も流れている。

そのため、大峡谷の中には、いくつも人の集落があるし、東西を行き来する隊商などの通り道ともなっている。

大峡谷の中には、草地や、森林もあるが、今、ザーラが走っているのは、切り立った崖と岩ばかりの道である。

シヤリエザーラと別れたあと、ザーラは、一人、東に向かった。  
三日野宿し、四日目に、村があった。

宿屋に入って食事をしていたところ、村人が五人、ザーラの所にやってきた。

一人が村長だと自己紹介した。

冒険者なら、依頼を受けてほしいという。

まずは話をお聞きかせいただきたい、とザーラが答えると、村長が、ジャガという男に、

「ナーリリアさんに来てもらってくれ」

と言った。

うなずいたジャガが、しばらくして帰ってきたとき、後ろに女性がついてきた。

豊かな黒髪は、幾筋もに別れて波打ち、今水浴を終えたばかりであるかのように、ぬれた光彩を放っている。

翡翠の瞳と、黒く太く鮮やかな眉毛。

つんと突きだした形のよい鼻。

みずみずしい真つ赤な唇。

少し筋張つてくつきりとした輪郭の顎。

田舎風の赤茶けたブラウスと、色あせた紺のスカートをはいいてさえ、その存在感は、圧倒的である。

高価な衣装をまえば、侯爵夫人である、といっても通るだろう。

「あら。」

冒険者さんで、ずいぶんかわいらしい人なのね」

彼女の口からそう言われると、褒められたような気持ちになるな、と少年は思った。

「薬師のナーリリアさんだ。

では、ザーラさん。

説明させてもらう」

村長の話によると、ふた月ほど前から、この村の外れの谷に、岩で出来た巨人が住み着いたのだという。

怪物は、時折、不気味な大声を出して、村人を怖がらせる。

それだけならよいのだが、このふた月のあいだに、村人が三人、行方不明になった。

近づいて見下ろしてみると、怪物のいる場所に、亡くなった村人の服や持ち物が落ちていているという。

落ちている服は、村人の物だけではなく、どうも、何人もの旅人が犠牲になっていると思われる。

あの気持ちの悪い声は、犠牲者を呼び寄せる呪いの声なのではないか、と推測される。

何とか怪物を退治しなければ、犠牲は増えるばかりだと、村の人々は金を出し合った。

何度か、通りかかった冒険者に退治を依頼したが、実際に怪物を見ると、その金額では無理だ、と言われた。

そこで、数年前、夫婦で村に移り住んできた、薬師のナーリリアに相談して、手持ちの毒をいくつか試してみたが、怪物には効き目がなかった。

ナーリリアは、田舎に置いておくのはもったいないほどの知識と技術の持ち主である。

何とか方法はないかと相談したところ、一つないこともない、という話になった。

だが、それには、ある特殊な材料が必要なのだという。

「その材料というのは、ケツアルパの毒袋なの。」

この村から北に少し上った所に、洞窟があつて、そこにケツアルパがいるというの」

「ああ、それは間違いない。」

昔から、あそこにはケツアルパというのがいる。

村では、知らない者はない。

ナーリリアさんは、知らなかったようだが」

と、村長が請け合う。

「鉱物系のモンスターには、毒が効きにくいけれど、ケツアルパの毒なら、まず間違いなく効くわ。」

精製は、ちよつと難しいんだけど、ちゃんと処理すればストーンゴーレムでも殺せる毒が採れるのよ」

その場所までは、歩いて往復しても一日かからないという。

ほぼ一本道であり、地図は渡すが、まず、迷う心配はないとのことである。

ただ、途中、やたらモンスターが多いため、冒険者でなければ、採りに行けないのだという。

「でも、お若い冒険者様には、ちよつと荷が勝ちすぎるお願いかもね。」

無理はしないでね、ザーラさん」

「何を言っただ、ナーリリアさん！」

あの岩男は、あんたの旦那の仇かたきじゃないかつ」

その口を挟んだジャガに、ナーリリアは、

「あら、うちの亭主は、死んでないと思うわ。

遺品だって発見されてないし。

珍しい薬草でも見つけて、どこかでふらふらしてるのよ」

にこやかに、そう言い放つナーリリアを、ほかの五人は、何とも  
気の毒そうな目で見ている。

「ふむ。

つまり、その洞窟にたどり着くまでが大変だと。

たどりつければ、あとはケツアルパの毒袋を採ってくればいい、  
ということですね」

ザーラの言葉に、五人の男たちは、そうだとばかりにつなずく。

一人、ナーリリアは、少し慌てたように、

「そ、そうだけど、ザーラさん。

ケツアルパをご存じ？」

「ええ、冒険者ですからね」

そのとき、どこか遠い所から、

のあ~~~~~うい~~~~~ら~~~~~

という声が響いてきた。

「あ、こ、これが、その怪物の呪いの声です」

「そうですか」

村長は、ひどく怖がっているが、その声は、ザーラの耳には、恐ろしいというより、物悲しく聞こえた。

3

洞窟に着いた。

確かに、分かりやすい道であった。

ザーラは、インベントリを開いて、一本の短剣を取り出した。

これを持っていなければ、今回の依頼を受けることはなかったかもしれない。

ケツアルパ。

モンスターレベル60の、巨大なムカデである。

攻撃力自体は、それほど高くないが、暗い洞窟に複数で生息し、鉋と尻尾に、即死級の猛毒を備えている。

また、体から毒の霧を放出しているので、ケツアルパの住む洞窟は、それ自体が死の罠であるといってよい。

文字通りS級指定のモンスターであり、迷宮の外でこれと闘うとなれば、S級の冒険者でパーティーを組まなくてはならない。

ケツアルパの毒袋は、心臓の後ろにあり、殺さなくては採れない

し、採れば死ぬ。

ザーラは、片手剣を右手に、カイトシールドを左手に構えた。カイトシールドには、先ほどの短剣が差し込んである。

片手剣はもう少し強力な物に替えるべきだろうか、一瞬迷ったが、

いや。

恩寵付きの武器に頼らずに強敵と闘えるようになること。

それこそが大きな目的ではないか。

この短剣だけでも、私には過分だ。

と思い直し、洞窟に入ってしまった。

暗視のスキルを発動させ、二百歩ほど進んだときに、敵は現れた。天井から、ひらりと落ちてきたのである。

ケツアルパは、くるりと身をひねって、頭部の巨大な鋏で攻撃してくる。

ザーラは、身をかわし、敵が接地するのをまって、がちんとかみ合わされた鋏の片方を、根本から断ち切る。

左から別のケツアルパが飛び込んでくるのを、カイトシールドで受け、痛みにひるんだケツアルパの、もう一方の鋏も落とす。

と、左側のケツアルパが、尻尾で攻撃してくる。頭の上から降ってくるような角度である。

尻尾の切っ先をカイトシールドで受けながら、少し根本の部分に斬撃を入れるが、角度が悪かったのか、はじき飛ばすにとどまった。

一匹目のケツアルパが、ぶわっと浮かび上がって、押しつぶすような形で攻撃してくる。

その柔らかい腹を、縦に大きく切り裂いてから、ぱつと後ろに飛び退く。

体液をまき散らしながら着地するケツアルパの左から、二匹目のケツアルパが、鋏で攻撃してくるが、一匹目のケツアルパと衝突して、態勢を崩す。

そこを狙って、二匹目のケツアルパの鋏を一本落とす。

このとき、探知スキルにより、三匹目が近づいていることを知る。

そろそろ、頃合いか。

とザーラは判断し、くるっと向きを変え、入り口のほうに走る。

傷を受けた二匹は追ってくるが、三匹目は追ってこないようである。

ぼんやりと入り口から光が入る辺りまで走ると、またもや反転し、追いつがってくる二匹に向かっていく。

ケツアルパが高速で移動するときは、体躯はほとんど一直線に伸びる。

この状態のケツアルパは、技術と速度さえあれば、非常に狙いやすい獲物といえる。

毒袋は、一匹分でよからう。

と決めると、先行していたほうのケツアルパの上空に、ふわりと飛びあがって宙返りする。

そして、ちょうど頭が真下を向いた状態のまま、縦一文字にケツアルパを切り裂いていった。

ケツアルパは、自身の突貫力によって、左右二つに分かれた。

場所によっては、完全に剣が腹まで突き抜けてはいなかったが、勢いによって、全身体が切れていった。

当然、心臓も、毒袋も、真つ二つになった。

遅れてやってきた、もう一匹のケツアルパが横を通り過ぎていくが、最後にぐつと背中を曲げ、尻尾で攻撃をしてきた。

空中で身をねじってかわしたが、かすかに左足の膝の下を削られた。

着地して態勢を整える。

だいぶ向こうまで走っていったケツアルパが、向きを変えて、またもや突進してくる。

倒したばかりのケツアルパが、左右に分かたれたまま、体中の毒と体液をまき散らして激しくうごめいているのが邪魔なので、後ろに飛んで距離を取る。

今、向かってくるのは、両方とも鉄を落としたほうのケツアルパである。

もだえている仲間の死骸をはね飛ばしながら突進してくるケツアルパ。

ザーラは、すつと身をかわし、胴体の中程の、甲殻のつなぎ目で、怪物を前後に切り分けた。

そのあとは、単なる作業であった。

ばたばたと跳ね回る尻尾部分を、何か所か輪切りにし、ほとんど動きがなくなるまで待って、毒袋を切り取り、あらかじめ預かっていた容器をインベントリから出して収納する。

無傷といかなかったのは、痛恨であった。

とザーラは反省した。

戸をたたく。

「はい。

どなた？」

と中から声がして、扉が開く。

ザーラの姿を見たナーリリアは、驚いた表情を浮かべ、声も出ない様子である。

「う、う、う、うそ。

か、帰ってきたの？」

「はい。

無事に、ケツアルパの毒袋を採ってきました。

確かめてください」

「うそつ。

あ、いえ。

と、とにかく、中に入って」

中にザーラを招き入れ、毒袋を確認すると、ナーリリアは、お昼ご飯はたべたのか、と訊いてきた。

まだです、とザーラが答えると、ではすぐに用意するので食べていってほしい、と言う。

食事は、たつぷりの肉を使った豪華な物で、とても即席で準備したとは思えなかった。

この時代、貴族であれ、平民であれ、よそで食事をするときには、

自分のナイフを使うものであるが、ザーラも、自分の短剣で肉を切って食べながら、味のよさに感心したので、思わず、こう言った。

「本当においしいです。」

毒を入れてこの味が出せるとは、あなたは侯爵家の料理人も務まるかたですね」

その言葉を聞いたナーリリアは、仮面を脱ぎ捨てた。

陽気さや親しさは消え去り、その美貌は、冷たく尊大な光を放つ。

「いつ、気が付いたの？」

「あなたにお会いしたときです。」

私は、十四歳の年から二年間、ほとんど毎日、迷宮に潜っていました。

モンスターの気配には、敏感なのです」

「なぜ、死なないの？」

「迷宮で使える毒消しのポーションなどは、外ではまったく効果がありません。」

また、毒抵抗の恩寵を持つアイテムも、外では役に立たないのが普通です。」

しかし、例外のアイテムもあるのです」

「そうなの。」

ケツアルパの毒袋を採ってこれたということは、あなたのレベルは高いのね？」

「六十八です」

「ろくじゅーはちーっ？」

なんでそんな超一流の冒険者が、こんなところにいるのよっ」

なぜか急に、村女に戻ったような表情と言い回しである。

案外、こちらが本性なのかもしれない。

「そっかー。

六十八かあ」

しばし目を閉じて、何かを想うナーリリア。

かっと思開いた目の虹彩は、縦に裂けていた。

「なら、死ね！」

ナーリリアの全身が、服を破り裂いて、激しく変化する。

瞬く間に人の背丈の倍ほどに伸び上がった、その下半身は、太い蛇そのものである。

手も足も消え、全身は鱗で覆われている。

ただ、顔と髪だけが、美しい女性そのままである。

ラミアか！

美女の顔を持ち、邪法で人を惑わし破滅させる、地獄の毒蛇。

魔の眷属であり、神々の恩恵を受ける人間を憎む女怪。

そうと知った瞬間、ザーラは、短剣を放っていた。

変身が完了したときには、短剣は、すでにラミアの心臓を貫いていた。

「いたたたたつ。

何、これ？  
これ、何？」

今度は、ザーラが驚く番だった。

なぜ？

なぜ、魔性そのものであるラミアが、聖属性であるカルダンの短剣を受けて、消滅しないのか？

「あ、でも、なんか、懐かしい感じ。  
なんか、これ、安らぐわあ」

と、心臓に刺さった短剣を、そっと両手で包んでつぶやくラミア。  
ザーラは、事態がまったく理解できない。

そのとき、戸をたたく音がした。

5

「ナールリアさん、いるんだろう？  
開けてくれ。

俺だ。

ジャガだよ」

人が近づいているのは、察知していた。

この怪物の正体を見せるのもよいと、判断していたのである。

だが、今は、まずい。  
事態が整理できるまでは、この女怪の正体が知られないほうがよい。

ザーラは、ラミアに、自分のことは黙っているよう手振りで伝えるとき、素早く短剣を回収して、音もなく、奥の寝室に隠れた。

「えっ？

えっ？

えっ？

ど、ど、ど。

えっ？

取り取り残されたラミアは、正体を現してしまっている自分の体と、床に落ちた服の残骸、テーブルの上の料理、扉などを、順番に見回している。

「ナールリアさん、どうかしたのか？

何やら、大きな声が、さっき聞こえたが、

妙なことでもあったのか？」

「あ、ジャガさん、こ、こんにちは。

あの、あのね。

今、食事してたんだけど、服を脱いでるの。  
入ってこないで」

「食事してたのに、なんで服を脱いでるんだ？」

「っ、つまりね。

食事してたの。」

そしたら、髪、そう、髪に料理の汁が付いちちゃってで、髪を洗い始めたの。

そ、そしたらね。

服と体にも汚れが付いてたの。

それで、全身を拭いたの。

い、今、裸だから、入ってこないで。

ちょ、ちよつとだけ待って！」

「そうだったのか。

そりゃ、大変だったね。

分かった。

いくらでも待つよ」

ナーリリアは、人の姿に戻り、髪に水を掛け、破れた服を片付け、扉を開けようとして、裸なのに気付कि、寝室に入って、服を着てから、ジャガを迎え入れた。

寝室にいたザーラと目が合ったとき、思いつきり顔をしかめて、ザーラを威嚇するのを忘れずに。

「作りすぎちゃったの。

ジャガさん、よかつたら、一緒に食べて」

「な、なんだったって。

もちろん、いいとも。

やあ、うれしいなあ、ナーリリアさん」

手料理を勧められてすっかり舞い上がっているジャガ。

ごまかすにはもう一押し、と思ったナーリリアは、酒を勧めた。

形だけ断ったジャガだが、すぐに酒に手を伸ばし、わずかな時間で、すっかり出来上がってしまった。

そして、ナーリリアを口説きはじめた。

「ナーリリア。」

なあ、俺の気持ちは、分かってるんだろ。もう、あんたの亭主は、死んじゃったんだ。俺と一緒ににならないか」

「いえ、うちの亭主は、きっと帰って来るわ。あたしには、分かってるの」

「そこまで操立てるような相手じゃないだろう。いや、あいつ、ほかに好きな女ができて、あんたを捨てていったのかもしれないぜ」

「いえ、うちの亭主は、今でも毎日、私のことを想ってるわ。あたしには、分かってるの」

「あんたのような女に、こんな小汚い生活しかさせられない甲斐性なしじゃないか。

俺なら、うんと綺麗な服を着せてやれるぜ」

「あら、最近、羽振りがよくなったの？」

「ほら、これ見ろよ。」

これも、これも。

みんな、あんたにやるぜ」

「あ、綺麗ね。」

あれ？

これ、行方不明になったミーナさんが着けてた指輪じゃ……」

「あ？

え？

ああ、まあ、よく似てるかもな」

「こっちは、ザンドさんの娘さんに、あたしがあげたブレスレット。あんたがっ、あんたがみんなを殺したのね！」

「あ、く、くそ。

静かにしやがれ。

お前も殺すぞっ」

「そこまでです」

なぜか寝室のほうから突然現れたザーラに、ジャガは顔面蒼白となる。

「お、おめえ。

洞窟に行ったんじゃ。

くそっ。

はめやがったな」

逃げようとするジャガを、取り押さえるザーラ。

ジャガの雑言は続く。

「く、くそっ。

最初から俺を疑ってやがったな。

それで、冒険者を隠して、俺を色仕掛けで引きずり込んで、おためごかしで、指輪とブレスレットをだまし取りやがった。

そ、そうか。

村長も抱き込んでたんだな。  
き、きたねえ。

おめえは、なんて恐ろしい女だ。  
魔物だ。

悪魔だ。

これからは、ラミアって名乗りやがれっ」

「そ、それは、どうも、

あ、ありがとう?。」

6

村長の所に引っ張っていつても、相変わらずジャガは、おのれの所業を暴露し続けたので、そこからは早かった。

ジャガの家を調べたところ、山ほどの証拠も出てきた。

とすると、岩男は、村の金をさらえてまで倒す相手ではなくなるので、依頼は取り消しになった。

むろん、すでに毒袋は採ってきている、とは言わずに済ませた。

依頼料がもらえないのは気の毒なので、せめて、この毒袋を持っていけ、とナーリリアが言うのに対して、ザーラは、自分の一番欲しい報酬は、情報である、と答えた。

「何から話したらいいかな。

あ、その前に、あの短剣、貸して」

ザーラが渡した短剣を、ナーリリアは、両手で胸に抱きしめた。

「やっぱり、そうだ。」

これ、カルダン様の匂いがする」

幸せそうな顔で、ナーリリアが言う。

「それは、カルダンの短剣という恩寵品で、解毒や異常状態の全解除などの効果があります。あなたは、邪竜カルダンを知っているのですか？」

「邪竜なんかじゃない！」

カルダン様は、ほんとに、ほんとに、優しい女神様だったんだ」

驚いたことに、ナーリリアは、二千歳を越える年齢であり、人として生きていたころは、女神カルダンに仕える侍女の一人であったという。

しかし、カルダンの美貌と人気に嫉妬した女神オルゴリアが、周りの国をけしかけて、カルダンを悪者に仕立て上げたうえ、みんなでよつてたかって、カルダンが恩恵を与えていた国々を滅ぼしたのだという。

侍女の中で最後までカルダンに付き従おうとしたナーリリアは、直接オルゴリアの手により、ラミアにされてしまった。

カルダンはこれを解呪できず、泣いてナーリリアに謝り、少しでも幸せを見つけて生きるよう言い残して、恋人と使い魔の精霊と共に世界の果てに消えたのだという。

女神オルゴリアといえば、知恵と契約の神であり、バルデモストなど北部では、六大神の一柱として、篤く信仰されている。

北部の常識からすれば、ナーリリアの言い分は、荒唐無稽というほかない。

しかし、ザーラには、ナーリアの言い分にも聞くべき点があるのではないか、と思える。

なぜなら、バルデモストで広く信じられている伝説の裏側を、わずかながら知っているからである。

旅立つ前に、ザーラはユリウスの所にあいさつに行った。

今は、両家は、同格の直隸貴族であり、ともに領地持ちの侯爵家であるとはいえ、現在ゴラン家があるのは、メルクリウス家あってこそ、といって間違いない。

パンゼルを臣下として引き立ててくれたユリウスのおかげで、今のすべてはあるのである。

それだけではない。母の深慮により、幼くして家を出た自分を受け入れ、ここまで育て上げてくれたのは、メルクリウスである。

わが忠誠は、永遠に、王家とメルクリウスのもとにある、とザーラはいつも思っている。

ユリウスは、途方もないプレゼントを用意していた。

メルクリウス家が誇る、五つの恩寵品である。

アレストラの腕輪

カルダンの短剣

ライカの指輪

エンデの盾

ボルトンの護符

ユリウスは、所有印はメルクリウス家のままであるが、ザーラにもこの五つのアイテムが使えるよう、使用印を加えてくれるといい、刻印術師を待機させていた。

そして、そのとき、人払いをして、これは当家の秘伝である、と前置きして、教えてくれたのは、

広く一般には、アレストラの腕輪は、女神ファラから始祖王に下賜され、始祖王からメルクリウス家初代に下賜された、と伝えられているが、当家の秘伝では、アレストラの腕輪を初めとする五点すべて、初代が倒した竜神カルダンから、初代の武勇と汚れなき忠誠をたたえて贈られたもの、となっている。また、この五点すべて、当家の当主か、当主が心から認めた者しか効果を発動できない。

ということであった。

バルデモスト王国は、女神ファラの加護のもと、人民を苦しめた邪竜カルダンを倒した始祖王と英雄たちが打ち立てた国である。

この秘伝は、国の成り立ちそのものに疑義を投げ掛ける怪しげな伝説といえる。

別の言い方をするなら、この秘伝が外に漏れれば、メルクリウス家は消滅させられる。

それほどの秘事を、こともなげに明かしてくれたユリウスの信頼に、ザーラは、胸が震える思いがした。

「のう、アルス殿。

いや、ザーラ殿と呼ぶべきか。

私も、亡き父に憧れた。

わが家臣でもあったが、わが国が世界に誇る英雄であったパンゼル殿にも憧れた。

自分の力で、かの怪物にとどめをさしたいと思った。

じゃが、私の闘いの場は、迷宮ではなかった。

今、私は、自分の最大の闘いに向けて、牙を研いでおるのじゃ。

ザーラ殿。

かの怪物を打ち倒す日まで、五つの恩寵品は、貴殿に貸し与える。旅にも持っていくがよい。使い方を習得せよ。

しかして、強大な恩寵の力に頼らぬおのれを築き上げるがよい」

7

追想に区切りを付けたザーラは、ナーリリアの夫について訊いた。

夫とは、西の辺境で知り合ったという。

ナーリリアが十年ほど身を寄せた家族が、盗賊に殺されてしまった。

一人残った少年を連れて旅するうち、年を取らないナーリリアとの関係が、母と息子では不自然になったので、ここ何年かは、夫婦ということにしている。

昔カルダンから教えられた薬師としての知識を生かして、人々を助けながら、ひっそりと暮らしていたのだという。

「あなたの夫殿は、まだ生きていますか」

「生きてるっば。

毎日、声を聞いているでしょ」

「あの岩男が、夫殿ですか」

「そうなの。

呪いを……受けちゃって」

「なぜ夫殿を呪ったのですか」

「呪うわけないでしょ！」

ただ、あの人が、どうしても、どうしても

「どうしても？」

「どうしても、どうしても、ほんとの夫婦になりたいって言うから。あかし、ラミアだから、床を共にすると、呪いがうつっちゃうつて言ったのに……………うつうつ」

「……………涙は止まりましたか？」

「泣いてないわ。」

あたしを愛してしまった男は、蛇の鱗で全身が覆われて、毒と呪いで苦しむの」

「蛇の鱗？」

そのような姿とは聞いていませんが」

「少しでも早く呪いが解けるように、解呪と解毒と体力回復の効果がある土で、全身を覆ってあげたの。」

それに、普通の人間の大きさじゃ、毒に耐えられないでしょ。だから、おおっきくして。

土が落ちないように、硬質化の呪文を掛けて。

あの谷なら、川も流れてるし、木の実も、食べられる野草もあるし。

静かにしてなさいって言うておいたのに」

なんと、岩男の正体とは、治療中のただの人間だったのである。  
あと二、三週間で、元に戻るのだということであった。

8

ザーラは、旅館にもう一泊して、翌朝早く、旅立った。

不思議なことに、レベルが七十一に上がっていた。

律義にもナーリリアは見送りに来て、自作だという各種の薬を大量にくれた。

中には、妙に怪しげな効能の薬もあったが。

礼を述べて、いよいよ立ち去ろうとしたとき、また、あの声が聞こえた。

のあ~~~~ついで~~~~ら~~~~

ザーラは、振り返って訊いた。

「あれは、夫殿の声なのですね？」

「そ、そうよ」

「何を叫んでいるのですしょう」

「何度も聞いたんだから、分かるでしょ！」

「すみませんが、分かりません」

ナーリリアは、横を向いて、小さな声で言った。

「あたしの名を呼んでるの。」

ナーリリア、って言ってるのよ」

## 挿話2

ミノタウロスは、幅広の長剣を右手に持ち、久しぶりに百階層のボス部屋から出た。

すぐに、バジリスクが襲ってきた。

バジリスクは、巨大な蛇である。

身をよじらせながら、高速で回廊を周回している。

菱形の頭部は、恐るべき重量を持ち、かつ強靱であり、巨人の振るハンマーのようである。

頭頂には、とさか、あるいは背びれのようなものが突き出ており、長い胴体の半ばすぎまで、低くなりながら続いている。

アンバランスなほどに大きな口には、鋭い歯がびっしり生え、岩をも噛み砕く。

最も気を付けるべきは、舌である。

獲物に伸びるその舌は、稲光のように枝分かれしながら、はるか遠方の標的をもとらえる。

ひとたび、その舌に触れたなら、石にされてしまう。

迷宮内で石化すれば、死ぬしかない。

さらに、バジリスクの通ったあとには、しばらく、ぬるぬるとした体液が残る。

これは猛毒であり、全ステータスを急激に低下させ、持続的に生命力を奪う。

サザードン迷宮百階層は、同心円をつないで配置された回廊と、いくつかの石室から成る。

中央に上層からの階段があり、ボス部屋は、一番外側の回廊に接している。

外側の回廊ほど、バジリスクは高速で周回しており、バジリスクそのものの数も多い。

かといって、バジリスクを避けて、石室に入れば、多くの場合、さらに凶悪なモンスターが待ち受けているのであるから、昔、最初にたどりついた人間たちは、ここは地獄そのものであると報告した。

さて、ミノタウロスは、伸びてきた舌を切り飛ばすと、分析スキルと異常抵抗を高めるスキルを発動させ、飛びかかってきた大蛇の頭部を蹴り上げた。

バジリスクの体が地面から浮かび上がりながら、ミノタウロスの横を飛んでいく。

すかさず、分析スキルで、心臓の位置を見定める。バジリスクの心臓は、なぜか頭部の近くではなく、胴体の中央辺りにある。

腹から剣を突き入れ、心臓を切り裂く。

バジリスクの背は異様に硬いが、腹は軟らかい。

着地したバジリスクは、すでに死んでいた。

巨体が消えたあとに、胸当てが残る。

バジリスクの鱗で出来ており、それ自体高い防御力を持つとともに、異常抵抗付与の効果がある。

バジリスクのドロップする防具は、フルセットで装備すれば、魔法および物理防御が向上するとともに、異常系の攻撃は倍にして反射するという、優良なアイテムである。

が、ミノタウロスにとっては、今さら拾う気にもなれない品であり、放置して歩き去る。

もう一体のバジリスクに遭遇して倒したあと、ミノタウロスは、石室に足を踏み入れた。

そこには、ヒュドラがいた。

地上で人の住む土地に出現すれば、災害級の対応を必要とする魔獣である。

巨象のごとき胴体に、九つの首と一本の尻尾が生えている。

全身は、超硬質の鱗で覆われ、ぐねぐねと敵をねめつける九の首からは、猛毒のブレスを吐く。

ヒュドラが厄介なのは、再生能力のためである。

手や足、首など、体のどこを切り落としても、すぐに生えてくる。付けられた傷は、瞬く間に修復される。

ヒュドラを倒すためには、まずは再生を阻止する必要がある。

それには、再生を司る首を落とさねばならない。

九本の首のうち二本が、体を再生する力を持っている。

個体ごとに位置がランダムである、この二本の首を、ほぼ同時に切り落とすことによって、ヒュドラの再生能力は激減する。

地上で、ヒュドラへの模範的な対策とされているのは、次のような方法である。

まず、魔法によって足止めをし、再生を司る首二本をやはり魔法で探知し、これを同時に落とす。

次に、残りの首を全部落とす。

あとは、バリスタや攻城槌など、強力な物理攻撃を、生命力が枯渇するまで加え続けるのである。

なにしろ、攻撃魔法に対しては、既知のモンスターの中でも最大級の抵抗を持っているうえ、あきれるほど膨大な生命力を持つため、

こうした方法以外、とどめを差しにくいのである。

つまりるところ、人間がヒュドラに対抗できるかどうかは、足止めがうまくいくかどうかにかかっている。

足止めは、魔法以外の方法では難しい。

綱や鎖は、ぎざぎざで硬質な鱗で切れてしまうし、何百人で引っ張ろうが、人間の力では、ヒュドラの体重と力には対抗できない。

落とし穴を掘る、という方法も、以前何度も試みられたが、いずれも無残な失敗に終わった。

なぜなら、ヒュドラには、驚異的なジャンプ力が備わっているからである。

あんな鈍重そうな足で、なぜあれほど高く飛び上がれるか、誰にも分からない。

翼はないが、一種の飛行能力ではないか、という見方をする者もある。

あの巨体で跳躍したあとの着地は、すさまじい破壊力を持つ。

小規模な砦なら、一撃で粉碎される。

今、ミノタウロスの前に立つヒュドラは、このちっぽけな侵入者に何を感じたのか、いきなりジャンプした。

着地点は、ミノタウロスの立つ位置である。

これが人間であれば、

初めてこの階層に来たときには、このヒュドラに勝つにも、ひどく苦勞をしたなあ、

などと感慨を覚えたかもしれない。

しかし、ミノタウロスのあまり大きくない脳みそを満たしているのは、久しぶりに対戦する、この、しぶとくて、やたら首の多いや

つを、いかに手早く、被害を押しえて倒すか、ということだけであつた。

ミノタウロスは、人間たちが考えたこともない方法で、ヒュドラを倒そうとしている。

### 第3話 イシュケリエラの白姫

1

がたごと。

がたごと。

昏い森の中を、馬車が走る。

御者台で手綱を握るのは、ひげ面の男である。

三十歳前後であろうか。

マントの下には、革の鎧を着け、傍らに大剣を置いている。

口には短くなった葉巻をくわえている。

「臭いわ。」

何度も言うようだけど「

と話し掛けたのは、横に座っている女である。

こちらも三十歳前後か、あるいは、もう少し若いかもしれない。

つばのある帽子をかぶり、マントで全身を覆っている。

「もうすぐ終わるって。

けどな、この葉巻のおかげで、ほかの匂いがごまかされてるんだ  
せ。」

つまり、葉巻を吸い終わったら、俺の素敵な体臭を、じっくり味  
わってもらえるわけだ」

「ぼうやに味わってもらいなさいな。

あたしは、ぼちぼち、中で休ませてもらうから。

プチ・フレア」

発動呪文とともに、こぶしほどの大きさの光の球が三つ、女の胸元から飛び出す。

よく見れば、マントの下で、杖を構えている。

光の球は、木から飛び降りて馬車に飛びつこうとしていた、五匹のモンスターのうち、三匹に命中する。

モンスターは、それぞれ、短く悲鳴を上げて落ち、そのまま動かない。

的確に急所を突いたのである。

残り二匹のモンスターも、悲鳴を上げて墜落する。

それぞれ、顔のまん中に、ナイフが突き立っている。

「戻れ」

と男が命じると、手の中に二本のナイフが戻ってきた。

男は、手を伸ばして木の葉をもぎ取り、ナイフをぬぐうと、元のとおりに、マントの隠しに収める。

「それにしても、妖魔系のモンスターばかりね。  
珍しいわ」

「だな。

この三日間で、生まれてから見た全部よりたくさんの妖魔を見た  
ぜ」

モンスター、というのは、種族の名前ではない。人間から見て、脅威になる、人ではない生き物の総称である。実際のところ、動物とモンスターのあいだには、明瞭な区別はない。

普通、兎はモンスターとは呼ばれないが、角兎は、モンスターと見なされている。

だが、どちらも食べられるし、生態に大きな差はない。

ただ、角兎は、人に攻撃してくるし、戦闘力のない一般人にとっては、命に関わる敵であるので、モンスターと見なされているのである。

オーガ、オーク、ゴブリン、コボルトなどは、モンスターと呼ばれるても動物とは呼ばれないが、生き物であることに違いはない。

人と交わらずにすむ地域では、彼らは彼らなりの安定した生活圏を築いている場合が多い。

これらに対して、生き物とはいえないモンスターがいる。

妖魔系とか悪魔系とか呼ばれるモンスターであり、成長したり、子どもを作ったりせず、いずこからともなく湧いてきて、ただ人を傷つけ殺し、災いをもたらすことのみを行動原理とする。

妖魔系モンスターは、それぞれ、どの悪魔の眷属だとか、どんな由来で産み落とされたとかいう伝説を持っている。

悪魔そのものといわれるモンスターもいる。

たいていの場合、極めて醜悪な容姿をしており、上位のものは、悪質な魔法攻撃や、呪いを仕掛けてくる。

毒を持っている場合も多い。

だが、こうした妖魔系モンスターには、特定の迷宮にでも行かない限り、めったに出遭うものではない。

それなのに、この三日間、一行は、妖魔系モンスターに、ひつきりなしに襲撃されているのである。

ほどなく、キャンプに格好の場所に出た。

少し早いが今夜はここに泊まる、と男が宣言し、女が同意する。馬車の中に伝えると、まず、少年が、馬車から降りてきた。

ザーラである。

ザーラは、鉦なたで邪魔な低木や枝を払っていく。

次に降りたのは、古ぼけた僧衣をまとった五十歳ほどの男である。辺りを見回すと、何やら呪文を唱え、両手を大きく頭上に広げた。キャンプのときによく使われる簡易結界である。

モンスターが近寄りにくくなり、体力回復などにも多少の効果がある。

御者をしていた男は、馬車から馬を外して草を食べさせる。

魔法使いの女は、かまどの準備をする。

ザーラは、安定した位置に草を敷き詰めて、上に毛皮を広げた。

「置き場所の準備ができました」

馬車から、箱が出てきた。

五、六歳の子どもなら中に入れるのではないか、と思われる大きさである。

頑丈そうで、奇麗な装飾がほどこしてある。

それが、宙に浮かんだまま、馬車から出てきたのである。

箱に続いて、白い巫女服をまとった女が、馬車から出てきた。

女は、両手を開いて、まるで、その箱を持っているかのようになり、

差し伸べている。

しかし、箱と女の間には、いくばくかの距離があり、直接持つて  
いるわけではない。

見えざる手、と呼ばれる特殊スキルである。

ザーラが用意した設置場所に、静かに箱を安置すると、女は、ほ  
っとためいきをもらした。

イシユクリエラの白姫しろひめ

と呼ばれる、高名な占い師であり、今回の冒険の依頼者である。

2

大峡谷を抜けた所に、大きな街があった。

そこには、冒険者ギルドさえあった。

ザーラは、ギルドでクエストを受けてみようかと思ったが、ため  
らいもあった。

ギルドでクエストを受けようとするれば、冒険者カードを、等級を  
閲覧可能にして、提示しなければならぬ。

Sクラス冒険者である自分は、どうしても目立ってしまうだろう、  
と懸念したのである。

酒場で食事をしていると、ひげ面の男が、きよろきよろ辺りを見  
回しながら近づいてきて、言った。

「お、あんだな。  
あんに話があるんだが、食事が済んだら、上の部屋に来てくれ  
ねえか」

教えられた部屋に行くと、中に招き入れられた。  
ひげの男のほかに、白い巫女服を着た女と、魔法使いらしい女と、  
僧衣の男がいた。

「こつちの人が、あんに用事がある人だ。

イシユクリエラの白姫様。

名前ぐらい、聞いたこと、あんだろ。

依頼内容は、この人と、あれを」

と、傍らのテーブルに鎮座している箱を示して、

「海の神殿まで、無事送り届けること。

メンバーは、俺と、あんだと、この二人。

馬車があるんで、移動は楽だ。

あ、海の神殿ってのは、知ってるかい？

こつからまっすぐ東に行った、半島の先端にあるんだ。

大陸の一番東端ってこつたな」

かかる日数の見込みを聞き、報酬を確認してから、ザーラは、依  
頼を受諾した。

戦士の男の名は、ボランテ。

主武器は大剣だが、相手によって武器は使い分け、スローイング・  
ダガーなどの投擲武器も使うという。

魔法使いの女は、ヒマトラ。

攻撃魔法が専門で、炎系を得意とし、拘束魔法も多少はできるらしい。

どっしりした体格の僧侶は、ゴンドナ。支援魔法専門で、攻撃力はないが、魔力量には自信がある、というその手には、ごっごつした太いメイスが握られている。

近くにいただけで、ザーラには分かった。

三人とも、一流の冒険者である。

よくも、こんな僻地で、これだけのメンバーを集められたものだと感心する。

なぜ自分に声を掛けてくれたのかと聞けば、白姫様の占いなのだそうだ。

他の三人も、そうであるという。

なんでも、今回の旅は、多数の強力なモンスターに襲われる定めなので、最高の護衛が必要なのだという。

「私の名は、ザーラ。

武器は」

腰に差した剣のつかを右手で軽くたたく。

「剣です」

3

いささか世事につといたザーラでさえ、イシユクリエラの白姫の名

は、聞いたことがある。

王侯や大商人に招かれて、占いをする、放浪の巫女。

天候、物事の吉凶、戦争の勝敗、たくらみ事、出産、人の行く末、ありとあらゆる事柄について、その占いは的確でなかったことがないという。

大金を積まれても占いを断ることもあるし、自ら進んで未来の英雄のもとを訪れ、寿言と助言を与えることもある。

命の終わりが近づくと、白姫は、才能のある娘を後継者に指名し、共に身を隠す。

数年後には、すべての技を習い終え、神々の加護を引き継いだ新たな巫女が、イシユクリエラの白姫の名と生き方を引き継いで現れる。

こうして、千年以上の昔から、白姫は、啓示をもたらしつつ、世界中を旅しているのである。

名を騙ろうとする者は絶えない。

しかし、白姫ならば、占いの力もさることながら、必ず、「箱」を持っていくはずである。

ごく短い移動の際にさえ、その箱は身近から離されることはない。常に、見えざる手によって、白姫の傍らに浮いて運ばれるのである。

これは、尋常では、まねできない。

見えざる手という特殊スキル自体が、極めて珍しいものであるうえ、わずかな使用さえ、魔力を根こそぎ奪ってしまうものだからである。

自前の馬車で移動するあいだ、ずっと見えざる手を発動させ続けて箱を護持する、というのは有名な話であり、仕掛けなしでこれが

まねできるぐらいの術者なら、偽物にならずとも大金が稼げる。

今、ザーラの前で、瞑想しているのは、間違いなく本物であろう。  
名の通り、髪も肌も白い。

生々しい白さではなく、透き通るような、水晶や氷を思わせる白さである。

人間離れた白さ、といってよい。

「見とれてんのかい、ぼうや」

「ええ。」

不思議なただなあと思って、見とれていました」

「あは。」

うまいこと言うわね。

まあ、不思議さというなら、ぼうやも、けっこうそれなりだけだね。

もう、野営の準備は慣れたみたいね」

「はい。」

でも、何か気付いたら、教えてください」

「うわあ。」

なんて、素直」

ザーラが、森の中での野営に慣れていないのは、最初の日に明らかになった。

だが、それをもって、ザーラを、駆け出し冒険者と侮る者はいない。

野営地に着く直前に、五体のガーゴイルが襲ってきたのを、御者

席の横に座っていたザーラが、すっと飛び出したかと思うと、瞬間に切り伏せたからである。

御者をしていたヒマトラの声に、ボランテとゴンドナが馬車を飛び出したときには、ザーラは、息も切らせず、澄ました顔で、剣を収めていた。

辺境では、ガーゴイルを一人で倒せるのが、一流の騎士であるあかし、といわれる。

しかし、実際に、一人でガーゴイルを倒した騎士は、あまりいない。

ガーゴイルは、素早く、魔法耐性が強く、悪知恵も働くモンスターである。

人型だが、毛髪はなく、口には牙が生え、背中には蝙蝠いっせつのような翼がある。

身体は青銅のような硬さと重さを持っており、殴られたり、爪に引っかけられれば、相当の深手となる。

その上、翼で自由に飛び回る。

倒しにくいモンスターなのである。

ザーラの倒したガーゴイルは、いずれも首を落とされており、尋常でない技前を示している。

切り口の鮮やかさに、ボランテが、思わずうなったほどである。

それほどの手練れなのに、野営に慣れていない。

見張りの順番を決めようとしても、きよとんとしていた。

田舎にたむろして、しかも、ギルドを通さない依頼を請けるような冒険者は、すねに傷を持っている、と見て間違いない。

この少年も、そうであるはずなのに、この物慣れなさは、どうしたことがか。

貴族家か上級騎士の子弟で、剣技の英才教育を受けたが、家が没落して、冒険者になった。

それで、冒険者カードをさらしたがない。

とも想像してみるが、ザーラの装備は、上品でも高級でもない。

しかも、使い込まれており、ザーラによくなじんでいる。

気配の消し方の見事さや、くつろいでいるように見えても決して油断していない様子も、召使いにかしずかれるような生活とはつながらない。

そのアンバランスさが、ヒマトラには不思議なのである。

実のところ、ザーラは、野営に慣れていないわけではない。

野営は、迷宮の中で、いやというほど経験した。

ただ、丁寧に野営地を設営したことがないだけである。

寝るときも、毛布など使わず、剣を枕に、マントにくるまるだけである。

下草も刈らないし、たき火さえ、めったにしない。

何か近づけば、自分で気付いて対処するしかない。

そのため、睡眠は、浅く短い。

つまり、ずっと過酷な野営に慣れ、しかもソロの経験しかないため、集団で居心地のよい場所を設営し、交替で見張りに立つ、という発想がないのである。

迷宮ではポーシヨン一つで体力が回復できる、という事情もある。

「はっはっはっ。

それにしても、ほんとおいしい燻製じゃなあ。

ザーラ殿が参加してくださって、よかったわい。

ワインが進む、進む」

「ゴンちゃん。

あんたねえ。

今日こそは、見張りしなさいよ」

ゴンドナは、一行の中で年長者であるはずだが、ヒマトラの口調には、すでに敬語の残滓もない。

「ゴンさん。」

あなた、つまみが何だろうが、とりあえず飲んでるじゃねえか」

ボランテも、ゴンさん、などと気楽な呼び方をしている。

ゴンドナ本人は、ゴンちゃんとかゴンさんとか呼ばれるのが、うれしいようなので、問題はないが。

「本当においしいお肉ですね。」

これは、何のお肉なのですか」

と訊ねる白姫の皿には、ピンク色の肉が何枚か乗っている。

先ほど、ザーラが、よくこんな大きな肉を燻製にしたな、と思わせる肉の塊を取り出して、それを大胆に切り分け、まん中のピンクの部分の薄くカットして、白姫の皿にサーブしたのだ。

ガーラ越えのときに作った燻製は、パーティーの一同を、とても喜ばせている。

「エツテナの肉です」

「そうですか」

にこにこ微笑む白姫。

ぼかんとするボランテ。

ぶっ、とワインを吹き出すヒマトラ。

次のワインの瓶を、インベントリから取り出すゴンドナ。

パーティーを組んで冒険するというのは、楽しいものだな。

と、ザーラは思った。

4

次の日は、雨だった。

相談の結果、とりあえずは移動せずに、様子を見ることになった。白姫は、箱と一緒に、馬車の中で過ごす。

ザーラは、白姫の護衛ということで、一緒に馬車に入った。

四人乗りの馬車であるが、通常より内部は広い。

箱を置いたり、出し入れがしやすいようであろう。

今、箱は白姫の横に置かれ、ザーラは、白姫の向かいに座っている。

若い、といえば若い。

そうでない、といえば全然そうでないようでもある。

ザーラは、白姫の顔を見ながら、そんなことを思った。

雨脚は、激しい、というほどではないが、途切れることなく、馬車の屋根をたたいている。

馬車の中の、静かな空間は、この世でないどこかにいるかのような錯覚を起こさせる。

「ザーラ様は、不思議なかたですね」

「不思議な、というなら、あなたほど不思議なかたはおられないでしょう」

「あなたからは、ポーラ神様の祝福を感じます」

「あなたが、そうおっしゃるのなら、そうなのでしょう」

「いつも、お一人なのですか」

「ずっと一人で迷宮に潜っていました」

しかし、師や先達に囲まれ、教えを受けていましたから、一人ではありませんでした。

一人で冒険の旅に出たのは、三か月ほど前のことです」

「そうですか」

私には、旅の供をしてくれた者がおりました。

しかし、年老いて病にかかり、あの街で死んでしまったのです。でも、本当は、ずっと一人だったのかもしれない。寂しいかどうか忘れてしまっただけ長く」

「あなたは、いつ、前の白姫様と、お別れされたのですか」

「ふふ」

世間では、そのようにいわれていますね。いえ。

いわれるように、私がしたのです。

次々に別人が、白姫の名と役目を継ぐと。

本当は、そうではありません。

ずっと私は一人でした」

「では、千年以上も、あなたは白姫様であられたのですか」

「そうです。」

あまり驚いておられませんね。

あなたは、やはり不思議なかたです」

「ずっと秘されていた、そのような大事を、私にお教えになって、よかったのですか」

「もうすぐ、私の役目も終わります。」

時が満ちようとしているのです」

そう言って、白姫は、箱のほうを見た。

「あなたの魔力の源泉であるといわれる箱ですね。」

その箱の力が失われるのですか」

「いえ、いえ。」

そうではありません。

やっと、この箱の中身は、本来の役目を果たすのです。

その時までこの箱を見守るのが、私があるじより与えられた役割  
なのです。

本当に、長かった」

「お供のかたというのも、今まで何人もおられたのですか」

「ええ。」

人間の寿命は、限られていますからね。

もう何人目の従者であったか、よく覚えていません。」

でも、とてもよく仕えてくれました。  
いつもなら、ある程度年がいけば暇を出し、新しい従者を雇うの  
ですが」

「今度は、そうはされなかったのですね」

「はい。」

もう、終わりですから」

海の神殿には、いったい何があるのかと、白姫に尋ねようとした  
が、結局その質問が発せられることはなかった。

ずいぶん前から、徐々にこの野宮地を取り囲んでいた多数の敵が、  
急に包囲網を狭めてきたからである。

自分も戦闘に参加しなくては、と馬車の扉を開きかけたが、

「いや。」

手を出さないようにしてくれて、ゴンさんが言ってる。

ザーラは、馬車の中にいてくれ」

とポランテに言われ、ザーラは、馬車にとどまった。

この敵は、かなり厄介である。

山ほどの数が集まってきていることもさることながら、この歩き  
方、この気配。

敵は、おそろく。

「ターン・アンデッド!!!」

ゴンドナの発動呪文が、雨の森に響き渡る。

その効果は、激烈であった。

ばちばちばちばちばちばち。

ターン・アンデッドは、聖職者固有の魔法であり、不死系のモンスターを追い払う効果がある。

しかし、へたをすると、相手を興奮させて攻撃が激しくなることもある。

不死系モンスター以外には、まったくダメージを与えられないが、注意を引くことはできる。

ある僧侶は、雑魚敵を引き寄せて一気に殲滅するための、無差別全方位タゲ取りスキルだ、と言っていた。

スキルのランクが上がってくると、近くの敵なら、大きなダメージを与えることもできるという。

だが、今発せられた呪文の、この威力は。

馬車の小さな窓からも、はっきりと見えた。

近くのグールは、ばちつと雷光を発して、一瞬にして蒸発した。

遠くのグールも、衝撃を受けたように吹き飛んで、起き上がってこない。

やがて、どろどろに溶けて、雨の中に流れて消えてゆく。

百体を超えていたであろう、おぞましい不死の怪物たちは、ただ一言の呪文によって、一掃されてしまったのである。

「ゴンちゃん！」

あなたのスキルは、ワイン飲みだけじゃなかったのね！」

「ゴンさん！」

攻撃魔法は使えないって、言っただけじゃなかったか？」

「はっはっはっ。」

あれは、攻撃魔法じゃないわい」

「じゃ、何なんだよ」

「聖職者のたしなみじゃ。

大声を出すと、腹が減るのう。

ザーラ殿、燻製肉は、まだあるじゃろうか？」

5

雨は次第に小降りになり、翌朝には晴れた。

一行は、移動を再開した。

いくらも行かないうちに、二十体ほどの下級妖魔を率いて、豹のような妖魔が襲ってきた。

ボスは、ボランテが相手をした。

豹の化け物は、二足歩行して、幅の広い曲刀を武器にしていた。

ボランテの大剣と、しばらく競り合っていたが、ボランテが投げつけた小袋を斬ったあと、急に相手の動きが悪くなり、ボランテは遠慮なく斬り捨てた。

下級妖魔は、ヒマトラが、フレイムボール三発で焼き払った。

「あの小袋は、何だったんだい？」

「野生のトウガラシを乾燥させて、粉にした物だな」

「そんな卑怯な闘い方でいいのかい？」

「お前こそ、森で火球を使うな」

「雨のあとだから、大丈夫さ」

「はっはっはっ。」

仲よさそうで、何よりじゃ

「あ、ごらっ。」

ゴン。

なに、昼間っから飲んでるのさー！

午後には、三十匹ほどの妖魔に襲われた。

顔つきは凶悪だが、小さな子どもほどの身長しかない。

「大して魔力も感じないわね。

あたし一人でいいわ。

さくつと追っ払ってくる」

と、ヒマトラが助手席を飛び出した後ろ姿を見ながら、ゴンドナが、

「あれは、ザファンじゃのう。

火には、めっぽう強い。

それと、アイテムで攻撃してくるタイプじゃから、保有魔力量は、あんまり関係ないがのう」

と、つぶやく。

しばらくすると、ヒマトラが、きゃあきゃあ悲鳴を上げたので、  
ザーラが馬車の中から飛び出して、次々と、敵の首を刈り取っ  
った。

敵を倒し終えて、馬車に戻ったヒマトラは、ゴンドナが敵の特性  
を知っていたと聞き、大いに怒った。

「なんで教えてくれないのさ！」

髪がちよと燃えちゃったじゃないか！

あ、また飲んでるわねっ。

昼間っから飲むな、って言ってるだろっ。

この、酔いどれ坊主！

それにしても、あのちっぽけ妖魔どもめえっ。

森であんなに火魔法を使いまくるなんて！」

「お前が言うな」

この日の襲撃は、それだけだった。

翌日の襲撃は、さらに厄介な敵であった。

「もしかして、デュラハンかい？」

「そっらしいなあ。」

俺、初めて見たよ」

「うむ。」

あれは、デュラハンじゃな」

夜明け早々に出発した一行の通り道をふさぐように、一頭の大柄  
な馬が立っている。

その馬にまたがっているのは、甲冑を身に着けた騎士である。首はない。

いや、胴体の上にはない。

どこにあるかというと、左手で持っている。

右手には、抜き身のロングソード。

普通、片手で使うものではないが、このモンスターにとっては、そうではないのであろう。

「一回、闘<sup>ま</sup>ってみたかったんだ。

行かせてもらうぜ」

と、言い残して、ボランテが前に出る。

長剣と大剣の対決が始まった。

両者とも技巧が高く、剣に重さもある。

見応えのある決闘といえる。

「次は、私の出番のようですね」

と、口にして、ザーラが、馬車の後ろ側に向かう。

そこにも、馬にまたがったデュラハンが一体、出現していた。こちらでも、剣と剣との対決が始まった。

二つの対決の決着は、ほぼ同時についた。

いずれも人間側の勝利である。

しかし、

「あっ」

「ぶむ。」

「やはりのっ」

ボランテがデュラハンを倒すと同時に、その後ろに、二体のデュラハンが現れた。

ザーラのほうも、同様である。

つまり、今、一行は、四体のデュラハンに襲われているわけである。

もはや、ボランテの表情に、余裕はない。

しゃにむに攻め込んで、二体を倒した。

ほぼ同時に、ザーラも二体を倒した。

しかし、今度は、さらに倍の敵が現れた。

つまり、ボランテの前に四体の、ザーラの前にも四体のデュラハンが現れたのである。

ただちに援護に出ようとするヒマトラに、

「すまんがの、ヒマトラ殿。

少しのあいだでいいから、四体を足止めしてくれんか。

そのあいだ、ボランテをここに戻らせてくれ」

と、ゴンドナが声を掛ける。

いささか驚いたが、ヒマトラは、その通りにした。

馬車に戻ったボランテに、ナイフをありったけ出すように言うと、ゴンドナは、そのナイフに、用意してあった瓶の液体を塗り付けた。

「聖水じゃ。

悪魔騎士には、なかなかの効き目があるはずじゃ」

「わかった、ゴンさん」

まさに、その通りであった。

あれほど手こずった敵は、聖水を塗ったナイフが刺さったとたん、消滅して、もう復活しなくなった。

ゴンドナは、ザーラの支援にも向かおうとしたが、こちらはいち早く、相手を殲滅していた。

「ふうむ。

見事じゃ。

聖属性の武器をお持ちじゃったか」

うなづくザーラの肩をたたいて、ゴンドナはザーラを馬車にいざなった。

そして、戦闘直後のポランテとザーラを、馬車に入れると、自分が手綱を取り、ヒマトラを助手席に座らせた。

「あたしだって、今、闘ってたんだけどねっ！

あ、こら、飲むなって言ってるだろうが。

よこしなっ」

ヒマトラは、ゴンドナからワインの瓶を取り上げると、瓶に口をつけて、ワインをラッパ飲みした。

それからも、毎日のように妖魔の襲撃を受けたが、パーティーは、それぞれの持ち味を生かしながら、そのすべてを退けた。

「やっと、森の外に出られるねえ」

「おう。

あれを倒したらだけどな」

森の出口近くに、真っ黒い大きな固まりが四つ、うずくまっ  
ている。

馬車が近づくと、固まりは立ち上がり、それぞれ三つの光る目で、  
一行をねめつけた。

「あれは、何？」

「バグベアじやの」

「おお。」

あれがそうなのか。

ヒマトラ、おい。

お前、何を」

ヒマトラの準備詠唱が完了し、発動呪文が発せられた。

「メテオ・ストライク！」

「うわー。」

こんな所で使うなー！」

空から彗星が降ってきて、四体のバグベアを消滅させた。

密集していたのが相手の不運というべきか。

森の出口だった所には、巨大なクレーターが出来た。

そこにあつた木や草や土は、一行の上に降り注いだ。

幸い、火事にはならず済み、ひとつもんちやくのあと、馬車は森  
を出た。

「ヒマトラ殿。

よかったら、これをどうぞ」

「え？

あ？

これは、何だい？」

「魔力回復が速くなる薬草だそうです。

煎じてもよいし、このままでも口にできると聞いています。  
しばらくかみしめて、草の汁を唾液と一緒に飲んでください」

「なんだか怪しげだねえ。

でも、ありがと。

ちよつとでも回復が速くなるなら、大歓迎さ」

「とても苦いそうです」

ヒマトラは、手のひらに乗せられた薬草を、がばつと口に含んだ。  
そして、とても嫌そうな顔をしたが、吐き出しはしなかった。

森を出た直後、イナゴの妖魔と、ハエの妖魔に襲われた。

それぞれ、率いていたボスは、アドバンとナスという名らしい。  
敵の数が多くて閉口した。

ゴンドナは、結界を張って、依頼主と箱を守った。  
ヒマトラは、火系の魔法を撃ちまくった。

ボランテは、炸裂弾を使って、ヒマトラに近づく妖魔を倒した。  
そして、ザーラが、敵のボスを倒して、決着をつけた。

そして、海に出た。

今いるのは、砂浜である。

目の前には、青々とした海が広がっている。

潮風は、新鮮そのもので、一息吸うたびに、生命力が増加するようだ。

ザーラは、生まれて初めて見る海に、感動していた。

視界の中央右寄りに見えるのが、ユトの島であると聞いて、胸が高鳴った。

では、あれが、大魔法使いギル・リンクスのふるさとなのだ。

ギル・リンクスの逸話と生き様を、小さいころから聞かされ続けたザーラには、その生まれ故郷は、まるで聖地の一つであるかのよう感じられたのである。

一行は、馬車に戻って、海の神殿に向けて、旅を続けた。

三日ほどは、妖魔に襲われなかった。

一度、ゴブリンの群れに襲われている旅人の家族を助けた。

毎日、潮風の吹く場所で野営した。

ワインはおいしく、貝や魚も新鮮であった。

意外にもヒマトラが料理上手であるという事実が発覚した。

その後、何度か妖魔に襲われたが、さほど強力な敵ではなかった。このパーティーだからいえることであったが。

旅は続き、あと四、五日で海の神殿に着くというところになり、急

に妖魔の襲撃が激しさを増した。

食事の途中で襲われることもしばしばで、皆の心と体に疲労がたまっていた。

「みんな、聞いてくれ」

夕食が終わるころ、ボランテが、呼び掛けた。

「あと二日ほどで、神殿に着く距離だ。

しかし、早めに出発して、馬の尻けつつぺたをしっかりとたけば、一日で着かない距離でもねえ。

ひとつ、ここは、明日一気にゴールといこうじゃねえか」

三人の冒険者が賛成し、白姫も、賛成した。

このメンバーならできると、皆が思った。

7

夜明けよりだいぶ早く出発した。

森の中と違い、海のそばでは、夜中でも真っ暗にはならない。

妖魔たちの攻撃は熾烈であった。

それを、馬車の速度を緩めることなく、たたき伏せ、押しつけながら、ただただ前進していった。

「げ。

前方、道のと真ん中に、中型妖魔一体」

「出ます！」

馬車は速度を緩めず、そのままに願います」

ザーラが、馬車の中から飛び出し、馬車を追い抜いて走る。

素早く妖魔の足を斬り落とし、崩れかかるところを、道の外に蹴り出す。

馬車は、倒れる妖魔をかすめるように走り抜ける。

後ろからザーラが追いついて、馬車に入る。

ゴンドナが、絶妙なタイミングで、ドアを開いて、ザーラを迎えて、

席に座ったザーラに、

「おつかれさま」

と声を掛ける。

御者席では、ボランテが口笛を吹いて、ザーラをたたえた。

8

それぞれが携行食糧で腹ごしらえをしながら、しゃにむに前進した。

昼をだいぶ過ぎたころ、

「見えた！」

とボランテが叫んだ。

ザーラは、扉を押し開けて、前方を見た。

海際の道の先が、切り立った岬になっている。

その上に、荘厳な建物が見える。

あれが、海の神殿であろう。

ザーラは、扉を閉めて、言った。

「白姫様。

神殿が見えました。

もうすぐです」

だが、力押しをしてきただけに、皆の疲労も深い。

幸い、傷は、ゴンドナが恐るべき回復スキルで完治させてくれたが、体と心の疲れは、ピークに達している。

特に、馬車から皆が降りない状況の中で、遠距離攻撃を続けたヒマトラは、消耗がひどい。

そのとき、ゴンドナが、

「ザーラ殿。

パーティーを組んでおきたい」

と言った。

迷宮探索では、パーティーであれば、正式のパーティー登録は、常識である。

経験値やドロップの公平分配からも、戦闘のしやすさからも、それは当然である。

お互いの正確な位置を知ることや、HPの管理が、生命に関わる場面も多い。

対して、外でのクエストでは、あまり、正式のパーティー登録はしない。

しても意味がない場合が多いし、細かなステータスなどは非表示にできるとしても、職業や本名、HPなどが丸見えになるのであるから、嫌がられるのである。

なぜ突然、今になって、ゴンドナがそんなことを言い出したのかは分からない。

しかし、何か意味があるのだろうと思い、ゴンドナに言われるまま、ザーラは自分をリーダーとしてパーティーを編成した。

そして、身乗り出して助手席に上がり、ボランテとヒマトラにいきさつを説明して、冒険者カードを触れ合わせて、パーティーに入ってもらった。

ザーラは、馬車の中に戻ってから、ふと、

この僧侶は、迷宮探索専門であつたのかも知れぬな、

と思つた。

迷宮探索での僧侶は、パーティーメンバーのHP管理を司る。

だが、迷宮の中でのような目覚ましいHP回復は、外では不可能であるし、外の常識では、HPの管理は自己責任である。

そんなことを考えているとき、がくんっ、と馬車が傾いた。

右前輪が脱輪したようである。

「くそっ。

体当たりされちまつた。

すまんっ。

馬を切り離すぞっ」

というボランテの声がする。

馬車は、少し速度を落としたが、勢いのまま前進する。

ががががと音を立てながら、右に左に揺れ、そして大きく左

にかしいだかと思うと、ごろんごろんと何回転かして、上下逆さまにひっくり返って止まった。

ザーラは、恐るべき反射速度を見せ、転がり始める馬車から、白姫を抱えたまま、扉を蹴破って脱出した。

ボランテも、うまく馬車から飛び降りたようであるが、ヒマトラは、放り出されて、うめいている。

腕の中の白姫は、ショックで気絶したようである。

ずっと緊張状態のまま、見えざる手を使い続けたあげくの横転であるから、無理もない。

白姫を、そつと砂浜に横たえたとき、

「ザーラ殿、近くの敵を、しばらく食い止めてくださいさね！」

と、馬車から乗り出してきたゴンドナが言う。

その額には、血が流れている。

いわれるまでもない。

近くの敵の気配には、最も注意を向けていたザーラである。寄ってくる妖魔たちを、次々斬り伏せていった。

ゴンドナは、とふと見れば、砂浜に両膝を突き、頭を下げて、何かを祈る様子である。

手に握り込んでいるのは、聖印であろうか。

と、ヒマトラと、その手当をしようとしていたボランテと、ザーラの体が、柔らかい光に包まれる。

そうか、なるほど。

レベルアップか。

と、今さらながら、ザーラは気が付いた。

ゴンドナは、高位の聖職者であったようだ。その場合、同じパーティーであるか、冒険者カードを預ければ、本人たちに代わって、神にレベルアップの請願をすることができる。ここしばらくの激しい戦闘で、レベルアップに必要な経験値がたまっていたのであろう。

これで、傷も癒え、体力も精神力も回復する。

「ゴンちゃん、褒めてあげるわっ」

「ゴンさん、助かったっ」

すぐに二人が戦線復帰する。

だが、ザーラは、気が付いた。

ゴンドナの額の傷は、そのままである。

ゴンドナは、レベルアップをしていない。

あれだけの戦闘をこなしても、レベルアップをしないということは、この僧侶は。

「箱は？」

「箱は！？」

目を覚ましたのであろう、白姫の音がする。

箱は、横転の衝撃で、馬車から転がり出ている。

砂浜であったことが幸いしてか、完全に壊れてはいないが、壊れかけて、中の白っぽい物が、少し見えている。

急いで、箱に走り寄った白姫は、様子を確かめたあと、

「始まって、始まってしまった。

でも、この位置なら、大丈夫のはず」

と、箱と岬の上の神殿を交互に見ながら、自分に言い聞かせるかのように口にした。

そして、冒険者たちを見回して、

「皆さん、この箱の中身は、間もなく準備を終えます。

今は、動かすことができません。

準備が調うまで、どうかこの箱を守ってください」

と言った。

四人の冒険者たちは、うなずいた。

最初に、海のほうに目をやったのは、誰だったか。

いつの間にか、波打ち際を埋め尽くすように、半魚人が湧いていた。

その後ろからも、さらに後ろからも、波の中から、続々と姿を現している。

サハギンである。

最後の闘いが、始まる。

9

「サンクチュアリ！」

ゴンドナの呪文が響き、箱と、その前で祈りを捧げる白姫が、半

透明の防護壁に包まれる。

深みのある、いい声だな。

と、あらためてザーラは思った。

続いて、ゴンドナは、

「ブレッティング！」

と、魔法を発動させた。

これを見て、ヒマトラの目が、怒りに燃え上がった。

この、腐れ坊主がつ、といわんばかりの眼差しである。

無理もない、とザーラは思った。

ゴンドナが、この補助魔法を、自分自身に掛けたからである。

ブレッティングは、確かに優れた支援魔法である。

物理防御力を格段に上げる魔法なのである。

だが、持続時間は、ごく短い。

迷宮でのボス戦でもあればともかく、長時間続く乱戦では、あまり意味がないといってよい。

それでも、特攻する前衛や、物理防御の弱い魔法職に掛けるなら、まだ分かるが、前線には出ない僧侶が自分に掛けるなど、なんという臆病、身勝手か、と思われても致し方ないのである。

そんな無駄なことに魔力を使うより、回復用にとっておけ、と思われて当然である。

だが、そう巡らせかけた思いは、直ちに破られた。

「ブレッティング！」

ブレッティング！

ブレッティング！」

続けざまの、ブレス四連発である。

ボランテが、ザーラが、ヒマトラが、この支援魔法のしるしである青い燐光に包まれる。

三人とも、あぜんとした。

準備詠唱の時間が、まったくない。

と、いうことは。

この人は、口で発動呪文を唱えながら、心の中で次の準備詠唱を行っているのだ。

そう気が付いて、ザーラは寒気を感じた。

感動のあまり。

そういうことができる魔法使いもいるとは、聞いたことがあった。だが、驚きは、そこで止まらなかった。

「リペリング・エビル！」

リペリング・エビル！

リペリング・エビル！

リペリング・エビル！」

またも、ゴンドナ自身を最初に、四人全員に魔法が掛けられた。

先ほどの青い燐光の外側で、かすかなオレンジの光が灯った。

「これは？」

この魔法を知らないザーラが訊ねると、ゴンドナは、

「魔を退ける技じゃ。」

闇や魔属性の敵に対する物理攻撃に、強い付加が付く。

また、魔属性の攻撃に対する防御力が上昇する。  
異常抵抗も上昇する。

さあ、行こうかの「

え？

と三人が立ち尽くすのを尻目に、ゴンドナは、サハギンの群れに向かって、どすどすと走った。

大きなメイスを、ぶうん、と振り回す。

五体のサハギンが、吹き飛ばされ、空中ではじけて消えた。

怒って、ゴンドナを取り囲む、サハギンたち。

集まるを幸いと、ゴンドナが、縦横にメイスを振るう。

そのたびに、何体ものサハギンが宙を舞い、砕け散って消える。

サハギンというのは、Aクラスの剣士でも、一撃では倒せない相手のはずである。

今、目の前で起きている、これは、何か？

などと考えている場合ではない。

自分たちも、モンスターに囲まれつつあるのである。

馬たちまでは守れないので、尻を叩いて逃がしてから、三人も、戦闘に突入した。

ザーラは、またも驚いていた。

軽く刀を振っただけで、すばすばと、サハギンが切れるのである。それだけではない、急所を狙わなくても、サハギンには多大なダメージを与えているようで、たいていの場合は、そのまま消滅してしまうのである。

技も力も要らない。

ただ振るだけでよい。

また、防御力の増大は絶大で、まともに攻撃を受けても、ほんのわずかなダメージしか通らない。

乱戦には、何よりありがたい支援である。

これほど多数の敵に囲まれながら、これほど心軽く闘えるとは、とザーラは感嘆した。

それにしても、支援が切れない。

ブレッシングと、もう一つのオレンジの支援を受けてから、もうずいぶんたつ。

とうの昔に効果を失っているはずなのである。

いくらなんでも長すぎる、と思っていると、再び、ゴンドナが、ブレッシングの呪文を四連発で唱え始めるのが聞こえた。

さらに、もう一つの支援魔法も、続けざまに四回唱えられる。

ザーラは理解した。

ゴンドナが、最初に自分に支援を掛けたのは、このためだったのである。

自分の支援が切れれば、メンバーへの支援も、続いて切れる。

そのとき掛け直せばよい。

つまり、全員に対し、切れ目なく支援を掛け続けるために、あのようにしたのである。

おそらく、ゴンドナは、自分の支援魔法は、ほんの少し先に切れるように、掛けた。

だが、そう気付いてみて、不思議な点がある。

支援魔法というものは、対象がすぐそばにいないければ掛けられない。

ブレッシングなど、文字通り息の掛かる距離でなければ発動しない、と聞いている。

また、対象とのあいだにわずかな障害物があっても発動しないと。

この乱戦の中、何十歩という距離があるのに、どうして支援を掛けることができるのか？

よく分からないが、たぶん、パーティーを組んだことと関係がある。

これが支援というものか、とザーラは思った。

相変わらず、白姫は、箱に向かって祈っている。

箱の中では、淡い光が、ごくゆっくり点滅している。

それは、次第に強く、速くなってきた。

敵の数は、減ったようにも思えないが、近づくものは、ちゃんと倒せている。

いつしか、役割分担ができていた。

ザーラは、前線で遊撃しつつ、敵を寄せ集める。

ボランテは、鎖付き星球と、回転しながら敵を倒して手元に戻る  
複刃の投擲武器を使い、スローイングナイフと炸裂弾を織り交ぜながら、広範囲に敵を制圧する。

ヒマトラは、敵の進軍を妨げるような遠距離射撃を行いつつ、時折、ザーラが集めた敵を大型魔法で片付ける。

ゴンドナは、支援を維持しつつ、ヒマトラを守り、抜けてきた敵を粉碎する。

防御力もずいぶん上がっているが、それでも傷は受ける。

そろそろきついかと思うと、

「ヒール！」

という呪文が響いて、傷が治る。

どうも、ちょうど百パーセント近いところまで回復するタイミングを見て、回復呪文を掛けているようである。

これも、とんでもなく遠い位置でも、呪文を成功させている。なるほど、これなら、わざわざパーティーを組んでHPをさらす価値は、じゅぶんにある。

依然、サハギンは湧き続けているが、戦線は安定している、と思えた。

いける。

と、ザーラは思った。

だが、そのとき、すべての希望を打ち崩すものが現れた。波打ち際から、はるかかなた。

海を割って、巨大な姿が立ち上がった。

ダゴンである。

海の妖魔たちの神、といわれるモンスターである。

いつしか、明るかった空は、鉛色の空に覆われ、海の色も灰色にくすんでいる。

その海と空のあいだをかき分けるように。

ゆっくりと、悪魔の魚神は、陸地に向かって進み始めた。

絶望に染まる耳に、ゴンドナの力強い声が響いた。

「皆、ここに集まれ！」

10

防御半径を縮めて闘いを続けながら、ゴンドナの話に耳を傾けた。

「あれは悪魔神じゃ。」

あれによく効きそうな魔法を知っておる。

倒せるとは思わんが、しばらく動けなくするぐらいはできるじゃろつ。

しかし、その準備詠唱には、とんでもなく長い時間がかかる。

そのあいだ、ブレスリングもヒールもできん。

わしは、まったく無防備になる。

サンクチュアリも、途中で解けるじゃろつ。

守ってもらえるかの？」

準備とやらが終わるまで箱を守りきる、というのがクエストの達成条件である。

そのための時間を稼ぐために守ってくれ、と僧侶は訴えている。それに応えたい。

だが。

乱戦で、攻撃を受けない、ということはいかなる達人でも、望むべくもない。

強力な防御魔法と回復魔法があったから、ここまで闘えたのである。

そして、ここまでの闘いで、疲労は限界に近い。

支援魔法なしで闘えというのは、手足を失い、命を失う闘いをしる、というに等しい。

いや、待て。

私には、その手段があるではないか。

と思い出したザーラは、腹に力を入れて声を出した。

「心得たっ。

ポランテ殿！

ヒマトラ殿！

お願いがあります。

アイテムを一つ出す時間を稼いでください」

ザーラが何をしたいのか、むろん、二人には分からない。  
だが、

「わかったわ！」

「任せとけ！」

と答え、手数を増やして、サハギンたちを押し返す。

長時間は続かない無理押しであるが、これで、ザーラに時間がで  
きる。

ザーラは、短く呪文を唱えて、ルームを出した。

ザーラの、開いた手のひらの向こうに、青い光の扉が現れ、左右  
に分かれる。

そして、素早く検索をかけ、一本の剣を取り出す。

ポランテは、目の端で、これをとらえていた。

ザーラの特異インベントリが、ザックでなくルームであることは、  
分かっていた。

だが、ルームの操作画面が見える位置にいたことはない。

あのルームの大きさ、あの操作画面の広さ、複雑さ、ありゃあ。

ありゃあ、王侯や大貴族家の当主が持つレベルのルームじゃねえ  
か。

あんなものを持っているということは、こいつは。

と思ったときには、ザーラは、ルームを閉じて、走り出していた。その走る速度、剣を振る速さは、それまでのザーラとは、まるで別人である。

瞬く間に、至近のサハギンを一掃すると、ザーラは言った。

「私が敵を退けますっ。」

ボランテ殿は、ヒマトラ殿とゴンドナ殿の援護を。

ヒマトラ殿は、遠距離攻撃のみお願いいたすっ。」

今の動きを見る前なら、そんなことができるか、と答えたであろう二人は、ただ黙ってうなずくしかなかった。

それほど、今のザーラの動きと破壊力は、異常だったのである。

ザーラが取り出した剣は、ポーラの剣といい、

攻撃力 + 200%

クリティカル発生 + 20%

移動速度 + 80%

攻撃速度 + 80%

HP 吸収 10%

SP 連続回復 20%

全ステータス + 60%

破損自動修復

という効果を持っている。

普通、ステータス上昇系の恩寵は、迷宮の外では無効である。

迷宮の中で使えば、HPが増えたり、攻撃力が増えて、無敵の力を与えてくれるアイテムも、外では役に立たないのである。

ところが、ポーラの剣は、すべての効果が、迷宮の外でも有効で

ある。

そのうえ、HP吸収は、迷宮の外はもちろん、中においても、その恩恵は圧倒的である。

吸収率が一割もあるというのは、それだけでも神話級の恩寵といわねばならない。

闘うべきモンスターのHPは、人間に比べてはるかに大きい。

モンスターを倒すための冒険者の一撃も、相応の威力である。

そうして削ったHPの一割を吸収できるなら、体の損傷を回復しつつ、永久に戦い続けられる。

父より受け継いだこの剣は、あまりにすぐれた恩寵品であるため、ザーラは、使うべきでないと、封印してきた。

これに慣れたら、まともな闘いはできないからである。

人に過ぎた力であるから、反動も尋常ではない。

その封印を、今こそザーラは解いた。

これだけ速度付加があれば、敵などとまっぴらに等しい。

これだけ攻撃力付加があれば、触れるだけですべては吹き飛ばす。

それでも、体のあちこちが傷つくが、それをただちに修復する効果まで持っているのである。

自分たちは、今、神話の中の一つの場面を見ているのではないかと戦士と女魔法使いは思った。

少年の活躍で、近くの敵は、ことごとく粉碎され、自分たちは、呆然と少年の暴風のごとき立ち回りをしている。

はぐれて近づく、ごく少ない敵は、疲労の極にある二人でも、余裕をもって対処できた。

そうしているあいだに、ゆっくり、ゆっくりと、しかし確実に、ダゴン、陸地に近づいてくる。

ゴンドナの準備詠唱は、まだ続いている。

ダゴンの巨体は、近づくほどに全身を現し、ますます威圧感を高めていく。

ほんとうに、あれに対抗する手段などあるのか、と思わせる破壊の力をまとい、瘴気を振りまきながら、その足が、ほとんど波打ち際に届こうとするとき。

待ち望んだ発動呪文が響き渡る。

「コンヴェイクション・ハンマー！！！」

遙か高空より、鉛色の雲を掻き裂いて、数条の光の帯が海に落ちる。

天空に、光の渦が生まれ、瞬く間に雲を巻き込んで広がると、その中央に、巨大神の持つべき光のハンマーが現れた。

虹のかけらを振りまきながら、ハンマーは、速度を次第に増し、まさにダゴンの頭上を目指して下りてくる。

その全長は、ダゴンそのものより、なお大きい。

たちまち、光のハンマーは、ダゴンをとらえ、極彩色の破片をまき散らし、神々の国のオルガンのごとき荘厳なハーモニーを響かせて、この悪魔神を打ち据えた。

見たこともない光景に、冒険者たちは、動きをとめて、見入っている。

やがて、ダゴンは、ぶすぶすと煙を放ちながら、ぐらつと揺らめき。

後ろ向きに倒れて、巨大な水しぶきを上げた。

砂浜を埋め尽くしていたサハギンたちも、光のハンマーの余波を受け、吹き倒されたまま、動こうともしない。

ダゴンを倒したためか、サハギンの湧出も止まったようである。

勝ったのだ。

ボランテとヒマトラが、もつれるようにくずおれる。

肉体が、精神が、心が、限界だったのである。

ザーラも、今にも倒れそうである。

だが、倒れない。

神器で力を引き出した揺り戻しのため、苦痛が強すぎ、気絶することもできないのである。

極大魔法を放ち終えたゴンドナも、うつぶせに倒れたままである。あのようなすさまじい魔法を、この男は、どれほどの犠牲を払って行ったのであろうか。

突然訪れた静寂。

波の音しか聞こえない。

天界より呼び寄せられた魔法により、黒雲も打ち払われたのか、空は澄み切っている。

日は傾いて、空の色は、かすかに夕暮れの色に染まりつつある。その中で、

「生まれる!」

という白姫の声が響いた。

ぴきぴき、と音が響き、箱を壊して、中から現れたものは、

一匹の白い竜であった。

竜。

それは、古代の伝説にしか現れない神霊である。

迷宮の中の、神性のかけらもない、ドラゴンという名のモンスターならともかく、地上で竜を見ることなど、現代ではあり得ないと誰もが思っている。

その竜が、今、目の前にいる。

天と地の青と、夕暮れに近い太陽の赤を、その体に映しながら、神秘そのものである生き物が、あどけないまなざしを、まっすぐにザーラに向けている。

その体長は、大人の人間ほど。

ぷかり、と浮かび、

「きゅいー」。

きゅきゅいー」

と鳴き声を上げている。

頭部と腹部は、真珠のような輝きを放つ鱗で覆われている。

背中も、より硬質な質感の鱗で覆われている。

白く透き通る羽はまだ小さく、羽ばたきもしていない。

羽ばたいていないのに飛んでいるということは、生まれながらに、そのような特殊スキルを発動できるのであろう。

どさっ、という音がする。

白姫が倒れている。



「あなたは、お仕えしていたかたから、この竜の卵を託されたのですね」

「そうです。」

わがあるじカルダン様とそこご夫君の、最初で最後のお子であるこの御子を、カルダン様は、私に託されたのです。

私は、カルダン様にお仕えした水の精霊で、名をパクサリマナと申します」

「竜神カルダン様ですか。」

では、あなたは、ナーリリアをご存じですか」

「ナーリリア！」

かわいいナーリリア。

なんと懐かしい名を聞くことでしょう。

いったい、あなたは、どうしてその名をご存じなのですか」

ザーラは、事のあらましを伝えた。

「ああ、では、ナーリリアは、愛しい人と出会い、幸せに暮らしているのですね。」

しかも、人に役立ち喜ばれて。

なんてうれしい知らせでしょうか。

こんなうれしい知らせを、カルダン様にお届けできるなんて。

ザーラ様、ありがとうございます」

白姫は、涙を流さなかった。

すでにその体全体が涙であった。

「女神カルダン様の夫君も、やはり神竜なのですか」

「いえ。」

「ご夫君は、人でした。人でしたが、希代の魔術師で、史上有数のダンジョン・メーカーであられたのです」

ふと気が付けば、海の神殿が、淡い光を発している。

その光は、生まれたばかりの竜の子に降り注いでいるように見える。

「神殿が、光っている？」

ザーラのつぶやきに、白姫が答えた。

「あの神殿は、今は海の神殿と申しますが、もとは竜の神殿といったのです。」

かつて、カルダン様が庇護を与えた国々は、今のゴルエンザ帝国の帝都付近にありました。

その繁栄をうらやんだ国々に攻められ、カルダン様が、安住の地を探してたどり着かれたのが、ここだったのです。

やがて、カルダン様を奉ずる人々が集まるようになり、神殿が築かれました。

人々の篤い信仰を、長年にわたって受けたため、神殿には、今も強い守護力が働いております。

また、あの神殿には、カルダン様の父神であらせられる天空神様、母神であられる地母神ポーラ様の加護が込められております。

けれども、やがて、この地も安全ではなくなりました。

自分とともにあつては、わが子も滅びるゆえ、そなたに託す、とおっしゃって、私を残して、カルダン様は、ご夫君とともに北に去り、現在バルデモスト王国のある地で、命を終えられました。

カルダン様は、神々の中でも、人々を苦しめる妖魔たちを、もっとも多く討伐なさったかたです。

妖魔たちの恨みは深く、カルダン様の匂いのする卵は、彼らにとって仇敵そのものであったのです。

ですから、私は、千年にわたり、気配を漏らさぬ魔法を掛け続けました。

しかし、時満ちて誕生が近づくと、あふれ出す神気は隠しようもなくなり、妖魔たちが襲い掛かってきたのです。

それを退けるため、カルダン様は、当代の英雄たるべきかたがたを、お差し向けくださいました。

あなたも、ほかのかたがたも、ご自身でお気付きではないとしても、カルダン様と縁をお持ちのはずです」

生命力を失いつつあるのであろう。

白姫の体は、だんだん透き通り、声は小さくなっていく。

竜の子は、つぶらな瞳で白姫を見守り、時々ザーラに物問いたげな眼差しを送ってくる。

「この地なら、竜の御子は、安全に成長なさることが出来ます。

いえ、今でも、ご誕生なさった御子の神気は、妖魔たちには滅びの光。

また、ご誕生により、神殿に込められた天空神様と地母神様のご加護もよみがえりました。

もう、大丈夫です。

もう。

今、すべての約束は、果たされました」

消え入るように、最後の言葉を言い終えると、白姫の体は、水と  
なって砂に吸い込まれて消えた。

その水の一部が手に触れたとき、ザーラの苦痛は癒され、同時に

耐え難い疲労感に襲われて、ザーラは気を失った。

沈みかかる陽光に体を紅く染めた竜の子と、海から吹く風と波の音だけが残された。



首と三肢をばたばたさせて起き上がるうとしていたヒュドラは、たちまち死んだ。

ヒュドラの心臓は、不死身性のよりどころであり、たとえば体から切り離しても、生命を失わない。

取り出した心臓を切り裂いても、傷はすぐに修復される。

心臓を取り出された本体も、それだけでは死なない。

まして、体の中にあるとき、その心臓を攻撃するのは、無駄ではない。

と、人間たちは理解していた。

ところが、実は、傷つけるのではなく、心臓を丸ごと、ばくばくと食べてしまえば、ヒュドラは死ぬのである。

だから、はるかな昔、竜族や巨人族がヒュドラと闘ったときには、心臓を食べることによって倒すことが、普通に行われていた。

しかし、今の人間に、このことは知られておらず、ミノタウロスにしても、誰かに教えてもらったわけではない。

ただ、ヒュドラの心臓に、何ともいえない力強いものを感じて、

食べてみたい、

と思つて、実際にやってみたところ、ヒュドラが死んだ。

その経験から、この方法を知つたのである。

ヒュドラが死んだあと、そこには赤黒い、子どもの握りこぶしほどの肉が残った。

ミノタウロスは、それを拾い上げ、インベントリに入れた。

不死の肉

と呼ばれる貴重アイテムである。

地上では、これを用いて、強力な薬を作ることができる。死にかけた病人でも元気になり、老人は若返るといふ。

効果は永続的ではないが、それでも、金を持つ老人には、絶大な人気がある。

また、回春と精力増強の薬の原料ともなるため、後宮に売って、大金や人脈をつかむこともできる。

だが、これを得た冒険者は、よほど金に困っているでなければ、売ることはない。

なぜなら、ヒュドラの心臓は、迷宮内で服用すれば、一定時間、損耗した体の部位を瞬間的に修復する効果があり、致命的なダメージからさえ、命を守ってくれるからである。

冒険者たちは、それを、不死効果、と呼んでいる。

不死効果は、ほんの数呼吸のあいだしが続かず、あまり大きなダメージを受ければ、ただちに効果が停止するが、しかしこれは、最下層で闘う冒険者たちにとっては、最後の切り札となる。

ミノタウロスは、石室を出た。

気分は晴れなかった。

やはり、こんなものをいくら倒しても、どうにもならない。

こんな闘いに、喜びはない。

こんな敵に比べたら、メタルドラゴンのほうが、ずっとましだった。

ヒュドラより一回り大きい体躯。

三つの首は、それぞれ二本の角で風や水を操り、衝撃波、高熱、超低温のブレスを吐く。

青い燐光を放つ半透明の翼を広げて、広大なボス部屋を飛び回り、三本の尾から雷を落とす。

鱗の硬さは、ヒュドラをしのぎ、魔法攻撃にも物理攻撃にも、桁外れの抵抗を持っていた。

そのうえ、高い知性を持っており、こちらの行動の裏をかいてきた。

初めは、どうやって倒したものが、見当もつかない敵であった。だが、あのメタルドラゴンでさえ、今闘えば、物足りなく感じるであろう。

強い敵を俺に与えてくれ。

俺を苦しめる、強い敵を。

あの人間に勝てる力を、俺にくれる、本当に強い敵を。

ミノタウロスの全身が、そう叫んでいた。

よい闘いへの飢えは、煮えたぎる濁流となって身の内で膨れ上がり、体中の毛穴から吹き出しそうであった。

このときのミノタウロスは、まだ知らなかった。自分の願いが、とうにかなえられていることを。

## 第4話 エルストラン迷宮の亡霊

1

枯れ木をたくさん打ち鳴らすような音だな、

と、ザーラは思った。

十何体目かのレッド・スケルトンを倒しての感想である。

今日は、初めて実戦で、バラストから饞別にもらったバトルハンマーを使っている。

とても重たいが、破壊力は抜群で、レッド・スケルトンはおろか、ブラック・スケルトンでさえ、一撃で粉碎できる。

その、ブラック・スケルトンが、後ろから近づいて来る。

なぜ、誰も、補助してくれぬのであろうか。

と、今さらながら、寂しく思う。

これでは、パーティー戦ではなく、個人戦ではないか、とザーラが思うのも無理はない。

せっかく、スカウト、剣士、戦士、支援魔法使い、攻撃魔法使い、僧侶という、理想的といっていい編成なのに、それがまったく生かされていない。

スカウトは、倒したレッド・スケルトンの数を数える以外のことをしない。

戦士は、普通のスケルトンを引きつけると言っていたが、三体を相手にするだけで精一杯なので、危なくて任せられない。

攻撃魔法使いは、余分なレッド・スケルトンを倒してしまっただけじゃないから、と理由立てて、まったく戦闘に参加しない。

支援魔法使いは、一生懸命支援をしてくれようとはしているが、スケルトンがうじゃうじゃいる中で、ザーラにうまく近づけず、支援を切らしたままである。

僧侶は、不要なときに回復をするかと思えば、必要なときにはほかのことに気を取られている。

どうしてこんなことになってしまったのであろう、

と、ザーラは思った。

2

海の神殿近くの砂浜での戦闘のあと、最初に目を覚ましたのは、僧侶のゴンドナであった。

夜明け少し前のことである。

少し遅れて、ザーラとボランテとヒマトラが、ほぼ同時に起きた。起きてすぐ、ザーラは、異常に気が付いた。

体が痛くない。

全身が爽快で、生気に満ちている。

冒険者カードを出して確認すると、なんと七十九レベルになっていた。

戦闘前のレベルアップで、七十二になった。  
それから七つも上がっているのである。

たしかに山ほどの敵を倒したが、それにしても、あり得ないほどのレベルアップである。

最近、このようなことが、何度も起きている。  
ゴンドナなら分かるかもしれないと思い、

「ゴンドナ殿。

レベルアップというものは、敵を倒して得られる経験値によってのみ起こるものと思っていました。

違うのでしょうか」

と訊いた。

「ふむ。

冒険者の実践的理解としては、とてもすっきりした、分かりやすい考え方じゃのう。

それでよい、といえばよい。

じゃが、まあ、より本質的にいえば、レベルアップというのは、  
神の感謝が生き物を成長させる出来事なのじゃ」

「神様の感謝ですか？

よく意味が分かりません」

「ここに饅頭屋があるとす。

饅頭に、一個いくら、と値段を付けて、それを売る。  
じゃがのう。

かわいい孫が来たら、饅頭屋は、金を取らずに饅頭をやるかもし  
れん」

「はい」

「そのかわいい孫が川でおぼれて、それを助けてくれた人がいたら、お金を取らずに、饅頭をどっさりあげるかもしれない」

「饅頭屋が神様で、饅頭が経験値ですか」

「そうじゃ」

このモンスターを倒したら経験値いくら。

レベルいくつだから、あと経験値いくらで、次のレベル。

これはの。

一個いくらで饅頭を買うようなものじゃ。

対価と見返りが常に釣り合っているように見えるから、法則のよ  
うに人は思う。

しかし、そんな保証は、本当はないのじゃがな。

饅頭屋が客の態度に怒って饅頭を売らんこともあるかもしれない。

店をやめてしまつかもしれん」

「そうであるなら、なぜ、一個いくらで饅頭を買えるようなレベル  
アップが、現在あるのでしょうか」

「それは、わしにも分からんがの。

もともと、神が人に恩寵としてくだされたのか。

人が求めて、神が応えたもつたのか。

いずれにしても、そうすることによって、大きな意味で神の御心  
にかなうような何かがあったのじゃろうな」

「私はどこかで、神様のお孫さんを助けたのでしょうか」

「助けたんじゃろうな」

神が、実現したいが神の力だけではなしえず、人がこれをしてくれたらと、願っておられる内容がある。

それをなしてくれた人間は、神にとって、孫を助けてくれた恩人に等しい。

神は、その人間に感謝なさる。

その感謝がそのまま、経験値という恩寵となるのじゃ。

神の側から働き掛けが起きるので、あらためて請願をせずとも、レベルアップが起きるわけじゃな」

「なるほど。」

そういわれてみると、ふに落ちる点もあります」

ボランテもヒマトラも、大幅なレベルアップをしていたようで、二人の会話を興味深げに聞いていたが、

「その話は、そのへんでいいわ。

あたしが倒れたあと、何が起きたか、教えて。

それから」

と、傍らの白い子竜のほうを見て、

「こ、これって、やっぱり、あれ？」

「地上で最後と思われる竜の御子みこです」

ボランテとヒマトラが、感に堪えない様子で、あらためて竜をじろじろ観察し始める。

竜の子のほうでも、これをおもしろがって、互いに相手の周りをぐるぐる回り始めた。

ヒマトラが、足をもつれさせて転ぶ。

竜の子が、きゅいきゅいと喜びながら、ヒマトラの上空で、勝利の踊りを踊る。

いつの間にか、怪物たちは消え去り、静かで平和な浜辺に、朝の日が昇るうとしていた。

3

ザーラは、みんなが倒れてからのことを、できるだけ正確に語った。

そのあと、一同は、白姫しろひめの墓を作った。

その前で祈祷を捧げたあと、報酬を分配した。

ザーラは、竜の命名とはどうすればよいか、ゴンドナに相談した。ゴンドナは、決まった様式などないと思うが、王の長子の命名式になぞらえてやってみるか、おもしろがって協力してくれた。

みんなから供物をかき集めると、ゴンドナは、ありあわせの素材で、見事な祭壇を組み上げてみせた。

さあ始めるかと、ゴンドナが聖衣をインベントリから出して身に着けたときには、みんな声を失った。

枢機卿カテドナルの正服であったからである。

ゴンドナの采配にしたがって命名式は進められ、ザーラは、竜の子に名を付けた。

一同は、天に手を差し伸べて、命名の出来事を証言し、寿いだ。

それから宴会になった。

祭りのあとの宴会は、直会のりかいというらしい。

供えられた食材が料理され、供えられた酒を飲んだ。  
供えられていなかった酒も、どんどん飲んだ。

ゴンドナが最高位の聖職者であると知って、ヒマトラは、敬称を付けて呼ぶようになった。

「ゴン猊下げいか、そっちの肉取って。

あ、そのワイン、こっちにちょうだい。  
ちがうわよ。

瓶ごとよこしなさい。

ありがとう。

さすが、枢機卿しゆきけいねえ。

いーワインだわー。

猊下げいか、このワイン、あとで十本ちょうだいね」

相変わらず敬意はこもっていないが。

ポランテは、ある国の騎士団でそれなりの地位にいたらしいが、別の国との戦争で、上司の判断に意義を申し立て、すったもんだのあげく、上司をぶちのめして出奔してきたらしい。

ヒマトラは、ある国で宮廷魔術師見習いだったが、手込めにしようとした上司を黒こげにして出奔してきたそうだ。

ザーラは、自分は親の遺志を継いで強敵と闘うために修行の旅をしていると言った。

ゴンドナは、自分の経歴を語らなかつた。

このあと、どうするか、という話になった。

ゴンドナは、神殿に行くという。

竜の子も、神殿に連れていってくれることになった。

ボランテと、ヒマトラは、五人が出会った街に戻るといふ。  
どうしても、ぎゃふんといわせたい相手がいるらしい。

ザーラは、ギル・リンクスのふるさとを一目見てから南に行く、  
と言った。

ヒマトラは、金が入ったからといって葉巻はだめよ、とボランテ  
に言い、ボランテは、お前にそんなこと言われる筋合いはない、と  
応じた。

ヒマトラは、自分自身に筋力上昇の呪文を掛け、ゴンドナからメ  
イスを借り、ボランテを張り倒した。

そのとき、ボランテは、確かにごつんと派手な音を立ててメイス  
に当たって倒れながら、ほとんどダメージは受けていないという絶  
妙の見切りを見せ、ザーラをうならせた。

使えないと言っていた支援魔法をヒマトラが使ったことを、あえ  
て指摘する者はなかった。

竜の子は、エツテナの燻製が、ひどくお気に召したようだ。

しっかり燻いぶされた端の固いところを、竜の子のプレスで軽くあぶ  
ると、最高の美味であることを、ゴンドナが発見した。

最高に楽しい夜となった。

4

翌朝、一同は、別れた。

まず、馬に乗って去って行くボランテとヒマトラを見送った。

二頭の馬は、砂浜から少ししか離れていない林の中にいたようで、ポランテが口笛を吹くと、戻って来たのである。

二人の姿が峠の向こう側に消えるころ、ゴンドナが言った。

「実は、わしも、目が覚めたらレベルが上がっておってなあ。それだけではないのじゃ。

コンヴィクション・ハンマーを使うとき、寿命の半分を差し出したのじゃが、今朝見てみると、半分減るところか、元より少し増えておったようじゃ。

大きな饅頭を頂いた、ということかの」

ザーラは、

寿命の半分というのは、残り寿命の半分なのか、それとも、全寿命の半分なのか。

自分の寿命を見ることができなのか。

と聞きかけたが、やめた。

この僧侶に、不用意な質問をすると、そんなことまで知りたくなかったと思ってしまうような答えが返ってきそうで、怖かったのである。

竜の子は、初めはザーラのそばを離れなかったが、ザーラが持ち合わせている燻製肉をすべてゴンドナに渡すと、今度はゴンドナのそばを離れなくなった。

「わしは、これから、しばらく、神殿で祈念を込める。

ザーラ殿のことも、祈っておるからう。

神のみわざは贖むべきかな。

若き冒険者の旅に、幸多かれ」

ザーラは、頭を垂れて、祝福を受け、旅立った。

ユトの島を訪れて感慨を深め、大陸に戻って、半島を海沿いに南下した。

モンスターに襲われている隊商を見かけて助力したところ、乞われて護衛に加わるようになった。

アルダナに入った辺りで別れようとしたが、隊商の長が、ロアル教国まで来てほしいと言う。

この辺りは、盗賊が多いのだという。

もともとザーラは、ロアル教国に入るつもりはなかった。

ロアル教国は、アルダナの国の中にある宗教国家で、形式的にはアルダナから自治を許された小領主といった立場であるが、諸国の神殿の本山にあたる大神殿をいくつも抱え、大陸全体から聖地と見なされている。

その反面、世俗化した聖職者が横暴なふるまいをしたり、異なる神を奉ずる神殿同士のあいだで権力闘争が盛んであるなどといった噂もあり、ザーラとしては、あまり足を踏み入れたい気持ちがない。

入国審査が厳しいらしい、というのも、ロアル教国に入りたくない理由の一つであった。

だが、別にやましいところがあるわけでもない。  
とにかく関所まで送ることにした。

関所というのは、巨大な砦であった。

砦の両横には、長く高い壁が築かれており、砦を過ぎれば、もうそこが街であるという。

入国審査待ちの長い列ができているのを見て、ここで別れようか

と思ったが、せつかくここまで来たのだからと、列に並んだ。  
審査を受けるまで、一日かかった。

冒険者カードを審査した係官が、大きな声で言った。

「おお！

Sクラスの冒険者殿ですか。

ようこそ、ロアル教国に。

神々と教主様との名において、あなたを歓迎します。

神々の栄光は永遠なり」

周り中の視線を集めた。

護衛してきた隊商の長までが、目を見張っている。

それからが、大変だった。

報酬をもらって別れようとしたが、隊商の長は、護衛の専属契約  
をしつこく迫ってくる。

断つても、今日の宿はどうしますかとか、よかつたらお世話しま  
すと言われ、それも断ると、案内の人間を付けると言う。

長だけではない。

さまざまな人々が、ザーラを取り巻き、親切がましく話し掛けて  
は、何とか関係を結ぼうとしてくる。

最後には、冒険者ギルドに行くので、用事があればそちらにと言  
い切り、何とか包囲網を脱出した。

すると、今度は、冒険者とおぼしき人々が、ギルドに案内すると  
言ってまとわりつく。

場所だけ教えてくださいと頼むと、目の前にギルドがあった。

それからが、さらに大変だった。

冒険者ギルドに行くと、奥に通され、上級職員が面接にあたった。ここでは、クラスだけでなく、レベルまでも表示させることを求められた。

冒険者カードを見た職員が、ぎよつとした表情になり、しばらく席をはずしたあと、ギルド長なる人物が面接に加わった。

これまでの業績を、細かに聞かれた。

バルデモスト王国のサザードン迷宮で冒険を続けていたこと、その後、思うところあって旅に出たことを話した。

ギルド同士では、非常な遠方でも、情報のやりとりというものはできるし、また、情報を要求された場合、断らないのが常識であるから、隠したりごまかしたりしても、あまり意味がない。

ただ、旅に出てからの冒険の中身は、隊商の護衛以外については、依頼主の秘密に関わるからと、村や個人から、いくつかのクエストを受けたことを述べるにとどめた。

大まかな旅路を述べるとき、ガール大山脈を越えたと言うと、ギルド長と職員が、あぜんとした顔になった。

Sクラス冒険者であるということは、冒険者レベルが六十一以上か、あるいは、五十一以上で格別の功績を挙げている、ということにほかならない。

レベル五十一以上ということは、戦闘力において大国の上級騎士なみの力がある、ということである。

諸侯同士のいさかいが、片方に有力なSクラス冒険者が雇われたとたん、ただちに収まった、などというのは、よく聞く話である。

その戦闘力や人脈によって、戦争の帰趨が決定づけられてしまうからである。

また、各国は、常に、大小の盗賊団やモンスターに悩まされているが、自前の兵力の損耗は国家の浮沈に関わるから、金で雇える最強の戦力であるSクラス冒険者は、できるだけ多く囲い込みたい。

単に戦力としての働きだけではない。

冒険者は、人にもよるが、調査や分析などの能力も優れている場合が多い。

作戦立案や情報収集に、高い実力を備える冒険者もいる。

名の通ったSクラス冒険者は、複数の国の利害がからむ問題で、使者や調停者としての役割を担うこともある。

一時的に、騎士団の指揮をしたり、参謀につくこともある。

だが、Sクラス冒険者は、もともとの数が限られているうえに、迷宮にこもって、一般のクエストは受けよとしない場合もある。外で活躍するSクラス冒険者は、たいていの場合、固定した任務を持つ。

そうでない場合は、重要案件を、次々に引き受けることになる。老齢になれば、現場では使にくい。

冒険者ギルドにとり、Sクラス冒険者は、最大の商品であると同時に、ギルドが高い自立性を保ち、あらゆる干渉をはねのけて存立し続けるための切り札である。

であるから、常にその所在を把握し、緊急度の高い公的な案件については、義務に近い形で、依頼の斡旋をすることがあるかわり、国家に対してさえ、Sクラス冒険者の権利を守る防波堤となるのである。

新しいSクラス冒険者は、誕生した直後に、その国のギルドや権

力者に囲い込まれるものである。

ところが、今、ロアル教国に、一人のSクラス冒険者が、ふらりと現れた。

なんと、そのレベル、七十九。

しかも、十六歳という、信じられない若さである。

そのうえ、どこの組織に属するわけでもなく、修行の旅をしているという。

ギルド長は、この若者を縛り付けるために、手段は選ばない、と決心していた。

今、こうして、必要事項の確認という名目で足止めしつつ、裏では、目端の利く職員に命じて、酒、宿、女、観光案内、魅力的な仕事、地位、高性能武具の提供など、ありとあらゆる懐柔作戦を立案準備させているところなのである。

こんなことにならないよう、バラスト・ローガンの甥であり、現在のミケーヌ冒険者ギルド長であるドルーガは、ザーラの冒険者クラスをAまでで押さえておきたかったのであるが、あれよあれよという間に、レベル六十五に達してしまったので、Sにしないわけにいかなかった。

もし、レベル六十五の冒険者をAクラスにとどめているなどと知れば、ミケーヌの冒険者ギルドは、よからぬ企みを持っている、と見なされ、信用を失ってしまう。

さて、理由を付けて引き留めようとするギルド長を振り切って、ザーラは、応接室を出た。

それから、あらためて大変だった。

ロビーは、人で埋め尽くされていた。

その誰もが、ザーラに用事があった。

あなたにいいご提案があるのです。

私の家に来ませんか。

食事をごちそうさせてください。

得意武器は何ですか。

もちろん独身ですよ。

素晴らしい場所にご案内します。

お話ししたいんです、ちょっとでいいから時間を下さい。

冒険者が、商人が、役人が、彗星のように現れた若きSクラス冒険者と縁故を結ばんとして、ザーラを取り囲んで、自分に注意を向けさせようと、話し掛けてくる。

手や体を引つ張つる者もある。

髪の毛をつかむ者もある。

いつしかマントはもぎ取られ、髪はぐしゃぐしゃになり、体には、擦り傷やあざが増えていく。

頑丈なはずの服も、あちこちが傷んでいる。

なんとか剣は手から話さないよう抱え込んでいるが、ベルトはついに取られてしまった。

視界の端で、ギルド職員が人の波に押し流されていく。

サハギンなら、近いところから順番に斬り捨てていけばよい。

だが、人間には、どう対処すればよいのか。

ザーラの対人スキルは、高くなかった。

これは、まさに集団攻撃である。

すさまじい言葉の嵐と人間の密集で、意識が怪しく明滅しはじめる。

ああ、毒蜂に似てるな、

と薄れかける意識の中で思う。

五十レベルぐらいの強いモンスターを危なげなく倒す冒険者が、五レベルとか六レベルの、昆虫や小型爬虫類モンスター多数に囲まれて、命を落とすことがある。

毒蜂などが、よい例である。

心の準備ができていれば、爆炎弾などのアイテムや虫除けなどで危険を回避できるのに、いきなり囲まれてしまうと、対処ができなくなることもあるのである。

一匹一匹の毒は大したことがなくても、連続的に刺され続ければ、大きなダメージとなる。

私は、ここで死ぬのか。

ああ、迷宮が、懐かしい。

モンスターたちが、懐かしい。

と抵抗を諦めかけたザーラの耳に、

「Sクラスなら行ける迷宮があるから、一緒にどうだい」

という声が飛び込んできた。

ザーラが、その声の主の手をつかみ、

「行きましょう、迷宮に！」

と答えてしまったことを、誰が責められるであろうか。

「まずは、外に出るぜっ」

と叫んだ相手の言葉に従い、ザーラは、人波をかき分けて、ギルドの外に出た。

行動方針さえ決まれば、あとは技術の問題である。

敵が押し寄せてくる渦の中で、押して、引いて、層の薄い部分を作り、そこをすり抜けていくことは、戦闘スキル的一种といってよい。

ザーラは、対人スキルは低くとも、戦闘スキルは高かった。

ザーラに続いて、迷宮探索を呼び掛けてきた相手も、ギルドを出てきた。

ザーラより、少し年上であろう。

「こっちだ！」

その男は、スカウトとみえて、なかなか機敏な動きをみせた。

道を走り、露地を抜け、時に壁を上がって、屋根を越え、二人は追跡者たちを振り切った。

「さすが、やるな。

俺にあっさりついてくるなんて」

汗を拭いながら、少し息を乱して、相手の男が手を差し伸べてくる。

握手を交わしながら、

「ポリアプルだ。  
よろしくな」

と自己紹介をしてきた。

7

ポリアプルと名乗ったスカウトは、仲間が待っているという宿に、  
ザーラを連れて行った。

駆け出しの冒険者が泊まるような安宿だったが、ザーラは気にし  
なかつた。

冒険者の生活は浮き草のようなもので、金回りのよいときもあれ  
ば、悪いときもあるものだからである。

合流した仲間たちと共に、ポリアプルは、ザーラを伴って、少し  
離れた食堂に行き、一部屋を貸し切りにした。

そして、一同に食事と飲み物が行き渡ると、まずは、乾杯をして、  
食事を始め、一同の紹介をした。

ザーラがSクラスの剣士だと知って、仲間たちは、大いに盛り上  
がった。

迷宮の名は、エルストラン迷宮というらしい。

ロアル教国を始め、アルダナには、迷宮が多い。  
その種類も多様である。

エルストラン迷宮は、多重型迷宮であるという。

多重型迷宮というのは、入り口を入ると、他の冒険者たちとは違う位相に放り込まれる迷宮である。

パーティーを組んでいる仲間以外とは、出会いたくても出会えない。

例えば、Aというパーティーが、第一階層のボスを倒したとする。同時刻に、Bというパーティーが、同じボス部屋に行く。

そこには、ちゃんとボスがいたのである。

つまり、入っているパーティーと同じ数だけの、同じ中身を持った別々の迷宮があるようなものである。

多重型迷宮では、一度入ってしまえば、他のパーティーに邪魔されたり、宝物を先取りされることがない。

この場合、たとえ、迷宮入り口に、ザーラを待ち構えている人々がいても、中に入ってさえしまえば、煩わされることはない。

今のザーラにとって、まさに願ったりかなったりの迷宮である。

ポリアプルと仲間たちは、こことは別のロマル教国の街に生まれ、固定パーティーを組んで、迷宮探索やクエストをしてきているのだという。

しばらく前から、この街で情報収集をしていて、ポリアプルは、大変な値打ちのある古文書を、運よく入手した。

それには、ある特定条件下での、エルストラン迷宮のクリアの仕方が描かれているというのである。

「あなたは、エルストラン迷宮を知らないんだな。

この国じゃ、有名なんだけどな。

別名を、幽霊迷宮。

階層は、一つだけ。

そこに、八つの部屋がある。

モンスターは、スケルトンのみ。

通常のスケルトンと、レッド・スケルトンと、ブラック・スケルトンがいる。

ある条件を満たすやり方で、このスケルトンどもを倒していくと、ボス部屋に飛べる。

このボスというのが、幽霊なんだが、ボスに出会ったら、相手がアイテムを渡してくる。

そのアイテムというのが、こちらの職業に合わせた、とても珍しくて高性能の武器なんだ。

パーティーが何人であろうと、そのそれぞれが、自分に合った武器をもらえる。

その武器をもらうのを拒否すると、幽霊と闘うことになるらしいんだが、ここは闘っちゃいかん。

武器を手に入れるのが目的だからな」

ここで、エールを飲んで、喉を潤して、説明を続ける。

「クリアのヒントは、入り口の石に表示されている、といわれてる。入り口の手前に、細長い岩が突き立っていてな。

その上の部分は、斜めにすぱっと切れてる。

そこに、宝玉が十二個埋められているんだが、これが、色とりどりに輝いている。

この宝玉は、誰かが迷宮をクリアするたびに、配色が変わるんだ。その配色は、中でどういふふうに変化するのか、倒せばいいかを示している、といわれてるが、それを読み取る方法は、誰も知らない。

結局、手当たり次第にスケルトンどもを倒していったら、運がよければボス部屋に飛べる、つてのが、みんながやってるやり方さ。

ま、あんまり」

もう一度、ぐいっと、エールをあおる。

「利口なやり方とはいえねえがな。  
それでも、二年か三年に一度は、ボス部屋に飛べるやつが出る。  
確かにそのたんびに、宝玉の色は変わる。  
けども、その色が何を示してるのか、分かるやつはいなかった。  
今まではな」

ポリアブルが、思わせぶりに、インベントリから古文書を出して、  
最初のページをザーラに見せた。

「ここに、十二の宝玉の配色が描かれてるだろう。  
これを描いた冒険者は、この配色だったときに、迷路をクリアし  
た。」

そのクリアの条件を、別のページに書いてあるんだが「  
ぐっと身をザーラに寄せ、ささやくように続ける。」

「いいか。」

普通のスケルトンと、ブラック・スケルトンは、関係ねえ。  
倒しても、倒さなくてもいいし、何体倒してもかまわねえ。

問題は、レッド・スケルトンさ。

こいつは、倒すべき数が、部屋ごとに決まってる。

それ以上でも、それ以下でも、だめなんだ。

その数ぴったりを倒して回ったとき、クリアって寸法なのさ。

そして、この古文書には、各部屋での、倒すべきレッド・スケル  
トンの数が、ちゃんと描かれている。

そして「

にやっと笑って、最初のページに記された宝玉の配色図を指では  
じく。

「この配色は、ただ今現在の入り口の岩の配色と、まったく同じなのさ」

クリアの仕方が分かっているのなら、さつさとクリアしてしまえばよいのに、とザーラは思ったが、倒す上限が決まっているというのは、存外難しいらしい。

実際に、何度も挑戦してみたが、相手が何体も一緒に出てくるため、つい倒しすぎてしまうらしい。

また、どうしても乱戦になりがちで、倒した数が分からなくなるという。

それで、決定力がある仲間を探していた、というのである。

スケルトンぐらいで大ききな、とも思ったが、なるほど、密集して現れたら、指定数だけ倒すのは、それなりに難しいかもしれない。また、ザーラは、初めて、サザードン以外の迷宮、それも多重型という、北ではほとんどないタイプの迷宮に入れるということ自体に、興味を感じた。

さつそく、食事のあと、迷宮探索に行くことになったのである。

あらかじめ、食堂で、正式のパーティーを編成した。

迷宮に行くと、案の定、大勢の人間が、ザーラを待ち構えていた。ギルドでの話を聞いていたとしても、どの迷宮かは分からなかっただろうが、手分けして張り込んでいたのかもしれないし、ポリアブルのことが知られていたのかもしれない。

それをかわし、突っ切って、迷宮に突入した。

しばらくして、全員が中に入った。

当然、パーティー以外の人間は、見当たらない。

ザーラ以外のメンバーも、待ち伏せしていた人間に引き留められ、

いろいろ頼み事をされそうになったらしい。

自分の責任ではないが、ザーラは、メンバーに謝った。

しかし、メンバーは、みな、気にするな、と言ってくれた。

その言い方には、嫌みなところがない。

気持ちのいいパーティーだな、と、ザーラは自分の幸運に感謝した。

だが、実際に戦闘を始めると、気持ちのいいパーティーではあったが、共に闘うにはあまりにも物足りないパーティーである、ということが分かった。

8

すでに、八つの部屋のうち、五つまでは、指定された数の、レッド・スケルトンを倒してきている。

もう、ほかのメンバーから攻撃の協力を得ることは、諦めていた。今さら、下手に手を出されて、余分のレッド・スケルトンを倒され、振り出しに戻ったのでは、やりきれない。

とつととクリアしてしまおう。

そう考えていたのである。

それでも、ザーラは、支援魔法使いに、

「次の部屋に入ったら、拘束魔法をお願いできるかな」

と聞いてみた。

うん、頑張るね、という支援魔法使いのかわいい笑顔には、ささ

くれかけた神経をなだめるものがあつた。

そして、部屋に入った。

この部屋には、ずいぶん、ブラック・スケルトンが多い。

ザーラは、拘束魔法の予約をした自分を、褒めてあげたい気持ちになつた。

そして、呪文が発せられる。

「アース・バインド！」

魔法は、ちゃんと掛かつた。

ザーラに。

足を動かせない状態のまま、ザーラは敵を倒し続けた。

この部屋で、ザーラは、二つのことを学んだ。

一、アース・バインドは、同じパーティーの仲間にも掛けることができる。

一、一度掛けたアース・バインドは、時間が来るまで、掛けた本人にも解除できない。

できれば二度と役に立ってほしくない知識である。

9

最後の部屋である。

そして、あと一体である。

最後のレッド・スケルトンを、ザーラの振るうバトル・ハンマー

が粉碎する。  
すると、

ぶっん、

と音がして、風景がかすんだ。

気が付けば、今までとまったく違う部屋にいる。

パーティーメンバー全員が、一緒に移動してきている。

そして、部屋の中央には、テーブルがあり、武器が置かれている。

「やった。

ついに、俺たちは、やったんだ！」

「あたしたち、やったのね！」

「そうですよ。

やっと、努力が実ったんです！」

せつかく、みんなが喜び合っているのに、自分だけがこんなに冷めた気持ちではいけないと思うのだが、ザーラには、達成感のかけらもない。

ごくわずかながら、これで終わった、という開放感のようなものはあったが。

ふと気が付けば、パーティーが解散されている。

この部屋に飛ぶと、自動的に解散になるのである。

ということは、ボスと闘うかどうかは、一人一人が個別に選択できるのかもしれない。

などと考えているうちに、仲間たちは、自分用の武器を手取る。そして、手に取った人間は、そこから消えた。

迷宮の入り口にでも、送り返されるのだろうか。  
そのことについては、聞くのを忘れていた。

テーブルには、何も残っていない。

ザーラへの報酬も、誰かが持つて行ったのであろうか。

しかし、今のザーラは、そんなことに興味を持つてはいなかった。  
今、ザーラの関心は、テーブルの向こうにいる幽霊に向けられている。

10

男でも麗人と呼んでよいのであったかな、

などとザーラは考えていた。

まさに麗人という言葉がぴったりとする。

長くまつすぐな銀色の髪。

卵型の小さな顔。

銀色の貫頭衣は、絹のような光沢を持ち、たつぷりとひだを作りながら、床に届いている。

腰の辺りに、紫色のサツシュをゆったりと巻き付けている。

左腰の上では高い位置に細く、右腰の上では低い位置に広く、サツシュは貫頭衣を押さえ、上品な結び目を作って、右腰の横に垂れている。

顔と肌の色は、ほんの少し黄色を含んだ白色である。

目は深い青色をして、口には笑みをたたえている。

細長く繊細な手と指は、それだけ見れば女性のようである。  
その全身は、半透明で、背後の壁が透けて見えるので、幽霊とい  
うのにふさわしい。

「今さら、私を呼び出す人がいるとは、驚いたな。  
でも、呼び出されたからには、仕事はしようか。  
それで、どこの迷宮に行けばいいのかな？」

「どこの迷宮、というのは、何のことですか？」

「うん？」

迷宮の調整で、私を呼び出したのではないのかな？」

「私は、あなたがどなたかも知りません。

私は、ここエルストラン迷宮の攻略をするために、人に頼まれて  
パーティーに参加したのです」

「攻略？」

攻略とは何のことかな」

「しかるべき手順を踏んで、この部屋にたどりつくことです」

「ああ、なるほどね。

それは、攻略というようなものなのかな？  
それで、何のために、攻略をするの？」

「褒賞の武器を得るためだそうです」

銀髪の男は、しばらくきょとんとして、それから、笑い出した。

「それは、愉快だ。

ああ、なるほどね。

たぶん、だいぶ時間がたってるんだろうね。

あれは、私を呼び出す資格を持っていない人が、この部屋に来たときに、まあご足労のお駄賃として、出現するようにしていたものなんだ。

わざわざ、それを目的にするような物じゃないんだけどね」

「私の聞いたところでは、この部屋にたどりつくと、幽霊と武器が現れ、武器を選択すれば、それは自分の物となり、選択しなければ、幽霊と闘うことになる、ということでした」

「闘えないよ、あれとは。

あれは、単なる映し絵にすぎない。

姿は私と同じだけれどね。

あなたは条件を満たしていないので、ご要望をお聞きすることはできません、と伝えることしかできないんだ」

「あなたとは、闘えるのですか」

「うん？

闘いたいのかい？

闘えなくはないけれど、私を倒すことはできないよ。

私は、霊体だからね。

それも、本来の意識を持たない、影絵のような霊体だね。

まあ、私が出現できたということは、本体のほうも生きていますということだけ」

「本体は、どこにおられるのですか？」

「うん。」

これは、答えにくい質問だなあ。そうだなあ、君が、絶対に訪ねて来ず、人にも教えないと誓ってくれるなら、こっそり教えてあげてもいい」

「では、お聞きしないことにします」

「ははは。」

君は、愉快な人だね。

私は、戦闘力は低いので、実際に闘ったら、がっかりすること請け合いなんだが。

しかし、私のことを知らないとなると、君が神々の名を持つ恩寵品を持っていたというのは、なかなかの偶然だね。

……うん？」

何に気が付いたのか、幽霊の様子が変わった。

「それは、まさか？」

幽霊が、ザーラのほうに右手をかざした。

すると、ザーラのルームが勝手に表示され、アイテムの検索が始まった。

オープンはされていないのに、次々と画面の表示だけが変わる。

あり得ざる事態に、ザーラが反応できないでいると、インベントリの中に保存されている五点のアイテムが表示された。

それらは、別々のカテゴリに分類され、別々の引き出しに格納されているのであるから、検索画面の同じ位相に、同時に表示されることはない。

にもかかわらず、まさにその五点、すなわちメルクリウス家から貸与されている五つの恩寵品が、今同時に表示されている。

「それを、どこで手に入れた？  
返事によっては、君は私が自ら殺す最初の人間になる」

1  
1

幽霊の目は、金色に輝いている。  
表情からは、先ほどまでの優しげな様子が消え、今は氷のごとく冷たい。

ザーラは、唾を飲み込み、大きく息を吸って、答えた。

「これは、バルデモスト王国のメルクリウス家が襲蔵しているものです。

メルクリウス家の初代が、神竜カルダン様より、武勇と忠誠を賞せられて賜った物と聞いております。

メルクリウス家の現当主が、サザードン迷宮のミノタウロスを倒すまでとの約束で、私に貸与くださったのです」

ひと呼吸かふた呼吸のあいだ、幽霊はザーラを探るように、じっと見つめた。

そのあと、急に表情を和らげた。

「君のまとう空気は、君の言葉が心からのものであると告げている。  
脅かしてすまなかつたね。  
許してくれたまえ」

幽霊から殺気が消え、目も、青色に戻る。

ザーラは、冷や汗が吹き出すのを感じた。

この実在ならざる相手が、いかに強い圧力を発していたか、ということである。

「サザードン迷宮は、もちろん知っているよ。

だが、ミノタウロス？

なぜ、君ほどの剣士が、ミノタウロスなどを目標にするのかな？  
それに、その恩寵品は、ミノタウロス相手に必要になるようなものじゃないよ」

「三十年と少し前より、サザードン迷宮では、十階層で生まれたミノタウロスが、各階層のモンスターたちを撃破して、最下層に至り、メタルドラゴンを数えきれぬほど倒し続け、替わって最下層の主として君臨しているのです」

「は？

ミノタウロスが？

そんな馬鹿な。

ああ、失礼。

君の言葉を疑っているわけじゃないんだ。

あの迷宮は、そんなイレギュラーが起こるような、不安定な作りにはなっていないかったはずなんだ。

だが、よりによって、ミノタウロスか。

偶然、なわけはないな。

ああ、ちよつと待って。

いろいろ教えてほしいこともあるし。

おわびもしたいし。

ちよつと場所を変えよう。

ここでは、お茶も出せない」

幽霊は、しばらく目を閉じて、何事かを考えているようであった。

「なんてことだ。」

どこもかしこも、荒れ果ててる。

今、いったい何年なんだろう」

「王国歴では、千百十四年です」

「王国歴？」

「どの王国かな？」

「バルデモスト王国です。」

女神カルダン様が、その、お亡くなりになった年が、王国歴元年とされております」

「……ほう。」

こりゃ、驚いた。

ずいぶん時が流れているようだね。

うーん。

あそこなら、大丈夫かな。

ああ、大丈夫だった。

失礼。

移動するよ」

一瞬で、景色が変わった。

瞬間移動したのであるう。

しかし、瞬間移動につきものの、引っ張られるような感じや、内蔵がねじれるような不快感はなかった。

そこは、花が咲き乱れる庭園のあずまやで、大理石のテーブルと、材質は分らないが、白くて豪華な飾り彫りがほどこされた椅子が二脚、置いてある。

「どうぞ、座って。」

悪いが、お茶は準備できない。

自分で飲み物を持ってきているなら、遠慮なく飲んでくれればいい。

私は、飲んだり食べたりできないからね。

まあ、立ったままでもいいけど、演出的に、座るとしよう」

幽霊は、椅子に座った。

その動作も座る姿も、見とれるほど優美なものであった。

「そつだ。」

私は、迷宮のラスボスということになってるんだつたね。

では、千二百年ぶりの正式攻略者に、賞品を与えないといけない。

何が欲しい？」

「何が、と言われても、今すぐに欲しいものはありません」

「いやいや。」

それでは、ラスボスとしての私のめんつが立たないね。

うん。

これなんかどうだろう」

幽霊がテーブルの上に置いたのは、ショートソードだった。

ショートソードというにも少し短いが、短剣というほど短くもない。

まるでオリハルコンで作られたかのような高貴な色合いだが、刃先が赤い色に染めてあるのが、いささか悪趣味である。

「これは、小さく振れば、半径十歩ほどの、大きく振れば、半径五百歩ほどの、すべてを破壊する魔法陣を生み出す。

振り方しだいで、近くにでも、遠くにでも、魔法陣を作れるので、とても便利だよ。

ただ、持ち主自身の手で、一日に十人以上の人間の命を捧げないといけない」

「そんなカード・アイテムは、要りません」

「いや、呪いはないんだ。

ちゃんと使ってる限りはね。

十人殺すのを忘れると、そのとき初めて、持ち主が呪われるんだ」

「要りません」

「それは、残念。

では、こちらは、どうだろう」

次にテーブルに置かれたのは、宝石を埋め込んだ指輪であった。

赤黒い宝石は、高級には見えるが、どうにも毒々しい。

「リザレクション・リングの一種だね。

冥王の指輪の劣化版、といったところだ。

これを着けていると、死んでもすぐ生き返る。

ただ、冥王の指輪のように、老化をとめる機能はないので、不老不死というわけにはいかないけどね。

それと、聖属性の攻撃に、ちよっぴり弱くなる。

あと、これを装着すると、下級悪魔の一人を主人に定め、永久に仕えなくてはならない」

「要りません」

「悪魔のことなら心配は要らない。

あらかじめ封印しておけばいいんだ。

なんなら、アフターケアとして、手伝うよ。

悪魔を自分の体とか服のどこかに封印しておくよ、なかなか便利だよ。

持ち主が死んだ瞬間に封印が解けるから、自分を殺した相手や、遺産を持っていこうとする不心得者たちを、皆殺しにしてくれる」

「要りません」

「うーん。

君はなかなか、好みが難しいようだね」

そう言いながら、幽霊は、そのあと、鏡とヘルムを出して説明したが、ザーラは、どちらも欲しくない、と答えた。

「仕方ないね。

欲しい物ができたら、そのとき言いなさい。

さて、では、少し、話を聞きたいんだが、いいかな」

12

最初に聞かれたのは、今、世界には、どんな国があるか、ということであった。

次に、サザードン迷宮のミノタウロスについて聞かれた。ザーラは、知っている限りのことを説明した。

「待ってくれたまえ。」

冒険者というのは、いったい何かな？

ほう。

そういう恩寵職なのか。

ポーションというのは、ものすごいものみたいだね。

もし、今持っていたら、見せてもらえないかな。

おお、こりゃ、よくできてる。

へえ。

迷宮では、よほど成長の効率がいいんだろうね。

なるほど。

神霊が減った穴埋めを、そういう形でしたわけか。

うまい手だ。

人も増え、国々も栄えているようだから、効果は高かったんだろ

うね。

だが、その方法だと、よどみはたまるばかりなんじゃないのかな。

ああ、失礼。

これは、君への質問じゃあない。

ふむ。

あとで調べてみないといけないなあ」

幽霊は、しばらく自分自身の思考に沈んでいたが、ややあつて顔を上げ、表情を改めて、次の質問をした。

「ところで、君は、この千年のあいだに、竜が目撃されたというよ  
うな話は、聞いていないだろうか。

もちろん、迷宮の外での話だ」

この質問に答えてよいのか、わずかな時間、ザーラは悩んだ。その結果、告げるべきであるという、強い思いが湧いてきた。

「はい。」

つい先日、女神カルダン様とご夫君の御子<sup>みこ</sup>である、白い竜が生まれました。

私は、不思議な縁<sup>えにし</sup>により、その場に立ち会い、名付け親とならせていただきました」

この答えを聞いて、幽霊は、震えながら、立ち上がった。そして、両手をテーブルに突いて、

「まことに失礼なことをいうが、君の記憶を見せてもらえないだろうか。」

頼む」

と、頭を下げた。

ザーラは、下腹に力を入れて、

「どうぞ」

と答えた。

幽霊は、ありがとう、と礼を言いながら、右手を伸ばして、ザーラの額に触れた。

そして、目を閉じて、何事かをつぶやいた。

ザーラは、ふうつと一瞬めまいがしたように思った。

気が付けば、幽霊の手は、もう額から離れていた。

幽霊は、目を閉じたまま、何かを反芻しているようである。その閉じた目からは、涙がこぼれている。

顎をつたって滴ると、そのまま消えてしまうのだが。

どれほどの時間がたったろうか。

幽霊は、まっすぐ背を伸ばし、右手を自分の心臓の位置に当て、ザーラに対して、深々とおじぎをした。

長い銀髪が、さらりと垂れる。

「ザーラ殿。

お礼を申し上げます。

わが妻と私の子を、よくぞお取り上げくださった。

よくぞお守りくださった。

感謝の言葉もない。

そのうえ、よき名をお付けくださり、このうえなく適切な場所に導いてくださった。

さらに、パクサリマナとナーリリアに対して、貴殿がしてください。決して忘れぬ。

いつか必ずこのご恩はお返します」

突然の幽霊の言葉に、ザーラは驚いたが、それでも、それが相手の真摯な思いの発露であり、真剣に受けるべきものだと分かった。

ザーラは、立ち上がって、礼を返し、

「お役に立てて、幸いでした。

しかし、これは、神の導きにより、神の助けを受けてなされたこと。

この身は、すでに過分の恩恵を受け居ります」

と言った。

幽霊は、にっこり笑って、

「ありがとう。」

もう少し話も聞きたいけど、今は、すぐに行きたい所があるので、これでお別れする。

「あ

何が起きたのか、幽霊の姿が、一段と薄くなっている。

「しまった。

心を震わせすぎたので、霊体が壊れてしまった。

うーん。

残念だ。

娘の姿を、一目見たかったのに」

見る間に、その姿は透明度を増している。

「ああ、そんな心配そうな顔はしなくていいよ。

本体は無事みたいだから、時間がたてば、また霊体も復活するか  
らね。

本体の意識がない状態のことだから、だいぶかかるだろうけど。  
まあ、いいさ。

再び目が覚めるときの楽しみができた。

君にも、ちゃんと賞品をあげないといけないし、恩返しをしなく  
てはね。

とりあえず、テーブルの上の物は、持って行ってくれているから。  
では、ザーラ殿。

また、いつの日か」

そう言い残して、幽霊は消えた。  
いや。

幽霊ではなかったようであるが。

一人残されたザーラは、考えていた。

ここはどこで、私はどうやって帰ればよいのだろうか、と。

また、このテーブルの上の、触れることもできない危険物の数々は、どうしたらよいのか、と。

## 挿話4

かつて、ミノタウロスが、百体目のメタルドラゴンを倒したときのことである。

百階層最外周回廊の、ボス部屋と正反対の位置に、大きな入り口が出現した。

だが、ミノタウロスは、以来ここまで来ていないし、通りがかった人間に、この入り口は見えないようで、そこに入っていく者はなかった。

あれから、さらに三匹のバジリスクを、それぞれ違った方法で倒して、ミノタウロスは、回廊を進んでいた。

どこか行く当てがあったわけではない。

少しは体を動かしてみたかった。

少しはあがいてみたかったのである。

そして、ミノタウロスは、大きな入り口の前に来た。

何だ、これは？

ここは、以前、何度も通ったはずである。

しかし、こんなものがあれば、気付かないはずがない。

とすれば、これは、自分が、メタルドラゴンの部屋に閉じこもってから出来たもの、ということになる。

入り口から先には、長い回廊が、徐々に下りながら続いている。先は真っ暗である。

この長い回廊の向こうには、何があるのか。ひよっとすると、ないと諦めていた、さらに下の階層への階段なのか。

ミノタウロスは、見たことのない回廊に、足を踏み入れた。

歩いてても、歩いてても、回廊は先に続いていた。

かつて、九十九階層から百階層に下りた階段も、恐ろしく長かったが、これは、それよりずっと長い。

じきに真っ暗になったが、優秀な暗視スキルと、各種の探知スキルがあるミノタウロスにとっては、何ほどの障害ともならない。

気配探知の範囲を広げてみる。

しかし、何もひっかからない。

近くに、生き物はいない、ということである。

ミノタウロスは、歩き続けた。

どれほど歩いたのか。

おそらくは、サザードン迷宮の一階層から百階層までの階段を下りるよりも、なお何倍か長い距離を、ミノタウロスは歩いた。

どこにも行き着かない道なのかもしれん。

と、思い始めたとき、先に、ぼんやりと光が見えた。

その場にたどりつくと、小さな広場に出た。

ここからは、どこに行く通路もない。

と、その広場に踏み込んだ瞬間。

広場の中央に置かれた円形の平たい石が、青く発光した。深い闇の中で、地から照らす青い光に映し出されるミノタウロスの姿は、まるで神話の登場人物のようであった。

あそこに乗れ、ということなのか。

ミノタウロスは判断し、それ以上考えを進めることもなく、無造作に、発光する平たい石の上に乗った。

その瞬間、ミノタウロスの姿は消えた。

## 第5話 業火

1

雨が降っている。

私は、雨の音に、耳を傾ける。

庭の木々の葉にはねる音。

池に落ちる音。

地を打つ音。

少し遠くのおずまやの屋根に響く音。

こうして雨が降る日、私は、心の奥底にしまっている、小さな箱のふたを開ける。

その箱の中には、炎が燃えている。

消えることのない怨念の火が燃えている。

それは、解き放たれば、私自身を、私が大切に思う人々を、この国のすべてをも燃やし尽くしてなおやまぬ、滅びの炎だ。

だから、私は、こうして雨が降る日には、そつと、その箱のふたを開けて、消せない炎を、降る雨にさらしている。

しゅうしゅうと、燃えさかる炎が静まっていく音を聞きながら、かろうじて私は、箱の中に封じた復讐に、わが身を食い尽くされるのをまぬがれる。

それでも、時に火は、不意に勢いよく燃え上がって、私のすべてを紅蓮くれんの焰ほむらに焼き染めようとする。

そうなってもかまわない、と思う私がいる。  
そうなることを望んでやまない私がいる。

その火は、私が五歳のときに灯り、八十一歳になる今日まで、燃え続けている。

2

あの少年は、知っているだろうか。

恩人と呼んでくれる私にとり、自分こそが恩人だと。

私は、あの少年に助けられた。

いや、もう少年ではない。

千年ぶり二十五人目の王国守護騎士にして、直閥家当主。

不敗の化け物に打ち勝って神剣を勝ち取り、首謀者の首をはねて  
反乱軍を敗走させ、王の御前で、たった一人で百人の騎士を圧倒し  
てのけた希代の英雄。

だが、王国守護騎士パンゼル・ゴランは、今でも私にとっては、  
パンゼル少年のままだ。

サザードン迷宮の前で初めて会った、あのときと変わらず。

パーシヴァル様がおかれになり、その遺品の中にアレストラの  
腕輪が見当たらない、と知ったとき、私は、焦燥より困惑を覚えた。  
あのパーシヴァル様が、そのようなことをなさるわけがない。

かの腕輪を紛失させるようなことを、なさるわけがないのである。  
だから、腕輪を持ってパンゼル少年が現れたとき、ああこれはパ  
ーシヴァル様が差し向けてくださった少年なのだ、腕輪はその証な

のだと、私は知った。

出会ってすぐ、少年の人品が優れたものと分かった。

かねてより、ユリウス様をお支えする家臣団の養成は、私の最も重要な使命の一つと心得ていたが、能力や人柄に優れた者はあっても、今ひとつ線の細さが不満であった。

この少年こそは、まさに私が待ち望んでいた人物だと思った。

迷宮を愛したパーシヴァル様が、迷宮で見つけてくださった少年なのだと思った。

少年との縁えにしがそのようなものでないと知ったのは、三日後のことだった。

私は、少年をメルクリウス家の家臣として迎えるため、少年の母は御はごに会いに行った。

私の名乗りを聞くと、母御は、病床より起き上がり、主君に対する礼をもって私を拝して、わが夫はエイシャ・ゴランの孫にございまして、とあいさつしたのである。

### 3

エイシャ・ゴラン殿のことは、むろん、よく知っている。

かわいがってもらったことも覚えていたし、何より、幼心にも、命の恩人であることは理解していたので、その後、調べたのである。

エイシャ殿は、南方で生まれた。

おそらくは、ゴルエンザ帝国の北西部、エラ大湿原に近い辺りかと思われる。

若くして、帝都で、剣士として名を上げた。

軍略や歴史知識にも優れ、諸侯から仕官を望まれたが、特定の名家は持たず、あちらこちらを放浪しながら、剣を教えて暮らした。

南方諸国を巡り、各地で、名の高い剣士たちと技を競ううち、当代無双の剣客と呼ばれるようになり、慕う人も増え、諸王諸侯から破格の条件で誘われたが、首肯することはなかった。

そんな人物が、ふらりとバルデモスト王国に現れた。

すでに北方においてさえ、その声望は高く、この放浪の武人を自家に誘わんとする動きが、にわかには盛んとなった。

そんなエイシャ殿が腰をおろしたのが、わが父、マゼル・ス・ラ・ヴァルドの屋敷だった。

当時の父は、近衛の平騎士にすぎなかったが、剣の腕は衆に抜きんでたものがあった。

エイシャ殿は、父の剣の師を訪ね、その紹介で、父と剣を交えたのである。

試合は、道場で長く語りぐさとなるほどの熱戦となった。

その日、二人は、腹の底が抜けるほど大いに酌み交わし、親友となった。

トウメイコトノク

豪放磊落なエイシャ殿と、謹厳実直で気の利いたことの言えぬ父が、なぜか非常にうまがあった。

共通点といえば、剣と酒を愛したことだろうか。

エイシャ殿は、北方に來た理由を訊かれるたびに、「南の酒は、飲み飽きた」と返していたという。

父は、エイシャ殿に、兄と私の教育を預けた。

兄は、正式に剣の修行も始めたが、幼い私は、エイシャ殿と一緒に、野山を駆け巡るのが常だった。

力一杯走り、笑い、一緒に食事を作って、食べた。  
草や、木や、けものについて学んだ。

水や、空や、土や、山や、天地のことわりについて学んだ。

父は、吏務査察官しむつさつかんに任じられて、留守が多くなり、私には、エイシャ殿こそが父のように感じられた。

エイシャ殿は、決して、父の家臣ではなかった。

食客、とでもいうのが近いだろうか。

父が何かをエイシャ殿に命ずることはなかった。

エイシャ殿が、父に対し、雇い主であるかのようにへりくだることはなかった。

父は、エイシャ殿に、生活の資を渡していたのであろうか。

それは、知らない。

知る必要もない。

エイシャ殿は、父の友であり、私たちの家族だった。

#### 4

父が吏務査察官に抜擢されたことは、驚天動地の出来事といつてよい。

それほどの、名誉ある、また責任の重い役職なのである。

吏務査察官は、王直属の調査員であるが、査察の対象は、行政と司法のあらゆる分野に及ぶ。

宮廷内での政務について、自由に調査する権限を持ち、不正を告発し、さらには処分の具申ができる。

王直轄の地方機構については、自己の判断で懲罰を実施すること

もできる。

さらに、王より諸侯に委託された事項について、諸侯を越えて独自に調査し賞罰を決定できる。

吏務査察官が、職務怠慢や不正の疑いがあると報告すれば、大臣や代官の首でも飛ぶし、諸侯は大きな利権を失う可能性がある。

当然、吏務査察官は、あらゆる方法で徹底的に懐柔される。

懐柔できない人間は、この役職に就くことがないよう、注意深く根回しがされる。

しかし、吏務査察官は、親補官である。

王が直接任命でき、少なくとも制度上は、王がみずから下問する場合を除いて、人選を上奏できない。

同時に、高位の貴族でなくても就任できる、ほぼ唯一の高等官である。

それでも、近衛の平騎士、すなわち準貴族が就任するというのは、あまりに慣例をはずれていたため、側近のかたがたは、よい顔はされなかつたと聞く。

朝議においては、白卿はつけい、赤卿せきけい、青卿せいけい、黒卿こっけいのすべての大臣が連名で、適当な人選ではないという意見を、わざわざ文書にして奏上した。

しかし、王は、意見をお変えにならなかつた。

当時の王は、のちにシャナ＝エラン（浄王）と諡おくりなされたとおり、不透明なこと、不公平なことが、お嫌いな気質であられた。

けれども、王宮と政治は、不透明、不公平そのものであり、公正を求めて王が試みられたいかなる努力も、砂にしみこむ水でしかなかった。

そのような王が通された唯一のわがまま、それが父を吏務査察官

としてお召しになることだったのである。

それをわがままと申し上げるのは、あまりに不敬であり、お気の毒であろう。

しかし、輔弼ほひつすべき立場からの諫言かんげんをことごとく退ければ専断となる、というのも識見の一つには違いない。

まして、吏務査察官という、どの派閥も喉から手が出るほどに欲しい役職をさらった父は、悪人となった。

このような、あり得ざる人事が起きたということは、父が、あり得ざる汚い手を使った、ということである。

王その人をたぶらかし、政道をゆがめて。

どのような不正を父が行ったかは、彼らにとり、調べる必要もなかった。

吏務査察官就任という結果が、父の有罪を証明しているからである。

かくして、地獄への道行きが始まった。

父は、まずは、家臣を集めねばならなかった。

吏務査察にあたるとなれば、相応の能力を持った家臣たちを、大勢集める必要がある。

父が頼ったのは、剣の師であり、道場の知己だった。

これは、さつそくに妨害にあつた。

結局、必要な人数は集めることができたものの、貴族は皆無というありさまだった。

父の志に共鳴する人は多かつたらしいが、剣の道場に通う貴族というのは、有力貴族であつても、その次男や三男であつたり、あるいは、官職も得られない末端貴族であることが多い。

親や、長兄や、本家筋などから、強く諫止され、あるいは脅迫さ

れば、押して父の元に駆けつけるわけにはいかなかっただろう。  
無理もないことだと思う。

このことが、王宮での父の仕事を、困難にした。  
役所の仕事を調査しようにも、一定の身分がなければ、そもそも  
王宮の敷地内に入れない。

公務の助手であるから、連れて入れればよいともいえるが、各役所  
で、身分規定をたてりに入室をこばまれば、あえて押し通るわけ  
にはいかなかった。

押し通れるとすれば、罪があると確定したときである。  
それでも、父は、めぼしを付けた部署に、粘り強く交渉して資料  
を提出させ、それを部下たちに筆写、整理させて、分析をした。

それをまとめた資料をもって、次の段階に進もうとした。

ところが、あらためてその部署を訪れると、資料はすべて書き換  
えられ、置き換えられ、持ち去られていた。

わずかでも父に協力した官吏は、異動あるいは解雇の対象となり、  
処刑された者さえいた。

もちろん、表面上は、父の調査とは何の関係もない理由によつて  
である。

父は、方針を変えた。

家臣たちを率いて、アンポアンに行き、王国から委託している輸  
出入について、抜き打ち調査を行ったのである。

これは、電光石火の早業だったらしい。

案の定、隠す間もなく、物資の横流しや、不正な利益供与、ある  
いは不公正な売買の記録が、山ほど見つかった。

アンポアンは、当時すでに王国最大の港街となっており、数年前  
に侯爵領に格上げされたところであった。

父の調査により、王宮から差し向けられて外国との貿易を担当していた子爵三人が罷免され、領主であるアンポアン侯爵が叱責および徴税権の一部剥奪という処分を受けた。

これが、当時のリガ公爵家当主クレルモの逆鱗にふれた。

子爵三人は、いずれもリガ公爵の分家の子弟だった。

また、アンポアン侯爵は、古くからリガ公爵家を主家と仰いでいたが、特に当時の当主はクレルモの子飼いの部下であり、近々入閣するのではないかと、いわれていた人物だった。

そうならば、リガ公の派閥は、ますます巨大化する。

ところが、父のために、そのもくろみは狂った。

アンポアンの伯爵領への格下げさえ検討されたというのであるから、リガ公としては、長年の努力が水泡に帰した気分であっただろう。

だが、その怒りにこそ、クレルモの思い上がりがある。

そもそも、侯爵領も、伯爵領も、王のものである。

それを私物であるかのように思う貴族が多い。

あまつさえ、アンポアンという重要な街の国務を、自家の関係者のみで独占している異様さを、クレルモは、どう説明するつもりか。

長い歴史の中で、制度にゆがみもできているであろう。

だが、それ以上に、そのゆがみを悪用してはばからない大貴族たちが、この国の清明さに、影を落とし続けてきた。

わが国の爵位制度は、ゴルエンザなどのそれとは、だいぶ違う。たとえば、わがメルクリウス家の場合、直閲貴族家であるから、位階でいえば席次の最も高い侯爵相当の爵位持ちであるが、当時は領土を持っていなかったため、侯爵とは呼ばれなかった。

侯爵と呼ばれるのは、王から侯爵領に封じられた貴族である。

伯爵は、王から伯爵領に封じられた貴族である。

侯爵領と伯爵領の違いは、土地の広さ、豊かさ、重要産業の発展具合、交通や軍事上の観点などから総合的に判断される。

子爵というのは、実態はともかく、建前の上でいえば、侯爵領もしくは伯爵領の一部を預かる貴族、ということになる。

男爵については、これらとは、まったく成立が異なる。

男爵とは、もともと領地を持っていた諸侯が、バルデモスト王に臣従することを誓い、領土を安堵されて発生した身分である。

であるから、男爵領の場合、広さも実力もさまざまである。

侯爵より金持ちで領土も広い、という男爵もいるわけである。

宮廷での席次も、必ずしも男爵が侯爵や伯爵以下というわけではない。

男爵は、その成り立ちからいって、移封されることがない。

それに対して、侯爵や伯爵は、格上げや格下げ、さらには移封もあり得る。

実際には、戦争などにより大きな領土の変更がない限り、移封は行われないが、少なくとも制度の上ではそうなのである。

ところが、ここに、王から封じられた領地に基盤を持ちつつ、格下げや移封など人事（人事）とばかりに、豊かな土地に、のうのうとあくらをかき続けている貴族がいる。

その土地は、王の物であるのに、まるでわが物のように思い、扱  
う。

リガ公爵である。

そもそも、リガ家は、公爵家などではない。

公爵家というのは、王の兄弟や子が、特別な手柄を立てた場合に、  
王領の一部を分け与えられて出来るものである。

その領土は、そう大きなものではありえないが、当主が死んだの  
ちも、遺族が相続し続けることを、国法が認めている。

他国には、王位継承権の高い身内を排除するために公爵家を乱造  
したり、母親から領土や財産を受け継いだ王子が強力な公爵家を築  
いて、国の乱れるもとなった例もみられる。

わが国では、公爵が強い権力を持ちにくいので、こうした轍は踏  
まずにすんでいる。

リガ公爵家は、もともとは、現在のタダとフェンクス諸侯国東部  
にまたがる、広大な土地を治めていた諸侯である。

始祖王没後に、当時のリガ家の次期当主が、幼い二代王に代わっ  
て政務を執ったが、それをもって国政を私することは決してなく、  
その公正な態度は、バルデモスト王国内はもちろん、諸国にも厚く  
信頼されたという。

しかし、リガ家の当主が没したあとも、二代王に乞われてバルデ  
モストに尽くし続けたため、リガ家のもとの領土は、分裂しあるい  
は周囲に吸収されて、消え去った。

二代王は、リガ公の働きを高く評価し、リガという枢要の地を与  
えるとともに、王族にも等しい高貴な立場であるとして、公爵位を  
贈り、しかも、子孫の続く限り、リガの地を治め続ける権利を認め  
たのである。

リガ家という名も、そのときに出来た。

初代リガ公爵は、優れた人物であったと、私も思う。その業績は、評価されてよい。

しかし、公爵になったのは間違いである。

二代王から、公爵に叙するといわれたとき、その厚遇に感謝しつつ、断るべきであった。

だが、ずうずうしくも、それを受けてしまった。

それが、以後のリガ家を、ゆがめるとも知らずに。

王族でない者が、公爵となつてはならないし、王から封じられて領主となる以上、侯爵位か伯爵位でなければ、話がおかしい。

また、初代のリガ公は、始祖王と一緒に国を興したのではなく、もともと領主であつて、始祖王の威徳に引かれて歩みを共にするようになったのであるから、歴史的経緯からすれば男爵位こそがふさわしい、ともいえる。

さらにいえば、なるほどリガ家初代の功績は大きいが、自らの領土を顧みずに王に尽くした貴族は、リガ家だけではない。

にもかかわらず、リガ家が、初代の功績をひけらかし、その遺徳を享受するほどに、国には禍々しい毒がたまつていく。

のちに、私が物心ついてからのことである。

リガ公家の当主は、クレルモからモルゾーラに代替わりしていた。あるとき、フェンクス諸侯国の一領主と、わが国の伯爵のあいだで、紛争が起きた。

勝てば結果としてわが国の領土が広がるのである。

大臣たちから、王都から応援を出すべきだという意見が出た。

これを、当時白卿<sup>はつけい</sup>、つまり宰相兼務の筆頭大臣であつたモルゾーラが蹴つた。

王都が介入すれば、フェンクスでも周辺諸侯が参戦する事態になる、という言い分だった。

うまいことを言うものだと思う。

その裏で、やつが何をしたか。

塩の補給を止めたのだ。

塩がなければ戦えない。

伯爵とその親族たちは、王都の塩を買おうとし、また、塩田地帯からの塩の手配をしようとした。

だが、王都でも塩は突然高騰し、塩田地帯の塩は、隣国のタダに売り尽くされていた。

結局、有利に戦を進めていたにもかかわらず、一片の領土も得られないまま、停戦しなくてはならなかった。

その伯爵は、王都に鎧姿のまま馬で駆けつけ、塩の売買を管理する官吏のもとに行き、長剣で机を真つ二つに切ったという。

伯爵が本当に斬りたかったのは、リガ公爵である。

誰がこの戦を負けに等しい決着に導いたか、知らぬ者はなかった。

リガ家は、この国の塩と鉄を押さえている。

そもそもリガは、海岸部から国の中央部に向かう、人体でいえば喉元にある。

海からの輸送、海への輸送は、すべてリガを通るのである。

かつ、アンポアンをはじめ、海外沿いの諸都市は、すべてリガ家の支配下にある。

その中には、製塩を行う村のすべてが含まれている。

国内の鉱山のうち、主立ったものは、すべてリガ家が押さえている。

長年のあいだに、リガ家は、この国の隅々にまで、その長い触手

を張り巡らしている。

まるで、北の海に出没するという、巨大な怪物のように。

甘言と恐喝をもって人を支配し、何もかもを飲み込んでいこうとする。

そして、気に入くわない者、従わない者には、どんな仕打ちでもする。

派閥の違う伯爵が領土を広げそうだというだけで、塩の補給を止めるようなことさえするのだ。

リガ家は、この国にとり、毒そのものだ。

6

クレルモは、能力は高く、人間として魅力もある人物であったように思う。

だが、リガ家の宿痾しゅこに、脳の奥までが毒されていた。

領土も財も権力も地位も、生得のものとしか考えず、それを侵すものは滅ぼさねばならないという狂気に取り付かれた、哀れな男。

そんなクレルモが、父をほおっておくはずがなかった。

王都に戻った父は、事後処理と報告を済ませ、家臣を総動員してアンポアンでの調査内容を遺漏なくまとめ直した。

万一、王宮に収めた書類が紛失するようなことがあっても、事件の事実関係と、その処理の公正さは、この資料により、いつでも明らかにできる。

そして、父は、すべての作業が終わったことを確認してから、家

臣を集め、慰勞の宴を持った。

王国歴千二十四年赤の三の月の三の日のことである。

そこをリガ公の兵が襲った。

クレルモの狡さは、このとき、自家の兵だけでなく、リガ家とはむしろ対立関係にあった大臣二人の家兵を同行させたことにある。

それにより、出来事は、私怨から公儀に装いを変えることができたのだから。

どうして、その二家が、この惨劇に加担しなければならなかったのか、私には、今でも分からない。

だが、何かがあったのだ。

父を殺すことが二家の利益になるような。

あるいは、殺さないことが不利益になるような。

私には分からないそれを、クレルモは、嗅ぎ当てた。

むろん、当時五歳だった私が、その時点で、各大臣家の事情など、知り得ようはずもないが、あとになって調べても、そこは分からなかった。

この日、家にいた三百四十三人が、皆殺しにされた。

わが家は、王都の郊外にあり、後ろの山も敷地に入っていた。

一万二千人の軍隊が、そこを取り囲み、魔法を撃ちかけて焼き払い、逃げ出す者を殺す、という暴挙が行われた。

翌朝、参内したクレルモは、王の着座を待って、謀反人の討伐を報告した。

その謀反人とは、吏務査察官マゼル・ス・ラ・ヴァルドである。

王陛下は、天界から冥界に突き落とされた気分になられたであろう。

自らが抜擢した吏務査察官が、他国との貿易で不正を行った官吏を発見し、それを見事に裁いた。

その調査記録は完璧というべきであり、王都の役人たちも、調査の見事さを認めないわけにはいかない。

そして、懲罰の対象となっていたのは、専横をほしのままにする白卿の秘蔵っ子であり、もうこれで当分は、あのいやらしい笑顔で、「そろそろかの者を黒卿に」などといわれることもない。

陛下は、どれほどか、溜飲をお下げになり、父を誇らしく思ってくださいましたことか。

このごろの陛下の言行は、当時のことを知る宮廷人たちにいわせれば、欣快の一語に尽きる。

毎夕の食事の際には、何度もそこにいない父に乾杯して、杯を空けてくださいましたそうだ。

玉座ではすでに報告を聞いておられたが、近々個人的に父を招いてご慰労くださる予定で、恩賞もご準備くださっていた。

その父が罪を問われて殺された、と聞かされた。

それは、陛下に対しまつり、お前を殺した、と宣言したに等しい。

陛下は、一言も発せられず、顔を紫色に染めて、そのまま下がられた。

むりもないことであり、このうえなくおいたわしいことである。

だが。

だが、このとき。

陛下は、なおご下問なさるべきだった。

今、そのほうは、謀反人を家人郎党もろとも討ち果たした、と申し、さらに、このような大罪においては、一族ことごとくを誅せねばなりません、と申しましたが、それは、すでになされたのか、と。

ところで、このとき、白卿がどのような根拠で父を謀反人として告発したのかが、はっきりしない。

罪状の中に、一官吏の身分にもかかわらず、諸国に知られた武人を自家に取り込み、あまつさえその弟子と称する兵あまたを養い居る罪、というのがあったことは分かっている。

だが、当時、エイシャ殿は、娘御お一人むすめこのほかは、内弟子として三人の門弟をおそばに置かれていたのみで、わが家の家臣に稽古をつけることさえ、遠慮しておられた。

これが謀反の主な証拠となるはずはないのだ。

しかし、いくら湯水のように金を注いでも、この時の告発の内容は、浮かび上がってこなかった。

陛下がご退出なさったあと、クレルモは、蛇のごとき舌で自分の唇をなめていたことだろう。

謀反計画をしたという告発がなされ、その首謀者は、すでに誅殺したと奏上した。

そして、その族人どもも誅さねばならぬ、と奏上した。

それに対し、王陛下は、何のお言葉もなく、朝議を終わりになされた。

それは、この運びについて、勅許が得られた、ということだ。

クレルモは、すべての大臣に命じて、族兵を出させた。

勅命をもって。

すべての大臣が共犯者になった。

そして、私の姉の嫁ぎ先、父の兄弟の家、母の実家、母の兄弟の家が襲われ、幼子まで含め、すべての家族郎党が殺された。まさに族滅である。

二日のあいだに、死者は、合わせて、七百二十五人となった。陛下は、さらに次の日になって、事の顛末をお知りになったようだ。

そのまま、憤怒のあまり体調を崩され、そして二度と床から上がられることなく、ご崩御なされた。

父が行った官吏の告発は、ねつ造であったとされた。

王宮に厳重に保管されていた調査記録は、どこかに消え、父がまとめた資料は、灰となった。

罷免された官僚は復職し、アンポアン侯爵は、黒卿になった。

私は、ずっと、このときの死者の数を、不思議に思っていた。

死者の名簿に名前がありながら、私自身は死んでいないからだ。

私の死体と確認されたのが、家臣の子どもの誰かだったのか。

それとも、七百二十五人という数が事実と違っており、あるいはない私の死体が数に入っていたのか。

だが、そうではなかった。

やはり、七百二十五人だったのだ。

そのことを知ったのは、あの夜何があったのかを、パンゼルの母御に聞いたときだった。

あの夜、私の想像もつかないところで、私の命を守るための凄絶な戦いがあった。

パンゼルの祖父殿は、チャルダという名前で、西の辺境の出であるという。

エイシャ殿を慕って、その内弟子となった。

事件の起きた年には、二十二歳だった。

あの日、エイシャ殿も宴うたげに誘われたが、自分は留守番をしていただけなので断った。

その代わり、チャルダ殿の兄弟子二人は、宴に出た。

この二人は、師であるエイシャ殿の命を受け、アンポアンに、護衛として同行していたのだ。

惨劇の始まる前、エイシャ殿は、屋敷と山を取り囲む軍勢に気が付いたが、まさか、郊外とはいえ王都で、王直属の高官の屋敷をいきなり魔法攻撃してくるとは、夢にも思わず、対処が遅れた。

だが、攻撃が始まったとき、これほどのことを行うのであるから、誰一人生かして逃がさぬ覚悟であると、ただちに理解した。

このとき、私は、エイシャ殿の所にいた。

自分では、その理由を覚えていなかったが、チャルダ殿の伝えるところでは、父の使いとして来たのだという。

いわく、「貴殿の弟子二人の見事な働きを賞ほめて杯を取らそうとしたが、師の命に従っただけのわれらが、師を差し置いてその杯を干すわけにはまいらぬ、と言い張る。わしを助けると思って、宴に参席されよ」との口上を述べたらしい。

父は、貧乏騎士であったが、祖母から、王都郊外の土地を相続していた。

庭の広い、というより庭ばかり広い作りで、母屋はこじんまりと  
していた。

はじめ、エイシャ殿は、母屋の隣の小屋に住んでいたらしい。  
父が吏務査察官になり、家臣のために、家というより小屋をたく  
さん建てねばならなくなり、庭には、にわか造りの家が乱立してい  
った。

ここでは落ち着けないだろうと、父はエイシャ殿に、奥の山の中  
ほどにある庵を提供したのである。

私は、母屋より、この離れで過ごす時間のほうが長かった。

エイシャ殿は、離れに、娘のエニナ殿とチャルダ殿の三人で住ん  
だ。

当時エニナ殿は十四歳だった。

私は、この優しい女性を、本当の姉のように慕っていた。

チャルダ殿の兄弟子二人は、母屋に寝泊まりし、交替で父の護衛  
にあたっていた。

エイシャ殿の判断は、早かった。

私を抱きかかえると、チャルダ殿とエニナ殿に、静かについて来  
るよう命じ、燃えさかる母屋に見向きもせず、藪の中に飛び込んだ。  
身を低くして進むうち、川に出た。

小さな釣り舟がないである。

私とエニナ殿を抱えて、舟底に寝そべると、むしろをかぶった。  
そして、チャルダ殿に、「舟を王都の水路に進めよ」と命じた。  
舟に乗ったことは、私自身も覚えている。

だが、眠ってしまったので、このあとのことは、知らなかった。

山に離れがあることは、当然敵に知られている。

母屋の次は、こちらが襲われる。

どの方向に逃げても、山からの降り口は見張られているだろう。

また、どう逃げたところで、山の向こう側は、見通しのよい平原

であり、見つからずに逃げることはできない。

そこで、逆に、川に身を潜めて王都のほうに逃げることにしたのだ。

この川は、王都の水路とつながっている。

夜のとばりが落ちた今なら、敵の目からのがれて、王都まで行けるかもしれない。

王都に逃げて、そのあとどうするのか、チャルダ殿には見当もつかなかったが。

身を低くし、音を立てぬよう、そろそろと、棹おしを操って、舟を進めた。

もう、母屋はとうに過ぎ、王都の水路も遠くない。

敵の見回りがやってきた。

チャルダ殿は、草の高く繁った位置に舟をとめ、闇の中で息を殺して、近づく敵をにらみつけた。

数名の兵を指揮する男が、こう言った。

「まさか、ここまで来ておるまいがな」

こいつは、コンパチだ。

チャルダ殿は、気が付いた。

コンパチは、有力貴族の三男で、剣の腕が自慢だった。

南の軟弱な武人など、北の勇者の敵ではない、というのが口癖で、なぜかエイシャ殿を目の仇にした。

南でさえ仕官できなかった、あんな年寄りなどをありがたがるやつらは、阿呆だ、と公言し、化けの皮をはいでやるとばかりに、三度、エイシャ殿に挑戦した。

そして、三度とも、こてんぱんにたたきのめされた。

それでエイシャ殿への態度が変わるかといえば、そうではなく、相変わらず、悪口を吐き続けている。

チャルダ殿は、エイシャ殿の内弟子ということ、何度もコンパチから、あざけられ、嫌みを言われ、いやがらせを受けてきている。そのコンパチが、今、円錐型の魔光器を左手に持ち、右手には槍を持って、岸边に近づいて来る。

斬るか。

と、チャルダ殿は、考えた。

コンパチの腕は、チャルダ殿と直角だが、エイシャ殿と共になら、この数名の兵士ともども、わずかな時間で斬り殺すことができる。だが、ほんの数百歩向こうには、何百という兵士がいる。

その向こうには、さらに大勢の兵士がいる。声を上げられないほど素早く、この数名を倒し切るには、距離がありすぎる。

生き延びるには、見つからないことしかない。

見つければ、一人でも多く敵を倒して斬り死にするほかない。

コンパチは、川を広く魔光器で照らしながら、ぐるっと視界を回した。

そして、槍で草むらをかき分け、チャルダ殿が潜む辺りに、視線を向けた。

二人の目が合った。

が、一瞬でコンパチは視線をそらし、何事もなかったかのように、部下たちに声を掛けた。

「やはり、こちらにはおらん。

上流も見ておく」

兵士たちは返事を返し、一団は、山のほうに歩き去った。心臓が止まるほど驚いたチャルダ殿と、舟を残して。

チャルダ殿は、身がしびれたようになり、しばらく動けなかった。安心感のあまり、はらわたが腰の下にずり落ちていくように感じる。

それにしても不思議である。

明るい所から暗い所を見たので、見えなかったのだろうか。とも思ってみるが、確かに一度、視線が合ったのである。

王都に入ってから、そのことを師に告げた。

エイシャ殿は、ただ、

「うむ」

と、ひと言を發した。

8

エイシャ殿は、舟を着ける場所をチャルダ殿に指示すると、まっすぐに目的地に向かった。

エイシャ殿は、私を抱きかかえて走り、チャルダ殿は、途中からエニナ殿を抱えて走った。

そして、大きな屋敷に着くと、エイシャ殿は、腰の剣をはずして、応対に出た家人に渡した。

その剣は、こしらえは質素だが、相当の名剣であり、よく使い込まれていた。

感心したことに、この家の使用人は、こんな時間に突然訪ねた、名も告げぬ怪しげな組み合わせの来客を、当たり前のように、客間に通した。

すぐに水と茶を出してくれたので、眠っていた私以外の三人は、喉を潤すことができた。

そして、驚くほど短い時間で、家人が戻り、当主がお会いになりますと告げ、四人を別の部屋に案内した。

このときには、エニナ殿が私を抱きかかえていた。

「当家のあるじ、バルドラン・コン・ド・ラ・メルクリウス・モトウスといます。

まずは、この剣をお返ししましょう。

よくぞおいでになられました」

その言葉を聞いて、チャルダ殿は、ここが誰の屋敷であるのかを、初めて知った。

では、この貴人が、かの英雄の子孫なのだ。

「エイシャ・ゴランと申す武辺者にござる。

このような時間に、先ぶれもなくお訪ねし、申し訳ない。

わが娘の腕に眠る男児を、お預かり願いたく、まかり越した。

この男児は、マゼル・ス・ラ・ヴァルド殿のご次男にござる」

「吏務査察官殿に、何か変事でもおありですか」

「今、かの屋敷は、万を越える兵士に焼き討ちされており申す」

「なにっ」

優男、と行ってよい当主の表情が急変した。

そこには、鬼神も退ける強い殺気がこもっており、この家がものふの魂を失っていないことを物語っていた。

わずかな時間で表情を戻すと、当主は言った。

「お会いしたことはありませんが、吏務査察官殿のことは、以前より存じ上げておりました。

「ご活躍をお祈りしていたのです」

「お預かり願えましょうか」

訊ねるエイシャ殿の目を、まっすぐに見返しながら、当主は訊き返した。

「お預かりしたとして、あなたはどうかなさいますか」

「なすべきことをなす所存」

当主は、瞑目して天を仰ぎ、

「そうか。

そうでしょうね。

そのままというわけにはいかない。

あなたの名も顔も人柄も、よく知られている、と見なければならぬ

と言った。

しばらく、目を閉じたまま、黙考していたが、やがて、侍女を呼

び、何事かを言いつけた。

「エイシャ殿。

かのかたのご次男殿をお預かりする。

そちらの娘御も、ともに奥の部屋で休まれるとよい」

「かたじけない。

エ二ナ。

奥に連れて行っていただけ」

こうして、眠っている私と、私を抱えたエ二ナ殿が、奥に消えた。このとき、エイシャ殿は、座を辞する構えをみせかけたが、それにかぶせるように、当主が言った。

「エイシャ殿。

短剣をお持ちだろうか」

こういうものを持っておりますと差し出した短剣を受け取り、暫時お借りしますと言って、傍らの机に置いた。

そして、腰に佩いた剣の鞘に巻き付けてある、細い革の留め紐を外し、左手と左小指をきつく縛った。

エイシャ殿の表情が硬くなる。

ほどなく、侍女が一人の男の子を連れて帰ってきた。

ちょうど私と同じぐらいの年格好と髪の色であったという。

その子どもを見て、チャルダ殿は不審を覚えた。

私の着物を着ていたからだ。

侍女は、すぐに部屋を出て行った。

「私の子なのですが、わけあって、妻の実家の家名を名乗らせてお

ります。

おいで、パン＝ジャ」

眠い目をこすりながら寄ってきた、年の離れた実子を、愛おしそうに当主は抱きしめ、そして、短剣を取ると、

心臓に突き立てた。

そのまま、殺したわが子を床にそつと横たえ、腰の長剣を抜き、机に刃を立てて置き、その下に左手の小指を差し入れると、

「ごん、

と音をさせて断ち切った。

袖から出した布で、切り離れた指を包むと、横たわるわが子の胸元に入れた。

そして、

「許しておくれ、パン＝ジャ」

と小さくつぶやいてから、立ち上がって、エイシャ殿に言った。

「エイシャ殿。

ここはどうしても、ご次男殿の屍体がなければ収まりません。

たとえ、草の根をかき分けても、焼けた死体の顔の皮を一枚一枚剥いてでも、それを改めねば済まさぬやつらなのです」

エイシャ殿は、心臓に短剣を突き立てたままの少年を両手で抱き上げ、

哭いた。

渾身の力を込め、喉の破れるほど泣いた。

両目は開いたまま、滂沱の涙を流し、自慢のあごひげは、慟哭の泣涕に浸された。

割れ声は、聞く者の臓腑をえぐらずにはおかぬ音の刃となって、部屋の中を吹き荒れた。

やがて、死んだ少年の胸に落ちる涙が、赤く染まった。

みれば、エイシャ殿の目から落ちるものは、すでに涙ではなく、真つ赤な血そのものとなっていた。

エイシャ殿自身の目も、赤く染まっていた。

それは、人ならざる闇夜のものけのごとき形相であったが、同時に、もっとも人らしい形相でもあった。

最後にエイシャ殿は、

「北のもののふの誠、かくのごとし。

ザーラよ、ご照覧あれ！」

と、余人には分からない言い回しで当主を言祝ぐと、すくつと立ち上がった。

「お前は、一晩、ここに泊めていただけ。

すまんが、エニナのごときは、よろしく頼む。

渡した金は、好きに使え」

とチャルダ殿に言い、当主のほうに向き直ると、

「ご厚情は、忘れもつさん」

と短く謝した。

当主も、

「お会いできて、よかった」

と短く答えた。

二人は、互いに礼をした。

エイシャ殿は、子どもの屍体を抱えたまま、部屋を出て入った。それが、チャルダ殿がエイシャ殿を見た最後だった。

翌日、チャルダ殿は、エニナ殿を連れて、屋敷を出た。

当主は、買い出しの荷車にチャルダ殿を潜ませる、という細やかな心遣いをみせた。

二人は、西の辺境に逃れて、のちに結婚した。

王都を出て八年後、男の子が生まれた。

チャルダ殿は、息子に剣の技を伝えた。

チャルダ殿が亡くなって、ご子息のウエルゼア殿は、王都にのぼり、剣の道場を開いた。

田舎剣法と揶揄する者もあったが、強さが圧倒的であったし、乱暴者も礼儀正しくなると評判が立ち、なかなかの盛況をみせた。

ウエルゼア殿は結婚し、パンゼルが生まれた。

しかし、ウエルゼア殿が病を得て床に就くと、生活はたちまち困窮した。

道場は、だまし取られるように人手に渡った。

死ぬ前に、ウエルゼア殿は、父御のチャルダ殿から聞いていた事件の顛末を、細君に伝えた。

こうした話をするあいだ、パンゼル少年は、家の外に出されてい

た。

真実を伝えるかどうかは、私の判断に任せる、ということだろう。

最後に、逆に質問された。

あのあと、エイシャ様は、どうなったのでしょうかと。

この点については、かねて調べてあった。

王宮に残された調書には、次のように記してある。

母屋と周辺の叛徒と家人らを誅殺したあと、離れにいるという謀反人の次男とその用心棒である剣術使いの搜索が続けられた。

なかなか発見できないために、最後には、山を焼き、遠巻きにして、飛び出してくるのを待った。

それでも、賊はなかなか姿を現さなかったが、夜明けが近づくころ、次男を背負った剣術使いが発見された。

それは、包囲網の一番外側で、あと少しで取り逃がすところだった。

優秀な兵士たちの懸命な搜索が実を結んだのである。

剣術使いは、悪鬼のごとき奮闘をみせ、捕り方の犠牲は八十人以上に及んだが、遠距離魔法攻撃が効果を上げ、敵の戦闘力を奪った。剣術使いは、抵抗を諦め、次男の胸を突いて殺し、自らの喉に剣を突き入れて自殺した。

屍体検分の結果、剣術使いは、剣客エイシャ・ゴランと確認された。

次男も、年格好や衣服などから、本人に間違いがないと確認された。

これを聞いて、パンゼル少年の母御は、静かに泣いた。

私は、初め、パンゼルを、家宰として育てるつもりだった。

パンゼルには、メルクリウス家の家宰が務まるだけの器があると思っていた。

だが、パンゼルは、私の予想など、遙かに飛び越す成長をみせた。そして、それに導かれるように、ユリウス様も、成長なされた。

ユリウス様に手柄を立てさせたいという王陛下のおぼしめしと相まって、メルクリウスは、次々と功績を上げていった。

それを邪魔に思ったりガアルカンは、見え透いた罠を仕掛けてきた。

近衛第四騎士団が総掛かりで敗北した、迷宮の怪物、これに単独で勝利する者がいれば、建国時代の諸英雄に匹敵する、と朝議で述べたのだ。

この罠は、見え透いているがゆえ、有効だった。

王陛下は、何とかパンゼルを高位の騎士に叙したいご意向であられた。

廟堂に上げられるほどの。

皇太子の指名は、もはや引き延ばせない問題だった。

第一王子を指名したい王陛下は、自分の孫にあたる第二王子を後継者にと決め込んでいるリガ公の前に、ほとんどなすすべがなかった。

ところが、直閲家の当主として廟堂に席を持つユリウス様が、「家のあとは長男が継ぐのが古来よりの伝統です。国においても、またしかりではありませんか」と述べたことで、空気が変わった。

若手の貴族のあいだでは、ユリウス様は、大きな支持を得つつあ

った。

また、ユリウス様が実は王妹の御子であると知る長老たちが、ユリウス様の言葉を軽くは聞いていない節もあった。

しかも、述べた言葉は、まさしく正論であった。

ここで、重なる戦勝で武名を上げたパンゼルが、廟堂に上がるならば、それは大きな力となるはずなのだ。

王国守護騎士。

それは、建国時に始祖王を支えた二十四人の英雄に与えられた栄職である。

二十四人は直閲貴族家の始祖となり、それぞれ、王国の顕職に就いた。

以来千余年、王国守護騎士に任じられた者はない。

つまり、王国守護騎士に任じられた者は、二十四家と同格になるに等しい。

そのような地位をパンゼルに与える可能性を、リガ公が提示した。あり得ないことであり、王陛下は、これを奇貨とされた。

その裏で、アルカンは、パンゼルが絶対に勝てなくなるような条件を追加していった。

また、パンゼルを迷宮に追い払ってから兵を挙げ、メルクリウスを族滅して、そのまま王宮を囲み、第二王子への禅譲を迫る、という文字通り謀反そのものである計画を立てた。

私は、あのとき、どんな顔をしていたらうか。

病床にあつて、事態が推移していく報告を受けながら、私の顔は、復讐の予感に、ゆがんだ笑みをたたえていたかもしれない。

アルカンは、決定的な誤りを犯した。

一つは、私が起き上がれない、と思っていることだ。  
もう一つは、パンゼルが帰って来ない、と思っていることだ。  
その二つの前提が覆るとき、リガは、滅びる。

私は、それまで、権勢を誇るリガ家を破滅させる方途を思い描けなかった。

メルクリウスが大義を失わないやり方で、リガ家と戦える場面を作れなかった。

ところが、今、あちらからその一線を越えようとしてくれている。越えてくるがいい。

その一步を踏み込めば、灼熱の炎がお前を焼き尽くす。

私は、リガ家を滅ぼす戦ができるなら、その炎で王都が焼かれようとかまわなかった。

そして、パンゼルはサザードン迷宮百階層に赴いた。

リガ公の軍が、メルクリウスに殺到した。

豊穰祭のただなかに、王都にあるメルクリウス邸を攻めたのである。

見よ、この暴挙を。

この一事をもつてしても、やつが日ごろ言う、国のためとか、民のためなどという建前が、いかに口先だけのものであるか、分かる。

私は、喜々として起き上がり、メルクリウスの指揮を執った。

ユリウス様は、泰然としておられる。

ユリウス様も、また、パンゼルの勝利と帰還を、露ほども疑っておられない。

一つ誤算があったとすれば、リガ公軍に、パウロ男爵が合流したことだ。

パウロ男爵は、もともとフェンクス諸侯国の有力領主の一人であった。

王国歴千四十年に、当時のリガ公モルゾーラの手引きにより、バルデモスト王に帰順した。

北方騎士団の一角たるパウロ男爵軍は、精強で知られる。

だが、わがメルクリウスの武勇は、それに劣るものではない。

両軍が三度激突し、態勢を整えていたとき、パンゼルが帰ってきた。

地下通路を使って、直接ユリウス様の部屋に現れたのだ。

聞けば、見届け役のエバート様に毒の短剣で刺され、迎えの見込めない状況となったため、なんと、迷宮の百の階層を独力で踏破して帰還したのだという。

私は、それを聞いて、自分の愚かさに、慄然とした。

そうだ。

その可能性があった。

エバート様の高潔は、疑うまでもない。

しかし、それゆえに、国のためにと信じて、リガの企みに天秤を傾けることは、なさるかもしれない。

ありそうなことであるのに、それをまったく考えてもいなかった。

私は、私は。

メルクリウスを滅ぼすところであった。

パンゼルは、ユリウス様に短く報告を済ませると、自室に戻って装備を調べ、再びユリウス様の前にひざまずいて、言った。

「敵将撃破のお下知を」

「うむ、征け」

「はっ。」

恐れながら、アレストラの腕輪をお許し願いたく」

「許す」

軍の編成について相談されるものと思った私の前を、ただ一礼して通り、護衛として控えていたバラストにも一礼をすると、パンゼルは、正門を開いて外に出た。

両軍の魔法結界を、すうっと通り抜け、パンゼルは、あせんとする敵軍の中に、ただ一人、分け入った。

そして、ふれる者、近づく者は、すべてただの一振りで切り倒し、前進した。

高い防御力を持つに違いない鎧が、すばすばと切断された。

うんかのごとく密集してくる敵兵に対し、パンゼルは歩みを止めるどころか、次第に足を速めながら、前に前に進んだ。

パンゼルの刃は、師である私の目にもまったくとらえられない。

敵の攻撃も確かに身に受けているのに、ダメージが蓄積しているようには思えない。

それは、目の前で起きている出来事なのに、まるでこの世のものではない光景に思えた。

パンゼルは、敵軍の将帥旗が立つパントラム広場に、まっすぐに向かった。

二本の将帥旗のうち、リガのそれを目指した。

敵の人波に隠れて、姿が消えた。

そして、すぐに帰って来た。

帰り道のパンゼルを、敵は、もう襲わなかった。

人にあらざる者を見る畏怖の目で、ただ呆然と見送るだけだった。

ユリウス様の前に、手に持った首を差し出して、パンゼルは言った。

「敵将ガレストの首にございます」

ガレスト！

私には、もはや、パンゼルの声も、ユリウス様のお声すらも、聞こえていなかった。

ふらふらと、その首に近づき、目の高さに持ち上げて、眺めた。確かにガレストに違いない。

現リガ公アルカンの長男。

次期リガ家当主にして、バルデモスト王国白卿の座を約束された男。

おお！

おお！

おおおおおお！

私は、泣いていただろうと思う。

とつてい手は届かないと思っていたものが、今、手の中にある。

怨敵が最も失いたくない首。

怨敵の一族の将来を担う首。

いや、この首こそ、怨敵そのものだ。

このとき、私の胸の奥にあった、どろどろとした赤黒いかたまりが、すうつと流れ落ちて消えていった。

私の心は、清明さを取り戻し、今すべきこと、できることを、整理し、すみやかに結論を出した。

「ユリウス様。

たしかに、ガレストの首に相違ございません。

爾後の手配につき、申し上げることを、お許しください」

「許す。

申せ」

「パンゼルには、ただちに騎兵千名を率い、王宮に行ってもらわねばなりません。」

「この守りは、わたくしが務めます」

「そのようにいたせ」

「ははっ。

パンゼル。

疲れておるであろう。

すまん。

ただちに、王宮に赴き、近衛第一騎士団長か近衛第三騎士団長を見つけよ。

そして、メルクリウス家が賊徒に襲われたゆえ、王宮に変事があったとはと駆けつけたと申して、いずれかの騎士団長の指揮下に入りたしと申し出よ。

よいか。

万一、王宮が叛徒どもに囲まれておつても、あるいは戦闘が始まっておつても、騎士団長の指揮下に入るまでは、決して手出ししてはならん。

それから、侍従長に、メルクリウス家当主からの伝言として、第一王子のご安全に留意されたし、と伝えるのじゃ。

必要ならば、新たに手兵をお貸ししますとな。

ここより王宮までのあいだは、瞬間移動魔法が封じられておるから、なんじも馬を使い、率いる兵も、騎馬のみ千名とせよ。後続に、もう千名を送るから、おぬしの判断で使え。ゆけっ」

だが、それ以上、戦いが拡大することはなかった。パンゼルがガレストの首を取ったとき、世に言うパントラムの乱は、終わっていたのだ。

10

ガレストが死んだあとの、リガ公アルカンの動きは、悪魔も感心するほどの手際だった。

404

まず、王宮を攻めるはずの手勢を、守る手勢に変じてみせた。このとき、王と王子たちの心配をして警護に加わろうとしたアルカンを、駆けつけた諸卿が見ているが、一様に、

あれは、誰か。

と思うほどに、いつもの驕慢を消し去っていたという。パウロ男爵は、素早く自領に引き揚げた。

次に、廟議を開いた。

アルカンは白卿として、開会を仕切った。やつは、乱の首謀者はパウロ男爵であり、メルクリウス家と武威

を競わんとした出来事であったとぬかした。

長男ガレストが、王都防衛官の要職にありながら、パウロ男爵にたぶらかされ、武力蜂起を見逃したのは、許されざる罪であるとして、驚いたことに王陛下と満座にわびてみせ、なんと、ガレストの子どもと側近全員の首をその場に差し出した。

詮議の済まぬうちに関係者を殺すなど、隠滅にほかならないのであるが、いつもは何があってもかばう家族と郎党を処刑してみせた凄みが、追求の鋒を鈍らせた。

アルカンは、息子が詮議の対象者であるから、自分が座を仕切るのは適当でないと言い、上席赤卿が議事を引き継いだ。

ユリウス様と、ガレスト軍の上級騎士が、戦いの顛末を証言した。ガレスト軍は傍観していたのではなく、積極的に戦闘に参加していたことが明らかになった。

だが、恐ろしいことに、虚偽判定の魔術まで用いて、ガレスト軍の上級騎士数名を尋問したが、メルクリウス家に続いて王宮を襲う計画などは聞かされていない、と全員が言い切った。

パンゼルが、ミノタウロス討伐の報告をした。

枢密顧問官であるローウェル家のエバート様が、パンゼルを毒の短剣で刺したとき、リガ家が、メルクリウス家当主の殺害、第一王子の自決、王の退位、第二王子の即位をもくろんでいる、と言い残したことが問題になった。

アルカンは、エバート殿とはこの数か月公式の場でしか顔を合わせたことはなく、パンゼルを害したのはエバート殿独自の判断であり、また、第一王子の自決うんぬんは、エバート殿の推測に過ぎない、と断言した。

結局、真相はパウロ男爵を召喚して詰問するまで明らかにならないとして、詮議は終了してしまった。

巧妙にもアルカンは、王陛下の注意をパンゼルに向けさせた。

どうやって陛下をそそのかしたのか知らないが、怪物から得た神剣を持ったパンゼルが百人の騎士と闘うことになった。

パンゼルが圧倒的な勝利を収め、次には、騎士隊長に神剣を渡して一対一で戦い、撃破した。

アルカンが、かの者王国守護騎士に叙さるべき、と叫び、陛下も喜々として同意なされた。

派手な成り行きに皆が心を奪われ、反乱未遂という大罪は、忘れ去られた。

さらに、アルカンは、身内の不始末の責を取るとして、致仕を申し出た。

つまり、王宮での役職を引くということであり、白卿という臣下最高位の立場を捨てる、ということである。

そうして致仕を申し出ながら、引退前の大仕事として、三つのことをした。

一つは、第一王子の立太子である。

これにともない、第二王子は寒村に領土を与えられ、公爵位を受け臣籍に落とされた。

また、ガレストの姉である第二王妃は廃位となった。

一つは、パンゼルの王国守護騎士叙任である。

パンゼルは、新しい直閥貴族家を立てるについて、ゴランという家名を上申した。

昔名の知られた剣豪と同じ家名であると言われまいかと、私は心配したが、もう誰もが忘れ去っているようだった。

もう一つは、逆賊パウロ男爵征伐軍の編成である。

パウロ男爵は、召喚を断り、続く勅使に対しても申し開きを拒んだのである。

アルカンは、全軍の兵糧をリガが負担するという腹の太さを見せ

た。

ここまでされれば、これ以上リガ家の罪を問うことは難しい。むしろ、本当にガレストの独断であったのではないか、という見方さえ生まれた。

そうした空気の変化をたくみに読んで、アルカンは、後任大臣の推薦を行った。

これは、白、赤、青、黒の四卿のうち、引退する大臣が、自身と同じか、それ以下の大臣を推薦する慣例に基づくものである。

しかし、これほど大きな不始末の責をとって引退する人間が、後任の推薦をずうずうしく行うというのは、眉をひそめずに聞ける話ではない。

しかも、推薦の内容は、リガ家の次男ドレイドルを赤卿に、というものである。

いくらなんでも勅許は得られまい、と、誰もが思った。

ところが、王陛下は、これをあっさりお許しになった。なぜか。

パンゼルの結婚と抱き合わせて、事を進めたからである。

ドレイドルの、というよりその黒幕であるアルカンのうまさや、パンゼルに直接申し出を行ったことである。

すなわち、美貌と機知の豊かさで知られるエッセルレイア姫を、パンゼルに嫁がせたい、と言ってきたのである。

エッセルレイア姫は、アルカンの二番目の正妻の娘であり、ガレストの異母妹にあたる。

ドレイドルとは同腹である。

アルカンが、この娘を溺愛して、他家には嫁がせないと公言していたことは、よく知られている。

この掌中の玉を、ガレストの首を取ったパンゼルに嫁がせるといふことは、リガが膝を屈した、とさえ見える出来事なのである。

パンゼルからすれば、これを断れば、それはユリウス様の狭量ゆえ、と世間に取られかねず、ユリウス様からすれば、パンゼルの思ふとおりにせよ、と言うしかない。

そして、話がまとまってから、リガ家は、王宮に対し、この婚儀は、リガとメルクリウスがこれから手を携えて進んでいく証であると奏上し、勅許を得たのである。

王国の安定という見地からすれば、願ってもない婚儀なのだ。

なおかつ、アルカンは、騎士五十人という、桁外れの持参金を付けた。

王女の輿入れでも、ここまでのことはしない。

パンゼルの武勇を深く愛する王は、世に知られた美姫がパンゼルの妻となることを、大いに喜んだ。

この大度を見せたドレイドルを、いきなり赤卿という高位に置くことを肯<sup>つくな</sup>つほどに。

ドレイドルは、赤卿に就任するなり、権謀術数の一門らしい怪物ぶりを見せた。

その年の暮れに黒卿の一人が死去すると、後任にユリウス様を推挙したのである。

白卿は常に一人と決まっているが、他の三卿は、できるだけ二人が望ましいとされている。

ユリウス様は、まだ二十三歳の若さであったが、武門の一族として十分に過ぎる功績を挙げていたので、推薦自身は、不自然ではない。

ただ、それを、よりもよってリガ家が行ったということは、皆を驚かせ、ドレイドルを見る周囲の目は、確かに変わった。

それは、やつがちゃんと皮をかぶれる蛇であることを証明したにすぎないのに。

さらに、ドレイドルは、パウロ男爵領の攻略で、ユリウス様とパ  
ンゼルを巧妙に利用し、その武勲を大げさに評価した。

見え透いた世辞であるが、これを度量の現れと見る向きは、少な  
くなかった。

そして、パウロ男爵が、フェンクス諸侯国に親族を頼って亡命す  
ると、なんとその領地であったケザには、メルクリウス家を封じる  
のが適当である、と廟議で発言したのである。

これを聞いたときには、私も驚いた。

やつめ、気でも狂ったのかと。

さらに、やつは、リガ家とは縁続きでなく、また、王国では古い  
名門である一族の姫を、ユリウス様の妻にと、仲人を買って出た。

これを聞いたときには、舌を巻いた。

単に婚姻によってメルクリウスを懐柔しようとするなら、自家の  
姫をこそ選ぶだろう。

しかし、どの姫を選んでも、エッセルレイア姫より身分も美貌も  
劣る、という事情もさることながら、リガとメルクリウスが直接婚  
姻を行えば、他家の不快をおそれがある。

ところが、ドレイドルが選んだのは、むしろリガ家を嫌っている  
が、メルクリウスに対しては好意をもって接してきた一族の姫なの  
である。

しかも、財政は豊かで、内政に暁通した良臣を多数抱えており、  
突然大領を統治することになった当家に、これほど心強い縁組みは  
ない。

このバランス感覚のよさには、うならざるを得なかった。

やつは、二年続けて、王ご自身が陪席なさる結婚式を仕切ったこ

となる。

ユリウス様が結婚なさり、ケザ侯爵に封じられた翌年、つまり今年、ドレイドルは、三十六歳の若さで白卿の座に就いた。

だが、こうしたりガ家の復権を見ても、私の心は、前のようにざわめきはしなかった。

恨みが消えることはないが、パンゼルがいるかぎり、悪いようにはなるまい。

そう思うことで、私は、心に燃える怨念の炎を、それ以上大きくせずにすんだ。

そうだ、あるとき。

ガレストの首を、この手でつかみ上げたとき。

私の心は救われたのだ。

私が死ねば、この炎は消える。

もう、それを受け継ぐ者はない。

憎しみは、すべてをゆがめる。

私の憎しみは、私の物の見方や判断を、何度も誤まらせてきた。

うつかりと、この炎を誰かに手渡さないことが、今の私の務めだと信じる。

不要な記憶は、時の彼方に消えてしまえばいい。

ちょうど、あの、アレストラの腕輪の伝説のように。

あれが、王家とメルクリウスの君臣のちぎりの証だなどと、笑い話にもならない。

あれは、まさに欲望の証だ。

始祖王は、初め、カルダン神に加護を願った。

カルダン神が加護を与えたとなれば、当時未開地であったこの北部中央地帯に、新しい国家を作ることができる。

だが、カルダン神は、人間の思惑に振り回され続け、疲れ切っておられたので、始祖王の願いを退けられた。

そこで、始祖王は、二十四英雄とのちに呼ばれる同士あるいは部下たちに、カルダン神の討伐を命じた。

ただ一人これに応じたのが、メルクリウスの初代だった。

だが、実際にカルダン神にお会いして、その気高さに、初代は打たれた。

始祖王に別の土地を探そう進言したが、これには王も朋友たちも反対した。

もともと、追われ追われて、ようやくたどり着いた地であったから。

初代は、たった一人、カルダン神に向かった。

死ぬつもりで。

しかし、戦いに倦み切っておられたカルダン神は、一切の抵抗をせず、死ぬ道を選ばれた。

死ぬ間際に、初代に、五つの秘宝を授けて。

持ち帰った秘宝の恩寵のすさまじさに、始祖王は狂喜した。

中でも、あらゆる魔法に対抗できるアレストラの腕輪は、国家創建の英雄王たる自分にふさわしい品だと考えた。

そして、甘言を弄して腕輪を自分の物にしようとした。

始祖王が、比類なき偉大な人物であったことは疑いないが、人の物を欲しがる悪い癖があった。

だが、それはカルダン神の心になうことではない、と初代は考え、腕輪を献上しなかった。

朋友たちも、ただ一人神竜カルダンに立ち向かって、これを倒した初代に、強く感銘を受け、腕輪は初代が持つのがふさわしい、という意見を述べた。

初代にしか効果を発動できないことが、大きく後押しをした。

始祖王も、それ以上の無理押しはできなかった。

初代は、慎重にも、当主に心から認められた者にも効果が発動できる、という点については、報告しなかった。

その結果、どうなったか。

メルクリウスが代替わりするたびに、王家は新当主を呼び出し、腕輪の効果を、王が発動できるようになっていないか、あるいは、メルクリウスがその資格を失っていないか、確かめることにしたのだ。

いつか奪うために。

邪竜カルダンからの贈り物とは公言しにくかったのである。

腕輪は女神ファラからの贈り物といわれるようになった。

始祖王から初代に下賜されたことになり、建国の勇ましくも美しい神話として、人々に語り継がれた。

腕輪以外の四品は、カルダン神自身をはじめ、昔は知られた邪悪な竜神の名を冠していたからか、語られなくなり、やがて当家以外には忘れ去られた。

もう、よい。

当家も、もう、この秘伝を忘れるべきときだ。

ユリウス様には、五品がカルダン神からの贈り物であることと、恩寵の効果だけをお教えした。

王家のほうでも、古い伝承を失っていることは、間違いない。

私の死とともに、腕輪にまわりつく欲望の炎も、消える。

もつとも、パンゼルが持ち帰った剣の性能を知ったときには、腕輪と同じ歴史が、また繰り返されるのか、と危惧せずにはいられなかった。

パンゼルは、パントラムの乱終結のあと、王の前で、サザードン迷宮百階層で起きたことを、ありのままに伝えた。

ただし、パーシヴァル様が迷宮で亡くなられたことは公言できないから、カルダンの短剣のことは伏せた。

鑑定士が呼ばれ、怪物から得た長剣の性能が明らかになったとき、満座は驚愕の声に満ちた。

神話にしか見られないような、超絶的な恩寵である。

これを怪物に差し出させたということが、まさしくパンゼルの勝利を証明する、とみなされた。

諸侯の一人から、王に献上すべきだ、との意見が上がった。

パンゼルは、まったく考える時間もおかず、ただちに剣を王に献上した。

王陛下は、ひとたび剣を取ってごらんになったあと、これはなんじが得たものであり、なんじが使うべきものである、と仰せになり、そのまま剣を、パンゼルにお下げ渡しになられた。

まことに見事ななさりようだ、と思う。

この一事のみをもってしても、私は、かの王陛下を、名君と申し上げる。

続いて、王陛下は、それを持って闘うなんじの姿が見たい、と仰せになった。

ただちに、騎士百人との試合が組まれた。

中には、レベル八十を超えた騎士隊長も含まれていた。

その百人を、神剣を手にしたパンゼルは、たった一人で、まさに鎧袖一触でたたき伏せた。

次に、王陛下は、神剣をその騎士団長に持たせ、パンゼルには普通の長剣を持たせて、一対一で闘うよう、命じられた。

このときの陛下のお気持ち、よく分からないが、もしや、騎士団長が神剣の恩寵を引き出しても、パンゼルなら勝てる、とのおぼしめしであったろうか。

結果は、パンゼルの圧勝で終わった。

騎士団長には、神剣は、恩寵を与えなかった。

何人もが神剣を試してみたが、パンゼルにしか本来の力を発揮できないことが、はっきりした。

王陛下は、

「まさに、これは、神がなんじに与えた神剣である」

と、仰せになった。

王宮での試合の翌日、パンゼルは、闘った百人の騎士全員を、わがメルクリウスに招待した。

ぬけぬけと、戦の後始末に追われる家宰と私に、客に酒食を、と言いおったものだ。

パンゼルは、百人の騎士たちと、酒を酌み交わし、友となった。

パンゼルには、闘った相手と友だちになるという、妙なスキルが備わっている。

そのようなパンゼルの姿が、私の心をどれほどなくさめ、導いてくれたか、本人には分かるまい。

雨が降っている。

どうも雨音が遠いと思ったら、雨戸が閉まっっていて、カーテンが掛かっている。

常夜灯の油の匂いもする。

夜になっていたようだ。

今日は、バラストのやつは、来たのだろうか。

いや、毎日来ているのだから、今日も来たはずなのだが。どうも、記憶がはっきりしない。

やつとも、妙な縁だ。

考えてみれば、やつとも、アレストラの腕輪が引き合わせてくれたのかもしれない。

腕輪が見つかったあとは、カルダンの短剣について、なにがしか情報をくれる可能性のある相手、というほどのことだった。

ところが、しばらくして、ユリウス様が、あの冒険者ギルド長という人は、お父様のことをたくさん知っているのですか、とお聞きになった。

それはそうに違いないので、そうお答えすると、話を聞きたい、と言われる。

もっともなことなので、事情を説明して、当家の夕食に招いた。

やつのは話は、おもしろかった。

直接パーシヴァル様とやりとりした内容も、思ったよりずっと多かったし、おそろべき情報網によって、パーシヴァル様の、いろんな逸話を知っていた。

もともと知らなかったことまで、情報を集めて話してくれた。

語り口は上品とはいえないが、確かな常識に基づく話で、見方のゆがんだところがないのが、ありがたかった。

何より、やつがパーシヴァル様のことが大好きだった、ということがよく分かった。

夕食に招くのは、一度や二度では済まず、六日か七日に一度は呼ぶようになった。

ユリウス様は、もっと頻繁に来てほしいと仰せだったが、何しろやつは忙しかった。

単にパーシヴァル様のことだけでなく、その背後にある冒険者の生活や考え方。

モンスターと闘うということの中身。

経験値やアイテムのこと。

諸国の事情、風物。

遠い異国の神霊や英雄のこと。

私も知らない知識を、やつは豊富に蓄えており、その語り口や物の見方も含めて、楽しい会話が続いた。

事柄が全部真実だとは、とても信じられなかったが。

やつとギル・リンクス殿が若き日に体験したと称するほら話など、金を払っても聞きたいほどの出来だった。

バトルハンマーの腕も見事なものだ。

どうしてやつと闘うことになったのだったか。

そうだ。

やつの主武器がバトルハンマーだと聞いて、「技は要りませんが、威力はすさまじく、大力の戦士でなくては扱えませんか」と、ユリウス様にご説明したのだった。

私は賞めてやったのに、やつはそれを取り違えて、「へえ。そんなら技をみせてやるうか」と、私に言ったのだった。

初めて夕食に来たころは、ひどく緊張していたのに、もうあのころには、すっかり慣れてきて、自分の家のように振る舞っていたものだ。

長剣を持って、やつと闘った。

私は剣を三本と、あばら骨を二本へし折られ、やつに降参した。むろん、その次のときには、しかるべき武器を準備しておいて、やつの胸を切り裂いてやったが。

しばらく相手してやっていないので、寂しがっていることだろう。

それにしても、不公平だ。

私は、こうして老いてしまい、立ち上がることもままならない。

ところが、やつは、いつまでたっても、まるで二十代か三十代の若者のように元気だ。

年齢を問いただしてびっくりし、そんな年なのに、どうして人並みにおとなしくすることができないのか、と訊いた。

すると、やつは、「わしのおやじはドワーフじゃから、わしは完全には人ではないのう」と答えたものだ。

最初は冗談だと思っていたが、本当だという。

ドワーフなどという生き物が、まだどこかにいたなど、周りに知れたら大騒ぎになるだろう。

しかし、いわれてみれば、たしかに人間離れた体格と体力をしている。

ギルド長をやめてからは、いつその屋敷に來い、と勧めた。

やつも、ここの空気が肌に合っていたのだろう。

「おお、そうさせてもらうか」と返事し、以来、メルクリウス家の

食客となった。

もう、あれから、十七年もたつのか。

12

パンゼルが来てくれたのは、今日だったか、昨日だったか。うれしい知らせだった。

子どもが生まれたのだという。

男の子だ。

奥方との仲も、とても良好のようだ。

エッセルレイア姫は、いささか才気のありすぎるかただとも耳にしていたので、少し心配していたが、杞憂だったようだ。

ユリウス様と奥様も、この上なく睦まじい。

もうすぐ、お子様がお生まれになる。

パンゼルの子と同じ年、ということになる。

喜ばしいことだ。

メルクリウス家とゴラン家の友誼は、何百年と続くだろう。

思えば、そのきずなは、あの忌まわしい夜、バルドラン様とエイシャ殿とのあいだで結ばれたのかもしれない。

名付け親になれと言われたときには、驚きもしたが、パンゼルらしいなとも思った。

以前から、これならと思っていた名があったので、その場で命名した。

ベッドに横たわったままの、ひどく略式の命名式となったが、パ

ンゼルも奥方も、満足していたようだった。

アルス、

という命名を聞いて、パンゼルは、ただひとつ、ありがとうございます、と  
言います、と言って下がった。

名前の由来など、何一つ聞くこともなく。

まことにパンゼルらしい振る舞いだ。

奥方は、英雄の名前をありがとうございます、と礼を述べて退出  
なさった。

そのとおりだ。

アルス、といえば、女神ファラに近侍して、あらゆる敵から女神  
を守り抜いたといわれる英雄だ。

人にして神、神にして人。

人間の剣の技は、このアルスによってもたらされたともいわれる。

だが、アルスには、もう一つの顔がある。

争い合う神々の中に立って、それぞれの言い分を聞き、いさかい  
を収めていった、神々の調停者と呼ばれる顔である。

アルスは、神の争いにより苦しむ人々をも、助けたことになる。

幼き日、私は、エイシャ殿から、古い神話を教わった。

昔、人々は、神を奪いあった。

地の恵みを望む者は、地神ボーラを、

山の恵みを望む者は、山神ガーラを、  
海の恵みを望む者は、海神エルベトを、  
わがものにしようと思つた。

わがものにならず、他の者に恵みを与える神を、人は憎んだ。  
やがて、神々は、人の思惑によつて、仲違いし、相争うようになつた。

神々の長兄であつた天空神は、  
今は南でもその名を伝える者は少ないが、  
ガーラ、という名だつた。

ガーラは、神々の争いを哀しんだ。  
人と人との争いを哀しんだ。

そこで、ガーラは、  
目には見えぬ風となつて、天空に舞い上がり、  
遙かな高みから、神と人の幸せを見守ることにした。

やがて、地上にアルスという英雄が現れ、神々の争いを鎮めた。  
アルスとは、ガーラの化身にほかならない。  
ガーラは、人の姿を借りて、地に平和をもたらしただ。

この由来も定かでない神話を事実と信じて疑わなかつたエイシャ殿。

私は、エイシャ殿より教つたこの神話になぞらえて、パンゼルの子の行く末を言祝こほごうと思つたのだ。

ああ、エイシャ殿、エイシャ殿。

私は、

私は、

あなたに頂いた命にふさわしい一生を送れたのだろうか。

エイシャ殿！

12

王国歴千百年白の三の月の一日。

メルクリウス家の前の家宰パン<sup>まき</sup>ジャ・ラバンが死去した。

葬儀は、新ケザ領誕生以来、最初の貴臣の葬儀となった。

若き武勇のケザ領主ユリウス・メルクリウスが喪主となり、王国守護騎士パンゼル・ゴランが執行責任者となった。

つつましかであるが、会葬する人の胸を打たずにはおかない荘厳な儀式であったという。

特筆すべきは、勅使が遣わされたことである。

パン<sup>まき</sup>ジャ・ラバン自身は、子爵家の傍流にすぎないので、本来、葬儀に王家が公式の使いを送ることはない。

パン<sup>まき</sup>ジャ・ラバンは、若き二人の英雄にとり父同然の存在だったから、格別の配慮だろうと、人々は言い合った。

奇妙なことに、勅使は、開いた誄詞るいしを読み上げなかった。  
読み上げず、無言で弔意を示し、そのまま柩に収めたのである。  
そこに何が書かれていたか、誰も知らない。

目の前から広場が消えた、と思った次の瞬間、ミノタウロスは、自分が今までとまったく違う場所にいることを知った。

別の場所ではあるが、先ほど乗ったのと同じような形をした石に、自分の体は乗っている。

ただし、先ほどの平らで丸い石が青色に光っていたのに対し、こちらの石は、形はまったく同じながら、赤色に光っている。

そのすぐ横に、まったく同じ大きさで同じ形の石があるが、こちららは、光らず、灰色にくすんでいる。

部屋、といえば部屋である。

周囲の形は、上から見下ろせばいびつな円形、といってよいだろうか。

床は、ぐにやりとした感触である。

うねうねとした起伏を持つ、赤褐色の床に、ところどころ、極彩色の、丸いボールが転がっている。

ボールの大きさは、まちまちである。

大きいものは、ミノタウロスの身長に等しい直径を持ち、小さいものは、腰ほどまである。

形はややいびつで、模様からしても、つぼみ、とでもいったほうが近い。

よく見れば、床から生えているように見える。

床も天井も、そのつぼみも、ぼんやりと色とりどりに発光してい

る。

だが、そんなことより何より。

この部屋は、尋常な空間ではない。

空気、と呼ぶには、あまりにねばねばとして重苦しい気体で満たされ、濃密な瘴気が立ちこめている。

おそらく、何らの抵抗をも持たない生き物であれば、入ってすぐに死んでいる。

今のミノタウロスなら、じゅうぶんに耐えられるが、心地よい、とは到底いえない。

ぬめぬめした壁は、そのまま天井につながっている。

どこにも出口が見当たらない。

ミノタウロスは、壁の様子を確かめようと、乗っている石から下りて、一步を踏み出した。

すると、すぐ近くのつぼみが、ぶわつと釣り鐘型に開き、中から無数のうねうねした触手が飛び出して、ミノタウロスに襲い掛かった。

ほう、面白いものが出たな。

と、思いながら、ミノタウロスは、触手を片っ端から切り落とすた。

そして、間合いを取ろうと、一步後ろに下がったところ、今度は、後ろ側のやや小さいつぼみが開いて、攻撃を加えてきた。

同時に相手にするのはよくないと判断し、ミノタウロスは、一度跳躍して、ここに飛ばされてきたとき乗っていた、平たい石の上に

戻った。

二体の球体捕食生物は、すぐに触手を収め、元の形に戻って、何事もなかったかのように、静まった。

後ろから襲ってきた触手に、少し左手が触れたのであるが、その触れた部分が、しゅうしゅうと腐食して、いやな匂いを放っている。触手の動きは、なかなか素早く的確で、ぐずぐずしていれば、あるいは、一度にたくさんの相手と闘えば、ミノタウロスといえども、苦戦しかねない。

そして、相手は、今ミノタウロスがいる中央付近では、まばらであるが、壁に近い所では密集している。

ここで、人間であれば、まずは、調べたり、考えたりするかもしれない。

だが、ミノタウロスには、そのような発想はない。そこに闘える相手がいて、向こうはこちらを襲ってくる。ならば、まず殺す。

話はそれからである。

あふれ出てくるどう猛な歓喜に、ミノタウロスは目に笑いを浮かべた。

## 第6話 武闘僧パタガモン

1

「パタガモン様、第十一部隊より、報告がございました。メジャトケ湖の神霊は、休眠もしくは消滅状態にある、とのことです」

「ご苦労。」

「いったん、山に帰るよう伝えてくれ」

「パタガモン様、第八部隊より、問い合わせがまいました。」

「最近、海の神殿に奇瑞が見られたと、辺境に噂が流れているようですが、調査いたしますかと」

「いや。」

「あそこには、急いで調査するようなものはあるまい。」

「予定通り、第二部隊と合流して、ガーラ大山脈に行ってもらおう。」

「少し時間がたちすぎたが、何らかの異変を目撃した者がいないか、ふもとで聞き込みをしたのち、案内のできる山の民を雇って、神域を見てくるように伝えてくれ」

「ここは、ジャン＝マジャル寺院である。」

「大陸に名高い武闘僧を輩出してきた寺院である。」

「この寺に入った者は、すべて厳しい武術の訓練を受ける。」

宗教教義と、その修行と、武闘家としての修行とが一体化した、特異な寺院なのである。

この部屋は、教務院総務執務室であり、中央の机に座って、忙しく報告を受け、指示を出し、また、とぎれることなく書類を片付けているのは、教務院総務官補佐のパタガモンという男である。

総務官は、長老といってよい老人で、現場には顔を出さないのが、実質、この部門の責任者である。

駆け回る僧侶たちには細身の者が多いが、パタガモンの体型は、雄偉、といってよい。

粗末な道着からはみだすような筋肉。

太い首。

つるつるにそり上げた頭。

太く、天に向かって反り上がる肩。

切れ長で、竜のごとき強い光を放つ目。

声は、低いけれど、張りがあって、よく響く。

武の技において、知能と見識において、宗祖の志を引き継がんとする決意において、心ある青年僧たちから指標とも目されている人物である。

そこに、一人の僧が入って来た。

ひよろつとした体つきはともかく、人相の悪さは、あまり僧侶の雰囲気ではない。

「パタガモン殿。

なかなか、お返事が頂けませんな」

「おう、ラガラタ殿。

すいませんな。

この通り、立て込んでおります。

念話のできるものは、それぞれ大陸中で任務に励んでおりますのでな。

前に申しましたとおり、手が空く者がいたら、そちらに派遣いたします」「

「パタガモン殿。

念話のできる僧は、当寺院全体にとって、貴重な人材。

いかに教務院の中核たる総務室とはいえ、あまり独占がましいことは、いかがかと」

「これは異なことを。

独占などしておりません。育成したのです。

今年も、昨年も、その前も、ずうっと以前から、新しく入山した者の配属については、貴殿の属する法務室と、祭事室が最初に人を選び、その他の室が選んで、最後に残った者を、この総務室に引き受けております。

その者たちを教育するなかで、たまたま念話ができるようになったというだけのこと。

念話の法は、当寺の中では秘伝でも何でもありませんからな。

どうか存分に、新人育成をなさるがよろしい」

「パタガモン殿。

そうおっしゃっては、身もふたもない。

どんな才能を持っておるか、時間をおかねば分からぬもの。目覚めた才能は、有効に使わなくてはなりません」

そのあとも、ラガラタは、しばらく食い下がったが、やがて諦め

て出て行った。

「パタガモン様。

今日のラガラタ様は、妙にしつこかったですね」

「うむ。

おおかた、先方が言い値を上げてきたのであろうよ」

「それにしても、人材の独占とは、とんでもない言いぐさでしたね。自分たちのところは、貴族や金持ちの子弟ばかりを取り込んで、さんざんうまい汁を吸っているくせに。

見向きもしなかった貧乏人の子弟が修行して能力を身につけると、今度は財産だと。

商品のつもりなんですかね」

念話僧は、二人で一組である。

大陸の端と端にいても、心で言葉をかわすことができる。

双方が同じ時間に、念話の態勢にならねばならないので、いつでも、ともいえないが、定時の連絡を決めておけば、あとは運用次第である。

これが使える者は、ジャン＝マジャル寺院以外から出たことはない。

この寺院特有の加護によるものといわれている。

もし、たった一組でもこのような能力を持った者がいれば、政治、軍事、経済その他の上で、利点は計り知れない。

諸国、特にゴルエンザ帝国は、長期間の人材派遣を、破格の報酬によって願ひ出てくる。

まったくはねのけるばかりでは、政治上不都合なので、時々、短い期間に限って、派遣を行ってきている。

また、寺院を政治的に牛耳りたい人々からすれば、外部に恩を売り、人脈を作るよい素材なので、念話僧を実質全員抱えており、かつ渉外の担当である総務室に、働きかけてくるのである。

「パタガモン様。

あまり、大きな声では申せませんが、ラガラタ様は、自分が寺院の総長になったら、世に奉仕する寺院に作り替える、と言い回っておられます」

「聞いておるよ。

念話僧は、その代表として、二組だけを残して、十組は外に貸し出す、というのであろう。

馬鹿な話だ。

この寺院本来の使命を分かっておらん」

そこに、一人の僧が、早足で入室してきた。

「パタガモン様。

一大事です。

カウ・レカン教務院総長様が、身まかられました」

2

山全体にあふれるような武威は、さすがだ。

と、ザーラは思った。

先ほどから、修行僧の案内を受けて、細くぐねぐね曲がる石の階段を上っているのであるが、山のいろいろな所から、というよりも山全体から、ただならぬ覇気のようなものが伝わってくる。

ここを訪ねたのは、ザーラ自身の興味もあつたが、一度見てもらい、場合によつては返却しなくてはならない物を持っていたからである。

あの不思議な庭園で、独りになって途方に暮れたが、しばらくすると、庭園が消えて、見知らぬ場所に立っていた。

ありがたいことに、妙な品々は、庭園と一緒に消えた。

行き合つた人に現在位置を聞いた。

アルダナからペザに、国境を越えた所だつた。

アルダナには、会つてみたい剣客が何人かいたのだが、ロアル教国での経験が経験だつたので、もう戻つてみる気にはならなかつた。とりあえず、あのギルドでのような目に遭わずにすむ、という点では、あの自称ラスボスに感謝したいぐらいだつた。

ペザに来たので、当初の予定通り、ジャン＝マジャル寺院を訪ねた。

Sクラスの冒険者カードは、このような場合には、ありがたい。訪問を、むげにはできないからである。

「ザーラ殿とおっしゃったか。

私は、当寺教務院総務官補佐、パタガモンと申します。

その若さでSクラスとは、恐れ入ったご修行ぶり。

当寺の若い者にも、見習わせたい思いがします」

ザーラは、あいさつを返し、しばらく会話をしたが、これは、武  
においても、智においても、さらには心においても、端倪すべから  
ざる人物と見て取った。

そして、実は今日お伺いした用件は、と述べて、一つの腕輪を差  
し出した。

「こ、これはつ。

いったい、どこでこれを」

パタガモンほどの人物があわてる何が、この腕輪にあるのかとい  
ぶかりつつ、ザーラは説明した。

「私の父は、バルデモスト王国の騎士で、パンゼルといいました。  
父は、あるとき、強敵と闘うために、素手の武技が必要と考えま  
した。

ちょうどそのとき、知人のもとに、当寺の武闘僧殿がご滞在で、  
お願いしたところ、快く指導をお引き受けくださったそうです。

わずか三週間であったといいますが、父は、その武闘僧殿から、  
まことに得難い技を教授され、強敵に勝てたのです。

その後、父は死に、遺品の中にこの腕輪があったのですが、どう  
いう由来の物か分かりませんでした。

私の武芸の師匠の一人であるかたが、この腕輪には、ジャン＝マ  
ジヤル寺院の文様が彫られているし、尋常の腕輪ではないから、機  
会があれば、一度立ち寄って訊ねてみるよう、助言してくださいま  
した。

このたび、修行の旅で近くを通りましたので、こうしてお訪ねし  
た次第です」

「うづむ。

なんと、おそれいったことが。

よりによつて、この時期に、この腕輪が戻つてくるとは。うづむ。

神霊のお導きとしか思えぬ」

パタガモンは、これも神霊のお差し向けでしょう、ご内密に願いますと前置きして、事情を説明した。

この腕輪のもとの持ち主は、マンダという高僧であった。

この腕輪は、聖獣環と呼ばれる秘宝で、四個あり、それぞれ、東のゴルメド、西のラシャ、北のポルポ、南のヤーツという、四聖獣の武徳が込められている、といわれている。

宗祖が、高弟四人に与えた物で、この腕環を持つ四人が、次の教務院総長という教団最高位を指名する資格を持つのだという。

腕輪は、各保持者が、自分の弟子の中で最も優秀とみた者に受け継がせる。

ところが、十八年ほど前、ゴルメドの腕輪が紛失した。

マンダが、旅先でほんの数週間手ほどきした人物に、渡してしまつたというのだ。

マンダは、それがどこの誰であるか、決して口にしなかった。

それは、

「どこの誰かを言えば、使いが出て、腕輪を取り戻すであろう。

しかし、かの者は、たとえ教えた期間は短くとも、愚僧の愛弟子。知る限りにおいて、あれほどの格闘者はおらん。

あの者に託さずして、誰に腕輪を授けよというのか」

という理由によるという。

その上、マンダは、そのどこの誰とも分からぬ弟子に、寺の秘伝

である金剛鬪気法と、青銅鍊丹法を伝えたという。

許し難いことであり、マンダは、平修行者に落とされたが、不満をいうでもなく後進の育成につとめ、六年前に死んだという。

ザーラは、わびることも、気の毒がることもしなかった。

それをすれば、マンダ師の生き様を軽んじることになる。

その代わり、

「寺の決まりを破つてのことであつたのですか」

と、訊いた。

ミノタウロスを倒そうとする父の願いが、マンダ師に禁を破らせたかと思つたのである。

だが、これに対して、パタガモンは、大いに笑つて、

「宗祖は、わが技とわが祈りは、広く伝えよ、と仰せでした。

また、技を継ぐ者は、年限や立場でなく、ただ武の力のみをもつて定めよ、ともおっしゃつておられます。

マンダ師は、宗祖の教えに、見事に従われた。

腕輪が教団にとり重要な意味を持つのは、あとで勝手に組織の都合で付け加えたもの。

腕輪に宗祖の権威を借りておるわけです。

そもそも、宗祖は、わが墓を作るな、拜むな、組織集団を作るな、と仰せられた。

ところが、われわれは、宗祖の墓を作り、拜んだ。

最高位たる教務院総長は、その墓番の親方。

当寺がある、ということ自体、宗祖に対する裏切りなのです」

と、大胆なことを言った。

ザーラは、この人は信頼できる、という思いを強くした。

3

「それにしても、弟子とは、バルデモストのパンゼル殿であったか。迷宮最深部の怪物を一人で倒したとか、北方騎士団を寡兵で打ち破ったとか、武勇の噂は、この地方まで伝わっています。」

噂の中には、騎士百人を一人で打ち破ったなどというものもありますが」

「それは、事実です」

「なにつ。」

悪いが、信じられません。

ちゃんとした騎士百人を、一人で相手にできるわけがない」

この人物になら、見せてもかまうまい、と思ったザーラは、インベントリを開くと、ポーラの剣を取り出して、この剣の力を借りてのことです、とパタガモンに見せた。

パタガモンは、鑑定スキルを持っていたようで、目をむいて仰天した。

「これはっ、神銘恩龍品。

しかも、上級神の！

まさか、こんな物が、まだ世にあるとは。

うっうっうっむ。

なんたるすさまじい恩寵か」

神銘恩寵品とは何か、と訊ねてみると、神や神霊が、最高の恩寵を込めて作った、ただ一つのアイテムのことで、その神や神霊の名を冠している、ということであった。

現在確認されている神名恩寵品は、ほとんどが、国や神殿や諸侯の秘宝となっている。

作成した神や神霊の特性と関係のある恩寵を持つ。

恩寵の効果は絶大であるが、発動条件が厳しく、実際には何百年も使われていないことが多い、という。

次にザーラは、上級神とは何か、と訊ねた。

神霊が、人の信仰を集めて神格を得たものが下級神であり、これがさらに神格を高めると中級神になるという。

湖や、滝や、山や、川や、木や、岩などの神霊が神格を帯びた場合、その場から動くことはなく、人格的要素は希薄である。

竜や、巨人や、神々と人との交わりから生まれた神霊が神格を帯びた場合、どこにでも移動できるし、際だった個性を発揮する。

上級神というのは、これらと違い、もともと姿形はなく、人が現れるより早く、この世に働きを現していた霊的存在である、ということであった。

「ボーラ神が上級神でおわすなら、ガーラ神やザーラ神も、そうなのでしょうか」

「そうです。」

しかし、北のかたなののに、ガーラの神や、ましてザーラの神を「存じとは、驚きました」

実は、と、ガーラ大山脈で山の民の娘に教わった神話と、神霊との出会いの顛末を語った。

「なんと、そうでしたか。」

大山脈で神霊の強い波動が発せられたのは感知してありましたので、何事が起きたのか調べに、寺の者を派遣していたのです。

それにしても、神霊相手に刃を振るい、あまつさえそのような起請を立てるとは。

あなたは、まるで、ボルトン神のように無鉄砲なからだ」

「ボルトンというのは、神様の名前なのですか」

「ええ。」

南の一部では、よく物の例えに使われる名前です。

おとぎ話では人気のある神ですな。

もとは、ドナ湖に住んでいた竜神ですが、妻の竜神ライカは、怒れる女神とも呼ばれ、ひどい焼き餅焼きで、とにかくすぐに怒る性質でした。

ボルトンは、妻を恐れているくせに、何かというと、わざわざライカを怒らせるようなことをするのですね。

そして、周りの者も、とばっちりを食う。

そこで、好んで危難を呼び寄せることを、ボルトン神のように無鉄砲だ、などと云うのです。

わざわざライカのひげを引っ張るようなことをするな、という言葉い回しも残っています。

ライカはカルダンの妹ともいわれています」

ああ、それでボルトンの護符は、ああいう恩寵を持っているのか、と、見当違いなところでザーラは納得したが、口には出さなかった。

「アレストラとか、エンデ、といった名をご存じでしょうか」

「エンデは、やはり神竜で、ボルトンの弟だといわれています。アレストラ、という名は南では知られていません。」

北には、女神ファラの使役神の一人である、という伝説がありますね。」

出自の不明な神霊なのですが、アレストラの腕輪という神銘恩龍品があるそうですから、実在した神霊なのでしょう。」

今名前を挙げた神霊については、伝説を収集して得られた知識しか持ちません。」

この教団が出来たときには、いずれも身を隠している神霊ですから」

「北でいう六大神は、みな上級神なのでしょうか」

「大地神ポーラと、海神エルベトは、上級神です。」

治癒と死の神トランは、中級神です。」

他の三神は、下級神から中級神に移りつつある、というところではないかと思えます」

「それにしても、神々や神霊のことについて、まことに広く深く存じなのですね」

「それがこの寺院の使命だからです」

「伝説を集めることができますか」

「神々と神霊の動向を見守り、邪神化を防ぐこと。」

邪神化したら、鎮めあるいは滅ぼすことができます」

邪神化とは何ですか、と訊くと、僧は、少し長い話になります、と言った。

4

ザーラは、石の回廊を、ひた走っていた。  
さほど広くない通路の両側には、等間隔で、石の獣が立ち並んでいる。

これは、実在の獣を象つたものなのだろうか。

と、ザーラは思った。

獣は、獅子のようでもあり、熊のようでもある。

後ろ足二本と尻尾を支えに立ち上がり、前足二本を、威嚇するかのようにつき出し、太い牙の生えた口を半ば開いている。

頭部から毛髪もしくはたてがみが長く伸びている。

ここまでなら、獣といってよいのだが、どうも目と耳が異様である。

目と耳は、どう見ても、人間のそれなのである。

しかも、目はひどく大きく、ゆがんで見開かれ、あざけり笑うかのような表情をたたえている。

太い四肢、爪の鋭さを見るに、動き出せば、容易ならぬ敵である。

こんなものに、この狭い通路をびっしりとふさがれたら、確かに、

よほどの時間をかけねば通れまい。  
それも、相当の腕の持ち主でなければ、どうにもならぬ。

そう思う心の一方で、これと闘ってみたい、という気持ちも強く湧いてくる。

しかし、今は、時間がない。

こうしている間にも、挑戦者の門は閉じられるかもしれないのである。

しかも、今は、走る速度を上げるため、ポーラの剣の力を借りている。

帰り着いたときの反動は、覚悟しなければならぬ。

そのような状態で、格上の相手と、闘う。

だが、近い未来に訪れる、その不利な戦いは、ザーラの胸を躍らせてやまない。

まさか、ここで、かの、ジャル・ドル・バザ殿と闘えるとは。

む、見えた。

出口だ。

ザーラは、ボルトンの護符の効果発動を解除した。

疾風の勢いで、出口を駆け抜けると、あぜんとする僧たちにかまわず、ポーラの剣をインベントリに収め、挑戦者の門に入ろうとするザーラを、太い腕が止めた。

「待たれよ、ザーラ殿」

パタガモンであった。

パタガモンは、右手の人差し指を、ザーラの額に突きつけると、むっ、と気合いを込めた。

ボーラの剣を使った反動で、きしみを上げ始めていた全身が、嘘のように楽になる。

「武運を」

と目に力を込めて言うパタガモンに、こちにも目に力を込めてうなずくと、急ぎ足で、挑戦者の門をくぐった。

無事にくぐれた、ということが、ザーラが正しく資格取得の試練を果たしたことを証明している。

なおも前に進むザーラの後ろで、挑戦者の門が閉じる音がした。まさか間に合うと思っていなかった者たちは、驚愕しているであろう。

だが、すべては、これからである。

ほどなく、大きな部屋に出た。壁は円形で、天井は半球形である。四方の壁には、人と獣が混じり合ったような神像が四体、埋め込まれるように立っている。

四聖獣と呼ばれる、この寺院の守護神であろう。

この四聖獣が、決着がついたと判定するまで、ここから出て行くことはできない。

部屋の中央に、一人の初老の男性が座っている。

じっと目を閉じて瞑想しているようであったが、ザーラが部屋の中に進んでいくと、目を開いて立ち上がった。

「ジャル・ドル・バザと申す」

武人の礼をもって、男はザーラに名を告げた。

同じ礼をもって返しながら、ザーラは、

「ザーラと申します」

と、短く答えた。

男が座っていた、そのすぐ前には、二本のロングソードが置かれている。

男は、ザーラに、先に取りよう、しぐさで促した。

まずザーラが、次に残ったほうを男が手にした。

「シアイヲ、ハジメヨ」

どこからともなく、声が響いた。

なるほど。

四聖獣とやらが、ちゃんと判定してくれるのか。

これから、この剣聖といわれる男と戦えるのである。

5

パタガモンから、邪神についての話を聞き終えたザーラは、言葉を失った。

それまで、神について、迷宮について、冒険者について考えていたこと、知っていたことが、すべてひっくり返されてしまったように感じた。

続いて、ザーラが、ナーリリアから聞いた話と、イシユクリエラの白姫から聞いた話と、竜の御子誕生の顛末を伝えた。

パタガモンのほうも、ザーラの話に相当の驚きを覚えたようである。

いくつか、長年疑問に思っていたことが解決した、とも言った。

ザーラは、邪神を討つことを使命とするというこの教団が、ナーリリアのことをどうするのか心配した。

パタガモンは、ラミアは、この宗派が討伐の対象にするようなものではないし、まして実体が人間であるとすれば、なおさらであると言った。

ただし、妖魔というものは、本人の思惑にかかわらず、事件のもととなることはあるので、万一、多くの人間に災いを呼ぶような事態になれば、何らかの手を打つことはあり得る、とも付け加えた。

パタガモンは、腕輪を当寺にご返還いただけなしかと申し出、ザーラは、もとよりそのつもりでした、と応じた。

パタガモンの説明によると、最高責任者が少し前に急死し、新しい最高責任者に、利権と富貴しか眼中にない人物が選ばれようとしており、その場合、この寺本来の使命は、遂行不可能になるというところが、聖獣環保持者三人のうち、二人までが、その人物を推している。

行き詰まったところに、四つ目の腕輪を持って、ザーラが現れたのだというのである。

しかし、腕輪があっても、伝承資格はどうなりますか、とザーラが聞くと、なんと、パタガモン自身がマンダの高弟であり、秘伝はすべて受け継いでいるので、継承資格には問題がない、と言っ。

ザーラは、間に合う時期に来ることができてよかった、と心から

思った。

そのまま、賓客として、寺の修行を見学などして、有意義に、数日を過ごした。

ある日、事態が急展開した。

憤怒に顔を染めたパタガモンに事情を聞くと、二対二で拮抗した候補のどちらを取るかについて、四聖獣の堂で帰依者の対決により決する、と相手側が言い出したらしい。

帰依者というのは、寺の武威に心服して、宗法の守護を誓った、外部の武芸者であるという。

四聖獣の堂は、決闘場のようなものであるが、ここには、四聖獣の霊が祭られており、闘いの不正を監視し、決着を宣言するという。この堂への入り口は、試練の扉と呼ばれ、資格を持った人間以外は通さない。

堂の前に、長い回廊があり、その最奥にある石版に触れば、資格を得られる。

堂と回廊は、宗祖自身が残した唯一の建造物であるという。

寺の重要事項について議論で決着がつかないときに、四聖獣の堂で決することは、教団の規則にも認められていることであり、当事者同士の遺恨を残さないため、代理として帰依者に闘わせることも、慣例に則ったものである。

だが、それを、今日行うというのだ。

この議は、言い出したほうが日時を決められる。

あまりといえば、あまりなやり口である。

私が今から回廊に行きましょう、とザーラが申し出たが、石版ま

での距離は、神速の歩法の持ち主でも、指定の刻限までに戻れるものではなく、まして、回廊では、石の獣たちが襲い掛かってくるので、練達の武者者でも三日はかかる、とパタガモンは答えた。

だが、ザーラは、相手の武者者の名を聞いて、すっかりやる気になっっていた。

それは、まさに、アルダナで最も会いたかった剣客である。

また、およその距離を聞いて、間に合うかもしれない、と思った。いぶかるパタガモンに押しお願い、案内を受け、回廊に飛び込んだのである。

走る速度は、ボーラの剣により加速される。

ザーラ自身の加速スキルで上乘せできる。

そして、ボルトンの護符の恩寵の一つである、隠形効果を発動させた。

もはや、いかなる相手にも気付かれない。

風よりも疾く、ザーラは走った。

6

今日の前に立っている敵は、確かに剣を持っている。

それなのに、重さが、まったくこちらには感じられない。

おそらく、剣を持っている、という感覚さえないのであるうな。

そう思いながら、ザーラは、石の床を右回りにすり足で移動しつつ、攻撃の呼吸をはかった。

ひゅん、ひゅん。

風斬り音というには、ごく控えめな音を立てて、相手の剣が二度振られた。

ザーラは、これを、上半身のひねりだけでかわしつつ、右に回る足は止めなかった。

二撃とも、カウンターで斬り込める隙があった。

隙に乗じて斬り込んでいたら、殺されていたであろう。

足の動きは止めず、ザーラは、前に向けた剣を左下段に下げた。

そして、まったく予備動作なしに、左下から斬り上げた。

相手は半歩下がってこれをかわす。

ザーラの右回転は、おそるべき加速をつけて続けられ、もう一度左から右への斬撃が、大きく踏み込みつつ、繰り出された。

相手は、跳躍して、これをかわした。

少し後ろに下がりながらの跳躍に見えたので、ザーラは、しめた、と思ったが、相手はそのまま空中で身をひねると、たっぷりの遠心力を乗せて、左上から袈裟懸けに斬り付けてきた。

このとき、ザーラの剣は右に泳いでおり、左半身は無防備にさらされている。

ザーラは、後ろに倒れかかりながら、そのままさらに加速をつけて体を回転させる。

相手の剣は、体すれすれのところで、ザーラの右の空を切り裂く。ザーラは、遠心力を利用して、体を起こし、再び、二人は、ともに剣を体の前に構えて対峙した。

危ないところであった。

右回りの足運びを最後に逆転させて、間合いを惑わせていなかったら、まともに切り裂かれていたであろう。

相手の呼吸は、乱れてはいないが、心持ち胸が大きく動いているように見える。

この相手に、ただ一つ優るものがあるとするれば、それは若さである。

待ち続けるほど、勝機は増す。

そんなことを考えながら、ふとザーラは思った。

たかが氷狼に、傷つくことの恐怖を感じた自分が、今は、これほどの敵を前に、むしろ喜々として闘っている。

一撃を受ければ、手足が飛び、命を失う。

そのような相手と、勝算があるとはいえない状態で、殺し合いをしながら、自分の心には、恐れが見えない。

これは、どういうことなのか。

闘いの高揚が、恐怖を麻痺させているのだろうか。

氷狼と違って、殺されても名誉な相手だからだろうか。

相手が、袈裟懸けに斬撃を繰り返してきた。

ザーラは、左に身をかわして、剣先を相手の顔に突き込もうとした。

相手の剣が、右下から左上に、ちょうど先ほどの斬撃を逆にたどるように、斬り上げてきた。

ザーラは、剣を右下にねじ込み、相手の剣にすりつけるようにして、軌道を変えさせ、一步下がった。

相手も、半歩下がった。

今は、素晴らしい技だった。

かわしたはずの剣尖が、間髪を入れず、斬り上げられた。

見たことのない技だった。

何が起こったのかは、見た。

相手の重心は、剣の向きと同じく、上から下へ移動していたが、まるで子どもの遊び玉を地にたたきつけたように、急に上向きの移動に変化した。

同じことをすれば、私にも、今の剣撃が、再現できる。

ザーラは、自分の心が変わるのを感じた。

強敵と闘える猛々しい歓喜が、柔らかな喜びに、少しだが変化し、もっともっと技を見てみたい、という心になった。

そして、思った。

闘いというものは、人と人が闘うものだが、それと別に、技と技とが闘う、という面がある。

私を通じて出たがっている技があり、相手を通じて現れたがっている技がある。

技よ、存分に出てゆけ。

思うがままに舞い踊るがよい。

二人の技の応酬は続いた。

ザーラが左袈裟から右逆袈裟に変化する連続技を使えば、相手は、最小限の見切りと打ち合わせで、これをかわした。

相手が、回転しながら次第に深く踏み込んできたときには、ザーラは、まったく同じ間合いを保ってみせ、相手は攻撃を止めざるを得なかった。

そのすぐあと、ザーラが、右の背中にかつきこんだ剣を、かわしようなない距離でたたきつけようとすると、相手は、自分の剣を持

つ手を、ザーラの剣を持つ手に打ち付け、攻撃力を拡散させた。

それからも、いくどとなく、技のやり取りが繰り返された。

そして、ある瞬間。

ザーラは、澄み切った心の一部で、ある場面を思い出していた。バラストは、いつものように、無骨なバトルハンマーを持っている。

初めは、あんな単調な動きしかできない武器で、剣の相手をしてくれるのは、気の毒だと思っていた。

ところが、バラストのハンマーは、頭で、軸で、柄で、あるいはその全部で、時により、場合により、千変万化に振るわれる。

攻撃かと思えば防御に、防御かと思えば攻撃にと、自在に変化しつつ、こちらの剣のあらゆる動きを封じる。

対して、こちらは、強力極まるハンマーの打撃を受け止めることなどできない。

そのうちに、剣のように取り回しの悪い武器で、ハンマーと闘うのは、不公平だ、と思うようになった。

バラストが、時々、狙ってこちらの剣を折りにくる。

立て続けに剣を折られたある日、ずるい、と言った。

きょとんとしていたバラストは、大笑いしてから、ならわしも剣を使おう、と言った。

互いにロングソードを構えて対峙した、次の瞬間。

ザーラの剣は、ぱきん折られてしまった。

武器じゃねえよ、技だ。

そう、バラストは言った。

見えた。

相手の剣の根本から三分の一ほどの部分。隙だ。

普通の剣士は、隙とは考えない隙だ。

思う瞬間には、ザーラの剣は、その部分を正確に打ち抜いていた。  
ぱきーん。

相手の剣が、折れ飛んだ。

「ソコマデ」

と判定の声が下りる。

勝負はついた。

勝ったのだ。

「見事」

と、剣聖が声を掛けてくれた。

「ありがとうございました」

と、ザーラは頭を下げた。

こんな心から頭を下げられるのは、生まれて初めてかもしれない。  
いい、と思いつつ。

そして、気付いた。

この試合で、自分が一度も特殊スキルを使っていないことに。  
どうしてだろう、と不思議に思った。

「どうされた。」

妙な顔をしておるぞ」

「いえ。」

試合のあいだ、自分が一度も特殊スキルを使っていないことが付きまして。

どうしてだろうか、と」

実は、わしも同じことを考えておった、と剣聖が笑った。

ザーラも笑った。

周りの四聖獣も笑っているように見えた。

7

意外にも、ザーラの勝利は、僧たちの多くに、好意をもって迎えられたようである。

あちらのあまりに強引なやり方や、日頃の言動に対して、不快感や反感を持つ人は、少なくなかったということかもしれない。

絶望的な状況から、あざやかに勝利を勝ち取ったことと、四つ目の聖獣環をどこからともなく取り戻した手柄があいまって、パタガモンは、非常に大きな信頼と支持を勝ち取ったようにみえる。

新しい教務院総長には、現在の総務官なる人が就くことになったということである。

結局、ザーラは、四か月を、このジャン＝マジアル寺院で過ごした。

帰依者として宗門のために闘った者は、秘伝を学ぶ資格を持つと  
のことで、厳しいが有益な四か月だった。

寺院にいるうちに、ザーラは十七歳になった。

そのあと、アルダナに行った。

ジャル・ドル・バザに誘われたのである。

劍聖の道場に世話になった。

二人は、まるで、年の離れた親友のようであった。

ジャル・ドル・バザは、ザーラに、おぬしの家名はゴランだが、もしやエイシャ・ゴラン様とは縁続きか、と訊いた。

曾祖母の父がエイシャ・ゴランで、父がゴラン家を復興しました、と答えたところ、扱いはより親しく丁寧なものとなった。

わしの祖父はゴラン様の弟子だから、おぬしは師匠筋にあたる、と劍聖は言う。

ザーラは、本来の名と身分を説明したうえで、自分の正体は内密にと頼んだ。

劍聖や、その弟子と、いくども剣を交えた。

劍聖の紹介で、いくつもの道場に行き、多くの技を学ぶことができた。

最初のうち、慣れない剣技にとまどうこともあったが、一通りアルダナ風の武器とその使い方を覚えると、負けなしとなった。

ただし、不思議なことに、劍聖には、あれ以後、ほとんど勝てなかった。

エイシャ・ゴランの血筋の者であると、こっそり劍聖から教わった人もいたようで、非常な好意を示され、この伝説的な剣客の逸話を聞かせてくれた。

あるとき、ザーラは劍聖に、あなたはなぜラガラタにお味方なされたのですか、と聞いてみた。

劍聖の言うところでは、帰依者として四聖獣の堂に立つのは、武者としてこの上ない名誉であり、断るなど考えられないという。

自分が何を代表して闘うのかは、あらかじめ教えられないものであり、ただただ磨いた武技を捧げ、宗祖と神々の裁定にすべてを委ねるのである。

帰依者となつて二十年以上になるが、四聖獣の堂のことに選ばれたのは初めてであり、どんな相手と闘えるのか楽しみで仕方がなかった、と剣聖は言った。

あなたは、もう少しで対決者を得られないところでした、とラガラタのたくらみを説明すると、剣聖は、まず、大いに怒った。

そして、しかし結局わしは、おぬしと闘うことができ、しかもおぬしが勝ったのじゃから、やはり宗祖様は偉大じゃわい、と言つて笑った。

ザーラも、なるほど私が勝てたのはそういうわけでしたか、と納得して笑った。

冒険者ギルドには近寄らなかつた。

幸いにも、アルダナ滞在中、ロアル教国のように追い回されることはなかつた。

ザーラは知らなかつたが、剣聖がにらみを利かせてくれていた。また、ロアル教国のように、人が住む地域が連続的に広がっている地域は、大陸でも珍しい。

大きな国であっても、街や村という点をつないで成り立っている。情報伝達の速度も精度も低い。

だが、やがて、ザーラの剣名が知れ、諸侯から注目されだした。

七か月をアルダナで過ごして、ザーラは、カレリヤ自由都市群に向かつた。

ピアールダラに、ぜひ剣を交えてみたい男がいる。

## 挿話6

ミノタウロスは、荒い息をついていた。

あれから、ぐにやぐにやした丸い敵を、片っ端から斬り飛ばしていった。

上のほうより根本に近い部分のほうが、再生が遅いことは、すぐに分かったので、できるだけ根本のほうを斬るようにして、加速スキルを最大に用いて、一気に多くの丸い敵を刈ってみた。

だめであった。

結局敵は再生してくる。

きりがないのである。

そして、ほおっておいても、体の溶ける液を放ち、こちらの体を絡め取る触手を伸ばしてくる。

斬り飛ばせば斬り飛ばしたで、吹き出してくる体液は、こちらの体を溶かす。

今のミノタウロスは、ひどいありさまであった。

乱戦の結果、溶ける液を体中に浴びて、いたる所が溶けていた。

溶けた所からは、血も流れでるが、溶解液をしっかりと浴びた部分は、じゅくじゅくと泡立ちながら、あまり多くの出血はない。

愛用のベルトも一部が溶けて、腰に止まらなくなった。

仕方がないので、いったんインベントリにしまおうとして、赤ポーションの存在を思い出した。

何個かをつかみだして、飲む。

だが、体は再生しない。

ここでは、この体が治る赤い汁は、効かないのか。

とミノタウロスは思った。

先ほどから、持続的にHPが回復するスキルを発動させているのだが、これにも効果がないようである。

ここは、そういう場所なのだ、と思うほかない。

ミノタウロスは、呼吸が落ち着くと、大きく息を吸い、特殊スキルを発動させながら、強力な息を部屋中の丸い敵に吹き付けていった。

息は、風神の袋から解き放たれた風の精のように勢いよく飛び出し、ふれるものすべてを高熱で包み、燃え上がらせた。

焼け付く息、

と呼ばれるスキルである。

このスキルは使えるようである。

たったの一息で、部屋にある大小多くの丸い敵のうち、八割方を焼き尽くした。

だが、焼けて消えても、見る見る間に再生していく。

次に、ミノタウロスは、もう一度息を吸い込み、一番近い所に生えている丸い敵にだけ、焼け付く息を注いだ。

吹きつけ続けた。

燃える。

燃える。

丸い敵は完全に燃え落ちて吹き飛ばされ、さらに下のぐねぐねした岩も、吹き付けられてぶるぶる震えている。

そして、息が止まって、わずかな時間ののち、下の方から再生が始まる。

だが、今、ミノタウロスの目は、焼け落ちた丸いものの下、ぬめぬめした床の中に、細かな根のような物が、うねうねと密集しているのをとらえた。

あれをつぶしたら、どうなるだろう。

ひらめくものを感じ、武器を取り替えた。

新しくインベントリから出したのは、バレルハンマーと呼ばれる、打撃武器である。

無骨な樽に、横から長い串を突き刺したような形をしている。

握りや、樽部分の一部は、木で出来ているように見えるが、芯も外の補強部分も、粘りのある強い鉄をつないで作られている、非常に頑丈で、とてつもなく重い武器である。

これは、人間の冒険者から手に入れた。

これを使っていた冒険者は、身長はわずかにミノタウロスより低かったが、横幅ははるかに太く、体重は、ミノタウロスの倍以上あるように見えた。

全身赤黒く、上半身は裸で、下半身にはだぶだぶのズボンをはいていた。

体軀は、肉の上に肉を塗り固め、さらにその上に、どろどろの肉を垂らしたようである。

目ばかりが、ぎよろぎよろと光り、常にうなり声を上げながら、バレルハンマーを振り回した。

時に横から振り抜かれ、時に上から振り下ろされる、その加速をたつぷりと乗せた一撃一撃には、当たれば当時のミノタウロスとて、致命的なダメージを受けかねない破壊力が込められていた。

体力も底なしで、いくら狙いを外されても、ぐるぐると吠えながら、攻撃を続けた。

かわしているミノタウロスは、

人間かと思っただが、別の種類の生き物だろうか。

などと考えた。

実際、スマートに攻撃をかわすミノタウロスと、野獣のように責め立てる冒険者では、遠目には、人とモンスターが逆に見えたであろう。

バレルハンマーを振り上げたミノタウロスは、それを、ぐうんと振り上げて、一番手近な丸い敵に振り下ろした。

ただし、狙いは、丸い敵そのものではなく、その生え際であり、ぬめぬめした床の内部にある、丸い敵の根本の部分である。

どちゃっという音と、ばこん、という音が、ほとんど同時に響いた。

そして。

丸い敵は、はじけるように飛び散り、生えていた根本の部分の柔らかな岩もつぶれて。

もうその丸い敵は、再生しなかった。

殺し方が、分かった。

それから、しばらくのあいだ、ミノタウロスは、喜々として、部屋中の丸い敵の根本をつぶしていった。

飛び散る溶解液によって、自分自身もどんどん溶かされていったが、いつこうに気にする様子もない。

そして、ついに、全部の敵を殺し尽くした。

辺りをぐるぐる見回し、勝利の余韻にひたっていると。

突然、体が柔らかな光に包まれ、体の再生、いや、造り替えが始まった。

レベルアップである。

傷もすべていやされる。

ミノタウロスにとっては、実に久しぶりのレベルアップである。

もう、ずいぶん長いこと、レベルアップに足りる経験値をくれるような人間には、出遭っていなかったのである。

だが、これはおかしな事態である。

人間を倒したときには、経験値を得られても、モンスターを倒したときには、このミノタウロスは、経験値を得られないはずなのである。

しかし、レベルアップが起きた。

しかも、フロアの敵を全滅させると同時に。

ミノタウロスは、理屈は分からなかったが、とにかく、ここでは、モンスターを倒して強くなることができると理解した。

もう一つ、ミノタウロスが気付いたことがある。

先ほど、この場所に来たときには、赤く輝いていた円形の平たい石の横の石は、光っていなかった。

それが、今は、青く発光しているのである。

あれを踏めば、たぶん。

ミノタウロスは、青く光る丸い石の上に乗る、そして、消えた。

## 第7話 赤の騎士

1

じりじりと照りつける太陽と、照り返す砂漠。

ぼうつ、として、揺らめく空気を眺めながら、ザーラは、

案内人とボーボーを手配していなかったら、どうなっていたか。

と、そら恐ろしい気持ちになった。

紹介状を書いてくれた剣聖に、あらためて感謝を覚える。

地図によれば、ここは、南エルガ街道である。

しかし、見渡す限り砂漠であって、道などというものは、どこにも見えない。

「だんな、来やすぜ」

案内人の言葉に、ザーラは、うむ、と返事をした。

前方右方向の砂の中から、人間大の蜘蛛に鉄を二組付けたようなモンスターが現れる。

イモターバである。

五体現れた。

案内人は、おとりの餌を放り投げると、ボーボーに駆け足を命じ

た。

ザーラも、教わった通り、足でボーボーの首の付け根を蹴り、駆け足を命じる。

片方だけ黒い耳をひくつかせて、ボーボーが駆ける。

心地よい加速だ。

尻は少し痛むが。

やがて、モンスターの姿が砂の丘の向こうに消えると、速度を緩めた。

案内人は、ボーボーから下りて、褒美の塩を与える。

ザーラも同じようにした。

ボーボーは、馬ほどの高さだが、足が二本しかない。

胴体も、短めである。

顔も、馬ほどは長くなく、口の部分は、やや細い。

眠たそうな目をしているのだが、これが何とも愛嬌に満ちている。

再び、獣の背に乗る。

暑い。

まぶしい。

暑い。

だるい。

人が生きていける環境とは思えない。

本当に、こんな所に街があるのだろうか。

ぐったりとして、うんざりとしながら、ザーラは、ボーボーの背で、パタガモンとの対話を、また思い出していた。

神霊が、人から崇敬され神格を帯びて下級神となりながら、その後忘れ去られ、あるいは災厄をもたらす祟り神として忌避されると破滅や混乱をもたらす霊的存在となることがある。

それを、ジャン・マジヤル教団では、邪神と呼ぶ。

邪神は荒ぶる神とは違う。

もはや神の性質を失った、ゆがんだ力であり、神に戻ることはない。

邪神は、瘴気と毒と呪いを振りまき、その力の及んだ地域は、妖魔の温床となる。

その昔、人は、世界に対して、あまりに無力だった。

人は、神々や神霊の恩寵により、かろうじて生き延びた。

しかし、恩寵を得られる人は少なく、何か手段が必要だった。

やがて、レベルアップの方法が発見され、迷宮が生まれ、人が力と富を得る機会が飛躍的に上昇した。

だが、そこに問題もあった。

迷宮では、神々や神霊の恩寵が、強制的、自動的に引き出される。

こうした形で消費される恩寵は非常に強力であるものの、どうしても、ねじれがあり、ひずみがあり、きれいに燃え尽きない。

その結果、不純でゆがんだ恩寵のかけらが残される。

それは、目的のない力であり、いわば小さな小さな邪神のかけらである。

こうしたものは、地上でも生まれるが、大量に集まらない限り危険はなく、時とともに無に帰るか、神々や神霊に取り込まれる。

しかし、迷宮では、その生成が、速く、多すぎる。

それに気付いたのは、神々から特殊な恩寵を受けた、ダンジョン・メーカーと呼ばれる人々だった。

ダンジョン・メーカーたちは、ゆがんだ恩寵のかけらを自動的に迷宮外に排出する仕組みを設けた。

さらに、外に排出するかけらが多くなりすぎないように、かけらを一時的に保存する特殊な空間を作った。

このことは、宗祖ジャン・マジアル師が、ダンジョン・メーカーの一人から、直接に聞いた。

ジャン・マジアル師は、ゆがんだ恩寵のかけらがうごめく場所に、かけらが集まりすぎてしまったらどうなるか、と訊いた。

ダンジョン・メーカーは、ゆがんだ神が生まれる、とあっさり言った。

形あるもののほうが対処しやすいから、と。

頼めばそこに行つてゆがんだ神を倒してくれる神霊があり、時々行つてもらっているから、今のところ心配は要らないと、その人は言った。

そこでは、邪神を倒して新たに生じるゆがみと、邪神自身の力が相殺される。

従つて、邪神を倒せば、そのときまでに生成されたかけらは消滅する。

そこでは、迷宮固有の恩寵は、働かない。

働けば、新たなかけらを再生産しかねないからである。

それでいて、瘴気と毒と呪いのうずまく所だから、人は入れない。だから、どこにあるかは教えない、と言つたという。

ジャン・マジアルは、そのダンジョン・メーカーに、地上の神霊が邪神化したときに鎮める法を学んだ。

約千三百年前のことである。

そして、弟子たちにそれを伝えた。

約五百年前に、冒険者という恩寵職が発見された。

迷宮内のみにも有効な、さまざまな恩寵や、恩寵品が、次々現れた。迷宮探索の速度は一気に加速し、人が力を得る速度も飛躍的に増した。

これは、必要なことだった。

強力な神霊たちが、このころには、ほとんど姿を消し、人にとって神霊は遠い存在になってきていたからである。

と同時に、最も希少な貴金属は迷宮からしか出ず、今まで到達できなかった階層からは、多量の貴金属品がドロップしたので、迷宮探索は、国々の発展に、どうしても必要であった。

ジャン・マジアル師の後継者たちは、心配した。

かつての迷宮でさえ、大きなひずみをもたらした。

今は、その何倍、何十倍の効率を上げている。

間違いなく、かけらは、以前とは比べものにならない速度で蓄積している。

しかし、大陸に現れる邪神の数は、増えているように見えない。むしろ減っている。

かけらが集まる場所は、どこにあるのか。

今、そこは、どうなっているのか。

どんな器も、自分より大きな物を収めておくことはできない。

邪神が、その場所に収まりきらなくなったとき、何が起きるのか。

邪神に対抗すべき神霊は、今もいるのか。

その答えを教えてくれるダンジョン・メーカーは、もう一人も残っていない。

オアシスでは、争ってはならない。

たとえ相手が、親の仇であろうと、戦争中の敵の兵士であろうと、家畜を盗んだ者であろうと。

それが、砂漠のルールである。

そう教えられていたから、近づいて来る一団に、警戒はしたが、敵対的な行動は取らなかった。

「先客がいたか。

邪魔するぞ」

と言いながら近づく相手に、案内人が、ひどくへりくだった礼をしている。

高貴な人々なのだろうか。

五人とも、格別高価な衣装をまとってはいない。

ザーラは、袖を広げながら立ち上がると、両手を胸の前で交差させ、

「私の灯した火をあなたと、

私の作ったスープをあなたと、

私の干し肉をあなたと分かち合おう。

砂漠を旅する人よ」

と、習った通りのあいさつをした。

相手は、おもしろがるような顔をして、同じしぐさをした。

「ありがとう、砂漠の友よ。  
だが、私たちは、火にも、スープにも不自由しない。  
少しばかり、場所を使わせてもらえばよい」

おなごであったか、とザーラは気が付いた。

それも、大変な美女である。

なるほど、砂漠を旅する衣装は、男女の区別がない。

しかし、これだけ近くで見れば、そうと分かりそうなものである。  
まして、最初に声を聞いているのである。

だが、ザーラが気付かなかつたのには、わけがある。

歩き方、立ち振る舞い、放つ気配が、武人のそれなのである。

しかも、実戦経験の豊富な騎士を思わせる、しつかりとした存在感である。

また、女性に付き従う四人も、高い戦闘力と、強靱な意志を感じさせる。

一団は、泉を半周した日陰に移動し、てきばきと、休憩と食事の準備をした。

ザーラと案内人が砂漠に入って、一週間になる。

いまだ、この暑さには慣れることができない。

いささか熱に当てられて、今も、ぼうつとした感じが続いている。  
と、先の一団の一人が、こちらにやってきた。

「よければ、しばし酒をお付き合い願えないか」

旅人同士は、情報交換をしたがるものであり、申し出に不審なところは無い。

喜んで、とザーラは応じた。

こういう場合、招くほうが飲み物を提供し、招かれた側は、食べ

物を提供する。

ザーラは、アルダナで仕入れておいた珍味を提供した。  
これが、ひどく喜ばれて、座が盛り上がった。

「ところで、ザーラ殿は、どちらに行かれる」

ラウラと名乗った佳人が訊いた。

「ビア＝ダルラに参ります」

「ふむ。」

商人には見えぬ。

砂漠にも慣れておらぬ。

ビア＝ダルラに何を求めて行かれる」

こう訊ねるラウラの表情は、さっぱりとして陰湿なところがない。

匂い立つような美女であるのに、媚びるような色香は感じない。

切れ長の目に輝く翠玉の瞳と、すっきりとした鼻。

形のよい眉宇。

夜の砂漠、泉のほとりで、たき火に照らされる、その姿。

このおなごは、月の女神のようだ。

と、ザーラは思いながら、会いたい人がいます、と答えた。  
すると、

「せや。」

なんと、なんと！

聞いたか、皆。

美しき人は、美しき答えを持つものだ。

なんと、ロマンティックな旅ではないか」

一同も、あおりに乗って、はやし立てる。

ザーラは、答え方を間違えたことに気が付いたが、今さら、無粋なことも言いたくない。

オアシスでは、招かれた者は酒の肴を提供するという。

私が肴になるのも、また一興であろう。

と、思った。

ラウラは、楽器を取り出して恋の歌を歌うほど、この肴が気に入ったようで、楽しい夜となった。

### 3

翌日は、夕方近くまで休んで、それから出発した。

ラウラたちも一緒である。

ビアッダルラに行くには、ここで街道を外れ、南に十日間ほど進まねばならない。

この時代、国というものは、街や村という点の集合でしかない。街や村のあいだには、人の住まない広大な土地がある。

まして、このカレリヤ自由都市群は、小さな都市国家の集合体であり、人外の領域が、人のそれを、大きく上回っている。

ラウラたち五人は、やはり手練れであった。

いかほども行かないうちに、大サソリ四体に襲われたが、五人であつという間に倒してしまった。

ラウラは、体格からすれば、やや大きめのロングソードを、高速に、かつ的確に振るう。

モーラという大男は、バトルアックスを軽々と振り回す。

ジャマガルという痩せた男は、非常に切れ味のよさそうな曲刀を武器にしており、死角を突くのがうまい。

シャリアプロという小柄な男は、移動撃ちの技を持つアーチャーである。

オリエナという小太りの男は、補助と、拘束に加え、回復もできる支援魔術師である。

個々人の技も優れており、なおかつ、連携も磨き込まれていた。

それから、二日のあいだに四度、襲撃を受けた。

ザーラが暑気あたりなのに気を遣ってか、参戦しようとする、と、やんわり断られた。

案内人に、なぜ、おとりの肉を使って逃げることをせず、闘うのか、聞いてみた。

ここは、街道との行き来に必要な道だから、あとから通る人のために、少しでもモンスターを減らしてください、といるのです、という答えが返ってきた。

五人は、ルームを共有していた。

つまり、おそらくは、全員、騎士の恩寵職を持つ。

そして、家族のようには見えないのに、特殊インベントリを共にしているから、よほど強いきずなで結ばれ、何らかの使命を共に担っているであろう。

三日目に、これまでにない数のモンスターに襲われた。

苦戦というほどではなかったが、ザーラも、途中から参戦した。

最初に、群れの中で最も手強そうな、グリゴル二体を倒した。グリゴルは、馬より少し大きく、四足で高速に移動する。体の大部分が甲殻に覆われ、頭部には、一对の巨大な鋏を備えている。

一体のグリゴルの前足を一本斬り、態勢が崩れたところで、首を落とした。

もう一体のグリゴルは、盾を構えた大男のモーラに攻撃を仕掛けていたので、その背に飛び乗り、首を落とした。

これで、形勢は一気に傾いた。

次に、ザーラは、サンダル虫の相手をした。

大型のサンダルほどの大きさで、無数の小さな手足を持っている昆虫型のモンスターである。

異常に素早く動き回り、砂の中にも潜るため、攻撃を当てにくい。麻痺毒を持っており、まとわりつかれたら、他のモンスターの餌食になってしまう。

ザーラの探知スキルと剣速をもってすれば、捕捉は容易である。すすすすつと、流れるように、この厄介な虫を、屠っていく。砂の中を移動していても、ザーラには、よいでのしかない。

サンダル虫が掃討されると、一団は、安心して中型モンスターに対処できるようになり、間もなく戦闘は終わった。

と、ラウラが、ザーラに抱きついた。

「すすじっ、すすじっ、すすじっではないか。」

おぬしのように、素早く、鮮やかに剣を振るう者は、見たこともない！

しかも、グリゴリの硬い首を、一撃で断ち切るとは。

何たる手練れ！

何たる見事な技！

決めたぞつ。

おぬし、わがパーティーに入れ。

共に迷宮の王を、かのミノタウロスを、討とうではないか！」

そのあと、戦闘の後始末をするあいだも、ボーボーに乗って移動を再開してからも、ラウラは熱っぽく語り続けた。

いわく、暴れるグリゴリの背に、すくつと足をそろえて立ったときのザーラは、古の英雄アルスのごとく凜々いとしえしかった。

いわく、涼しげな顔で、いまましいサンダル虫を、迷いも失敗もなく、あっさりと片付けていく剣技は、名高い剣聖殿でも、目を見張って驚くであろう。

このおなごは、意外と興奮しやすい性格たちなのだ。

と、アルスは思いつつ、迷宮の王を倒そうというのは何のことかと聞いた。

「おぬし、バルデモストの生まれと言っておったではないか。知らんのか。

バルデモスト王国の王都の近く、ミケーヌという街に、サザードンという迷宮がある。

この迷宮は、百階層もあり、モンスターはなかなか手強いが、最下層のボスモンスターは、また別格の強さなのだ。

ミノタウロスといえば、ほかの迷宮では、それほどの強さではないが、サザードン迷宮のこのミノタウロスは、ユニークモンスター

でな。

人やモンスターと戦い続けて強くなり、やがて、神話に出て来る邪竜や巨人のごとき、恐るべき強さを身につけた。

もともと百階層のボスであったドラゴンを退けて、自らが迷宮の主となったのだがな。

知能、膂力、速度、頑健さ、魔法や状態異常への抵抗力、飽くなき闘争心、そして何より剣技。

まさに神話級の強さなのだ。

高熱のプレスや、強化されたハウリングを始め、数々の特殊スキルも持っている。

このミノタウロスを、人はいつしか、迷宮の王と呼ぶようになった。

迷宮の王を倒せば、どれほどの経験値を得られるか。

それだけではない。

迷宮の王は、あまたの冒険者や、モンスターを倒して、アイテムを集めている。

迷宮の王を倒したとき、国が買えるほどのドロップがある、といわれているのだ。

だから、バルデモストから、そして、大陸の各地から、名を上げ、力と富を得たいと望む者たちが、迷宮の王に挑戦した。

そして、破れ続けた。

信じられるか？

姿を現してから、三十有余年、このミノタウロスは、一度も負けていないのだっ

「思わず、ザーラは、ある騎士が一度打ち勝ったといわれています、と口を挟まずにはいられなかった。

「あれは、嘘だ。

倒したのなら、なぜ、そのあとも、ミノタウロスは生きているの

だ？

第一、たった一人で迷宮の王に立ち向かったなどと、それ自体が嘘くさい。

もし、地上にヒュドラが、あるいは本当の竜が出たとして、一人で闘おうとする阿呆がいるか？

あれはな。

実は、その数年前に、バルデモスト王が、騎士百人を派遣して、迷宮の王を討伐しようとしたが、その全員が返り討ちにあって死亡する、ということがあったのだ。

その不名誉な出来事を糊塗するため、でっちあげたのだな、おそらく。

わが国には、一人で迷宮の王を倒せる騎士がいます、といたいなのだ。

気の毒なことだ。

そつとしておいてやれ。

迷宮の王を倒すには、本当に優れた勇士が、パーティーを組んで、緊密な連携のもとに闘いを挑むしかない。

数を頼んでも、名誉もないし、戦闘に油断や乱れが生じる。

迷宮の王は、現代の神話だ。

迷宮の王を倒した者は、後世まで語り継がれる真の英雄となるのだっ。

だから、わがパーティーに入れ。

これは、運命なのだ！」

夕食の席でも、ラウラの熱心な勧誘は続いた。

「よし、分かった。

心配するな。

おぬしが訪ねていくおなごは、何という名じゃ？

悪いようには、せぬ。

言え。

相手が何と言おうと、おぬしに添わしてやる。夫持ちであれば、別れさせる。

手切れ金は、用意する。

このラウラが、約束しよう。

だから、安心して、わがパーティーに入れ。

まずは、相手の名を言え。

さあ、言えっ」

致し方なく、ザーラは、正直に事情を説明した。

アルダナに滞在していたとき、ある騎士についての噂を聞いた。

その騎士は、砂漠都市ビアッダルラの君公に仕え、砂漠の魔物を討つて人々の暮らしを安んじている。

誇り高く、剣の技は神の域に近く、まとう鎧の色から、赤の騎士と呼ばれている。

この騎士にお会いし、ひと手お教えを受けることが私の望みです、とザーラは言った。

ラウラ以外の四人が爆笑した。

ザーラの案内人も、けたたましい声で笑っている。

ラウラは、むすつとしていているが、どこことなく顔が赤いようにも見える。

支援魔術師のオリエナが、腹を押さえながら、ときれときれに言った。

「いやいや。

ザーラ殿は、運がよい。

貴殿の望みは、神々がお聞き届けになった。

なにしろ、ラウラが、いや、ラウラ様が、添わしてやると、名に

懸けてお誓いになったのだからな！

いやいや、めでたい。

では、ご紹介いたそう。

砂漠の都市ビア＝ダルラの君主コラリオル公のご息女、  
ラウラサリム・タリペトラ・トリト・ビア＝ダルラ様。  
当代の、赤の騎士にあらせられる！」

4

ひどい大騒ぎになった。

いつもは無口なアサシンのジヤマガルは、

「ひと手お教えというのは、何のひと手であるう？」

と、ぼそつと口にし、ラウラの正拳突きを顔面にくらった。  
のんびりしたところのある壁役のモーラは、

「ザーラ殿は、姫の聲こゑであったのか？」

と大まじめに質問して、泉に蹴落とされた。

硬骨な雰囲気を持つシャリアプロは、ザーラに年齢を聞き、もう  
すぐ十八歳であるという答えを得て、ちらとラウラを見てから、

「ふつむ」

と、難しい顔をして、自慢のあごひげを斬り飛ばされた。

頭の回転が速く、口もよく回るオリエナは、じつと黙っていたが、それはそれで癪かんに触ったらしく、かかとで後頭部を蹴られた。

ザーラの案内人は、何を思ったか、自分から泉に飛び込んだ。

騒ぎが収まってから、ザーラは、泉を少し離れて、星を見ていた。魔法使いのオリエナが来て、横に座った。

「最初の赤の騎士は、姫の伯父上様であられた。

次の赤の騎士は、姫の兄上であられた。

おそらく、ザーラ殿がお聞きになられた噂は、兄君のことでしょうな。

お優しく、そしてお強かった。

モンスターから街と人を守って闘い、亡くなられました」

「お聞きしてもよろしいですか」

「姫は、二十二歳ですな」

「そのことではありません。

ラウラ殿は、なぜ、サザードンのミノタウロスを倒したい、とお考えなのでしょう」

オリエナは、しばらく考えてから言った。

「砂漠では、人の命は、まことにはかない。

死のあぎとを踏んだ瞬間、命は、何も残さず消え去ってしまう。

今、あなたが手のひらに敷いている砂粒の数は数え切れないほどですが、明日になれば、どんな砂粒だったかを思い出すこともできないでしょう。

しかし、たった一粒の砂が、あの星に照らされて、きらりと美し

い光を放つならば、あなたは、煌めきを見たという記憶を、持ち続けるかもしれない。

「姫は、生きた証を残したいのでしょうか。」

「それが、兄君の名誉にもなる、と信じておいでなのです。」

「もつと強力な魔獣や魔神もいます。」

「近くに、人を苦しめるモンスターや悪人もいるでしょう。」

「どうして、サザードンのミノタウロスなのですか。」

「遠いから、かもしれませんな。」

「この地方には、あまり北の情報が入ってきません。」

「ミノタウロスについての噂も、どれほど正しいか、分かりません。」

「国の姿も定かに分からぬ遠い異国の、神話のようなモンスター。」

「だからこそ、憧れをかき立てられるのかもしれませんが。」

「では、本当には、闘うおつもりでない？」

「いえいえ。」

「本気も本気、大まじめですよ。」

「われわれのパーティーの編成は、多数のモンスターを同時に相手にするより、少数の手強い敵に向いていると思いませんか。」

「迷宮の王を想定した訓練も積み、装備も工夫してきているのですよ。」

「しかし、こうしてモンスターの討伐に明け暮れる毎日では、あなたがたほどの精鋭が長期間国を空けるのは、難しいではありませんか。」

「難しいでしょうな。」

「姫は、人一倍責任感の強いご性質です。」

兄君が守ろうとされた民草を、何としても守り続けるのが、自分の使命だと決めておられます」

「では、ミノタウロスと闘う準備をしても、無駄になるではありませんか」

「夢のために精一杯の努力をすることは、無駄ではありませんな。私たちは、そんな姫様が、大好きなのです」

このとき、ザーラは、旅立ちを見送ってくれた師匠バラスト・ロガンとの会話を思い出した。

「伯父御おじい、この前、私の知らない、人として生きる悲しみを、父は知らずにはいられなかった、と言われました。

あれは、どういうことでしょうか」

「ああ、あれか。

お前のおやじのパンゼルが生まれとき、家は剣術の道場をやつて、なかなか盛んだったそうだ。

周りの人も、ちやほやしただらうな。

だが、パンゼルのおやつさんが病気になる、手のひらを返した。パンゼルのおふくろさん、ずいぶん苦勞したらしい。

おやつさんが死に、おふくろさんが体を壊すと、食べる物にも事欠くようになった。

パンゼルはな、五歳のときから、暮らしを支えてたんだぜ。

といつても、そんな年じゃ、仕事らしい仕事は、ありやしねえ。

何とかかんとか生きていたんだが、やつが七歳のとき、いよいよおふくろさんの具合が悪くなった。

それで、薬代を手に入れるために、迷宮に入って、ミノタウロスに遭ったんだ。

そこまでの人生で、やつは、生きるっていうことは、どうにもならないもんだってことを、嫌っていうほど知ったんだ。

おやつさんが死ぬことも、おふくろさんがやせ細っていくことも、今夜の飯がないっていうことも、どうにもならない。

だが、どうにもならない中で、変わらないものもある。

おふくろさんの、おやつさんに対する態度、パンゼルに対する態度は、金があるうとなかるうと、変わらなかった。

おやつさんの弟子たちも、貧乏な中、様子を見に来てくれたり、食べ物を持ってきてくれたりした。

パンゼルに仕事をくれたりもした。

パンゼルはなあ、言ってたぜ。

あのころは、明日も生きている、という希望を持つことはできませんでした。

それでも、私は母を愛し、自分にできる精一杯のことをさせてもらおう、と思いました。

そう思ってみれば、そこには、私がやってみることのできる、なにがしかがありました。

それをありがたく思いました、ってな。

勝つか、負けるか。

強いか、弱いか。

それだけを考えるやつには、パンゼルのような闘いはできん。

名誉な闘い方は、こういうものかを知っていて、平然と無視できなければ、ミノタウロスのような怪物とは闘えん。

生きていることは悲しいことだって、心底から分かったらなあ。

「欲や不安に振り回されずに、精一杯の努力ができるもんなんだ」

育ての親ともいえるバラストの言葉は、まるで謎かけのようだった。

今、その意味が、少しだけ分かった気がした。

5

ビアールダラが、燃えていた。

火の手こそ見えないものの、煙が上がっている

まだ、かなりの距離があるのに、異臭がする。

これは、血と肉と内臓の匂い。

死と腐敗と生き物の焼ける匂いだ。

近寄っていくと、城壁の回りに、モンスターの死骸が、累々と横たわっている。

ザーラたち一行は、何が起きたかを悟った。

モンスターの狂集団化、と呼ばれる現象がある。

突然、モンスターが集まって、街や村を襲うのである。

集落を作っているモンスターは、そこに築き上げた彼らなりの社会も生活も財産も振り捨てて、この狂った行進に参加する。

普段は集団を形成しないモンスターも、どこからともなく、これ

に合流する。

種族の違うモンスターは、本来お互いを敵視することも多いが、このときばかりは、相争わない。

飢えも疲れも忘れ、自己保存の本能までも捨て去って、自らが果てるまで、ただただ人間を攻撃し続ける。

狂集団化は、一定の範囲で生じ、その範囲内にある街や村を標的とする。

街を滅ぼしても生き残っているモンスターがいれば、次の街や村に向かう。

モンスターが少なく人が多い地域で起きた狂集団化は、対処しやすい。

兆候も発見しやすいし、武力も集めやすく、治療もしやすいからである。

逆の場合は、対処が難しい。

襲撃が起こるまで気付かない場合、しばしば人間側の全滅に直結する。

ビアッダルラは、狂集団化したモンスターに襲われ、からくも、しのいだ。

城壁は守りきったが、南の門が破られた。

飛行しながら火炎を吐くモンスターがいたことも、被害を大きくした。

ラウラは、肝心なときに不在であったことを悔しがった。

君主である父親と相談し、宮殿を開放した。

休む場所のない人が人を運び込み、治療をさせ、炊き出しを行った。

朝早くから、夜遅くまで、けが人の元を駆け回り、手当をし、一

一人に声を掛けて励ました。

ザーラは、共に行動して手伝いながら、感動を覚えた。

領民を大事にする、と口で言うのはやさしいが、ここまでのことができる貴族が、どれほどいるだろうか。

いや。

自分自身、領主の長男であり、やがては領主と立つべき立場である。

その自分は、そもそも領民を大事に思っているだろうか。

そう思うほどに、今、自分の出せる最大の力で、ラウラを支えよう、と決めた。

とりあえず、医薬品は、最低限を残して、持ち合わせを提供した。大峡谷で会ったナーリアからもらった薬は、いずれも非常に効能が高く、大いに喜ばれた。

特に、毒に対する薬は、圧倒的な効き目をみせた。

問題は、このあと、第二波第三波の襲撃があるかどうかである。

ビアッダルラの兵力は、警ら官や門番まで入れて、三百五十。

このうち、騎士は五十。

残り三百が一般兵である。

そのほか、市民から募った義勇兵が四百。

第一次の襲撃で、騎士は十人が死に、二十人が負傷。

一般兵は、二十人が死に、三十人が負傷。

義勇兵は、三十人が死に、二百人が負傷。

損耗率は、高い。

ただし、最精鋭であるラウラのパーティーが無傷で帰城したこと

から、兵士も市民も、士気は低くない。

ラウラは、騎士隊長や政務官と相談し、義勇兵を募り直し、三百人を得た。

義勇兵は、第二波襲撃があっても、戦闘には参加しない。

物資運搬や負傷者の手当など、後方援護のみに従うものとした。

そして、四日目。

第二波襲撃があった。

防御力をはるかに超える、すさまじい数のモンスターによって。

6

二千はくだらないであろうな。

と、ザーラは思った。

うち、飛行種が二百体近い。

実に、まずい。

地上を走るモンスターの中に、オーガが百五十体ほどもいる。

とても、まずい。

しかし、戦術は変わらない。

第一に、城門を固く閉ざし、城壁の上から、攻撃を加える。

第二に、城壁の一部、あるいは城門が壊れたら、一定数の中に引き込み、あとの侵入を防いで、小刻みに殲滅していく。

今、城壁の上には、百人ほどの兵士が、弓を携えて待機している。経験のある者をかき集めて、この部隊を作った。

全員の矢に一本ずつ、ナーリリアからもらった毒を塗った。正体はラミアであるナーリリアが、自分で分泌した毒だ。

ザーラは、メルクリウス家から借り受けている五つの秘宝を、すべて身に着けている。

目立つ場所では使わない、と言われてはいるが、なりふりを構う場合ではない。

ポーラの剣は、まだ出してない。

恩寵の反動がきつすぎて、長期戦は戦えないからである。

「射てっ！！」

指揮官の号令で、矢が放たれる。

飛翔して迫る多数のモンスターを前に、落ち着いて弓を射れる者は、めったにいない。

多くの矢は、早すぎ、狙いも甘かったが、それでも、いくばくかは、敵を捉えた。

毒の効果はてきめん、かすただけで、飛行態勢が崩れ、あるものは城壁に激突し、あるものは内側に墜落する。

いっぽう、人間側も、かなり多くの弓兵が、撃つたらずぐに伏せろ、という支持を忘れて立ち尽くし、飛行モンスターの餌食になった。

ザーラはといえば、ティリカの弓を横に構え、四本の矢を同時に放った。

ただちに、もう四本を取り出し、射る。

周りの兵が構える弓と比べれば、まるでおもちゃのように小さなティリカの弓は、実は極めて勁い。

この弓をザーラの筋力と技で用いれば、飛距離も貫通力も、並の兵士のそれとは比較にならない。

ここで、飛行モンスターたちが突っ込んできたので、ひらりとかわし、反転して、城内に襲い掛かる敵に向け、さらに三本を撃つ。山の民の娘から教わった射弓術である。

都合十一本の矢のうち、十本が敵を落とした。もう一本は、はずれたものの、ずっと遠くまで届き、オーガを直撃した。

オーガは、少なからぬモンスターを巻き込んで横転したから、これは大当たりといってよい。

倒せた飛行モンスターは、四十体に届かない。

百五十体以上が残っているが、ありがたいことに、魔法を撃つタ-ipは見当たらなかった。

あとは、城内の遊撃隊に任せるしかない。

モンスターの地上部隊が近づいている。

あの勢いのまま、城壁にたどり着かせてはならない。

ザーラは、ここで切り札を切ることにした。

「メテオ・ストライク！」

メテオ・ストライク！

メテオ・ストライク！」

ザーラが剣で指した場所に、大きな彗星が落ちる。

ライカの指輪が光を失う。

この指輪の恩寵によって、彗星召還を行ったのである。

今の三発で、五十体は倒せたらどうか。

周りの兵士たちが、あぜんとした目で、ザーラを見ている。指揮官までが、あぜんとしている。

「爆裂弾、用意してください！」



はじける爆裂弾。

吹き飛ぶモンスター。

覆いかぶせるように放たれる矢。

期待し得る最上の善戦といってよい。

とはいえ、倒せた敵は、全体の二割少々。

人間であれば、これだけ損耗すれば一度引くであろうが、狂集団化したモンスターは、死に絶えるまで攻撃をとめない。

ここからが正念場である。

モンスターが、城壁を攻撃し始める。

この揺れ方では、長くはもたない。

ザーラは、指揮官に、左右に兵を待避させるよう進言すると、城壁の内側に飛び出した。

尖塔の張り出すと、城壁内部の階段に、交互に飛び移りながら、あつという間に地上に下り立ったザーラに、赤い鎧のラウラが声を掛ける。

「ご苦労。

上出来だ」

「もう少し下がったほうがいいです。

すぐに崩れます」

「うむ。

皆っ、下がれ！」

その間にも、城壁を殴りつける激しい音が響く。

やがて、南門付近の壁が崩れる。

落ちてくる大量の石に、二十体は、つぶされたようである。  
そして、そこには石が高く積み上がり、乗り越えなければ中に入れない。

城壁の、崩れた部分の両隣は、支柱に支えられて落ちてこない。  
うまい作り方だ、とザーラは思った。

すぐに、モンスターが乗り越えて来る。

五十体ほどを中に誘い込んで、そのあとを押しとどめる。

ここには、虎の子の魔法騎士五人が配置されている。

ラウラと、アーチャーのシャリアプロ、支援魔法使いのオリエナもいる。

いっぽう、引き込んだモンスターを倒す役は、壁役のモーラと、アサシンのジャマガルと、八人の騎士、五十人の一般兵である。

すぐ近くには、七人の騎士と、五十人の一般兵が待機して、交替の合図を待っている。

あと、五十人の一般兵を、街の各所に配置して、飛行モンスターや、包囲網を抜けたモンスターに供えている。

モーラが、タワーシールドを駆使して、三体のオーガを引きつけている。

普通、騎士五人掛かりでオーガ一体を倒す。

上級騎士なら、一人で闘える。

防御専念とはいえ、三体を一度に相手できるモーラは、やはり尋常の戦士ではない。

オーガの一撃一撃が、盾に当たって発する音は、戦に慣れた戦士でも、すくみ上がらせるほどである。

だが、モーラの顔に、あせりは見えない。

すっとオーガの後ろに移動したジャマガルが、曲刀で足の腱を切

り裂く。

倒れるオーガ。

そうやって三体のオーガを倒したあと、それぞれ武器を持つ手の筋も切っておく。

あとは一般兵に任せて、次のモンスターに向かう。

少し離れた場所で、八人の騎士が二体のオーガと闘っている。五十人の一般兵が、四十数体の中型モンスターと闘っている。

そこにザーラが飛び込み、二体のオーガの足を、一本ずつ斬り飛ばす。

後ろも見ずに、中型モンスターの中に飛び込み、あたるを幸いに斬り伏せていく。

騎士の指揮官が、号令し、待機班と交替する。

様子を見たラウラが、次のモンスターを入れる。

今度は、先ほどより多めに、六十体ほど入ったところで、足止めを掛け、攻撃魔法と、爆裂矢を飛ばし、それ以上の侵入を阻止する。ザーラも、ティリカの弓で、十一本の矢を立て続けに撃ってから、引き込んだ敵の掃討にかかる。

誰もが、ザーラの働きのすさまじさに目を見張る。

あの若者は、いったい何者なのか。

そのザーラは考えている

うまくいつている。

今は。

だが、魔法騎士の魔力は、そう長くは続かない。矢玉も、いずれ尽きる。

そして、モンスターたちは、広い範囲にわたって城壁を壊しつつ

ある。

まだ千五百体以上いる敵を、このまま押さえきれぬわけがない。やがて、戦線は崩壊する。

これは、勝ち目のない戦いなのである。

7

そのとき、城壁の崩れていない部分に、外から魔法攻撃が加えられた。

雷撃である。

ザーラは、はっとした。

魔法攻撃のできるモンスターがいるのか？  
それなら、別の可能性が開ける。

「ラウラ殿！

私はここを離れるっ」

その声は、ラウラにも周りで戦う者にも聞こえたが、理解はされなかった。

ここが前線であり、ここを離れてどこに行くのか。

ザーラは、答えを行動で示した。

すれ違うモンスターを斬り捨てながら、崩れた石に飛び上がり、周囲のモンスターを手練の早業でなぎ倒すと、その向こうへと飛び降りたのである。

正気の沙汰ではない。

そこには、千五百のモンスターが、殺気をみなぎらせて押し寄せ  
ているのである。

見えた。

と、ザーラは思った。

魔法攻撃を飛ばしているのは、十体少々の、見たことのないモン  
スターである。

巨大なミミズの体のあちこちにとげの生えたような姿をしている。  
頭と呼ぶべき部分は、蛸を下から見たようになっていて、触手の  
ような物をうねうねと動かしている。

体長は、人間の五倍はあり、起き上がっている部分は人間の身長  
より高い。

だいぶ後ろのほうにいる。

ザーラは、加速スキルを最大に発動して、大回りしてモンスター  
たちを迂回した。

それと同時に、アレストラの腕輪の恩寵を発動停止し、ボルトン  
の護符の、発動させていなかったほうの恩寵を、発動させた。

オーガが棍棒をたたきつけてくる。

エンデの盾で受ける。

たたきつけたと同じ力が棍棒に加わり、砕け散る。

オーガが殴りつけてくる。

エンデの盾で受ける。

殴りつけた腕が砕け散る。

その一方で、右手の剣は、モンスターを次々に屠っている。

空中で、大型モンスターの打撃を受けても、モンスターのほうが  
吹き飛ばばかりで、ザーラはこともなげにしている。

矢の届く距離になった。  
大ミミズに立て続けに矢を射る。  
タゲは取ったと思う間もなく、雷撃が来る。  
数発の雷撃に打ち抜かれて、激しい衝撃が全身を走る。  
見ると、ライカの指輪が、光を取り戻していた。

「メテオ・ストライク！」

城壁の近くにいたモンスターを吹き飛ばす。  
メルクリウス家の恩寵品五点は、いずれも素晴らしい恩寵を持つ。

魔法を消滅させる、アレストラの腕輪。  
毒や状態異常を解除する、カルダンの短剣。  
物理攻撃を低反動で反射する、エンデの盾。  
攻撃魔法を発動できる、ライカの指輪。  
隠形と魔力蓄積のできる、ボルトンの護符。

ライカの指輪には、強力極まる攻撃呪文がいくつか封じられていて、魔力のない者でも、発動呪文だけで発動できる。  
込められた魔力分だけ。

いっぼう、ボルトンの護符には、姿と気配を消す恩寵があり、また、受けた攻撃魔法を自らの魔力として吸い取る力がある。  
ザーラには魔力がないが、ライカの指輪に魔力を蓄積することができる。

このとき、ダメージはほとんど吸収してくれるが、痛みはそのまま、という妙な仕様になっている。

つまり、痛みをこらえて、雷撃を受け続ければ、ザーラは、メテオを撃ち続けられるのである。

モンスターを引きつけることにより、多少なりともラウラたちの負担を減らせるという効果もあるう。

ただし、荒れ狂うモンスターたちの攻撃から逃れつつ、大ミミズの射程距離から出ないようにしなくてはならない。

これだけの乱戦になると、いかにザーラといえども、始終体を削られ続けることになる。

ずたずたになりながら、モンスターの群れのただ中に居続けなければならぬのである。

成算の高い方法とはいえない。

しかし、これは、絶望の中のかすかな希望である。

阿修羅のごとく、ザーラは戦い続けた。

8

夢か？

ラウラが、微笑みながら、ザーラの顔を、拭いてくれている。

「目が覚めたのか？」

話し掛けるラウラの顔は傷だらけだった。

それでもなお、美しい。

ザーラの全身はしびれ、感覚は鈍い。

意識も、まだじゅうぶんに覚醒していない。

すべてが、あやふやで、たよりなく、実体のない幻のようである。

「あなたは、いったい、何者なのだろう」

ラウラの声も、近いはずなのに、遠くから聞こえる。

どうも自分の体は、寝台に横たえられているようだ。

と、ラウラは身をかがめ、ザーラの胸に顔をうずめた。

「あなたが、何者でもいい。

ありがとう」

見えないのに、ラウラが泣いているということが、なぜか分かった。

静かな時間が流れた。

少し意識が飛んだのか、ふと気が付けば、ラウラの顔が、目の前にあった。

ラウラは、ザーラにそっと口づけた。

甘く優しい風に包まれたように思った。

「たった一人の民でも、助けられれば、と思っていた。

しかし、それがかなわないということは、知っていた。

あなたは、奇跡そのものだ」

このとき、やっと、ザーラは口を動かすことができた。

「生き残り……は？」

「騎士は、けがをして下がっていた者たちのほかは、私以外みな死んだ。

兵士は、百人近く生き残った。

王と王宮は無事で、民の三分の二が生き残った。  
私たちは、勝ったのだ」

騎士は、どうしたと？

「モーラ殿は？

ジャマガル殿は？

シャリアブロ殿は？

オリエナ殿は？」

「みな、死んだ。

見事な死にざまだった」

顔は動かないので、目だけを動かして、ラウラを見た。

右手が、ない。

包帯は、血に染まっている。

ザーラの目線に気が付いたのか、説明する。

「ザーラ殿のくれた痛み止めは、すごいな。

さっきまで、私も寝ていたのだ。

なくなっただははずの腕が痛んで、痛んで、目が覚めた。

しかし、痛み止めのおかげで、今は平気だ。

砂漠ワニにかまれてな。

オーガに殴り殺されるところだった。

オリエナが、光弾で私の右手を焼き切って、助けてくれたのだ。

代わりにオリエナが殴り殺された。

私は、左手一本で、オーガとワニを倒したぞ」

では、生き延びたのだ。

あれほどの大群を、打ち倒すことができたのだ。

犠牲は大きかったようだが。

「ザーラ殿の戦いぶりを、見た。  
多くの者が、見た。

人にできる戦いではない。  
みなは、あなたは神の戦人いくさびとアルスに違いないと言っている」

「アルス……それは、私の、もう一つの名だ」

もつろつとする意識の中で、答えるともなくつぶやいた。

やはりそうだったのかと納得したラウラは、教えてほしいことがある、と言った。

帝国では、戦人いくさびとアルスは、邪竜カルダンのしもべといわれ、北では、女神ファラとやらの使いといわれているようだ。

砂漠では、大神ボーラの兄弟神が、神であることを捨てて、人になったのがアルスだ、と信じられている。

どれが正しいのだろうか、と。

ザーラは、夢うつつのまま、答えた。

「カルダン神……」。

今日の戦いは、カルダン神より賜った恩寵によるもの。

大地の神ボーラの恩恵は、さらに偉大なり。

女神ファラのごときは、よく知らぬ」

「そうか。

では、ビア＝ダルラの街は、これより、大神ボーラと神竜カルダンをあがめよう。

今日の日を祭り日としよう。

だから、ザーラ殿」

ラウラの言葉は、中断された。

街に、大きなざわめきが生じたからである。

ラウラは、左手に剣を持つと、ザーラに礼をし、何事かを告げて、出て行った。

ザーラの全身は麻痺し、耳鳴りと頭痛は、収まらない。

寝たままで、呪文を唱えて、特殊インベントリを開くと、ボーラの剣を取り出した。

剣を杖に起き上がる。

寝台に立て掛けてあったエンデの盾と、盾に差してあった短剣を収納した。

腕輪、護符、指輪を確認する。

剣を突き、よろよると建物の外に出る。

街は、ひどいありさまであった。

人々は、北門があつたほうを見ている。

瓦礫と折り重なる屍体の向こうに。

トロールである。

十体を越えるトロールが、近づいて来る。

今のこの街にとって、それは死神に<sup>ひと</sup>斉しい。

ずるずると、足を引きずり、前に進もうとする。

だが、こわばる身体は、ザーラの意志に従わない。

そのとき、誰かが自分を呼んだような気がした。

振り返ると、ザーラの案内人が、何かを叫びながら、手を振り回している。

その勢いに押し出されるように、一頭のボーボーが、こちらに走ってきた。

ザーラの前まで走ってきて、膝を突いて背を差し出したボーボーは、片耳だけ黒い。

背にしがみつくと、ボーボーは、城壁の残骸と死骸のあいだを器用にすり抜け、外に出た。

いた。

トロールまで、約二千歩。

その手前五百歩ほどの距離に、抜き身の剣を持って走るラウラがいる。

ザーラは、ボーボーを駆けさせる。

トロールは十二体。

大きさは、さまざまである。

後ろの小さい四体は、子どもであろう。

トロールも、父は子の、子は母の死を、哀しむのであろうか。

ひととき大きな先頭のトロールは、その長大な手に持った棍棒を体の横に引いた。

体格差はあまりに大きい。

トロールの長い胴と、短い足。

その足一本が、ラウラより大きい。

トロールは、飛び込んでいくラウラの体を、なぎ払った。

ラウラは、倒れ込みながら、棍棒をかわし、体の回転力で、怪物の右腕を斬り落とした。

そして、そのトロールに蹴り飛ばされ、ラウラの体は、高く舞い上がった。

地上に落ちたところを、行進するトロールに、次々と踏みつけら

れた。

ザーラの駆るボーボーが、トロールの間近まで来た。

ボーボーは、右に進路を変えて、トロールを避けた。

ザーラは、振り落とされ、迫り来るトロールに向かって、「ころころ転がった。

このころになつて、先頭のトロールは、右手を斬り落とされた痛みを感じはじめたのか、手を顔の前に上げ、大声を上げている。

ザーラは、身動きのままならない体で、転がる勢いのまま、何とかボーラの剣で、先頭のトロールの足に斬りつけることに成功した。

その途端。

ボーラの剣がトロールを傷つけることによつてザーラに吸収された、わずかばかりの体力が、劇的な効果を上げた。

体は封印を解かれたように自由になり、思考、聴覚、視覚、その他あらゆる感覚が、明敏さを取り戻した。

二体目、三体目のトロールに踏みつぶされるところを、体をねじつてかわし、四体目の左足を、斬り落とした。

ザーラの体力は、再び大きく回復し、倒れるトロールの首を落として、ラウラの元に駆け寄った。

十一体のトロールたちは、ザーラにもラウラにも興味がないのか、そのまま街に向かっている。

ラウラは、ひどいありさまであった。

赤い鎧が、かろつじて圧殺から守ってはくれたが、内蔵が破裂しているであろう。

口からは、赤い血が、こぼこぼとあふれている。

目は、膜がかかったようで、焦点を結ぶこともできない。

左足は、完全につぶれ、あり得ない形に曲がっている。

ラウラは、死ぬ。

今まさに冥界の門をくぐるうとしていいる。

奇跡のごとき技を振るう神官僧侶にも、ラウラの命は、救えない。

このとき、ザーラは、狂っていたのだろう。

ラウラの体を引き起こすと、後ろから支え、力を失った左手に、ポーラの剣を握らせた。

その手を自分の左手で包み込むと、けもののような雄叫びを上げ、街に近づいていく十一体のトロールに襲い掛かった。

斬る。

斬る。

斬る。

右手でラウラの胸を抱え、左手でラウラの手ごと剣を持つ、という不自由な態勢にもかかわらず、まるで暴風雨のように、ザーラはポーラの剣を振るった。

トロールたちは、何かと闘っている、という認識さえ持てなかったかもしれない。

手を、足を、首を、次々と斬り落としていく狂乱の死神。

ほどなく、そこには、切り刻まれたモンスターの肉塊と、ザーラとラウラだけが残された。

ザーラの狂気は、嘘のように治まっていた。

目を覚まさぬラウラを、そっと砂の大地に横たえ、ひざまずいて神に祈った。

「大地神ポーラよ。

偉大なるポーラよ。

汝が厚き恩頼を礼びまつる。  
希わくば、是の女に、今ゆ一時心安の眠りを

ラウラの失われた右手は、元に戻っていた。

左足も、元に戻っていた。

傷だらけだった全身が、命を取り戻していた。

顔には、血糊や汚れが付いているが、傷はない。

安らかに呼吸をしながら、眠っている。

千歩と離れていない城壁の残骸から、ビアッダルラの人々が、出来事を理解できぬまま、立ち尽くして見守っている。

そのとき、ザーラの頭の中に、すべてを圧する力強い声が響いた。

「パンゼルの息子アルス、またの名をザーラよ。  
時が来た。

約定にしたがい、わが剣となれ」

ザーラの姿が、その場から消え去った。

## 挿話7

移動した先は、やはり半球型の部屋であった。

天井と壁が遠い。

青みがかつた色で、ゆらめいている。

空気が異様に粘る。

汚物のような、もやがかかっている。

息を吸うと、喉が焼ける。

よほど強い耐性がなければ、この空気に殺されそうである。

床は、やはりゆがんでいるが、先ほどの部屋ほどでこぼこぼこしてはおらず、ゆるやかな起伏をみせている。

奇妙なのは、草である。

草と呼んでよければであるが。

細長く平べったい草が、辺り一面に生えている。

色は、緑、青で、微妙にそれぞれ違っている。

やや茶色がかつたものもある。

上端と下端が細く尖っている。

生え際というか、床に接している部分は、非常に細い。

そのため、宙に浮かんでいるかのようである。

大きいものは、ミノタウロスの背丈ほど、小さいものは、その半分程度であろうか。

足下を見ると、赤く光る円形の平らな石の上である。

その隣に、灰色にくすんだ円形の石がある。

インベントリにバレルハンマーを入れ、二本のシミターを出した。石から床に下りた。

ざわざわと、草が揺らめきだした。

吹いてもいない風にそよいでいるように。

角度によって、広くもみえ、消えるようにも見える無数の草が、ゆらゆら、ぐねぐねと、うごめいている。

迷い込んだ愚か者に気付いて、部屋が目覚めたかのようにあ  
る。

ミノタウロスは、素早く身をひねって、後ろからの攻撃を左手のシミターではじいた。

間髪を入れず来た第二撃を、身をひねり戻して、右のシミターではじいた。

続いて、足下に来た二つの攻撃を、両方のシミターを同時に振って、斬り落とした。

草である。

いや、草ではないのであろう。

柔らかかそうに揺らめいていた、この草は、床から離れると、ぴんとまっすぐに体を伸ばす。

まるで、一枚の刀身のようである。

そして、天井を向いていたほう、つまり切っ先をこちらに向けて高速で突っ込んできたのである。

しかも、第二撃目は、カーブしながら、こちらの迎撃を回り込もうとした。

ミノタウロスの左の脇腹には、かわし切れずについた傷があり、血が流れていた。

ミノタウロスは、違和感を感じていた。

この草もどきは、柔らかかそうに見えるが、切られたときも、剣ではじいたときも、まるで刃のような硬さだった。

こいつらは、見た目通りの物ではないな、とミノタウロスは心に刻み込んだ。

前の部屋の敵も、触手の見た目と実際の質感が、同じではなかった。

この場所では、目で見たことも信用ならないのである。

と、部屋中の草が、床を離れて、ふわりと浮かんだ。

何百何千という草もどきが、部屋中の空間を埋め尽くして滞空している。

そのすべてが、切っ先をミノタウロスに向けながら。

ミノタウロスは、この敵が気に入らなかつた。

不意打ちをしたからとか、闘いにくいとかいうことではない。

どんなモンスターも、人間も、意志があり、感情がある。

憎しみや、恐れを、ミノタウロスに向け、あるいは、殺そう、という思考をもって、攻撃を仕掛けてくる。

さらにいえば、命を持つものは、そこに在るだけで、存在の気配を放つ。

人の感覚に置き換えていえば、ミノタウロスは、相手の心の動きを、風、として感じ、命の気配を、熱、として感じる。

だが、この草もどきには、風も熱も感じない。

この草もどきは、闘おうとしているのではない。

ただただ動いているだけなのだ。

心を持たぬ武器が、俺に刃を向けている。



なおも、ミノタウロスの碎け散る息は、続く。  
衝撃波を浴び続けた草もどきは、文字通り碎け散っていった。  
ミノタウロスは、徐々に体の向きを変えながら、何度も何度も、  
碎け散る息を放った。

やがて、部屋中の草もどきが、碎け散って床に降り積もり、ミノ  
タウロスの咆哮も止まって、静けさが戻った。

赤く光る円形の石の隣の、灰色にくすんだ石が、青い光を灯した。

## 第8話 時を待つ者

1

ザーラが、ビアッダルラ防衛戦を戦う数日前のことである。

リガ家の前当主アルカンは、王都を見下ろすベランダで、一人くつろいでいた。

今日は、アルカンの八十一歳の誕生日であった。

華美や奢侈を嫌うアルカンの性情を、むろん家人らもよく理解していて、質素ではあるが、心のこもった食事会となった。

人の和が広がること。

それが、何より、アルカンの喜ぶことである。

大勢の家人、族人、友人たちが足を運んでくれたこと、それこそがうれしい。

だが。

来てほしくても、呼べない者。

呼んでも、来てはくれない者もある。

やはり、エッセルレイアは、来なかった。

なるほど、バヌーストは遠い。

だが、王宮への報告と納税などの時期を合わせることはできたらう。

贈り物も手紙さえもないことが、エッセルレイアの気持ちを、表している

やはり、わしがパンゼルを殺した、と思っているのだろうか。

その思考は、苦い。

アルカンにとってみれば、これほど馬鹿な話はない。

アルカンが、パンゼルを殺すわけがないのである。

あれほど国に有益な人物を。

だが、メルクリウス家を攻めるときに、策を弄してパンゼルを死地に追いやったのも事実である。

自業自得ということか。

苦笑いで、老いて娘に憎まれる寂しさを払った。

2

リガ家の初代が始祖王に仕えたのは、建国からほどない時期であった。

仕えた、といえば割切を欠くかもしれない。

初代は、北海に面する広大な領地の跡継ぎだった。

それに対して、始祖王の国は、今の王都といくつかの寒村があるばかり。

初代は、国が新たに生まれつつある、その風景の面白さを見物しつつ、多少の助言や協力をしていたにすぎない。

始祖王というのは不思議な男だ、とアルカンは思う。

強欲で、慎みがない。

欲しいと思つた女も物も、我慢できない。

たとえそれが家臣のものであつたとしても。

強引に、あるいは策を弄して奪い取ろうとする。

欠点だらけの男といってよい。

だが、そのいっぽうで、人の功績に報いることに、物惜しみしない人物でもあつた。

諫められれば素直に自分の過ちを認めることのできる人物でもあつた。

そして何より、人に大きな夢を与えることのできる人物であつた。

だから、始祖王の周りには、国を建てるに足る徳と才を持つ人々がいくたりも集まつた。

それぞれ、自分が始祖王を支えなければと思ひ、才を振るつた。

そして、始祖王は、人に存分に才を振るわせる才能を持っていた。

そこに駆けつけて冒険を共にすることが許されるなら、自分も馳せ参じたい、とアルカンも思う。

そのような、愉快で、破天荒で、壮大な、建国の時代を、始祖王は築いた。

始祖王が死んだとき、初代は、自分の国に帰ろうとした。

親が老いていたし、始祖王を失った国に、もう興味はなかった。

家族と郎党を率いて、馬車で王都を出て行く初代を、始祖王の正妃が引き留めた。

二代王たる幼子を抱え、馬車が進む道の上に寝たのである。

正妃は初代に、あなたが出て行けば、この子も私も国をまとめる

ことはできず、遠からず、死ぬ。

ならば、今、その馬車でひき殺せ、と言いつつ放った。

正妃は、始祖王の死後、有力な家臣が次々に離れていくのを、ただ黙して見つめていた。

ところが、初代の出立を聞きつけたときには、突然王宮を飛び出し、必死の引き留めを行ったのである。

正妃は、身を投げ出して初代の袖にすがった、といてよい。

初代は、その袖を振り払うことができず、王都に残った。

北海の雄といわれた故国を捨て、王の座を弟たちに譲ることになるのだと、正しく理解しつつ。

建国時点で生き残っていた二十四人の直臣たちは、王国守護騎士に叙せられ、直閲貴族家を立てた。

始祖王が死んだころには、代替わりをしていた家も多い。

二十四家のうち、始祖王没後も王国に忠誠を誓ったのは、メルクリウス家と、のちにエバートの死によって断絶するローウェル家の二家にすぎない。

ほかの家は、自領を事実上独立させて経営に力を注ぎ、思い思いに領土を拡大した。

時に交渉により、時に武力により、長い長い時間をかけて、初代は、離れた二十二家を残らず王国に引き戻した。

まさに偉業といてよい。

この畢生の事業を終えたとき、バルデモスト王国は、大陸北部最大の版図を確立した。

とうに老境に入っていた初代が、なおも執念を燃やしたのは、海への道を確保することである。

目を付けたのは、バルデモストの北東方向にあたる海沿いの小都市群であった。

ただし、武力で制圧する道は取らず、リガに街を作り、これを商業都市として発展させる、という迂遠な道を選んだ。

リガは、海沿いの小都市から、塩と海産物を買ひ、バルデモスト王国中に売った。

小都市群からすると、販路が拓けて大量の品がさばけるようになり、しかも、輸送と護衛までもリガが負担したため、産業発展の好機となった。

加工技術の開発に協力し、資金も貸した。

リガは、小都市群にとり、なくてはならない街となり、信頼関係も深まっていった。

初代の出自が知れていたことも、小都市群となじめた一因であった。

バルデモストの諸侯からは、塩の値を下げるよう圧力がかったが、小都市群がじゅうぶんな利益を得られる値段は譲らなかつた。

逆に小都市群に対しては、医薬品や金属製品などを、できるだけ安価に販売した。

小都市群の産業が拡大し、海運業も盛んになると、人手不足になった。

初代は、バルデモストの各地から、流民や貧民をかきあつめ、小都市群に送った。

やがて、バルデモスト人による村が、海沿いのあちこちでできた。小都市群の人々は、発展のしるしだと、喜んで受け入れた。

自然な形で、小都市群の君主たちは、リガを通じてバルデモスト王に朝貢するようになり、バルデモスト王国に編入された。

アンポアンを始めとする直轄都市も生まれた。

リガも、目覚ましい発展を遂げ、産業と防衛の要衝となった。初代は、リガ公爵に封じられ、家名もリガに改めた。

初代は、最晩年に、かつて故国のあった場所を訪れた。最も栄えていた地域は、荒れ果て、モンスターの跋扈する辺境になり果てていた。

国が分裂しても、人々の営みは残る、と思っていた自分の間違いに、初代は気付いた。

今、ここに、かつて国だった土地がある。

王となるべきだった自分がいる。

だが、ここに国はない。

民が消え去ったからである。

とすれば、国とは民である。

これが、リガ家の初代が生涯をかけてつかんだ、国家の本質についての真理である。

3

国の本体とは民であり、民が増え、広がり、豊かになっていくことが、国が栄えることである。

こうした哲学を基底に据えるリガ家から見れば、バルデモストの諸侯の多くは、視野が狭すぎ、実体のない理念に凝り固まり、武威と武力行使をはきちがえている。

王への忠誠こそが、国家興隆の基<sup>もと</sup>であり、諸侯に押し上げられて強力な王が育つことが、国の制度の目指すところである、と諸侯は言う。

それは、間違いではない。

だが、王一人のみが偉大であるとき、王の死とともに国は傾く。始祖王の死を制度の痛みとして感じる者が、いかに少ないことが、とアルカンは思う。

なるほど、建物には柱が、生き物には背骨が、家には当主が必要である。

しかし、大海を往く船に一本の帆柱しか許さなければ、航海は危うい。

リガ家の初代が公爵に封じられたのは、王と諸侯が支え合う国を目指した二代王の精一杯の表現であったと、なぜ誰も気付かないのか。

いや、だが、それも。

アルカンは思う。

本当に王家に忠義を尽くし抜く覚悟を持って言うなら、決して空<sup>くう</sup>言<sup>げん</sup>ではない。

しかし、王家に忠誠をと声高に言いつのるやからの多くは、他家への嫉妬や、自家への利益誘導を、その言葉に置き換えている。

結局、自家のことしか考えず、王国のことなど、まともに考えていないのである。

いい例が、あの伯爵だ。

大陸北西部の沿岸地域と結ぶ経済共同体の構築。

これこそが、リガ家の初代が後代に託した王国最大の悲願ともいうべき事業である。

現在のフェンクス諸侯国西部の沿岸地域には、古くからの良港があり、優良で大規模な塩田があり、発展した水産加工の技術がある。進んだ造船技術と海軍力を背景とした、西方諸島との交易。

フェンクス各地からの鉱石を一手に扱う金属加工の技術。

一国の王にも勝る財力を保有する大商人たち。

大陸北部の最も豊かな都市が密集している地域なのである。

その地域と、結ばれること。

支配でも恭順でもなく、対等の商売相手として、自由な人と物の行き来を可能にすること。

これこそが、王国発展の鍵である、と初代は言い残した。

リガ家は、長い時間をかけて、沿岸諸都市と少しずつ信頼関係を作り、海運貿易は、一定の輸出入量を確保するに至った。

また、バルデモストに接する諸侯の敵意を和らげる努力を続けてきた。

そして、その努力が、大きな実を結ぶ日が来た。

王国歴千四十年、フェンクスのパウロ侯が、アルカンの父モルゾーラの仲介により、バルデモスト王に臣従し、男爵に封じられたのである。

当時、モルゾーラは三十五歳。

アルカンは、たった四歳だったが、そのときのお祭り騒ぎのよくな一家の喜びを、覚えている。

その後も、折りにふれ、パウロ男爵の帰順がどれほど意味の大きいことかを、教えられた。

フェンクスには、重武装と独特の陣形戦法で平地戦では無類の強さを誇る、北方騎士団と呼ばれる兵団を抱える諸侯が割拠する。

フェンクスの諸侯は、独歩独立の構えを取り、互いに不干渉であるが、外敵に対しては団結する。

彼らは、バルデモスト王国を、怯懦の国、と呼ぶ。軟弱な南から逃れてきた貴族が作った国、と見下げているのである。

バルデモスト人が領土を通るのさえ、快く思わない。

豊かな北西沿岸部と交易をする上で、どうにもならない障害となっていた。

そこへ、パウロ男爵の帰順である

パウロ男爵は、精強な北方騎士団を麾下に置く。

バルデモスト王国が、それだけの武威を加えたことになる。

また、パウロ男爵領がバルデモストに編入されることにより、北西部沿岸が近づいた。

さらに、パウロ男爵は、フェンクス諸侯国中央部に親戚が多い。親戚筋の領地を並べるだけで、海にほとんど手が届きそうである。

リガ家は、慎重に、交易路開設の準備を進めた。

そんな折り、フェンクスのある君公の領内で、バルデモストのある伯爵の家臣が、役人に惨殺される事件が起きた。

婚礼の準備のため、海岸部の商業都市に宝物を買いに行った帰りであった。

フェンクス諸侯が発行した手形を持っていたし、殺したあと、宝物を奪い、逃げ去ったというのであるから、言い訳のしようもない。その君公は、非を認めて謝罪する手紙を自ら認めたといい。

モルゾーラは、これを聞いて、小躍りして喜んだ。

その君公は、バルデモストを毛嫌いし、交易路の開設に反対の立場を取っていたからである。

この貸しがあれば、その君公を黙らせることができる。  
うまくすれば、賛成派に回らせることさえできるかもしれない。

その喜びは、たった一日しか続かなかった。

伯爵がフェンクス領に攻め込んだ、という知らせが入ったのである。

アルカンは、父親のあれほど消沈した姿は、見たことがない。  
当時、モルゾーラは四十九歳で、アルカンは十八歳であった。

「アルカン。」

どうしても分からん。

伯爵は、なぜ戦うのだのだろう。」

「領地を得るためでしょう。」

「あんな荒れ地ばかりの土地を、わずかばかり切り取って、民に何の益がある？」

あんな飛び地のような地を得たとして、守るのにどれほどの兵力が要る？」

向こうが非を認めておるのだぞ。

貸しは貸しのまま貸しておいてこそ意味がある。

こちらから攻め込んだとなれば、貸しは消え、非が生じるではないか。」

「それでも、わが領地が増えることは、王国の領土が増えることである、と伯爵は言うでしょう。」

「北方騎士団が集結すれば、わが国に勝ち目はない。

逆にこちらが領土を削られるわ！」

では、こつ訊いたらどうなる。

お前は家臣を殺されて怒っているが、そもそも、通行手形を得て沿岸部に行き物に行けるようにしたのは、誰か。

どれほどの手間と金がかかっているか、知っているのか、と」

「伯爵は、こつ答えるでしょう。」

それは、王国のためにしたことであろう。

わが戦も王国のため。

とやかく言われる筋合いはない、と」

「そうか。」

なるほどな。

しかし、これで、フェンクスに長年言い続けてきた、わが国には領土的野心はないという言葉が、嘘になってしまったが、それはどうか」

「そもそも、領土を広げるのが王国の忠臣としての務め。

フェンクス諸侯国に、そのような物言いをしてきたリガ公こそ不忠の臣、とでも言うでしょう」

「もう領土を外に増やす必要などないのだ！

北西部沿岸との本格的な交易が拓ければ、王国は豊かになり、民は増え、生産力は増す。

遊んでいる土地が、王国内に、いくらでもあるではないか。

まずは国内開発を進め、国力を高めるのだ。

そのためには、交易によって経済を豊にせねばならぬ。

交易路の諸侯も潤う。

経済的に相互に依存する関係を結べば、戦争を仕掛けられる心配は減る。

そうしてじゅうぶんに国力を養ったあと、経済的に諸侯を取り込んでいけばよい。

戦で取っても、人心はついてこず、恨みは深い。

民にうまみを与えてこそ、国は太れるのだ。

そのことは、北東部の沿岸地帯で、実際に証明したではないか」

「それがいけません。

バルデモストの諸侯は、リガ公だけが利を取った、と見ております。

リガから北と東は、すべて実質リガ公の領土ではないかと。

国の金と人を投じて沿岸部を豊かにし、それを自らのものにした。ならば、われらにも、西の地を切り取る機会が与えられねばならぬ、と」

「それは、わが家の利ではない、王国の利だと言っても、通らぬのであるうな。

ふうむ。

アルカン。

今、わしにできることは何か」

「父上。

このたびの戦を始めるについて、伯爵家から、兵站協力の依頼がありましたか」

「いや。

そのようなものは、ない」

「では、タダに塩を売りましょう」

「何？」

この年、大陸東北部の沿岸は悪天候続きで、塩の生産量は著しく

落ち込んでいた。

他国と同じく、バルデモストでは、塩は王家の専売品であるが、リガ家が事実上生産と販売を独占している。

リガ家の采配により、塩はじゅうぶんな備蓄があった。

その備蓄すべてを、隣国のタダに売った。

タダは、塩不足に苦しんでいたから、貸しができたうえ、非常な利益が上がった。

バルデモスト国内では、各都市への割り当て分以外の流通が一時途絶え、自由販売の塩は高騰し、そして消えた。

いっぽう、伯爵に対し国として援軍を出すべきである、という意見が朝議で出されたが、国同士の戦争になってしまふ、というもっともな理由で否決された。

身銭を切ってまで援兵を出す諸侯はなかったので、戦は長引いた。

そして、塩が足りなくなつた。

だが買つべき塩は、もはやどこにもなく、結局領土は得られないまま、停戦となつた。

もし伯爵に、兵か物資を提供する諸侯があれば、こつはならなかつた。

モルゾーラが、そこを訊いたとき、アルカンは、

「周りの諸侯が伯爵を支持するのは、次は自分であると思うからです。」

しかし、同時に、伯爵にだけうまいスープを飲まれるのは許せない、とも思っています。

伯爵の領土を増やすためだけに、身を削って援助をする諸侯は、ありませんまい」

と答えた。

その通りになつた。

フェンクス諸侯とリガ家の友誼にはひびが入り、交易路の夢は、しばし遠のいた。

しかし、伯爵の軍を引かせてみせたことで、可能性は未来につながれた。

4

ことほどさように、リガ家の積み重ねてきた努力は、他家に踏みこじられてきた。

だが、逆に、リガ家が他家を踏みこじり、求めるものを自らの愚かさで遠のけたこともあった。

ヴァルド家の族滅は、その一つである。

当時、アルカンの父のモルゾーラは十九歳、モルゾーラの父のクレルモは四十九歳であった。

平近衛騎士マゼル・ス・ラ・ヴァルドを吏務査察官に据えたいと、王が言い出したとき、クレルモは、筆頭大臣兼宰相という立場上、身分と経歴からして適当でない、と奏上したが、心の中ではむしろ歓迎していた。

当時の王シャナ＝エラン（浄王）は、理想主義すぎ、純粹すぎた。いきおい、クレルモは、王の意に反する政策ばかりを進めることになり、心苦しい思いを持っていた。

ひいきの騎士を抜擢して気が晴れるなら、大いに結構であると考え

えたのである。

また、当時の王宮の政務は、利権やめんつが複雑怪奇に絡み合つて極めて非効率かつ非生産的であったので、懐柔されにくそうな青年吏務査察官が風穴の一つも空けてくれれば、と期待するところがあった。

だが、新任の吏務査察官は、親善試合に毒の剣で斬りかかるようなまねをした。

いきなり、アンポアン侯爵領の役所を調査したのである。

そして、何の相談もなく処罰を実施した。

子爵三人が、私腹を肥やすようなことをしていたことは、明らかに非がある。

これについては、相談されれば、きちんと責任を取らせ、償いと反省をさせるにやぶさかでない。

だが、他国との貿易での不正、と吏務査察官が呼ぶものは、決して不正ではない。

将来の交易路開設をにらんで、友好関係を保つための、必要にして有益な出費なのである。

本来なら、朝議に諮つて国策として実施すべきものである。

しかし、かつてのリガ家当主が諮つたところ、他国を利する余裕があるなら、その分王宮に収める塩その他を安くするべきだ、と口々に言われた。

王宮へ収める物資の価格を下げれば、当然諸侯に収める物資の価格も下がる。

つまり、自分たちに利をよこせ、というのである。

外交というものを、ここまで軽視する国もない。

だから、リガ家の裁量で取り仕切っているのである。

問われれば、胸を張って内容と意義を説明できる。

だが、このような問答無用の形で捜査され、一方的に処断されたのでは、他国に対し、また沿岸地方に対し、リガ家は信用と体面を失う。

それは、リガ家がした約束をおとしめることであり、国の未来の豊かさを削ることにほかならない。

また、長い年月をかけて侯爵領にまで育て上げたアンポアンが、海運と沿岸産業の拠点たるべき地位を失いかねない。

クレルモは、激越な反応を示し、吏務査察官に謀反計画の罪を着せて、一族郎党を皆殺しにした。

その数日後である。

クレルモの部屋から、ただならぬ物音がする。モルゾーラが駆けつけると、クレルモは、こぶしから血を流しながら、机をたたき続けている。

わしは過った、わしは過った、と叫びながら。

その日、クレルモは、王宮から回収した、アンポアン捜査の資料を見た。

その文書は、完璧というべきであった。

正確で、無駄がなく、比較対象の採り方、変動部分の数字の示し方、どれ一つを取っても、見事というしかない出来であった。

出来事と、関与する人間の責任と、その処罰を、簡潔に理路整然と説明する、その言葉の運びは、力強く、美しい。

他国への利益供与の潜在的意味をも踏まえつつ、しかし、処断せざるを得ない理由が、鮮やかに述べ立てられている。

単に法に従うのではなく、本来の精神に立ち戻って、あるべき運用を道付けている。

制度と人の成長を願う、血の通った法理が、そこにはあった。

これを書いた人間は、百年に一人の名吏である。  
伏してわが家の法学の師に迎えるべき傑人である。

この短時間に、これほどのものをまとめたからには、その配下にも、有能そのものの人材が多数いたに違いない。

それをまとめて殺してしまった。

この国に最も必要な、有能で公正で視野の広い官僚集団。

それが目の前に現れていたのに、そうと気付かず、踏みつぶしてしまった。

リガ家が願い続けたことを、やっと神々がお聞き届けくださったというのに。

結局、王が正しく、自分は間違っていた。

クレルモは、国の未来に甚大な被害を与えた責任を取らねばならないと考え、致仕を決めた。

その前に、事件で処罰されたアンポアン侯爵と三人の子爵を、復権、復職させた。

さらに、アンポアン侯爵を黒卿として入閣させた。

時を巻き戻せない以上、傷は小さく押さえねばならない。

そして、いよいよ致仕しようとしたとき、王が死んだ。

バルデモストでは、王の死後一年は服喪の期間であり、重要政策の決定や、要職の異動は慎まれる。

そして、翌年、新王即位とともに、致仕を申し出た。

致仕とは、健康その他の理由により、政務に耐えないとして引退することであるから、当然、同時に家の当主も退く。

長男のモルゾーラが、リガ公爵を襲爵し、当主の座を継ぎ、黒卿に就任した。

クレルモの失敗は、リガ家にとり、苦い教訓である。  
アルカンは思う。

やはり、クレルモの心には、驕りがあり、独善があった。  
取るにたりない役人に、裏をかれ、顔をつぶされたという怒り、  
それがあのような過激な報復となった。

大家が相争うとき、往々にして族滅という手段を取る。  
一人でも子どもが生き残れば、いつか復讐されるからである。  
しかし、リガ家は、これまでそのようなことをしたことがない。  
まして、ヴァルドはリガ家が争うような相手ではなかった。

権勢のある者は、傲慢から逃れがたい。  
そのことを忘れたとき、リガは国にとり毒となる。

そもそも、人は、生きていくという、ただそれだけで、誰かの邪魔になり、誰かの毒になる。

大きな富や権力を持てば、なおさらである。  
長くこの国のことを思って尽くしてきたそのことが、いっぽうでは、腐臭のするよどみを生みだし続けた。

そのよどみは、どうすれば被い清めることができるのか。

アルカンが白卿の座についたのは、王国歴千六十八年、三十二歳のときである。

リガの功罪両面の歴史を背負って、アルカンは、リガ家当主として、白卿として、よく務めた。

だが、アルカンが引退を考え始めたころ、千年の歴史と努力をいったん忘れてしまふべき、大きな転換点を迎えているのではないか、と思わせる出来事があった。

英雄の出現である。

きっかけは、立太子問題であった。

アルカンが白卿となった年、王が亡くなった。

翌年、十八歳の新王が即位する。

後にユーララ＝エラン（剣王）と諡おくしなされる通り、霸気に満ちた気性の持ち主であった。

剣の王というのは始祖王の異称の一つであるから、この諡号は抜群によい。

即位前に妃を迎えており、即位の翌年、男児が生まれた。

第一王子である。

問題は、第一王子の母の父にあたる侯爵が、領土拡張意欲を露骨に示し始めていたことである。

大臣たちは、この侯爵の影響を心配して、第一王子の立太子に消極的だった。

翌年、アルカンの娘が王に嫁し、第二王妃となった。

二年後に第二王妃は、男児を産んだ。

第二王子である。

第一王子を太子にという意見と、第二王子を太子にという意見が

拮抗し、太子が決まらないまま、時が過ぎた。

王国歴千九十六年。

王は四十五歳になっており、立太子問題はもはや引き延ばせないところに来ていた。

このころになると、外戚より、第一王子自身が問題となった。明確に、武力による国土拡大を志向していたからである。

アルカンは、周到な根回しをして、朝議を開いた。

通常の朝議は、王と大臣と案件関係者で行われるが、重要案件については、一定以上の身分の者全員が参加する。

九分九厘、第二王子で決まりかけた立太子を、二十二歳のユリウス・メルクリウスの、長子に格別の問題がない以上、長子が王位を継ぐのが順当である、という発言が覆した。

この声を聞きながら、アルカンは、なんと生臭さを感じさせない声か、と感慨を覚えていた。

収まらないのが、アルカンの長子ガレストである。

どれほどの深謀のもとに第二王子を推戴するか理解せず、アルカンの苦勞を無にしたユリウスに、深い憤りを覚えた。

そんなガレストに、共にメルクリウスを攻めてみないか、と声を掛けたのは、パウロ男爵ポーラムである。

パウロ男爵がバルデモストに帰順して、二度当主が変わった。

このとき、ポーラムは、三十四歳。

三十八歳のガレストは、幼なじみである。

パウロ男爵家は、軍事に秀でた家であるが、バルデモスト帰順以

後は、その武威を示す場もなかった。

ところが、王が、国内の平定を積極的に進めるようになり、大いに活躍の場が出来た。

広い国内のあちこちに、王に従わない勢力があった。

そうした不穏分子を、王命を受けて、ポーラムは、次々に平らげていった。

ガレストも、しばしば行動をともにした。

パウロ家は、活躍の場と名分さえ与えられれば、費用は自弁で構わないという態度を取り、かつ自領から離れたうまみのない地にも喜んで遠征した。

その騎士団は、きわめて精強であったから、功績は圧倒的であった。

こうしてポーラムの武名が国中に轟きわたったところ、彗星のように、ユリウス・メルクリウスが現れた。

王国歴千八十八年、国内を追われた諸勢力が、ジャミの森の蛮族たちと結んで、二万の大軍で王都を攻めようとした。

このとき弱冠十四歳のユリウスは、二日で二千の兵力を集め、六人のスクラス冒険者を動員して、ミケーヌの街に防衛陣を敷いた。

敵の連携の甘さを衝いて将二人を討ち取り、一週間にわたり、敵軍を足止めしてみせたのである。

やがて諸侯が集結して、敵を殲滅した。

この戦により、国内平定は完成に大きく近づいた。

その後ユリウスは、王から重用され、応え続けた。

戦の数ではポーラムに遙かに及ばないが、知名度と人気では大きく優る。

ポーラムは、いつも自軍より多い敵を鮮やかに打ち倒す、この十四歳年下の若き名将与、武威を競いたくてしかたがなかったのである。

ボーラムから、王都のメルクリウス邸を攻めると言われ、ガレストから、そののち王宮に入って第二王子に王位を譲るよう迫る、と言われたとき、アルカンは、あまりの過激さに、言葉を失った。

だが、ボーラムに、いつ攻め込むと聞いて、答えを聞いたとき、これはうまくいくかもしれぬ、と思った。

「もちろん、豊穰祭の最中ですな。

国中の人に見届けてもらえるわけですから」

反逆に等しい陰謀であるのに、ボーラムの言葉には陰湿さがない。また、豊穰祭には迷宮に入る者もないことから、じやまなパンゼルを死地に落とす算段もつく。

家宰のパン・ジャ・ラバンは高齢で病床にある。

あの二人さえいなければ、ユリウスを殺すのは易しい。

アルカンは、引くに引けない状況となっていた。

根回しが行き届きすぎたため、第二王子擁立派の動きは、アルカンの思惑を越えて大がかりで過激なものになっている。

もしも第一王子が太子になれば、リガ家と同調者の決定的な敗北となる。

その状態で、大義もなく、ただ領土を拡張するための戦争など始めれば、国が破滅しかねない。

しかし、武力で王を退位させ、自らの孫にあたる第二王子を王位につけるのは、リガ家の誇りを投げ捨てるに等しい。

負けるわけにいかないが、国を奪うわけにもいかない。

よし。

このとき、アルカンは、誰にもいわず、進む道を決めた。まずは、勝つ。

ユリウスを殺す。

そして、王宮を手中にする。

しかし、奪わない。

第一王子に直談判をして、外征を断念していただく。

ユリウスの死で第一王子の心を折ることができよう。

そのうえで、第一王子を太子に推戴する。

わしは死んで罪をわびる。

ガレストなら、そのあとのリガを牽引できる。

こう決めたとき、アルカンにとって、パンゼルは、優れた騎士であり、ユリウスの強さの鍵となっている存在であったが、それ以上のものではなかった。

陰謀は進められ、その日が来た。

メルクリウスを落としたあと王宮に兵を向けることは、アルカンとガレストとポーラムのほかは、ガレストの側近数名しか知らず、いかなる証拠も残していない。

王宮を占拠したあとのことは、アルカンが一切を行う。

ポーラムは、見世物と屋台と群衆でにぎわうパントラム広場に兵を進め、大音声で呼ばわった。

「やあやあ、われはパウロ男爵ポーラムなり！

王国の若き名將ユリウス・メルクリウス殿と一槍交えんと、北のものふを率いて参った。

見届け人は、リガのガレスト殿。

いざ尋常に、武を競わん！」

群衆は大いに盛り上がり、広場を明け渡し、近くの建物によじのぼって、ポーラムに、あるいはユリウスに声援を送ったというから、

ポールラムはまことに華のある武将といえる。

王都の邸宅で、この報告を受けたアルカンは、愉快に哄笑した。

だが、緒戦の報告の次に、パンゼルが現れて単身こちらの陣に侵入し、ガレストの首を取っていった、という報告を受けたときには、天地が逆さになったかと思った。

リガの後嗣たるガレストに万一のことがないよう護衛につけた、腕利きの騎士と冒険者は、すべて一太刀で斬り殺されたという。

一切を破綻させかねない、この凶報を受けて、しかし、アルカンの胸を浸したのは、

今、英雄が降り立ったのかもしれぬ。

という予感であった。

それにしても、あの子の自分を振り返って、アルカンは、不思議さを覚える。

なぜ、わしは、メルクリウス宗家を討つという非道を、いとも簡単に許したのか。

ユリウスには、まったく非はない。

正々堂々と、意見を述べただけのことである。

それに対し、リガ家の苦勞も知らずにと怒るのは、どう考えても逆恨みである。

ガレストが、武人らしい直截さで、どちらが正しいかを戦いで決めようとしたのは、まだ理解できる。

だが、アルカンの立場にあつては、その手法を冷静に批判できねばならない。

それなのに、自派の都合のためだけにユリウスを殺すと決めた。

このことは、ずっとあとになるまで、解けなかった。  
最近になって、ようやく、アルカンは、自分の心にあったもの  
正体を知った。

わしは、ユリウスを懼れたのだ。

だが、それこそ、激しい矛盾といわねばならない。

メルクリウスは、武の名門とされるが、歴代当主の知見と視野の  
広さは、リガに劣らない。

パーシヴァルの父も優れた人物で、アルカンは、薰陶を受けると  
ころが大きかった。

そして、パーシヴァルは、物事の本質を見抜く、鋭い目を持つて  
いた。

闘うことにしか興味がなく、高位の貴族でありながら迷宮探索に  
命を捧げた愚か者、とみるのは、とんでもない間違いである。

愚鈍な人間が、一族郎党の結束を維持することなど、できるもの  
ではない。

しかも、国のための戦争を、パーシヴァル自身はほとんど戦わな  
かったにもかかわらず、武の一門としての名声は落ちるところか高  
まった、といってよい。

パーシヴァルという男は、見た目通りの単純な武人などでは、決  
してない。

アルカンとも堂々と渡り合って、国政を運営していける能力を持  
っているのである。

であるのに、なぜ廟堂を避けるのか。

王妹をめとったことで野心を疑われぬための韜晦なのか。

アルカンは、パーシヴァルを、近衛第四騎士団長に据えようとした。

近衛第四騎士団は、第二王子の守護騎士団であるから、その知遇を得て、第二王子の立太子に合わせて入閣すればよい、との含みである。

だが、パーシヴァルは、固辞した。

このことは、パーシヴァルの死後、妙な結果を引き起こした。

第四騎士団長は、リガ家の分家の当主が務めていたが、パーシヴァルが後任に就くことを拒否したため、その当主の息子が次の騎士団長になった。

新しい騎士団長は、すでにこの世の人ではないパーシヴァルに、異常な対抗心を抱いた。

その対抗心が、第四騎士団のミノタウロス討伐につながった。

八人で挑むはずの討伐隊は、八十人以上に膨れ上がった。

王がミノタウロス討伐に熱心であることは周知の事実であったし、万全の態勢で行う、万に一つも失敗のない討伐であるから、乗り遅れまいとする騎士団員が相次いだのである。

それぞれの実家が、強硬に参加を要求してきた。

わが家だけを除け者にする気か、と。

この討伐隊への参加で、リガ家に対する忠誠心が計られるらしい、などという不可思議な噂もあった。

結局、肝心の騎士団長は、参加を取りやめた。

無理もない。

パーシヴァルを打ち負かした怪物を倒すことで、自分の武勇がパーシヴァルに劣らないことを示したかったのである。

数を頼んで押しつぶすとき戦いには、何の意味もない。

それにしても、まさか全滅するとは。

報告を聞いたとき、アルカンは、騎士団員たちの愚かさ、骨を失ったかと思うほど脱力した。

騎士団員たちの実家は、いきさつなどはすっかり忘れて、アルカンを責め立てた。

最初から最後まで、討伐隊の派遣に反対していたアルカンが、悲劇の元凶とされた。

しかし、派閥を率いる者は、往々にしてこのような立場に立たされるものである。

結果を見越して何らかの手を打つべきだったという意味では、確かにアルカンに責任がある。

その後、メルクリウスの新当主ユリウスは、武門の家らしいやり方で、頭角を現した。

アルカンは、その功績を背景に今度こそ政治の世界に出てこい、と心で呼び掛けていたのである。

そのユリウスが、廟堂で、堂々と正論を発した。大いに喜ぶべき場面である。

にもかかわらず、感嘆の次にアルカンを捉えたものは、恐怖であった。

嫉妬であった、と言い換えてもよい。

根回しは行き届いており、覆す余地は、わずかなものでしかなかった。

ただ一言により、そのわずかな可能性を、ユリウスは引き寄せてみせた。

欲も強引さもひとかけらも感じさせない声で。

この若者は、リガをも手玉に取る策謀を、いともあっさり思いつき、実行できる人である。

と、直感が教えたのである。

万の努力を一の労力で逆転する人間。

何気ない一言が必ず用いられる人間。

生まれながらに人への強大な影響力を有する人間。

ユリウス・メルクリウスとは、そういう人間であると、このときアルカンは見抜いた。

その認識が、ユリウス殺害を首肯させた。

だが、パンゼルの存在が、ユリウスを守り、ガレストを殺した。

リガ家は存亡の危機に立たされた。

## 6

アルカンの判断は速かった。

一切をなげうって、王への恭順を示したのである。

ポーラムには、悪役になってもらうしかない。

このとき、アルカンの胸中には、リガ家を生き残らせるといふ命題とともに、パンゼルを見定める、という目的が生まれていた。

迷宮の怪物から得たという神剣で、パンゼルが百人の騎士を鎧袖一触になぎ倒すのを見たとき、

この男は、常の人間ではない、

と、確信した。

そして、思わず、かの者王国守護騎士に叙さるべき、と声を発した。

王がすかさず、その言やよし、と応えたとき、それは決まった。

パンゼルが正式に王国守護騎士に任じられ、ゴラン家を立てたとき、アルカンは愛娘エッセルレイアと婚約させ、持参金として精鋭騎士五十人を贈った。

これを聞いた王は喜色を示し、ならばわしも騎士五十人を贈ろう、と言った。

アルカンは、初めて王と気持ちがあうのを感じた。

王も同じであつたらう。

自領に帰ったボーラムは、釈明を求める勅使に、剣でお答え申す、と答え、王国から討伐隊が出されることになった。

リガ家は、従軍せず、兵糧を負担した。

他家に手柄を立てさせるためである。

アルカンは、表舞台から去り、家と爵位を次男のドレイドルに譲った。

そして、パンゼルを見守った。

もつとも、パウロ男爵領は、王国側からは攻めにくいうえ、音に聞こえた北方騎士団が迎え撃つのであるから、ほどよい痛み分けて終わるしかない戦いのはずであつた。

パンゼルは、峻険の地に立つ九つの砦を次々に抜くと、広大な平原を風のように駆け抜け、男爵の居城に迫った。

このとき、パンゼルと共にあつたのは、麾下の騎士百人と、メル

クリウス家の騎士二百人のみである。

ポーラムは、城にこもれば負けるはずはないが、電光石火の進撃をみせた勇猛果敢な武将から、出でて戦えと言われて応じない男ではなかった。

領地の各所を預かる武将たちは、まだポーラムの元に集結しておらず、フェンクスの血縁者から兵を借りてもいなかった。

しかし、直属の兵だけでも圧倒的に有利であり、まして、敵軍は無理な進軍で疲労の極にある。

この無謀で覇気のある若い勇将を、せめて手ずから葬るのが礼儀だ、とポーラムは考えた。

こうして両軍は、平地で激突した。

一般兵を、メルクリウスの騎士が押さえ、ポーラム自身が率いる北方騎士団二百五十名と、パンゼル率いる騎士百人が衝突した。

自軍をくさびの陣形として、その先端となったパンゼルは、方陣を取るパウロ軍に正面から攻め掛かった。

見る者は、岩に碎ける波を想った。

だが、長剣でカーテンを切り裂くかのように、波は岩を突き抜けた。

パンゼルは、ポーラムに深手を負わせ、平地戦では無類の強さを誇る北方騎士団を完膚無きまでにたたきつぶして、城を占領した。

ポーラムは、フェンクス領の深くに親戚を頼って逃亡した。

完璧であるとともに、あり得ない勝利であった。

敵も味方も、聞いて直ちに信じることのできない結果である。

さらに信じられないことが起きた。

ポーラムの領地内に分封されていた七人の子爵のうち、三人が、パンゼルに帰順を申し出たのである。

誇り高いフェンクスの武人が、怯懦の国とまで呼ぶバルデモスト人の風下に自ら立つというのは、それだけでも大事件といえる。

アルカンは、パンゼルという希有の英雄が存分に力を発揮できるよう、心を砕いた。

まずは、ドレイドルを通じ、パウロ男爵領攻略についてのメルクリウス家の功績を強調した。

パンゼルは、軍の編成上ユリウスの配下であるから、この話に無理はない。

ユリウスをパウロ男爵の居城に入れ、采配を取らせるよう計らった。

メルクリウスが賞されることこそパンゼルの本懐である。

また、最前線の拠点をメルクリウスが押さえれば、パンゼルの後方支援は自然に調う。

もっとも、領主は追い払い、直属兵は討ち取ったとはいえ、非占領地域は多く、舵取りは容易でない。

しかし、ユリウスは、意外な老獪さを見せ、メルクリウス軍とゴラン軍の武威をちらつかせながら、戦闘は極力避けて、統治地域を広げ、安定させていった。

帰順した三子爵の働きも大きかった。

二年後、領土の平定が終わったとき、アルカンは、ドレイドルを通じて、旧パウロ男爵領をそっくりユリウスに治めさせるのが適当である、と上奏させた。

ユリウスは、王城の地名を取ってケザ侯爵領と名付けられた地に封じられ、ケザ侯爵となった。

また、アルカンは、メルクリウスが安定するためには、内政がたくみで家産の豊かな諸侯と結びつく必要があると考え、古くからメ

ルクリウスと友誼のある侯爵の娘との結婚を、ドレイドルに取り持たせた。

そして、新ケザ領誕生から二年後の千百年、フェンクス諸侯国との戦争が始まった。

7

バルデモスト王国に服属していたパウロ男爵が、王都で武力蜂起したのであるから、王国がこれを詰問するのは、理が通っている。

釈明せず武力で抵抗した末に、親戚を頼ってパウロ男爵はバヌーストに逃げたのであるから、引き渡しを要求したのも、当然である。

バヌーストは、フェンクス諸侯国内でも有数の堅城を持ち、最精鋭の北方騎士団を有する。

バヌースト公オルエバインは、パウロ男爵を引き渡そうとはせず、逆にパウロ男爵の領地を返還するよう、バルデモスト王に求めた。

このとき、バルデモストの外交には強い覇気がこもっており、国の気風が違ってきた、と思わせるものがあつた。

足掛け四年にわたる交渉は決裂した。

というよりも、フェンクスではパウロ男爵が、おもしろい戦ができるぞと言いつのつて親戚朋友をその気にさせた。

バルデモストでは、国内が平定され、国庫にゆとりがある今こそ、外に威を示す絶好の機会であると、王と太子が率先して開戦を支持した。

結局、武を競って天神の裁きに委ねん、というひどく古式な開戦文書がやり取りされて戦端が開かれた。

フェンクス諸侯国には国王はない。

関係諸侯が集まって議を決し、その盟約書を封印して保管する君公が代表の立場に立つ。

この戦では、バヌースト公を代表者として、十四名の君公が開戦決議書に署名したのであるから、この戦争は、国と国との全面戦争に近い。

バルデモストは、太子その人を総大将として、フェンクスに攻め入った。

バヌーストまでは、いくつもの城や砦がある。

パンゼルは、太子から王の剣と呼ばれて信任され、常に先陣をきって、地上に降り立った神のごとき戦ぶりを見せた。

三年と少しのあいだに、六つの北方騎士団を破り、パウロ男爵の首を取り、バヌースト公を自害させ、バヌースト城を奪取し、さらには、支城五つを攻め落としたのである。

諸侯は、前線が孤立しないよう、周囲の諸族やモンスターを平らげ、安定した形で占領地を押し広げていった。

まさに王者の戦いといえる。

アルカンは、夢を見るような心地で、この三年と少しを過ごした。パンゼルは、二つの点で、それまでの武將と、まるで違っていた。

一つは、破った敵から敬意を受ける、ということである。

パウロ男爵は、パンゼルは天空を切り裂く雷神のような男だ、と称えた。

アルカンは、フェンクスに多くの情報網を維持していたが、どの騎士団もみな天雷パンゼルと戦いたがり、負けたあとには、天雷の

堂々たる戦いぶりを褒めそやす。

二つは、メルクリウス家の恩寵品を使いこなしている、ということである。

メルクリウス家当主は、長い歴史の中で何度も、家族や家臣に五つの恩寵品を使わせようとした。

だが、リガ家の知る限り、当主以外にその恩寵を発動できた者は、一人もいない。

おそらく、パンゼルが初めてである。

パンゼルには、武勇に優れている、というだけではない何かがある。

千年にわたるリガ家の努力と、真反対ともいえる方向に、国は進んでいる。

しかし、この充実感、爽快感、沸き立つような気持ちは、何か。

血と暴力で領土を奪い合う出来事であるのに、吹き渡る風のような清涼を感じるのは、なぜか。

そこに、建国時代のごとき英雄がいるから、としか言いようがない。

自分もまた偉大な時代を生きているのだ、とアルカンは信じることができた。

バヌースト城とその支城までが、バルデモストの勢力圏となれば、沿岸地方まで遠くない。

バヌーストが安定したあと、パンゼルの武威を背景に交易路開設を呼びかければ、間違いなく実現できる。

あと少し。

あと少しで、積年の切望が、まったく考えもしなかった形で実現する。

その夢は、パンゼルの死により、突然終わった。  
バヌースト城の最後の支城を落とした夜、野営中にパンゼルは死んだ。  
三十一歳であった。

8

このときのユリウスの働きは、いくら賞めても足りない、とアルカンは思う。

ユリウスは、パンゼルの死を隠しきった。  
病気であることにして、影武者を置き、医者を通わせ、食事を運び、伝令をたびたび送る念の入れようをみせた。  
そして、太子に、講和条約の締結を急がせた。

その少し前に、停戦交渉は始まっていた。  
なにしろ、パウロ男爵を討ち取り、バヌースト公も死んだのだから、バルデモスト側には、戦争を続ける大義がない。  
いつぼう、フェンクス側は、これほど一方的に負けたままでは収まらない。

占領地の半ばを返還させるに足る反撃を期していた。

五つの支城をすべて落とす、というのは、フェンクス側の士気をくじくにじゅうぶんな効果を持った。

バヌースト本城に加え、五つの支城に、メルクリウスとゴランが詰めるとなれば、守りは盤石で、攻め掛ければ被害が大きすぎる。

パンゼルが死の直前に最後の支城を落としたことが決定打になり、若干の皆は返還するが占領地のほとんどをバルデモストが領有することを明記した講和条約が締結された。

ただし、バルデモスト側も、フェンクス側の勇戦を大いに賛え、莫大な見舞金を支払うとともに、十年間フェンクスからの輸入に關税を掛けないという大盤振る舞いをみせた。

また、旧フェンクス領の貴族と領民のうち、フェンクスに移りた者は、一定の財産を持ったまま移動を許可した。

さらに、貴族の捕虜は無条件で引き渡し、平民の捕虜はごく短い年限の労働のあと解放することとした。

戦争捕虜は、身分のある者は身代金と引き換えにし、そうでない者は労働力として奴隷にするのが常識であったから、この条項には敵も味方も仰天した。

こうした条項のほとんどは、黒卿たるユリウスの発議による。

アルカンは、うなった。

まず、他領から参戦したフェンクス貴族は、もともと恩賞が目当てといってよい。

これに対して見舞金という名で実を取らせるのは、非常にうまいやり方である。

次に關税の期限付き撤廃は、ひっくり返していえば、交易を盛んにする呼び水となるわけであり、戦争で荒んだ關係を和らげるためにも、将来の交易路開設の下準備としても、まことに意義が深い。

次に、移動を許可したとしても、農民は汗のしみこんだ農地から離れはしない。

大商人も、もともと国境を半ば越えたあり方をしており、大部分の財産を放棄して移動しようとは思わない。

結局、移動の自由とは、不満分子である貴族層をふるいに掛けることなのである。

自ら残留を選択した貴族たちは、領民との架け橋になってくれるであろう。

捕虜の無償解放は、廟堂でも反対の声が高かったが、実施してみると思わぬ効果を生んだ。

騎士の半ばと、兵員のほとんどが、バルデモストへの帰順を望んだのである。

占領地外に家族がいる騎士は出て行つたが、この思いもよらぬ厚遇は、彼らのバルデモストへの憎しみを和らげずにはおかないであろう。

さらに、フェンクス側の捕虜となつたバルデモストの貴族も、破格の安い金額で返還された。

フェンクスに捕らえられた平民の捕虜も、短い年限の労働のあとに帰国することが許された。

フェンクスの気風は、極めて誇り高い。

バルデモストが、騎士道を絵に描いたような戦ぶりを示し、その戦ぶりに劣らぬ寛大な講和条件を持ち出したからには、それを下回るやり口を、意地でもみせまいとしたのである。

とても二十九歳の大臣になし得る発想ではない。

この若い君公も、英雄が呼び寄せた風に乗って天に羽ばたいのかもしれぬ、とアルカンは思った。

バルデモストの諸侯は、金銭的な褒賞はほとんど得られなかった。しかし、広大な占領地があつた。

王家は、惜しげもなく、功績を挙げた諸侯に新領地を与えた。

その多くは、経済力が高いとはいえない土地ではあつたが、新たな領土を、しかもあのフェンクス諸侯国から得るといふ感動と名譽

は、諸侯に深い満足を与えた。

こうした施策がとれたのは、一つに、農地と民の疲弊を可能な限り抑えつつ戦ったからであり、もう一つに、リガ家が千年来の蓄えを惜しみなく吐き出したからである。

最大の問題は、バヌースト領、すなわち占領地の最先端を誰が領有するかであった。

パンゼルが存命なら、何の問題もなかった。

パンゼル以上に、かの地にふさわしい領主はない。

だが、パンゼルは死んだ。

初め、王は、メルクリウスを移封するつもりであったようである。バヌースト領主となることは大変な名誉であるが、事あれば三方から攻撃を受ける最前線でもある。

なまなかな諸侯では務まらない。

太子は、バヌーストを治める者はゴランしかあり得ない、と廟議で宣言し、皆の度肝を抜いた。

これに真つ向から反対したのが、白卿のドレイドルである。

臣下として最高位とはいえ、ドレイドルは三十九歳。

黒卿の一人であるユリウスが二十九歳であるのを除けば、大臣の中で最も若く、経験も浅い。

入閣以来、他の大臣の言葉をささええぎったことのないドレイドルが、このとき初めて、太子の言に疑義を呈し、激情を押し殺した声で、未亡人には重すぎる荷物でしょう、と述べた。

パンゼルの未亡人であるエツセルレイアが、ドレイドルの実妹であり、ドレイドルがこの年の離れた美しい妹を溺愛していると、知らない者はない。

この朝は結論が出なかった。

だが、ドレイドルの言葉は、妹への愛情から出たものではない。パンゼルへの憎しみから出たものである。

リガの一族は、家族を大切にす。

継嗣のガレストは、華のある男で、一族の希望であり、愛の塊であつたといつてよい。

ガレストは、武人らしいおおらかさで、家族や一族郎党をいつも気遣つたから、誰もがガレストを愛した。

そのガレストを、パンゼルが殺した。

ただちに復讐しなければならぬ。

だが、それは許されない。

それどころか、ガレストの子どもたちと側近たちの首を差し出すことまでしなくては、リガ家は生き残れなかつた。

仇敵たるパンゼルの、最愛の妹を生け贄として差し出した夜、ドレイドルは狂つたようにわめきちらして暴れた。

ドレイドルは大臣になり、白卿となつたが、フェンクスを攻めるあいだ、その座は針のむしろであつた。

王都で武装蜂起したパウロ男爵を責める言葉の矢玉は、そのままりガ家に突き刺さる。

泥水にはいつくばる気持ちで、ひたすら王に忠義を尽くし、諸卿の公平な調整に努めた。

戦争という砂地に、莫大な財を湯水のように注いだ。

決して手柄を取らないよう、注意しつつ。

これほど国に尽くしてきたリガ家が、じつと身を伏せ、運命の理不尽さに耐えねばならないのは、誰のせいだ。

講和条約締結によつて、屈従と忍耐の日々がやっと終わると思つたところに、最大の占領地をパンゼルの家に与えるといふ。

それだけは許せない、とドレイドルは思ったのだ。  
それは、ドレイドルだけの思いではない。  
数多い兄弟、親族、郎党、すべての一致した思いなのである。

こうしたドレイドルの吐露を聞き受けつつ、アルカンは、困ったものだ、と思っていた。

なるほど、家族は何より大事にしなくてはならない。  
だが、政治においては、物事は外側からも見てみる必要がある。  
バヌーストの領主を選ぶについて大事なのは、王国内の事情ではない。

フェンクス人の心性である。

天雷パンゼルをこの地に封じ、その御霊みたまの武徳をバヌーストの護りとなす。

これ以外のどんな形も、フェンクス人の魂に、ここがバルデモストの領土だと刻みつけることはできない。

そもそも、バルデモストの政まつじにしても、王や大臣や諸侯が行っている、とみるのは一面にすぎない。

より本質的な部分でいえば、この国は、始祖王と二十四英雄の遺徳の上に立っているのであり、始祖王の御霊みたまを祭るからこそその王なのである。

そこに思いを致さずに政務を執るのは、太陽と大地の恵みで育った作物を、自分の力だけで育てたと思いつがるようなものだ。

考えてもみよ。

パンゼル以外が領主になったとして、死んだバヌースト公やパウロ男爵が納得すると思つのか。

この二柱の御霊みたまが納得しないということは、二人の名誉を奉ずるフェンクス人たちも承服しない、ということなのだ。

だが、そのような理屈は、憎しみに染まりきった、今の息子には通じない。

そう分かるアルカンは、まったく別の説得を行った。

奪え。

パンゼルの、すべてを奪え。

わが娘をやったのは、なぜか。

ゴランの家を、わが血で埋め尽くすためではないか。

領地を、遠きバヌーストをこそ与えてやれ。

そうすれば、ゴランをメルクリウスから引き離せる。

家臣などろくにいないゴランが、リガ以外のどこを頼るのか。

行政に優れた兄弟を、外交に秀でた従兄弟を、経済を熟知した子飼いの臣を、エッセルレイアの元に送れ。

ゴランがバヌーストを領し、しかして、そのすべてはリガが牛耳るのだ。

リガの歴史、リガの思想、リガの気風、リガの怨念で、パンゼルの息子を染め上げよ。

そのとき、復讐は成る。

アルカンの言葉を聞いて、ドレイドルの目に正気が戻った。

翌日の朝議で、ドレイドルは、前言を翻してゴラン家をバヌーストに封じること賛成し、リガも及ばずながら精一杯の支援をさせていただきます、と述べ、王と太子と諸卿に感銘を与えた。

それだけではない。

旧バヌースト領を細かく分割して、それを分かち合おうと考えていた諸侯に、ドレイドルが、まとまった領地でなければ防衛上の連携が機能しないと述べたので、新バヌースト領は、当初太子が考えたものより広くなった。

ゴラン家は、バヌーストに封じられ、王国守護騎士パンゼル・ゴランは、バヌースト侯爵を追贈された。

バヌーストで、パンゼルの正式の葬儀が執行された。

驚いたことに、旧敵国であるフェンクス諸侯国から、二十二人も諸侯が弔問使を送ってきた。

9

アルカンは、エッセルレイアからの手紙を時々読み返す。  
おもしろいのだ、その変化が。

嫁がせるとき、何をせよともアルカンは言わなかった。

ゴラン家のことを一番に考え、メルクリウスを立てるのが妻としての務めである。

その務めを果たし、幸せになってくれることを願った。

それが、リガと、ゴランと、メルクリウスの友誼にもつながらる。

母は違えど、エッセルレイアは年の離れた兄ガレストを慕っていたから、パンゼルと仲良くやれるか、わずかな不安もあった。

まったくの杞憂だった。

見る見る間に、エッセルレイアは、パンゼルの妻そのものになった。

まじめな文章でのろけを書いてよこすのを読んで、こんな性格だったかと、驚いた。

パンゼルに、嫉妬さえ覚えた。

頻繁に届く手紙に、父への愛情を感じ、慰められた。

その手紙が、ふつりと止まった。

パンゼルの死を知った日からだと、あとで分かった。

夫を父に殺されたと、エッセルレイアは確信している。

なるほど、リガの誰もが、パンゼルを心から憎み、その死を願っている。

アルカン以外は。

エッセルレイアには、それが分からない。

暗殺、なのだろうか。

神剣の恩寵があるから、戦場での傷がもとで、というのは考えにくい。

体調を崩していた様子もなく、突然の死であったという。

メルクリウス家の恩寵品は、アレストラの腕輪以外はユリウスに返していたようであるから、毒殺、ということは考えられる。

だが、いったい、誰が？

ふつうに考えれば敵国であるが、恋人に会うようにパンゼルに戦いを挑み、天雷に負けたとうれしそうに言いふらすような騎士たちと、暗殺、という手法がそぐわない。

一人一人諸侯の顔を思い浮かべても、それらしい相手は浮かんで

こない。

そもそも、暗殺については、アルカンが感心するほど見事な対策をしていた。

専門の冒険者を雇っていたのである。

パンゼルは、けがれなきパンゼル、というあだ名を敵に付けられるほど、戦法においても戦術においても清廉な方法を探ったが、一面、汚いやり方を知り抜いていた。

メルクリウス家の食客になっている、元冒険者ギルド長だったドワーフ・ハーフの仕込みによるものである。

ミケーヌで活動するハイレベル冒険者は、戦争のあいだ、ほとんどメルクリウス家が困い込んだ。

情報戦を制したうえで、相手に寝技を使わせない段取りをしてから、戦闘を始めるのである。

リガが放ったスパイが、ユリウスの陣とパンゼルの陣では見逃してもらって活動していた、と報告したほどである。

考えれば考えるほど、分からない。

アルカンには、パンゼルを暗殺という手段で殺したいと考える者が思い当たらず、殺せる方法が思い当たらない。

たぶん、エッセルレイアにも、パンゼルを殺した方法が分からない。

ということは、エッセルレイアにも分からないような方法を思いつき、パンゼルを憎んでいる人間こそが、怪しい。

なるほど、エッセルレイアの身になってみれば、わししか犯人は思いつかぬ。

この誤解は、容易には解けぬ。

そう思うアルカンは、初め、ドレイドルの手腕に期待していた。ドレイドルが、バヌースト領を牛耳るために送り込むリガ家の一党は、当然、エッセルレイアに親しい者を選ぶはずで、エッセルレイアにリガ家の懐かしさを思い出させてくれる、と思ったのだ。

エッセルレイアは、リガ家の援助を受け入れた。  
受け入れる以外ない。

だが、同時に、ゴラン家の継嗣たるアルスの処遇について、アルカンは予想もしなかった行動を取った。  
王宮に参内して、王に直願したのだ。

わが夫バヌースト侯爵パンゼルは、王命を奉じてミノタウロスと戦い、勝利を収めながら、決着をつけることなく戻らざるを得ませんでした。

すなわち、王命は、まだ果たされておりません。

迷宮の怪物に対し、夫は、いつか決着をつけに帰って来る、と約束いたしました。

父の志は子が継ぐもの。

わが子アルスが、夫が闘ったと同じ二十四歳になりましたら、ミノタウロスと闘うよう、お命じくくださいませ。

また、私には、アルスを騎士として鍛えることができません。

なにとぞ、アルスをメルクリウス家に預けるお許しを賜りますようお願いいたします。

アルスが武勲を挙げて戻るまで、このエッセルレイアにバヌーストの統治をお命じくださいますよう、伏してお願ひ申し上げます！

王国きつての美姫といわれたわが娘が、黒衣に身を包んで、三歳のわが子を抱きしめながら訴える姿は、まるで絵のようであつたる

う、とアルカンは想像をめぐらせる。

王は感激して玉座を下り、なんじの望む通りとするであろう、と聴許を与えた。

そして、エッセルレイアを侯爵位に就け、アルスが使命を果たすまでバヌースト領を治めるよう命じたのである。

これで、リガ家は、アルスを自由に養育し、羊のような子に育てることも、リガの走狗に仕立てることも、できなくなった。

また、幼いアルスが侯爵位を継げば、侯爵の名の下に、どのような領治もできたはずが、エッセルレイアの了解を取らねば何もできなくなってしまうた。

アルカンの目から見て、エッセルレイアの器量はドレイドルに優る。

エッセルレイアは、ドレイドルの方針に従うふりをしながら、ゴラン家をリガ家から護り続けている。

よい例が、これも、バラスト・ローガンのあっせんによるものであろうが、ミケーヌの冒険者ギルド長であったパロスという者を、バヌーストの財務総監に登用したことである。

アイアドール家当主の弟であるから、身分に不足はない。

パロスは、有能かつしたたかで、ドレイドルの意向を酌んで、リガ家が経済的にゴラン家を食い荒らすのを輔けつつ、重要な決裁事項をすべて手元に引き寄せている。

また、関税撤廃をうまく利用して、フェンクスの諸侯と経済交流を広げ、しかもゴラン家の利益は抑えて、王国北部の諸侯に利益を提供している。

ある日、アルカンは、ドレイドルと話をしていて、衝撃を受けた。ドレイドルは、アルスの精神を破壊して、命令に従うだけの生きた人形に仕立て上げるつもりだったのだ。

ドレイドルにとって、アルスは甥などではなく、怨敵の息子ではない。

それまでアルカンは、なぜエッセルレイアは、アルスに過酷な道を歩ませるのか、不思議だった。

なぜ手元で愛情を注いで育てようとしなのか、理解できなかった。

だが、実は、エッセルレイアこそ、アルスと自分の置かれた境遇を正しく理解していたのだ。

アルカンは、エッセルレイアほどには、ドレイドルを理解していなかった。

思わずアルカンは、エッセルレイアに感謝した。

エッセルレイアがどう思おうと、ほかの誰がどう思おうと、アルカンにとってアルスは可愛い孫である。

あのパンゼルと、エッセルレイアの子なのである。

一度も会ったこともなく、声を聞いたことも、抱きしめたこともなくとも、一日一時たりとも忘れたことはない。

だが、アルスは、単なる孫ではなかった。

アルスは、十四歳になり、迷宮に潜るようになった。

そんなある日、ユリウスは、アルスに、アレストラの腕輪を試させた。

発動したのである。

五品すべてを、アルスは発動できた。

メルクリウスを探らせていた者から報告を受けたとき、アルカンは興奮のあまり心臓が止まるかと思った。

では、わが孫は、英雄であるかもしれない。

そうなる可能性を持っているように思われる。

その後、旅に出たアルスの様子を、できるだけ詳しく報告させているが、まさに常人の旅ではない。

よくも悪くも、アルスが歩く道は、人の運命を大きく変え、神霊を動かし、国や大陸の未来に影響を与える。

尋常の人ではない。

あのミノタウロスに勝ち、バヌーストに帰ったとき、アルスの真価が現れる。

エッセルレイアも、パロスも、パンゼルの側近だった者たちも、そのときを静かに待っている。

それは七年後であり、アルカン自身が生きて見ることは難しいであろう。

そういえば、パン・ジャ・ラバンが死んだのも、今のわしと同じ八十一歳であったな、とアルカンは思いをめぐらした。

あの男は、どれほどの深さ激しさで、リガを、わしを怨んだことか。

あの男の葬儀に勅使が出たと聞いたときは、肌が粟立つのを感じた。

王家もまた、ヴァルドを忘れていない。

やはり、と思うところもあった。

パン・ジャ・ラバンはメルクリウスの家宰としてあまたの勲功を挙げたのに、王はなぜか爵位を与えようとはしなかった。

身分が高くなれば参内できる、というより、しなくてはならない。もし、誰かがやつ の正体に気付いたら、リガ家もそのままにはしておけない。

そうなれば、メルクリウスも大きな傷を受ける。

ゆえに、やつは、陽の当たる場所では生きられなかった。

だが、やつは、自分の境遇に堪えきり、メルクリウスと王家に忠誠を尽くし抜いて死んだ。

パンゼルを育てたのも、やつだ。  
たいしたやつだった。

王家のリガに対する恨みは、どれほどのものだろう。

リガは千年、王家に尽くしてきた。

王家を思えばこそ、耳に痛い言葉を吐き続けた。

リガと王家のあいだには、千年分のよどみがある。

ユリウスは、今年、赤卿になった。

ドレイドルは少し健康を害しているが、致仕する様子は見えない。  
ドレイドルが引退すれば、ユリウスが次の白卿になるのは確実だからであろう。

これまでリガとメルクリウスは、お互いを尊重してきたのに、アルカンの不明で、確執を生み出してしまった。

こうしたよどみやゆがみも、アルスがバヌースト侯爵となると、自然にほめていくのではあるまいか。

そして再び、偉大な時代が始まるのではあるまいか。

その日を楽しみに、今日を生きられることの、なんたる幸せか。

アルカンは、思う。

この世には、あまたの恩寵があるが、時こそは神の最大の恩寵ではあるまいか、と。

時は、傷を癒す。

時は、つらい記憶を和らげる。

時は、生き物を成長させ、進歩させる。

時は、大きな安らぎをくれる。  
憎しみを愛に変え、猜疑を信頼に変え、仇敵同士に友誼をもたらしてくれる。

こうして過ごす、一瞬一瞬は、物事を調べ、もつれたものをほぐす、そんな恩寵に満ちている。

リガは、一千年の時を待ち続けた。

それは、よどみを生みもした。

しかしいつぽうで、一千年の恩寵を身に蓄えてもきたのではないか。

わしが死んだあとは、ドレイドルが時を待つ番だ。

たとえ自分が何を待つか理解していても、時の恩寵は、必ずある。

アルカンは、目を閉じて、未来を担う者たちの幸いを祈った。

## 挿話 8

レベルアップが起こり、脇腹の傷も消える。  
ミノタウロスは、ふと右の角にさわってみた。  
半ばで切り取られたままである。

これは、あの男につけられた傷だ。  
このぶざまな角にふれるたび、憤怒が吹き上がる。  
やつを殺すまで、この傷は治ってはならない。

大きく息を吸う。  
胸が熱く焼けるのは、空気が不浄であるからだけではない。  
次なる敵を求めて、青い石を踏んだ。

出た所は、水の中であった。  
かつて潜ったことのある泉の清涼な水とは、まるで違う。  
白く濁って、生臭く、目を開けているのが苦痛であるような、腐  
った水である。

さして得手ではないが、泳ぐことはできる。  
空気を求めて浮上しようとしたとき、何かに右足首をつかまれた。

見定める前に、右手のシミターを振って、その何かを斬った。水中で動きは悪いが、断ち切れた。

斬撃を繰り返す際に、ぼこぼこ空気をついた。

青い石を踏む前に、大きく息を吸い込んでいたことが幸いした。

ミノタウロスは、人間には考えられないほどの肺活量を持つ。

しかし、無限に水の中にいられるわけではない。

この一呼吸分の空気を消費し尽くす前に、この敵を倒さねばならない。

足首をつかんだのは、ぬめぬめとした巨大な触手であった。

見れば五十歩ほど向こうに、ミノタウロスの何十倍もある巨大な怪物がいる。

その怪物から何十本という触手が生えていて、その一本が足をつかんだのである。

いまや、十本以上の触手が、ミノタウロスをつかもうとしている。これを何とかしないと、浮き上がることもできない。

それにしても、ここに出てくる化け物どもは、どいつもこいつも生きていく気配のしない、腹立たしいやつらだ、とミノタウロスは思った。

ぬめる水に動きを妨げられながらも、右手のシミターで四本、左手のシミターで二本の触手を斬り落とした。

左右同じ手数を出したのであるが、左の攻撃は、一度は触手をはじくにとどまり、四度目の斬撃は食い込んだままである。

左手のシミターは格段に切れ味が落ちるため、これは致し方ない。

左手のシミターを食い込ませた触手が、透明から白色に変化する。シミターを引き戻そうとするが、引きはがせない。

新しい触手が伸びてきて、左手と左足に巻き付く。

見た目はぬるりとした質感であるが、実際につかまれると、ざらりとして痛い。

もう二本右から来たが、これは斬り落とした。

左手と左足が、突然激しく痛む。

ぼこぼこ泡を吐きながら、触手三本を斬って、体の自由を取り戻す。

さわられた部分の皮膚がどろどろに溶けて、一部骨がのぞいている。

左手のシミターは、先のほうが腐食している。

どうも触手は、透明のときはつかむだけだが、白く変色すると、物を溶かすようである。

何かをつかんだときには、接触した部分だけを白くできるらしい。

さらに、ミノタウロスは気が付いた。

最初に斬った触手は、本体のほうに引き戻されていたが、修復されて、また伸びてきている。

今、十何本の触手が、大きく回り込むように、ミノタウロスに近づいてくる。

息も苦しくなってきた。

ミノタウロスは、右手のシミターを左手に持ち替えると、右手を左肩の上に差し入れ、収納袋から、一本の剣を取り出した。

メタルドラゴンからドロップした剣の一つで、特殊攻撃ができる。

伸びてきた触手の三本を左手のシミターで斬り落とし、右手の剣

の特殊攻撃を発動しつつ、触手に切りつけた。

濁った水中に、電撃が光る。

電撃は水中を走ってミノタウロスに、ばちつと衝撃を与えるが、肝心の触手はさしてダメージを受けたように見えない。

触手が二本、右足と右手にからみつく。

左手のシミターで右手の触手を斬り落とすと、右手の剣を、右足を溶かそうとしている触手に突き入れて、電撃を発動した。

今度は激しい反応があった。

右足にからんだ触手は、はじめて切れ、本体とすべての触手が、びくびくっ、と大きく震えた。

触手は、ミノタウロスを嫌がるかのように、一斉にさつと引いた。

命もないくせに、痛がることはできるのか、と思うと、ミノタウロスの腹立たしさは、いっそう募る。

と思うや、巨大な本体が、ぐわわ、と起き上がり、ミノタウロスさえ一呑みにできそうな口が開いた。

丸い口であり、外側から中心に向かって、剣のような歯が百本余りも生えている。

今までよりはるかに多くの触手が伸びてくる。

触手が十何本、一斉にミノタウロスにからみついた。

そして怪物は、ミノタウロスを引き寄せた。

触手は透明なままである。

長い距離を、ミノタウロスは抵抗もせず、怪物の顎あぎとに運ばれていく。

口は収縮しながら、獲物を待ち構える。

いよいよ口の直前に、ミノタウロスが来ると、くわっ、と口を大きく開けた。

そして、この大きな餌を、口の中に、ぐいつ、と差し込んだ。

ミノタウロスは、右足と左手のシミターを、怪物の歯に引っかけ、自分の体を怪物の口の中に押し込んだ。

怪物の口が閉じられ、ミノタウロスの右足首が、切り取られた。

その痛みにも構わず、ミノタウロスは、右手の剣に雷撃を発動させ、怪物の口の中に突き立てた。

ばちばちばちばちつ。

いったん真つ暗になった口の中で、怪物の赤い口腔くわうを照らしながら、電撃が暴れ回る。

ミノタウロスも、その電撃に撃たれ、最後の空気をはき出しながら、身もだえしている。

怪物の消化液が、容赦なくミノタウロスを溶かす。

もはや肺内にはひとかけらの酸素もない。

頭は割れるように痛み、体はねじ切れそうである。

だが、ミノタウロスは、一切に構わず、最大出力で電撃を放ち続けた。

どれほど地獄の時間が続いたか、どこかで何かがはじけるような音がした。

急に怪物は力を失い、口が開いた。

その口を通して見る水底に、青い光が灯っている。

ミノタウロスが、必死に青く光る石にたどり着いたときには、レ

ベルアップも終了し、体は元に戻っていた。  
半ばで斬り落とされた右の角を除いて。

## 最終話 邪神の迷宮

1

暗く、風もなく、生き物の気配のしない場所である。中央にある円形の平らな石が、青く発光している。

迷宮の中の部屋のような感じもする。

しかし、こんな形の部屋を持つ迷宮は知らない。

ちょうど、丸い果物の上半分だけを切り取ったような形である。

ザーラは、体がこの場所に慣れるのを待った。

太陽の照りつける砂漠から、いきなり暗い石室に移動したのであるから、目の働きひとつをとっても、すぐには正常に機能しない。

三度ほど呼吸をしたとき、レベルアップが起きた。

カードを改めると、八十レベルになっていた。

レベルアップで体調が回復してはじめて、ザーラは、いかに自分の体が疲労していたかを知った。

同時に、あることに気が付いた。

ここは、迷宮ではない。

なぜなら、迷宮で自動的に発動するスキルが使えないからである。

では、ここは、どこか。

出入り口は見えない。  
見えるものは、中央の青く光る石だけである。  
ザーラは、それを踏んでみることにした。  
そのとき、頭の中に、声が聞こえた。

「ザーラ殿か？」

どこかで聞いた声だと思ったが、返事もできないでいるうちに、

「やはりザーラ殿か。  
動いてはいけない。  
今、そちらに行く」

と声がした。

誰の声だったかと思いつく間もなく、幽霊のような姿が、暗い部屋に浮かび上がった。

それは、一年前、エルストラン迷宮で出会った、美しい男性であった。

希代の魔術師にして、ダンジョン・メーカー。  
そして、神竜カルダンの夫。

「幽霊殿。

しばらくでした。

お元気でしたか」

「しばらくだったようだね。

元気ではないようだ。

本体が死んでいた。

私は、真正正銘の幽霊になってしまった。

この世にとどまっていられる時間は、ごく短い」

意表を突く答えを返されて、ザーラは絶句した。

「時間がない。」

君は、ここがどんな場所か、知っているかな？」

「いえ。」

突然、時が来た、約束を果たし、わが剣となれ、という託宣を受け、ここに飛ばされました」

「やはり、神々のご意志か。」

もう一人の人も、そうなんだろうなあ。

それとも、どこかの迷宮から、条件をクリアしてやって来たのかな。」

それにしても、まさか人間を使うとは。

ザーラ殿。

ここは、極めて特殊な場所だ。

ゆがんだ恩寵の集まる場所なんだ」

「もしや、邪神の迷宮ですか。」

それなら、迷宮で使えるはずのスキルが発動しないのも分かります」

「なぜ、それを知っているのかな」

「ジャン＝マジアル寺院の僧侶に聞きました」

「ジャン＝マジアル？」

ああ、あの妙に色っぽいお坊さんかな。

まあいい。

知っているなら、話が早い。

ここに君が呼ばれたのは、もう放置できないほどゆがんだ神が成長したために違いない。

それを倒す役を、神々は君に与えた。

ここに来てしまった以上、敵を全部倒す以外、出て行く方法がない」

「ここは、あなたが作ったのではないのですか？」

「私がつけた。

だが、前にも言ったように、私は戦闘力は低く、ゆがんだ神の相手をすることはできない。

だから、迷宮内部からは私に手出しできない代わりに、私も迷宮内部に干渉できないようにしたんだ。

「この構造を知っているかな？」

「いえ、迷宮専用のアイテムやスキルは使えないということと、瘴気と毒が渦巻いていること、邪神を倒せばゆがんだ恩寵は消滅することは聞きました。

迷宮の作りなどは知りません」

「この部屋が入り口なんだ。

この下に、五つの階層がある。

各階に単数もしくは複数のゆがんだ神が生まれるが、どのような姿や能力をしているかは、そのときによる。

倒しても経験値は得られないが、一種のボーナスとして、階層の敵を全部倒したらレベルアップができる。

また、階層の敵を全部倒したら、青いポータルが点灯し、移動が可能になる。

それ以外に移動の方法はない。

下の階層に行くほど、強力な個体が生成される」

「ポータルとは何ですか？」

「その青く光っている石だよ。」

上に乗ると、対になる石の上に瞬間移動する。

この迷宮では、入り口は青く、出口は赤く光るようにしてある。さて、ここからが重要だ。

君は今、カルダンが残した五つの恩寵品を持っているね。

それを全部装着しなさい。

特にカルダンの短剣は重要だ。

絶対に体から離してはいけない。

君はただちに死んでしまっただろう」

ザーラは、エンデの盾と、カルダンの短剣を取り出した。

カルダンの短剣はベルトに差し、はずれないよう革紐をきつく巻き付けた。

そのあいだにも、幽霊の話は続いている。

「君の前に、迷宮に入った人がいる。」

人間ではなくて神霊かもしれないが、このことを知っている神霊なら私を待つはずなので、人間ではないかと思う。

そして、たぶん、その人一人だけでは攻略が困難になった。

それで君が呼ばれたのではないか、と想像している」

「今、誰かが闘っているのですか」

「そうだ。」

この部屋に誰かが入れれば、最高緊急度で私が呼び出される。それで、なんとか霊体を形成することができた。

実は、サザードン迷宮の十階層のボス部屋にね。  
私の眠っている部屋に続く、隠し扉があるんだ」

「あのミノタウロスがいた場所にですか」

「そうなんだ。」

でも、これは秘密にしておいてほしい。

私は、カルダンが死んだとき、その柩の横で、永遠の眠りについたら。

ところが、少し前に、私の体を保存していた容器物が故障したよ  
うだね。

死んでしまった。

今ここにいる私は、本体を失った陽炎かげろうのようなものだ。  
すぐに消えてなくなる」

「それはっ」

「ああ、そんな顔をしないで。

まったく問題はないんだ。

最初から、永遠の眠りについたつもりだったんだからね。

ただ、君に景品をあげるのと恩返しをする約束をしたが、果たせ  
ない。

それが申し訳なくてね」

「こうして導いてくださるのが、何よりありがたいことです」

「そうか、ありがとう。」

君は優しいね。

君の母上も、優しい人なのかな？」

「はい。」

この上なく厳しく、美しく、そして優しい人です」

「うんうん。」

あ、いけない。

一番大事なことを忘れていた。

最下層の敵を倒せば自動的に外に出る

君の先に誰かが入ったが、まだ出ていない。

迷宮は今ざわざわしている。

ということは、まだ闘っているんだ」

「その人は、一人ですか？」

「え？」

あ、そうか。

二人以上ということも、あり得なくはないのか。

ふむ。

何人かは分からない。

同時だったことは間違いない。

とにかく、いいかい。

この迷宮の中では、自分とあらかじめ自分の持ち物だった物以外は、正常に見えない」

「目に見えないのですか？」

「そうじゃない。」

姿がゆがんで見えるんだ。

硬い物が軟らかく見えたり、白い物が黒く見えたりする。

強く美しい人が、醜く弱々しい人に見えることもある。

君は中で仲間に出会うが、恐ろしい怪物のような姿に見えることも

あるから、このことを覚えておいてほしいんだ」

「なるほど。」

貴重な情報です。

ありがとうございます」

「うん。」

では、最後に、体を調整してあげよう」

そう言って幽霊は、ザーラに近づくと、右手を開いてザーラのほうに向け、目を閉じた。

ザーラは、何かしら温かいものに体が包み込まれるのを感じた。

「正直、君の力は、この中に入るには不足している。

レベルもじゅうぶんではないうえ、そのレベルにさえ中身が追いついていない。

ここは、もともと人間が入るようには出来ていないからね。

それでも、五つの恩寵品と、ポーラの剣があるから、多少は闘うこともできるだろう。

ここでは、ゆがんだ神も、本来の力のごく一部しか発揮できない。

今、君の精神と身体を、ポーラの剣になじませた。

ライカの指輪も、魔力をいっぱい詰めておいたからね。

頑張るんだよ」

「はい。」

ありがとうございます」

「それから、お願いしたいことがある。

いつか私の娘に会うことがあったら、愛している、と伝えてほしい」

「い

自分で言いに行けない、ということ、それほどこの幽霊は弱っているのだ。

その残った最後の力を、ザーラのために、振り絞ってくれたのだ。

「必ず伝えます」

「いい返事だ。

そのためにも、生きてここを出ないとね。

ふふ。

もしかしたら、人が迷宮を必要とした時代は、もう終わろうとしているのかもしれないな。

ザーラ殿。

私は、人間に絶望して地上を捨てた。

だが、最後の最後に君に会えて、もう一度人間を好きになって、安らぎの眠りにつくことができる。

この前見せてもらった君の旅路は、本当に素晴らしいものだったよ。

ありがとう」

何か言いたいけれど、何を言えばいいのか分からないザーラの前で、幽霊は、姿を消しかかっていた。

ザーラは、聞きたいことを、突然思い出した。

「あなたのお名前は？」

幽霊は、ちょっと驚いた顔をし、そしてにっこり微笑むと、

「アレストラ」

と名乗って、消えた。

ザーラは、雷に打たれたように感じた。

自分の左手にはまったアレストラの腕輪を見、この腕輪に助けられた人々を想った。

自分。

父親。

パーシヴァル。

メルクリウス家の人々。

ザーラは、消えてしまったアレストラに騎士の礼をした。

「アレストラ様。

あなたには、初めから最高の物を頂いております」

小さな、しかしはっきりとした声で感謝を言葉にすると、青く光るポータルに乗った。

2

ミノタウロスは、目を覚ました。

空気がある。

あいかかわらず、いまいましくよんだ空気だが、呼吸ができるのはありがたい。

力尽きる寸前に、青い石にとりつき、次の場所に移されたようだ。

そのまま気を失っていたのだ。  
寝転がったまま、しばらく呼吸を繰り返した。

荒い息が次第に治まり、体全体が調子を取り戻すと、ミノタウロスは起き上がった。

体は赤い石の上にある。

部屋は、さきほどのように巨大ではない。

端から端まで六十歩に少し足りないほど、とミノタウロスは見た。

床というか地は白く荒い砂に覆われて平らで、隠れる場所もない。  
敵が見当たらない。

壁際に大きな扇形の板が一对、部屋の端と端、向き合うように立っているばかりである。

形はいびつである。

ミノタウロスから見た側が大きくくぼんでおり、ゆらめくように美しい輝きを放っている。

ふと手元を見た。

赤い石と、灰色の石のあいだ、この部屋のちょうど中央に、丸い宝玉が突き出ている。

白色のようでもあり、銀色のようでもあり、見る角度によっては、桃色の、あるいは紫色の光をまとう。

ミノタウロスは、素手である。

手に持っていた武器は、先ほどの部屋で失った。

インベントリから幅広の長剣を出すと、赤い石から降りた。

足元の宝玉が、一瞬強い光を発した。

ミノタウロスは身構えたが、宝玉は再び沈黙したままである。

扇形の板を見ると、さきほどなかったものが目についた。影である。

ミノタウロス自身と同じほどの大きさの影が、板に焼き付いている。

いや、大きさだけではない。形も、どこか似ている。

と、見ている間に、影が、うごうごと動き始めた。そして、しだいに膨れ上がると、最後に、ぬうっ、と板から出てきた。

ミノタウロスと、うり二つの姿をしている。手に持つ武器さえ同じである。

こちらに歩いてくる。

ミノタウロスも、歩いていく。

砂と思った物は、小さな生き物の抜け殻か、あるいは小さく砕かれた骨のようである。

踏んでも壊れることなく、ミノタウロスの硬い足裏に突き刺さってくる。

我慢できなくはないが、いささか動きを妨げる痛みではある。

相手を間合いに捉えると、ミノタウロスは、大きく剣を振りかぶってたたきつけた。

相手もこれを受け、二つの長剣が打ち合わせられた。

力も、速さも、タイミングも、刃の押し方も、まったく同じである。

三連撃を放つと、相手はこれをしのいだ。

次に、相手が三連撃を放ってきたので、打ち落とす。互いに一步を引いて、呼吸を調える。

こいつと俺は、強さが同じなのか。

と、ミノタウロスは悟った。

そのとき、ミノタウロスは、部屋の反対側の板からも、影が身を起こすのを見た。

やはり、ミノタウロスとつり二つの姿をして、同じ武器を持っている。

まがい物二体を同時に相手しなくてはならないようである。

自分と同じ能力と装備を持った相手二人と闘うのであるから、勝利の可能性はないに等しい。

というようなことは、ミノタウロスの心にまったく浮かんでいない。

ミノタウロスの注意は、二体の偽物の頭部に向いている。

いずれも、右の角が半分ほどしかない。

自分と同じく。

これを見て、わけも知らず、ミノタウロスは、激しい怒りを覚えた。

近くの敵が打ちかかってくる。

低くうなり声を上げると、ミノタウロスは、全身から鬨気を吹き上げ、相手を押し返した。

そのあいだにも、もう一人の敵が近づいてくる。

目の前の敵が、勢いに押されて距離を取ると、ミノタウロスは後ろに飛んで距離を広げ、焼け付く息を放った。

すると、目の前の敵も、もう一人の敵も、少し遅れて焼け付く息

を放ってきた。

こいつらは、俺と同じことができる。

そして、俺の攻撃を同じように返してくる。

しかし、俺とまったく同時でもないし、剣のふるい方も、息の吹き付け方も、まったく同じではない。

要するに、まねをしながら、自分なりのやり方で攻撃してきている。

ミノタウロスが、そう分析するあいだにも、遠くの敵は近づいてきて、今やこちらを間合いに捉えた。

ミノタウロスは、右手の長剣を左手に持ち替えると、収納袋からツヴァイヘンダーを取り出した。

長剣よりも長く、重い。

二人の敵も、同じようにツヴァイヘンダーを取り出した。

ミノタウロスは、ツヴァイヘンダーの柄の部分なめるようなしぐさをすると、素早くバーサークモードに入った。

偽物二体も、同じくバーサークモードに入った。

バーサーク状態になると、攻撃力が大幅に上昇する代わりに、防御力や知力が大幅に低下する。

最初の敵に右手のツヴァイヘンダーで切りつける。

相手は、長剣で防ぐ。

左手の長剣で切りつける。

相手は、ツヴァイヘンダーで受ける。

二番目の敵が、左側から襲ってくる。

その右手のツヴァイヘンダーが、ミノタウロスの背中にたたきつけられる。

息が止まるかと思うような強打であるが、ミノタウロスは、前に飛んで打撃の効果を殺しつつ、右手のツヴァイヘンダーを、右から左に横なぎに払った。

ミノタウロスが前に飛び出したために、間合いの狂った最初の敵は、身をかがめてツヴァイヘンダーをかわしつつ、左手の長剣でミノタウロスの腹を突いてきた。

ミノタウロスには、これをかわすことができない。  
長剣は、深々とミノタウロスの腹のまん中を貫いた。

ミノタウロスは、振り抜いたツヴァイヘンダーを左にいる二番目の敵に投げた。

まさかこの状態で武器を投げるとは思わなかったのか、かわしそこねて右足の太ももに突き刺さり、態勢を崩した。

ミノタウロスは、おのれの腹を貫いている敵に近寄りつつ、左手の長剣を喉元に突き入れた。

相手は、ミノタウロスがわざわざ傷を深くしながら接近したのが意外であったためか、やや反応が遅れた。

相手の右手にはツヴァイヘンダーがあるが、懐に飛び込んだ敵を迎え撃つには不向きな武器であるうえ、二番目の敵が剣の軌道をふさいでいる。

そして、ミノタウロスの腹に差し込んでいる自分自身の武器から手を離そうとしなかったことが、この敵の運命を決めた。

ミノタウロスの左手の長剣は、根本まで敵の喉に埋まった。

ミノタウロスは、剣を左にひねって喉を切り破ると、相手の左手ごと長剣を右手でつかみ、一気に腹から引き抜いた。

そして、自分の長剣を両手で持つと、態勢を立て直して打ち掛かってきた二番目の敵を迎撃しようとした。

だが、相手は一瞬早く、ツヴァイヘンダーを、ミノタウロスの首筋にたたきつけた。

いかにミノタウロスといえど、致命的といってよい威力である。バーサーク状態で防御力の弱っている今は、なおさらである。

吹き飛ばされ、倒れかかるミノタウロスに、敵は、大きくツヴァイヘンダーを振り上げた。

とどめをさすつもりである。

だが、一瞬力を失ったかにみえたミノタウロスは、ぐつと踏みとどまり、両手で握った長剣を右から左に振り抜いた。

致命的な重傷を負っているとはとうてい思えない、力と速度にあふれた一撃である。

敵は素早くツヴァイヘンダーを振り下ろそうとする。

ミノタウロスは、長剣を両手で持ち、敵は重くて長いツヴァイヘンダーを右手だけで持っている。

敵の刃が落ちるより早く、ミノタウロスの剣が敵を腹部で両断した。

二番目の敵は、上半身と下半身に分かれて崩れ落ちた。

二人の敵が完全に死ぬと、部屋の中央にあった宝玉が砕けて散った。

同時に、バーサーク状態も解けた。

レベルアップが起き、ミノタウロスの傷は癒された。

だが、大きな傷は、すでにほとんど修復されていた。

ミノタウロスは、インベントリからツヴァイヘンダーを取り出したとき、一緒に不死の肉を取り出し、食べていたのである。

不死の肉。

サザードン迷宮百階層でヒュドラを倒して得られるアイテムである。

迷宮で使えば、わずかな時間、死んでも生き返る不死状態になる。今ミノタウロスがいる、この奇妙な場所では、迷宮固有の恩寵は働かないが、不死の肉は、迷宮外で使用しても、重症や重病でもまたたくまに癒し、肉体の頑強さを引き上げる効果を持つ。

もつとも、ミノタウロスが、それを知っていたわけではない。

むしろ、赤ポーションに効果がなかったことから、不死の肉も無効である可能性は高い、と考えていた。

しかし、スキルにも発動可能なものと使えないものがあつた。

もしかすると、効果を発揮するかも知れない、と考えてのことであつた。

結局、あの肉が勝敗を分けたか、と考えてから、いや、違う、

と、ミノタウロスは自分の考えを否定した。

やつらには、怒りも、怖れも、喜びもない。

強大な敵に出遭って何かを学び、成長するということもあるまい。怒りで心を満たす状態になったときでさえ、やつらの心は空っぽだった。

ただ攻撃力が上がり、防御力が下がっただけのことだ。

あんなやつらに、負けることがあつてはならない。

それにしても、ここは、一つ進むごとに、敵の強さが格段に跳ね上がる。

次は、どんなやつが出てくるのか。

そう思いながら、ミノタウロスは、ツヴァイヘンダーを拾って収

め、青い石に乗った。

3

その場所に着いたとたん、ザーラは激しい苦痛に襲われた。あまりに濃密な瘴気のため、目が焼かれる。すぐに目を閉じたが、痛みはすぐには治まらない。

思わず一息吸った空気は、口内を、喉を、肺を突き刺す。

肌は赤裸に剥かれたかのように、ぴりぴりとする。全身がしびれ、硬直し、丸太のように床に倒れた。

カルダンの短剣の持つ、状態異常解除と解毒は強力である。

毒が毒として働き始めるやいなや効果を発揮するので、これをベルトに差しているだけで、まるで毒など受けなかったかのように感じるほどである。

状態異常についても、同じことがいえる。

そのカルダンの短剣を身に着けているのに、なぜ、このようになるのか。

短剣が恩寵を発動するまでのわずかな時間に作用した毒や異常が、これほど激烈な効果を現しているのである。

この空間が、いかに恐ろしい場所であるか、ザーラは思い知った。

なすすべもなく、しばらくのあいだ横たわっていた。

やがて、徐々に感覚が戻り、思考が働き始める。

ゆっくり、ゆっくり、痛みをこらえながら、ひと息空気を吸い込んだ。

そして、それを吐きながら、ジャン＝マジャル寺院で習った呼吸法で、氣息を調べていった。

意識がはつきりしてくると、やはりジャン＝マジャル寺院で習った、回復術を発動させた。

さらに、回復術を連続的に発動していく。

この術は、本来連続的に発動できるような術ではないが、ポーラの剣の持つSP連続回復という恩寵が、それを可能にしてくれる。かなりの時間をかけて、ようやく心身の調子を取り戻すことができた。

なるほど。

カルダンの短剣を失ったら、あるいはポーラの剣を手放したら、たちまちこの迷宮に殺されてしまう。

ザーラは、辺りを見回した。

うねうねとした床が、至る所ではこぼこに破壊されている。激しい戦闘の跡である。

ザーラのすぐ横に、青く光るポータルがある。

青く光る石に乗れば、次の階層に進めるのであったな。

ザーラは思った。

次の階層は、どんな場所であろうか。

どんな敵がいるのか。

着いたとき、戦闘の真っ最中であるかもしれない。

当然、このことと同じく瘴気に満ちた場所であろう。

じゅうぶんな心構えを作り、ザーラは第二階層に続く青いポータル

ルを踏んだ。

その場所に出現したとたん、ザーラは悪寒と頭痛に襲われ、うずくまった。

心構えはしたはずであったが、第一階層と比べても、第二階層の瘴気は、はるかに濃密であり、種類の異なるものであった。

しばらくは、身動きもならず、先ほどと同じように、時間をかけて体調を整えた。

辺りを見回してみる。

第一階層のように、戦闘の跡は判然とはしていない。

しかし、第一階層以上に激しい戦闘が行われたことは、疑いない。

ザーラは、その場に座りこむと、保存食と水を取り出し、腹ごしらえを始めた。

ゆっくりと、かみしめるように干し肉と乾燥芋を食べた。

物をおいしいと思うのも、また恩寵だな、と思いながら。

干し肉は干し肉の味がし、乾燥芋は乾燥芋の味がする。

水も水の味がするのであるが、干し肉と乾燥芋のあとに飲む水は、格別のうまさがある。

体の中で、食べ物喜んで迎え、身に取り込もうとする働きが働いている。

これが生きているということだ。

次の階層で、あるいはその下の階層で、死ぬかもしれない。

その可能性は高い。

アレストラ様のお言葉によれば、ここは、本来私などが足を踏み

込める戦場ではないのだから。

ふふ。

笑えるな。

Sクラス冒険者だのなんのといわれて、うぬぼれていた。

この迷宮での私は、サザードン迷宮に初めて挑むFクラス冒険者にも劣る。

闘うどころか、まともに立つこともかなわぬ。

この場所で、私は、どんな闘いができるのか。

ビア＝ダルラでの戦いは、砂漠を独りで越えられない以上ここで戦うほかないと思いつめて、死を覚悟して戦った。

だが、あれは、戦の狂気いにくさにおのれを委ねるような戦い方であり、ほめられたものではない。

それが必要なとき、そうするしかないときもあるが。

ジャン＝マジアル寺院の四聖獣の堂での闘いは、まるで違っていた。

優れた武人には神が入る瞬間はいがある、という。

あれがそうだったのではあるまいか。

あのときの私は、アイテムにも、特殊スキルにさえ頼らず、ただただ剣の技と一体であった。

私が剣であり、私が技であった。

あんな闘いを、もう一度してみたい。

ザーラは、すうつと立ち上がった。

いかなる毒の空気にも、もう心身を乱すことはない、と心に決めて、第三階層につながる青いポータルを踏んだ。

だが、その部屋には、一かけの空気もなかった。毒の水で満たされていたのである。

ぼこぼこ空気をつき出し、水を飲んで痛みと痺れに苦しみつつ、ようやく第四階層に続く青いポータルに取り付いた。

第四階層の、それまでに比べればいくぶん明るい部屋で、息も絶え絶えにうずくまりながら、ザーラは自分を笑った。

敵には、まだ一度も遭遇していない。

ただ、部屋があつたのみである。

部屋から部屋に移動するだけで、意表を突かれ続け、打ちのめされている自分である。

笑うしかない。

その笑いを、明るい調子に切り替えて打ち切り、あぐらをかいて座った。

両手を軽く組み合わせて足の上に置き、全身の力を抜いて、氣息を調べた。

今、ザーラがいるのは、第四階層である。

そして、この部屋のポータルも、青く光っている。

つまり、先に入っているという戦士は、第四階層までの邪神たちをすべて打ち破って、今、最下層で最大の敵と闘っている。

Sクラス冒険者であるザーラが、格別の恩寵品に支えられ、それでも移動するだけで半死半生となる、この迷宮で。

どんな方であろうか、とザーラは想った。

パーシヴァル様のごとき、身ごなし鮮やかな剣士であろうか。

父上のごとき、万夫不当の戦士であろうか。

ギル・リンクス様のごとき、魔術の深奥を極めた賢人であろうか。

いや。

そうではない。

おそらく、そのすべてを含んだパーティーではあるまいか。

さらに、ゴンドナ殿のごとき回復と支援の達人も含む、強力なパーティーなのではあるまいか。

お会いしてみたい。

そのパーティーが、邪神の最強の個体と闘う姿を、見届けたい。かなうなら、その場で私も、精一杯の技をふるってみたい。

ザーラ自身は気付いていなかったが、この迷宮に入って階層を進み、必死で順応しようとする中で、その心身は、揺さぶられ、磨かれ、研ぎ澄まされてきていた。

ジャン＝マジナル寺院での修行や、アルダナでの試合の数々が、旅での闘いが、今、実を結ぼうとしている。

ランクという、神々の仕組みによって引き上げられた強さに、中身が追いつこうとしている、といってもよい。

戦士として、これまでにない高みに上ったザーラは、驕りもひるみもなく、静かに戦意をたたえて、決戦の場に行く青い石を踏んだ。

最後のポータルは、部屋の中央にはなかった。

地獄の底のような、煮えたぎる溶岩の海に、岩のドームが浮かんでいる。

そのドームに続く細い岩の道がある。

道の先にある、直径五歩ほどの円形の岩の上に、最後のポータルがあった。

あのドームの中で、最後の闘いが行われている。

ザーラの感覚は、激しい闘いが今まさにその場で繰り広げられているのを捉えた。

闘いの風景は、立ち並ぶ岩の柱にさえぎられて見えない。

ザーラは、丹田に力をこめ、ゆっくりと氣息を調える。

押し寄せる熱気に肌をなじませていく。

次に、ジャン＝マジャル寺院秘伝の金剛闘気法を行う。

これは、一時的に筋力を爆発的に高める技術であるが、同時に、暑さ寒さや痛みを低下させることができる。

連続して使えるよう、効果は低く抑える。

ポーラの剣のHP吸収を当て込んだ、危険な戦法である。

受けるダメージや、スキルの反動が、回復量を超えた瞬間、ザー

ラは死ぬ。

綱渡りのようなスキルの発動に、わずかな狂いが生じれば、ザーラは死ぬ。

だが、もはやザーラに迷いはない。

岩の道を歩き、岩の林を越え、闘いの場に足を踏み入れた。

4

戦いは、膠着していた。

最後の敵は、巨大さにおいて第三階層の水怪をしのぎ、攻撃速度において第二階層の草もどきを上回り、さらに、第一階層の触手玉なみの再生能力を持っていた。

さまざまな形態を取ることができ、分裂したり、再結合することもできる。

今は、岩の床に根を張った巨木のごとき姿をとっている。  
低い部分は硬質化して、攻撃を受け付けない。

ミノタウロスの身の丈の十倍はくだらない高さを持ち、上の部分から、四方に触手を伸ばしている。

触手の先端は、やはり硬質化して槍のように尖っている。

めまぐるしく襲い掛かる四本の触手をいなしながら、隙については、触手の上のほうの部分に斬りつける。

斬り落とすまではいかないが、それなりのダメージを与える。

しかし、時間とともに、そのダメージは回復されてしまう。

いっぽう、ミノタウロスのほうも、たまに攻撃をかわしそこねて、ダメージを受ける。

最初、このドームに入ったときには、敵は巨大な獣の姿をしていた。  
た。

物理攻撃と、魔法攻撃を、すさまじい密度で放ってきた。

だが、その時点では、こちらの攻撃も敵のどこにあたっても有効であったので、ミノタウロスは、フットワークを生かしながら、少々のダメージは無視して、ひたすら攻撃を加え続けた。

その結果、敵は多くのエネルギーを失った。

この敵の体は、エネルギーそのものであるらしい。

ダメージを与えていくと、体が小さくなるのである。

今も十分巨大であるが、当初に比べれば、一回り小さくなっている。

やがて、敵は、ミノタウロスの刃が届く部位を硬質化させていった。

こうすれば、ダメージを受けない代わりに、その部分は動かせないから、攻撃の幅も狭まる。

エネルギー節約のためか、魔法攻撃は、してこなくなった。

いっぽう、ミノタウロスのほうも、ハウリングや、焼け付く息などの、魔法系攻撃をしない。

なぜなら、この敵は、攻撃の魔力を吸い取って、攻撃を無効化するとともに、自身の損傷を回復するからである。

闘いは、膠着している。

ときおりミノタウロスが与えるダメージは、敵がエネルギーを取り戻すことも、これ以上体の大きさが戻ることも、防いでいる。

敵の手数の多い攻撃は、ミノタウロスが、致命的な攻撃をすることを邪魔している。

だが、これは、ミノタウロスに分の悪い膠着である。

敵は、どうやら、勝とうとは思っていない。

相手は生物ではない。

どこからか、エネルギーを補給しているようである。

永遠に闘うこともできるのだろうか。

だが、ミノタウロスは、どれほどゆがんだ生き物であるとしても、命を持って限りある時間を生きる者である。

疲れは徐々にたまるし、いずれにしても、永遠に闘うことはでき

ない。

ミノタウロスの胸中では、このいまましい敵への怒りが煮えたぎっている。

ふざけたやつだ。

許しがたい敵だ。

こいつは、闘おうとさえしていない。

こちらの命が燃え尽きるのを待っているだけなのだ。

こいつは、敵だ。

命あるものすべてを侮辱する敵だ。

闘いをけがす敵だ。

だが、膠着状態は、どうしようもない。

活路を見いだせないまま、ミノタウロスは、剣を振るい続けた。

この状態になって、どれほど時間がたったろうか。

ミノタウロスは、その鋭敏な感覚で、何者かがこの階層に到着したことを感知した。

何かが来た。

これは、命ある者だ。

新しい敵か。

だが、この敵は、よい。

血と、肉と、怒りと、喜びを持った敵だ。

俺は、お前を歓迎するぞ。

さあ、俺に殺されに、ここに来い。

お前の血をぶちまけに、ここに来い！

新しく来た何者かは、しばらく動かず、闘気を調えている様子である。

その気配は、この新しい敵が相当の強敵であることを、ミノタウ

ロスに教えた。

やがて新しい敵は、ドームに入って来た。

入って来たのは、コボルトであった。

ミノタウロスは、コボルトという呼び名は知らない。しかし、かつて、サザードン迷宮の、ずっと上のほうの階層で、この犬つころには遭ったことがある。

生まれて間のない、貧弱だったミノタウロスにとってさえ、手応えをまったく感じさせない、ごみくずのような敵であった。

ひどく拍子抜けしたミノタウロスは、最後の敵との戦いを続けながら、なおも、コボルトのほうに注意を向けた。

つぶらな瞳。

ちんまりとした手足。

しおれた耳。

左手には、木の盾を持ち、右手には銅の剣を持ち。

布のブーツを履き、軽鎧を身にまとい、頭と額にも防具を着けている。

どうして、こんな犬つころが、ここに来たのか？

と思ううちに、コボルトが、すっと前に進み。

姿を消した。

その足運びは、練達の戦士のそれであり、ミノタウロスは目を睽みはった

犬の姿をしたモンスターは、姿を消したまま、怪物の裏側に素早く回り込んだ。

ミノタウロスは、このとき、気配を感じ取ったのかといえ、少し違う。

もともと、ミノタウロスは、装備やスキルに頼る闘いをしない。魔法攻撃をしてくる相手に対しては、それにおのれが耐えられるようになるまで、闘いを挑み続けた。

レベルやスキルを上げることによってではなく、おのれ自身を鍛え上げることで勝つ。

それが、ミノタウロスの流儀である。

だから、このように、目にも耳にも探知不可能な恩寵を持つ相手であっても、その動きを嗅ぎ当てることができる。

察知、というより、勘、というべきであろう。

ミノタウロスは、勘を極限まで磨き抜いた戦士なのである。

犬は剣を振り上げ、怪物の根本を切りつけた。

響いた音の鋭さが、犬の剣技が尋常の域ではないことと、剣がまねにみる業物であることを教えている。

だが、無論、この怪物には、わずかな傷も付いていない。

怪物は、攻撃に気付いてさえいないであろう。

相変わらず、怪物の攻撃をさばきながら、ミノタウロスは、コボルトが次に何をするか、見守った。

コボルトは、矢を放った。

矢は、コボルトの手を離れた瞬間、姿を現し、うねうねと動き回る四本の触手の、一本の根本に突き立った。

怪物の動きに、わずかな乱れが生じる。

今だ！

ミノタウロスは、助走もなく跳躍すると、触手の一本の可動部分まで飛び上がり、これを斬り落とした。

断面が、ミノタウロス自身の身長に等しいのであるから、怪物の巨大さが分かる。

同時に、ミノタウロスの振るう剣がいかにも長大なものかも分かるであろう。

落ちて、岩の床の上で暴れ回る触手に、ミノタウロスは、素早く斬撃を与える。

素早く、何度も何度も。

と、コボルトが発動呪文を唱え、怪物の触手の生え際辺りに、大きな彗星が落ちた。

だが、メテオ・ストライクは、爆発を起こさず、そのエネルギーは、怪物に吸収されてしまう。

斬り落とされた触手が、ぐにゅぐにゅと、見る間に修復される。ミノタウロスが斬り落として痛めつけていた触手の切れ端は、いやらしい色の球体に分裂すると、怪物の本体に吸い込まれた。

このとき、ミノタウロスは、

これで、犬っころにも、こいつに魔法攻撃をするとどうなるかが分かったろう。

斬り落とした手足も、すぐに拾ってくっつけられるような敵だということも分かったろう。

と、考えた。

このコボルトには、その程度の観察力はある、と踏んだのである。コボルトは、隠形を解いて、姿を現した。

そして、走り回りながら、立て続けに矢を射掛けた。触手の生え際辺りに向けて。

そうだ。

そこへの攻撃が、一番効果がある。

ミノタウロスは、コボルト戦士の飲み込みの速さに感心した。たったあれだけ技を試しただけで、やってはいけないことと、当面効果のある攻撃方法を分別したのである。

姿を現したのは、怪物の注意を引きつけるために違いない。

俺に働け、とあの犬っころはいうのだな。

怪物は、明らかに、この新しい妙な相手に気を取られている。

ミノタウロスは、さらに一本触手を斬り落とした。

コボルトは、怪物がたたきつけてくる触手を、ひよいひよいと、事もなげにかわしながら、矢を射掛け続ける。

その矢玉は、尽きることを知らない。

今や、膠着状態は解けた。

おもしろくなってきた。

ミノタウロスの顔に、どう猛な笑みが浮かんだ。

5

闘いの場に着いたザーラが見たものは、青銅の巨人が、小山のよ  
うな邪神と争う光景であった。

パーティーでは、なかった。

たった一人の戦士が、最強の邪神と一対一で闘っている。  
ここまでの道のりも、たった一人で切り拓いてきたに違いない。  
なんとすさまじい戦士であることが。

それにしても、どこの国の戦士であろうか。

ザーラは、青銅色の人間など見たことはない。

ジャミの森に住む蛮族の中に、変わった肌の色をした部族がある  
というから、この者もそうであるのかもしれない。

上半身は裸で、腰には簡素なものを着け、靴さえ履かずに素足を  
さらしているのは、まさに蛮族の戦士そのものである。

全身の筋肉は見事に発達している。

頭には毛髪がない。

唇は大きく分厚い。

顔は骨張っていて、顎は長い。

目は不気味なほど大きく、怒りを押し殺したように、静かに光を  
放っている。

鼻は太く長い。

だが、何よりも特徴的であるのは、その武器である。

大魚をさばく長包丁を何百倍にもしたものに、握りを付けたもの、  
といえば近いであろうか。

ザーラの身長は一步六分か七分ほどあるが、この戦士の身の丈は、  
二歩五分はあろう。

その身の丈よりも、刃渡りのほうが長いのである。

刃の幅たるや、ザーラの肩幅を軽く超える。

およそ刀とすら呼べない、その恐るべき鉄塊を、青銅の巨人は、  
まるで細剣のように、素早く振り回す。

豪快な剣である。

しかし、雑な剣筋ではない。

洗練された、といってよいほどの無駄のなさがある。

そして、巨人の全身の動き。

途方もない力を秘めた筋肉である。

微塵もけれんみのない、堂々たる剣の使い手である。

それでいて、軟らかい。

豹のごときしなやかさで、今までザーラが学習したどのような流派にもない、野性的で個性的な動きを、この巨人は見せている。

アレストラの言葉からすれば、この戦士の肌の色も体つきも、あるいはまやかしであるかもしれない。

しかし、この動き、存在感、確かな剣さばき。

この戦士が、真の強者であることは、間違いない。

常人では、一瞬たりとも生きていられない瘴気の渦の中に身を置いて、このような闘いができるとは。

世界は広い。

これほどの戦士がいたのだ。

対する邪神は、まず、その質量において、ザーラを圧倒する。

数千年の樹齢を持つ巨木のごときたたずまいである。

その四本の触手は、つよ勁く、はや疾い。

人の背丈ほど太く、人の二十倍ほど長い。

岩をも砕く破壊力は、一撃を浴びれば、この巨人といえども致命的なダメージを受けると思われる。

それを平然とさばき続ける、この巨人の偉大さよ。

ザーラは、まず、ボルトンの護符の隠形を発動し、硬質な幹をボ  
ーラの剣で削ってみる。

傷一つ付かない。

次に、盾を格納し、ティリカの弓を出して、矢を射掛けた。動く部分には攻撃が効くことが分かった。

巨人戦士が、邪神の触手を斬り落とした。

すかさず、傷痕に、メテオ・ストライクを打ち込む。

だが、このエネルギーは、邪神に吸い取られ、体の修復に利用されてしまう。

隠形を解除し、移動しながら弓を射て、囿役を務めながら、見たことを整理した。

まず、この敵には、魔法攻撃は禁物である。

硬化化した部分は動かさず曲がらないが、こちらの攻撃も通じない。落とした触手を、巨人戦士は、執拗に攻撃した。

そのあと触手は、硬い部分も動く部分も、形を変えて、本体に取り込まれた。

よし。

巨人戦士が何を狙っているか、分かった。

要するに、ダメージの総量を蓄積するのだ。

ザーラの参戦により、戦局は大きく動いた。

今や邪神は、わずかずつではあれ、確実に削られていた。

闘いの天秤が、ザーラと巨人戦士に、わずかではあるが傾いた、とあってよい。

そうしてしばらく攻防が続いてから。

邪神が、変態を始めた。

めきめきめきつ、と岩を引き裂くような音を立てて、地に根を張っていた部分が、巨大な二本の足に変わる。ずしん、ずしんと音を立てて、移動し始めた。

また、触手も、それぞれ二つに分裂し、合計八本となった。先ほどまでとは打って変わった、柔軟で変化に富んだ攻撃を放ってきた。

硬質化を解除するのは、瞬間にできるようである。

今や、邪神は、移動しつつ、倍の手数で攻撃をしてくる。

だが、ザーラと巨人戦士は、ほくそ笑んだ。

攻撃を受ける危険も増えるかわり、つけ込む隙も増えるからである。

先ほどまでは、接地部分も触手の先端も、異常な硬度を持ち、まったくダメージを与えられなかった。

しかし、今は、外見こそ岩のままのようであるが、動き、曲がっている。

傷つけることもできないに違いない。

巨人戦士が、邪神の右足に攻撃を仕掛ける。

削れた！

触手をかわして飛び退いては、すぐに戻って、再び右足を攻撃する。

何度もそれを繰り返す。

そのしつこさが、ザーラに何かを訴えている。

矢で邪神の注意を引きつつ、ザーラは、タイミングを計った。

今だ！

邪神が右足を振り上げて巨人を振り払った瞬間。

ザーラは、メテオで、邪神の左足の前にあつた岩を砕き飛ばした。飛び散る岩と爆風で、大きくバランスを崩す邪神。まるで申し合わせたかのように、巨人戦士とザーラが同時に飛び込み、邪神の左足の接地部分を削る。

邪神の体が、大きく傾き、そして倒れた。

ザーラと巨人戦士は、軟らかい部分に、超高速の打撃を、繰り返したたき込む。

触手は六本落とした。

下側になった二本以外は、すべて落としたわけである。

短い時間であつたが、邪神は、無視できないほどのダメージを受けた。

明らかに身体が一回り小さくなった。

と、邪神の体が、無数の小さな固まりに分裂して、飛び上がった。ドームの天井すれすれの位置で滞空し、分裂や結合を繰り返す。内蔵を裏返したような色と模様を持つ、数千個の飛行する球体となつて、ぶるぶると震えている。

そして、球体は、巨人戦士とザーラに向かつて、襲い掛かつてきた。

ザーラは、エンデの盾を取り出し、巨人戦士に走り寄つた。

二人は、背中合わせとなつて、四方八方から飛来する邪神の球体を迎撃した。

球体は、小さいものは、ザーラの頭ほどの大きさで、大きいものは、ザーラの身長ほどの直径がある。

真上から来るものは、速度がやや遅い。

地に激突すれば、邪神自身もダメージを受けるのであろう。

つまり、注意すべきは、十分に加速して前と横から来る攻撃であ

る。

巨人戦士とザーラは、互いに背中を預けつつ、必死になって、球体を斬り裂き、はたき落とし続けた。

ザーラには、エンデの盾がある。

大きな球体は、これで防ぐ。

反動は低く抑えられているはずなのに、当たるたびに体を持って行かれそうになる。

しかし、エンデの盾は、物理衝撃を相手に返すため、邪神も大きなダメージを受ける。

小さな球体は、右手のポーラの剣ではじく。

とうていすべての攻撃をしのごことはできない。

ザーラの全身は、すぐに傷だらけになる。

球体は、見かけは柔らかさそうであるのに、実際には鉄のように硬い。

横腹や腰が削られ、足を吹き飛ばされ、肘や肩が損傷を受ける。

それをポーラの剣によるHP吸収で修復しつつ、ひたすら球体をたたき続ける。

わずかに呼吸を乱しただけで、二人とも、この竜巻のような攻撃に飲み込まれ、命を失うであろう。

命懸けの防御戦のさなか、ザーラは、胸が震えるような感動を覚えていた。

後ろから、まったく球体が飛んで来ない。

この巨人戦士は、完全に攻撃を防ぎきっているのだ。

ザーラのほうは、残念ながら、完全な防御はできていない。

巨人戦士との体格の差もあり、いくばくかの球体は、巨人戦士を後ろから傷つけ続けている。

だが、巨人戦士は、それにひとことの文句を言うでもなく、黙々と球体をさばき続ける。

それだけではない。

二人はただ棒立ちになっただけではない。

右に左にステップを踏み、柔軟な身ごなしを取っている。

時にザーラは、左足を深く後ろに引いて、右回りに回転しつつ、盾を振り回し、剣に回転力を与えて球体を弾き飛ばす。

すると、巨人戦士は、打ち合わせをしていたかのように鮮やかにタイミングを合わせて回転し、位置を入れ替えてくれるのである。

まるで熟練の舞踏家のように、二人の戦士は、呼吸を合わせてダンスを踊る。

ステップを踏み外せば命を失う、死のダンスを。

だが、ザーラの心に悲壮感はない。

ふつう、パーティーを組むときには、仲間に配慮して、多少なりとも動きは制限される。

その掣肘を、今はまったく感じない。逆である。

自分が行ういかなる動作も、このパートナーは必ずすくいとり、意図した以上のものにして返してくれる。

背に翼を与えられたような自由さの中、ザーラは、闘いの歓喜にひたりながら、おのが内からありとあらゆる技があふれ出ていくのを見守った。

突然、攻撃がやんだ。

球体は、はるか上空に舞い上がり、一つに合体していった。

邪神の受けている損傷も、決して少なくない。

邪神にとっても、捨て身の攻撃であったのだ。

ザーラは、荒い息をつきながら、膝をつきそうになるおのれを叱咤した。

見れば、巨人戦士も、体中を削られ、ひどいありさまである。

だが、邪神を見上げるその立ち姿は悠然として、痛みも苦しみも感じていないかのようである。

まるで王のようだ、とザーラは思った。  
いや。

まさに王である。

この戦士は、その部族にあつて人々の尊敬を集める英雄であるに違いない。

メルクリウス家の秘宝五品と、ボーラの剣。

およそ地上にあり得ないほどの恩寵品を身にまとうザーラより、ただ一振りの剣しか持たぬこの誇り高き蛮人の戦士のほうが、強い。それは、屈辱的であるとともに、不思議な励ましと喜びを感じさせる事実である。

人とは、戦士とは、これほどの高みにのぼれるものなのだ。

邪神は、小さく小さく固まっっていく。

そして、ドームの岩の天井に張り付き、動きを止めた。

ザーラは、邪神が何を狙っているか気が付いて、愕然がくぜんとした。

やつは、闘いをやめ、持久戦に持ち込むつもりだ。

邪神は、千年でも待てる。

待てば、徐々にかけらが集まり、再び力を蓄えることができる。

対して、こちらは、邪神を倒さなければ、ここから出ることもできない。

巨人戦士はともかく、ザーラは、気を抜けば、今すぐにも瘴気に取り殺されてしまう。

闘い続け、相手のHPを吸収し続けるしか、ザーラの生きる道はない。

見たところ、邪神は、縮こまって、硬質化しようとしている。

先ほど転倒したとき、すぐには硬質化しようとしなかった。

軟らかくなるのは瞬時にできるが、硬質化には時間がかかるのであろう。

今だ。

今すぐ、やつを、あそこから引きずり落として、殺さねばならぬ。

時間をおけば、ダメージを与えることができなくなる。

ザーラは、指輪を見た。

ライカの指輪には、まだ光がある。

もう一発、メテオが撃てる。

ザーラが右手に持つポーラの剣を掲げるより早く、巨人戦士が何かを投擲した。

それは邪神のすぐ横に着弾し、爆発音を響かせて、天井の岩を削った。

爆砕剣である。

こんな距離で届くとは。

つくづく、この巨人は規格外である。

巨人戦士は、次々と、邪神の周囲に、爆砕剣を投擲する。

ドームの天井を形成する岩に、ひびがはいっていく。

爆砕剣は、十五発で打ち止めのもようである。

巨人戦士が、ザーラのほうを見る。

ザーラは、巨人戦士の無言の要求に、一つうなずいて答えると、ボラーの剣を天井に向けた。

「メテオ・ストライク！」

着弾点が、大きくはじけた。

ひびは一気に広がり、ばきばきと音をさせながら割れていき。邪神が落ちてきた。

大きな音をさせて床に激突する。

初めのころからは考えられないほど小さくなっている。凝縮して、強度を上げようとしているのであろうか。

まだ硬質化は完成していないように見える。

巨人戦士が、ゆるりとモーションを起こし、剣を水平に振った。

その剣の長さより、邪神のほうが大きい。

だが、委細構わず、青銅の巨人は大剣を振る。

この技は。

この円の動きは。

ゆったりと見えながら、不可侵の制空圏に捉えた者を決して許さない、この剣は。

メルクリウス家に伝えられる奥義。

なぜ、この巨人戦士が、この技を知っているのか、と思うより早く、ザーラは、引き寄せよれるように、剣を振った。

二つの剣は、邪神を挟んでちょうど対照の位置から、二つの円弧を描く。

大きさこそ違うものの、まったく同じ、二つの円弧を。

二振りの剣は、やすやすと邪神の身体に食い込み、切っ先が邪神の身体の中ですれちがった。

巨人戦士とザーラが、剣を振り切って手元に引き戻したとき、邪神は上下二つに分かたれて、崩れた。

さらさらと砂のように形を失い、地に吸い込まれるように消えた。

邪神最強の個体を、倒したのである。

地が揺れ始めた。

はじめは、ゆっくりと。

次第に、激しく。

岩のドームが、崩れようとしている。

邪神の迷宮は、ひとたび崩壊し、形成し直されて、再びかけらが集まる日待つのである。

青銅の巨人戦士と、ザーラの姿が、消えた。

6

見慣れた天井である。

では、戻って来たのだ。

ミノタウロスは、身を起こそうとして、体がまったく動かないことを知った。

気を失っているあいだに、レベルアップが起きたようで、傷は修復されている。

右の角を除いて。

だが、動けない。

あれほど、ひどく消耗する闘いのためであるから、無理もない。

それにしても。

と、ミノタウロスは思う。

あの犬っころは、たいしたやつだった、と。

剣の軌道は、鋭く研ぎ澄まされていた。

移動速度と攻撃速度では、俺の上をいていた。

強力な魔法攻撃も使える。

何より、あの防御には、恐れ入った。

怪物の触手をまともに受けたときには、どこまで吹っ飛ばかと思っただのに。

あの強力な攻撃をはじき返して、平然としていた。

盾に特殊な恩寵もあったのだろうが、その盾さばきも見事なものだった。

しかも、胆力がある。

あれほど密度の高い攻撃を、あれほど長い時間耐えきるには、単に技や体力だけでは足りない。

やつの心は、鍛え抜かれている。

だから、俺は、思ったのだ。

怪物を倒したら、次は、この犬っころと闘いたい、と。

その願いは、かなわなかった。

怪物を倒したあと、意識を失い、サザードン迷宮百階層のボス部屋に転送されたからである。

ミノタウロスは、せっかく楽しみにしていた闘いを奪われた。だが、まったく悔しくも残念でもない。

それどころか、今まで味わったこともないような満足感に浸されている。

なぜ、俺は、こんなに機嫌がいいのだろうか？

自分の心を探って行って、やっと気が付いた。

そうか、俺は。

ミノタウロスは、かつて、人間たちから闘いを学んだ。

人間たちの技を見て、おのれの武技を磨いた。

だが、たった一つ。

一つだけ。

あれはよい技だと思いながら、まねすることのできなかったものがある。

連携、である。

仲間を持たぬミノタウロスには、連携の利点を理解することはできても、実践することはできない。

だが、思いもかけず、このたびの闘いでは、コボルト戦士と、互いに背中を預けて闘った。

俺は、あの連携というやつを、やってみたいと思っていたのか。

ミノタウロスは、最後の怪物との闘いを振り返る。

ちっぽけなコボルトが参戦してからの、動作の一つ一つを振り返る。

すると、あらためて気付いたことがある。

今まで、人間たちの闘いぶりを見て、見事な連携だと思ったどの場面にも、今日の自分たちの闘いは劣らないと。

いや。

むしろ、最高だった。

最高にして、最強だった。

あの犬っころと俺が今日やってのけた連携ぶりを、越えるやつな  
どどこにもいない。

うっむ。

それにしても、犬っころにも、あんなやつがいるとは。  
たまには、上にのぼってみるか。

だが今は少し眠ろう、とミノタウロスは思った。

体は疲弊しきっている。

長い長い休息が必要である。

よい闘いのあとの充実感をかみしめながら、ミノタウロスは眠り  
についた。

(第2部 完)



## ユトから吹く風

これはこれは、侯爵様。

ようこそ、このような辺境にお越しくございました。

また、お心のこもった供物の数々、御礼申し上げます。

何しろ、この神殿は、ごらんの通り、行き場のない人を、大勢受け入れております。

病やけがを癒しに来た人々にも、滞在のあいだは、無償で寝る場所と食事を提供いたします。

やりくりも、なかなかでございましたな。

侯爵様のご活躍の数々は、私どももとくと聞き及んでおりますとも。

大陸守護騎士の栄称をお受けになられたそうでございますね。

あなた様は、バルデモスト王国のみならず、この大陸全体の大恩人様です。

海から来た異人どもを、あなた様が打ち破られた聞いたときには、皆で感謝の祈禱を捧げたものです。

はい。

ここでは、何かというと、祈るのです。

ただ祈ってばかりで何になる、とお思いですか。

私も、以前は、そう思っておりました。

聖職者は、祈るだけではだめだ。

神殿に引きこもって偉そうなことを言う前に、街に出て困っている人を助けるべきだ、とね。

しかし、ライエルラ様にお会いして、知ったのです。祈りほど大きな働きはない、ということ。

この神殿は、以前からございました。

ええ、前は、海の神殿と呼ばれておりました。

ライエルラ様は、この神殿で、ただただ祈っておられたのです。

お食事と、それから、巫女様のご教育以外は、起きておられるすべての時間、ひたすら祈っておられました。

私は、ふと立ち寄って、そのお姿に接し、わけも分からず、その背中を拜むうちに、泣けてきて、泣けてきて。

やがて、ここに腰を落ち着けて、ライエルラ様にお仕えするようになりました。

ほかに、同じような者が出てまいりました。

たった四か月で、ライエルラ様はご帰幽になりました。

巫女様に、「これからは、苦しんでいる人を祈り助けよ」と、言い残されて。

ライエルラ様が、巫女様を見いだされて、共にこの神殿にこもられたのは、私がここに来る三か月前であったそうです。

そうなのです。

この教団は、たった二人で始まったのです。

ライエルラ様と、竜の巫女様と、たった二人で。

いえ、そう言うっては違いますな。

ライエルラ様は、組織とか集団とかいうことが、あまり好きではなかったですからな。

巫女様とライエルラ様を慕う人が集まるうちに、教団ができてしまったのです。

え？

ゴンドナ、ですか？  
はははは。

どこで、その言葉をお聞きになりました？

それは、西のほうの教会関係者が使う隠語のようなものでしてな  
生臭坊主、というような意味です。

ええ、ええ。

ライエルラ様は、ときどき、冗談のように、ご自分のことを、そ  
う呼んでおられましたな。

ゴンドナ、と。

あのかたは、祭り上げられるのを、非常に嫌われましたからな。  
聖人に認定されそうになったので、ゴルエンザ帝国を飛び出した、  
といわれるほどです。

え？

ああ、ご存じなかったですかな。

ライエルラ様は、帝都のエルベト神殿で、高位の神官であられま  
した。

有名なかたですよ。

もつとも、私も、本名を教えていただくまで、気が付きませんで  
したがね。

貴族嫌いがなければ、とくに神殿長になっておられたはずのかた  
です。

ですから、私は、皆のように聖者様とか祖師様などとはお呼びせ  
ず、ただライエルラ様、とお呼びするのです。

さすがに、ゴンドナ様、とは申し上げませんがね。

ああ、そういえば、先ほどライエルラ様の墓所に、ずいぶんたく  
さんの上等なワインをお供えくださいましたな。

いやいや、さぞかしお喜びのことと思いますぞ。

なにしろ、あのかたの酒好きは、並一通りのものではなかった。一緒にお供えになった肉の塊は、見かけないものでしたな。

え？

エッテナの燻製ですと？

そ、それはまた、ずいぶん珍しいものを、ありがとうございます。しました。

おお！

やはり、そうでしたか。

侯爵様は、生前のライエル様と、ご面識がおりなのですね。

立ち入ったことをおうかがいしますが、巫女様とはいかなるご関係で？

なぜ巫女様は、あなたさまのことを、お父様、と呼ばれるのですよう？

えええっ？

名付け親でいらっしやると？

し、しかし、あなたさまは、そのようなお年には見えませぬ。

巫女様は、初めてお会いした九年前、すでに十四、五歳でいらっしやいました。

いえ、今も二十歳を過ぎておられるようには、とても見えませんが。

ああ、しかし、でもまあ。

巫女様は、何かと不思議なおかたですからなあ。

少女のようでもあり、慈母のようでもあられる。

無垢でもあり、叡智に満ちてもおられる。

女神のようにお美しく、いかなる病も傷も癒す、不思議な恩寵をお持ちでいらっしやる。

そして、強大な守護を得ておられます。

巫女様を、無理矢理に招こうと、兵を差し向けた王侯は、何たりもおられたのです。

それが、雨や風や雷に阻まれ、最後には巫女様に泣きついて、許しを乞う始末。

竜神の化身である、というような噂が立つのも、無理はありませんな。

それから、もう一つ、お聞きしてもよろしいですか。

先ほど、神殿の祭壇に、半ばで切れた動物の角のような物をお供えにされましたな。

あれは、いったい。

…おお！ そうでしたか。

なるほど、なるほど。

それで、あなたさまは、かつてのご修行の旅に受けられた、神々の恵みと、人との出会いに感謝なさるには、この竜の神殿に参拝なさり、そのしるしをここの祭壇に捧げるのが最もふさわしい、とお考えになった。

ああ！

ライエル様も、さぞかしお喜びでしょう。

長々と、失礼いたしました。

どうか、このバルコニーでおくつろぎください。

ほどなく、巫女様は、お勤めを終えられ、こちらに参られましたよ。

巫女様が、今日の日を、どれほど待ち焦がれておいでであったとか！

何やら、運命の日、とまで仰せでしてな。  
はははは。  
では。

ずいぶん遅くなってしまったな、とバヌースト侯爵アルス・ゴラ  
ンは独りごちた。

本当は、邪神の迷宮からバルデモストに飛ばされたあと、すぐに  
アレストラとの約束を果たしたかった。

だが、一年間は、起き上がることもできなかった。

僧侶や薬師が、毒ではない毒、と呼ぶ物が抜けるのに、それだけ  
の時間を要したのである。

落ちた筋肉を取り戻したころ、東の海から、異人たちの船団が来  
た。

初めは会話すらできなかった異人たちは、この大陸の民を、野蛮  
人と呼び、一方的に服従を要求した。

侵略に抵抗する戦争が始まり、北部のすべての国が団結した。

のちには、ゴルエンザ帝国など南方諸国も参戦した。

アルスは、王の命で襲爵し、領軍を率いて戦った。

多くの人が死んだ。

リガ公爵ドレイドルは、王国軍本隊を率いて奮戦し、壮烈な戦死  
を遂げた。

代わって白卿の座についたアルスを守って、バラストも死んだ。

ドレイドルは、アルスにとり、不思議な伯父であった。

ずっと、陰鬱な人である、と思っていた。

母のエッセルレイアは、もとは優しく楽しい人であったと言っていたから、おそらくは、ガレストの死により、性格を陽から陰に転じたのであろう。

だが、生涯の最後の数か月、ドレイドルの性格は、再び陽に戻った。

大陸を照らす光となって、死んでいった。

北部の国々をまとめて同盟を結成した手際は見事であった。

南部諸国への呼び掛けを提唱し、わずかな期間で諸王諸侯と会談を重ねた実行力には、反リガ派も文句の付けようがなかった。

対侵略戦争を人ごととしか考えていなかったゴルエンザ皇帝に対する、あの真摯な弁舌。

取り持ったパタガモンも感嘆していた。

そして、なんじの死に場所はここではない、という言葉とともに、焼け落ちる城から追い出されたとき、アルスは確かに肉親の温かみを感じた。

あの戦争では、ユリウスもまた、それまでと違う面を見せた。

わずかな情報から、異人たちが、海の彼方の大陸を代表する勢力などではなく、新天地を求める敗残者の群れに過ぎないことを探り当てた洞察力。

ゴルエンザ皇帝への供物と称して、異人たちの高度な武器を見せつけ、はるかに進んだ文明を学ぶ機会であると察知させた交渉力。マズルー国からは魔法兵を、ロアル教国からは神官を、さっさと借り受けた先見の明。

戦後の大陸全体の協力態勢をこそ重視した戦略の凄み。

アルスもまた、戦争で変わった。

成長し続けなければ、生きること、生かすことも、できなかった。

バヌースト侯爵領軍は、北部同盟の最精鋭と目されるようになり、アルスは、最も困難な戦いをいくども引き受けた。

旅で知り合った人々が駆けつけて、アルスを助けてくれた。

戦争に勝利したあとも、荒れた領土の再建や、新たな局面を迎えた諸国との外交に追われ、日々が過ぎた。

エイシャ・ゴランの名は、意外なほど南部の人々の記憶に残っていた。

その血を継ぐアルスは、早々に諸国の紐帯を取り持つシンボルに祭り上げられてしまい、引きこもることなど許されなかったのである。

二十四歳になり、サザードン迷宮最下層で、ミノタウロスとの決着をつけた。

そして、今、やっと、ここに来た。

再び竜の神殿と呼ばれるようになり、新たな教団の拠点となった、この神殿に。

ベランダからは、広く青い海が見渡せる。

左にユトの島が見える。

ユトの島から、風が吹き寄せる。

鮮烈な海の香を運んでくる。

そうだ。

新しいものは、海から来るのだ。

アルスは思う。

世界の過酷さにあえぐ人間は、神に救いを求めた。

神は人に、迷宮を与えた。

人は迷宮から、力と宝物を得た。

迷宮の王を、見よ。

彼の者は、狩られるのを待っただけの、貧弱なモンスターにすぎなかった。

その運命にあらがい、あがき、さらなる力を求めた。

神々は、彼の者の切なる祈願を聞き届けた。

彼の者は、闘い続け、強大なる力を得るに至った。

その姿は、恩寵を求めて迷宮に挑んだ人の姿そのものではないか。

だが、しかし。

人は、彼の者ほどに、ひたむきに、雄々しく、力強く、闘い抜くことができたろうか。

昂然と運命に立ち向かい、歩むべき道を切り拓いてこれたろうか。あの日、邪神の迷宮で見たものこそ、迷宮の王の真実の姿だったのではないか、と今、アルスは思う。

あのようでありたい、と思う。

ユトの島の向こうには、アンポアンの港がある。

その港で、まもなく、船が完成する。

異人たちの船を譲り受けて改造した、最新鋭の冒険船である。

大洋の彼方には、異人たちの大陸がある。

ほかに、いくつも大陸があるという。

数え切れないほどの島々と、多様な文化があるのだという。

そこには、新たな友が待っているであろう。

新たな敵とも、出会つかもしれない。

見たこともない文化、思いもよらない事物に出合っつであるつ。  
人が学び、成長するように、国も学び、成長する。

大いなる航海の時代が、始まるつとしている。

（迷宮の王 完結）

## ユトから吹く風（後書き）

「迷宮の王」全編、無事完結いたしました。

拙作を応援くださり、ありがとうございます。

また、どこかでお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0488v/>

---

迷宮の王

2011年10月7日19時16分発行